

第百十三年（通卷一七一号）

山

岳

二〇一八年

山岳 二〇一八年 目次

〔記録〕

2017年夏 カラコルム3つの登攀

① シスバーレ北東壁初登攀……………柏澄子、中島健郎……………7

② K7西峰南西稜初登攀……………横山勝兵、長門敬明……………16

③ ペアトリス東壁完全フリー化……………佐藤裕介、増本亮……………44

〔読物〕

黒部の山河と人を愛した伊藤孝一伝……………西山秀夫……………55

熊本滞在中のウエストンの足跡……………田上敏行……………66

〔調査・研究〕

杉本誠と山岳写真……………財津達弥……………85

四国の山に残る皇室とのゆかり……………尾野益大……………107

図書紹介

- メコンを下る(北村昌之)……岡村 隆…119／立山ガイド史 II(五十嶋一晃)
 ……成川隆顕…122／極夜行(角幡唯介)……渡辺興亜…124／『最後のヴァイキン
 グ ロール・アムンセンの生涯』(ステイブ・R・バウン／小林政子)……
 絹川祥夫…127／ウォークス 歩くことの精神史(レベッカ・ソルニット／東辻
 賢治郎)……松澤節夫…130／Colliding Continents(Mike Searle)……児玉 茂
 ……131／SHERPA THE MEMOIR OF ANG THARKAY(Ang Tharkay／Basil
 P.Norton)……南井英弘…137／The Alpine Journal 2017／The American Alpine
 Journal 2017……海津正彦…144

追 悼

- 高室陽二郎さん(内藤順造)…153／長谷川良典さん(横山宏太郎)…156／杉本 誠
 さん(水越 武)…162／平位 剛さん(土石川勝司)…165／田中壯佑さん(八木原
 啓明)…168／宮本数男さん(田路繁男)…172／大久保春美さん(堀井昌子)…174

会務報告

支部の活動報告

委員会の活動報告	271
----------	-----

山岳図書目録	A28
--------	-----

英文サマリー	A22
--------	-----

表紙デザイン 小泉 弘

表紙画 田立泰彦

「2017年夏 カラコルム3つの登攀」

シスパールレ北東壁初登攀

文＝柏澄子、中島健郎 写真＝Shispare Expedition 2017

4度目の挑戦

頂稜へ出る手前から壁は斜度を落とし、雪が深くなった。稜線に出た地点で、不要な荷物をデポし、平出和也は、下降に使う長い長い尾根を見下ろし考えた。連日の悪天のなか、雲の切れ間から、やっと下降路を確認できたからだ。このわずかな視界を、自分たちは山頂に登るためではなく、下降に使うべきではないか。天気予報は「晴れ」を報じていたが、現状は降雪があるうえに、視界も利かない。

平出と中島健郎が下りる予定の東支稜は、1974年に西ドイツ・ポーランド隊が登ったシスパールレ初登頂のルートである。この尾根について平出たちは、1994年に三重県の菰野山岳会がたどったときの報告書を取り寄せ、下

調べはしてあった。尾根は長大であり、いくつものピークを越えながら下りていく。のちにふたりが、「登頂の後、さにもうひとつ山を登った気分だった」と語ったほど、アツプダウンを繰り返し、体力と時間を要する尾根だった。また、上部にはブラトーがあり、視界がないときは迷いやすい。そのようなことを考えると、「はたしてこの晴れ間を逃して、自分たちはここから脱出できるのだろうか」とすら思っていた。

しかし、結局ふたりは山頂へと向かうことにする。中島が「あんなに困憊している平出さんを見たのは初めて」と言うほど、平出は最後、歩みが遅くなった。最初にシスパールレに出会ったのが2002年。トライしたのが2007

年、以来、過去合計3回トライしたが、山頂を逃し途中で下降している。4度目となったこの夏のトライ。15年の歳月を振り返るとあつという間でもあり、けれど確実に平出はアルパイン・クライマーとして成長した歳月でもあった。しかし、その間に最も大切だったパートナーを失なった。そして、新しい出会いもあった。長年思い続けた頂へ、万感の思いがあつたのだろうか。

たみ1畳分の地図を携えて

2002年夏、平出は手作りの地図を携えて、パキスタンへ旅に出た。各地の地図をコピーし貼り合わせると、たみ1畳分の大きさになった。そこに先人たちの歴史的登攀のラインを書き込むと、おのずと地図の空白が現われる。空白部分を眺めながら、まずはカラコルム・ハイウェイを北上した。前年、チベットにある未踏峰クーラカンリ東峰に登頂したが、平出にとつての初めてのヒマラヤであった。しかし、まだまだ世界の山のことは何も知らないと思つていた。世界にはたくさん山がある。それを自分の足で旅し、眺め、知りたいと平出は考えていた。

フンザを過ぎ、前衛の山の向こうに三角錐の山のぞいた。あまりの美しさに平出は、自前の地図で確認した。そ

れが、シスパーレだった。「この山に登りたい」「この先、時間がかかっても、この山の頂上に立とう」と考えた。

再びこの地に戻ってくるのは2007年。小松由佳とシスパーレ北東壁にあるリッジをたどつた。今回のラインの右手にあるものだ。北東壁は、5年前の旅の途次、平出が初めてシスパーレを目にしたときに見た壁だ。未踏であり、圧倒的な存在感があつた。平出はなんとしてでも、ここからシスパーレに登りたかつた。小松も日本人女性で初めてK2に登つた直後で、勢いがあつた。今ならば登れると意気込んだが、積雪の不安定性などを理由に、6000m地点で引き返すことになった。当時の映像が残っているが、小松は「ともかくここから帰りたい。これ以上登りたくない。生きて帰りたい」と語つていた。平出は、「命を懸ければ登れない山なんてない」と息巻いていた自分の挫折を、今は振り返る。

2012年、平出は三戸呂拓也と、再びシスパーレに戻ってくる。5年前とは反対側の南西壁。標高差3000mのこの壁もまた、未踏であつた。しかし、天候に恵まれず5350m地点までとなつた。

翌2013年、長年多くの山をともししてきた谷口けい(2015年没)と再び南西壁へ向かつた。5350mま

でルートを延ばしたが、上部の巨大なセラックに危険を感じ、下降。危険を冒すことはできない。「けいさんであれば、登れるかもしれない」という期待は消え去り、「人生のなかで、ひとつぐらい登れない山があってもいいかもしれない」と、諦めかけてもいた。

シスパーレに登るたびに、それは平出にとつての節目となった。ほかの山で経験を積み、また戻ってくる。登れなくても、自分の成長を感じ、力不足を思い知る。それは自分の人生を見詰める、ひとつの物差しのようなものでもあった。そんなシスパーレ通いが続くうちに、「命を懸ける」この言葉がいつしか平出のなかで、「人生を懸けて登る山」へと変容していった。命を懸けることと、人生を懸けることは、全く違う。むしろ真逆かもしれない。命を懸けるような無謀なことではない。危険は冒さない。けれどどこにリスクがあるか把握し、ときにはリスクテイクする。自分の人生を懸けるに値するのが、シスパーレだったのだ。そのことに、いつしか平出は気づいていく。

今年7月、平出は4度目のシスパーレへ向かった。パートナーは近年、撮影の仕事でもプライベートでも多くの山と一緒に登ってきた中島健郎。「健郎は、僕のどん底を見ている。だからこそ、一緒に登れると思った」と。

2016年1月末、ベスト・パートナーであった谷口が遭難死した1ヶ月後、ふたりは四川省でアイス・クライミングをしていた。悲しみと絶望のどん底にあり、一時は中止しようかと思ったが、今山に登り一步を踏み出さなければ、自分は一生山に戻れないと思い、平出はふんばった。けれど、手が震えてアックスが振れない。絶望と喪失感にさいなまれた。四川省滞在の最後に、やっと自分の心の中に浮かび上がってきた思いがあった。そのときの心の中を、平出は映像で記録している。自分がひどい状態だったとき、一緒に山に登ったパートナーであり、シスパーレへの思いを理解してくれる中島と、平出は登りたかったのだ。

荒天と雪崩

7月26日BC入り。その後、下降に使う東支稜に向かう。高所順応と偵察が目的であったが天気が悪く、5600m地点で下降。次にバスター・ピークを使い再び高所順応。そして、いよいよシスパーレへと向かうステージになった。しかし大雪が続き、なかなか好天が巡ってこないまま、タイムリミットも迫ってきた。

そのとき平出は、中島も同行したこの夏のデナリの撮影のことを思い出していた。ここでも天気待ちが続いた。

チームの士気がダウンしていると感じたとき、平出は谷口のことを思い出した。「周囲にとらわれず、自分の考えを貫く彼女だったら、今皆になんて言うだろう」「どんなに山に登りたかったか。彼女は二度と足跡を残すことができない。けれど、僕たちにはそれができる。だったら、登ろうよ。1%でも可能性があるのならば、諦めないでほしい」とチームメイトに投げかけた。彼女の思いを伝えられるのは、自分しかないと思ったからだ。そして平出は今、デナリのメンバーの最後の奮闘に励まされながら、その言葉を今度は自分に投げかけていた。

A B C から C 1 へ向かう途中、ふたりは大きな雪崩に遭った。はるか上部のセラックが崩壊し、彼らの所まで流れ落ちてきたのだ。特に中島が辛かった。雪煙にさらされ、一時は息もできないほどだった。やがてその強風は収まり、這う這うの体で互いの無事を確認し合った。

そこから先は一層斜度を増していくが、できる限り同時登攀をし、困難なセクションでは中島がリードし、ロープを延ばした。中島は「後方に平出さんがいるから、思いっきり登れる。間違いを犯しても正してくれる安心感がある。それに高所に弱い僕は、テントに入ると全くダメ。途中からは食べられなくなったし、動くこともできない。テ

ント生活は平出さんが全部やってくれた」と言う。一方平出は、「先陣を切ってルートを切り拓くことで、充実感を得ている健郎を見ると、まるで昔の自分を見ているかのよう to 思えた。今ではそうしたパートナーをサポートし、チーム力を高めることに注力できる自分がいる。以前とは、自分も変わった」と話す。

C 2 手前の第1岩壁とふたりが呼んでいた付近が、行くか戻るかの分岐点。ここを越えると北東壁のなかを敗退することはできなくなる。天気は相変わらず好ましくないが、分岐点も越え、C 2 はラインよりも大きく外れた所に設けた。降雪による雪崩の危険を避けるためだ。

壁に入って3日目の朝、C 2 からライン上に戻り登攀を再開した。リードしていた中島の話では、間もなく現われたスラブが、北東壁全体の技術的核心だったという。ここを第2左上岩壁と呼ぶ。この日は、前日の積雪が少しでも安定してから登ろうと、壁に日差しが当たってから出発した。しかし、それでも傾斜60度の岩に不安定な氷雪が載っていることに変わりはなく、シリアスなクライミングを強いられた。アイス・スクリューが半分しか入らないなど、貧弱なプロテクションが続いた。ふくらはぎも限界に近付いたところ、中島は意を決してプロテクションが取れないま

ま突っ込んだ。なんとか氷にアックスが刺さったが、こんな高所で足ブラになった。それでもかろうじて次の一手を出し、スクリューが半刺しできる氷を見付けた。そこで気が緩んだのか、アックスが外れ、中島はフォール。奇跡的にプロテクションはひとつも抜けず、ケガもなく止まった。その後も際どいプロテクションが続き、なんとか第2左上岩壁が終わった。中島は、「壁に着いた薄い氷がまだ剥がれずに残っていたから、スクリューでランナーが取れました。雪をかいて岩を探ってもハーケンやカムが効くようなリスはなかったので、氷がなくては登れなかったかもしれない。空荷で登ったため、下降して登り返しましたが、そのときには氷も随分溶け、これは難しいなと感じました。少しでも出発が遅れていたら、僕たちの登攀の結果も違っていたかもしれません」と話す。

C3からは傾斜も落ち、頂稜へと向かうことになる。けれど、その分ラッセルに苦しんだ。連日の降雪で吹き溜まりもできていた。ときには万歳ラッセルになり、先頭を行く中島は、荷物を置いてラッセルすることもあった。

ホワイトアウトの山頂と長い下降

身を削るように体力を消耗しながら、山頂へ到達したの

は8月22日14時半。登頂の喜びよりも、ホワイトアウトしたなかの下降の方が心配だった。すでにトレースはほとんど消えていたが、コンパスを頼りに暗くなる前にC4に戻る。視界さえあれば、もつと標高を下げたかったが、これでは無理だ。雪面を削ってビバークをした。

翌朝、視界の回復を待って出発したもの、再びホワイトアウトし足止めをくらった。次に視界が得られた隙をねらって改めて歩を進めるが、セラックの絶壁が現われたり、ピークをいくつも越えなければならなく大変だった。それでも平出は、「いい尾根だった。初登のチームも菰野山岳会も、気持ちよく登ったに違いない」と振り返る。標高を下げていくと徐々に風が弱まり、視界も良くなってきた。この日は、ようやくスノー・シャワーや標高のリスクに悩まされることなく、フラットで安全な場所にテントを張ることができた。

8月24日、身体に鞭を打って出発。迷路のようでありながらも、何度も通過し慣れたはずの氷河を、いつも以上に苦勞しながら歩いた。BCを出て7日目、ふたりはBCに戻った。中島は、「山頂では、厳しい下降を考えると全く喜びが感じられなかった分、BCに戻り、充溢した思いが湧いてきた」と、当時を振り返る。



実線が登路（北東壁）、破線が下降に使用したルート（東支稜）。
B Cは標高 4000 m 地点に設営

今回、平出はなんとしてでもシスパーレの山頂に立とうと考えていた。それは、谷口との死別に区切りをつけたかったからだ。長年抱えてきた宿題を解き、第二の登山人生を歩みたいと思った。平出は、山頂で胸ポケットから谷口の写真を取り出し、そっと雪に埋めてきた。

一方、中島はインドやパキスタンの高峰をもっと登りたいという。「やつと高峰でアルパイン・クライミングができる、そのスタート・ラインに立てたような気がします」と。

ふたりにそれぞれのものを与えたシスパーレ。地図を携えた旅から数えると、15年目の頂だった。（柏澄子）

『手記』 ミックス壁の微妙な核心部

登攀6日目、シスパーレが夕日に照らされて美しく輝いている。こうやって落ち着いた気持ちで山を眺められるのは、生への実感があるからだろう。

パートナーの平出和也にとっては4度目の挑戦となるシスパーレであるが、僕にとっては初めてのシスパーレ。写真で見ると、尖っていて純粹にカッコいい山ではあるが、登れるかどうかなんて行ってみないと分からない。

しかし、そんな想いもひと目見た瞬間にどうでもよくなった。なんとしてでも山頂に立ちたい。惹き付けるには十分過ぎるほどの山であった。

パキスタンの天候はなかなか安定してくれない。4年前のK6は天候で敗退しているため、今回のアタック前2週間は天候との忍耐勝負であった。アタックのタイミングもギリギリになってしまい、もう来年か？といった雰囲気すら出始めたころ、ようやく朝日が顔を出した。今後の予報はイマイチだったが、動けるのであれば動く。そうと決まれば気分は吹っ切れて、なんだか気持ちに楽になり、純粹に壁に立ち向かえるようになった。

ただ、来る日も来る日も天気だけでは恵まれない。朝晴れたと思えば、午後には雪の繰り返し。

登攀3日目の早朝、急傾斜の氷雪壁をトラバースし、いよいよ核心部となるミックス壁に入る。スラブの上にうっすら載った雪は、使えそうで使えない雪水。足元遥か遠くに垂れるプロテクションは、半分しか入っていないスクリューのため、落ちたら間違いなくタダじゃすまない。だましだまし氷に蹴り込んでいるスタンスは、今にも氷が剥

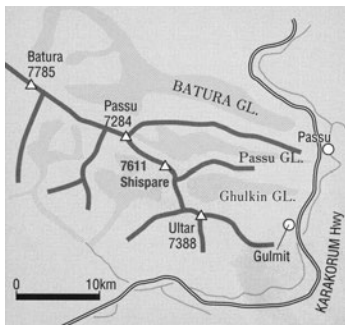
がれ落ちそうが必要以上に腕に力が入る。わずかなクラックにナッツを決めようにも、岩が剥がれ落ちる。すでに戻することは不可能。次の一手が遠いが、トルキングしている右手が外れないことを祈るしかない。深呼吸して右手に全神経を集中させ、左手を目いっぱい広げてアックスを打ち込む。感触は良好で足がスタンスから離れたが、手で体重を支えなんとか突破。自然と叫び声が出た。この先は氷がつながっていいそうで、ひと安心。スクリューでランナーを取り、さあ次の一歩と思ったとき、足場がずれた。一瞬ヒヤッとして止まったように思ったが、次の瞬間には壁から身体が離された。ランナーのスクリューが走馬灯のように頭をよぎったが、気がついたころにはロープにぶら下がっていた。幸い5mほど落ちた程度でケガもなく、事なきを得た。

リードを終え、ザックの回収に取付まで下降し、再度登り直したときには、すでに壁に陽が当たり、氷は溶けて使えものにならなくなっていた。

1日の停滞を挟んで5日目、昨日までの降り積もった深雪と急斜面で腰以上のラッセルになる。7000m以上で空荷ラッセルは初めて。冬の黒部を思い出した。午前11



山頂より喜びの大きかったBCにて



時、7200mを越え、あとは頂上稜線を残すのみ。相変わらず天気はイマイチだが、動けない視界ではない。残りの高度差400m。難しいセクシオンは越えているので、身体に鞭を打って一步一步慎重に高度を稼ぐ。ときおり風に吹かれて稜線上のガスが開けたと思うとすぐにまた包まれ、もはや夢の中で登っているかのような幻想に陥る。

14時30分、ようやく到達した山頂は、ホワイトアウトで景色を楽しむ余裕も体力もない。

1週間ぶりにベースキャンプに戻った姿はふたりともボロ雑巾さながらだが、とても充実した気分であった。何より精一杯楽しいクライミングができたことに。

(中島健郎)

「日程」

7月17日 日本—イスラマバード
7月25日 パスーよりトレッキング
7月26日 BC(4000m)入り
7月28・29日 初登ルート5600mまで偵察・順応(宿泊5160m)

8月1～4日 パスー・ピーク方面へ6750mまで順応

(宿泊6400m)

8月7～9日 好天待ちのため、フンザで休養

8月13・14日 アタックを試みるも大雪のため5000m

で1泊してBCに引き返す

8月18日 BC→C1 (5450m)

8月19日 C1→C2 (6500m)

8月20日 C2→C3 (6850m)

8月21日 C3停滞

8月22日 C3→山頂(7611m)→C4 (7200m)

8月23日 初登ルート下降→C5 (5750m)

8月24日 C5→BC

8月25日 BC撤収→フンザ

8月28日 イスラマバード着

9月1日 日本着

〔使用ギア〕

ロープ 7・5mm 50m×2、レーザースピードライト 17cm
 ×6、21cm×1、トライカム#0・5#1#1・5、オフ
 セットナッツ#1#3#5、ナイフブレード×2、スリン
 グ 60cm×6、120cm×2、スノーバー×2本、マイクロ
 トラクション×1、ジェットボイルSol×1、ガスカー

トリッジ×4、食料4泊分

*本遠征は、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミ
 ン
 グ協会の海外登山奨励金の助成を受けて実施されまし
 た。

「2017年夏 カラコルム3つの登攀」

K7 西峰南西稜初登攀

K7 西峰への縦走

2014年夏。長門敬明、増本亮とともに挑んだK7西峰の山頂は、5日目の朝を迎えてもまだ、ぼくたちのはるか彼方にそびえていた。数年ぶりのヒマラヤだったにもかかわらず、ぼくたちはこの場所までよくがんばったと思う。「未登のバダル・ピークを新ルートから登頂する」という成果を、すでに手にしていた。2012年から始まったパタゴニア通いで得たものを、ぼくはヒマラヤでも実践したいと願っていた。願いの半分は達成された。けれど残りの半分は、その未踏峰のさらに先にあった。それがK7西峰までの縦走だった。

文Ⅱ横山勝丘 写真Ⅱ長門敬明、横山勝丘

ただ壁に登り切るだけではなく、さらなる付加価値をそこに求める。ぼくがパタゴニアでの数シーズンで学んだ登り方だった。そうすることによって登山そのものがより困難に、そして充実したものとなる。だからこそK7西峰を目指したのだが、手持ちの食料は底を突きかけていたし、ユマリーング中に痛めた増本の膝は、悪化の一途をたどっていた。そして何より、目の前に広がる複雑な稜線の光景は、ぼくたちの心をへし折るのに十分だった。ぼくたちは、ベースキャンプに向けて長い下降を開始した。

失敗ではあったが、ぼくたちがこれまでやってきたことに間違いはない、という手応えがあった。もう少しの積み重ねがあれば、成功はぐんと近づく。国内でのトレーニング

シスパーレ北東壁初登攀



前方に見えるスラブ帯が核心部。氷雪壁をトラバースする中島





カラコルムのなかでも西に位置するシスパーレは、東西に長大な裾野を延ばす端正な山だ



8月19日、標高5450mのC1を出発。尾根を乗越し氷雪壁へ



C1からC2へ、リッジに向けて登る。このあと傾斜が強くなる

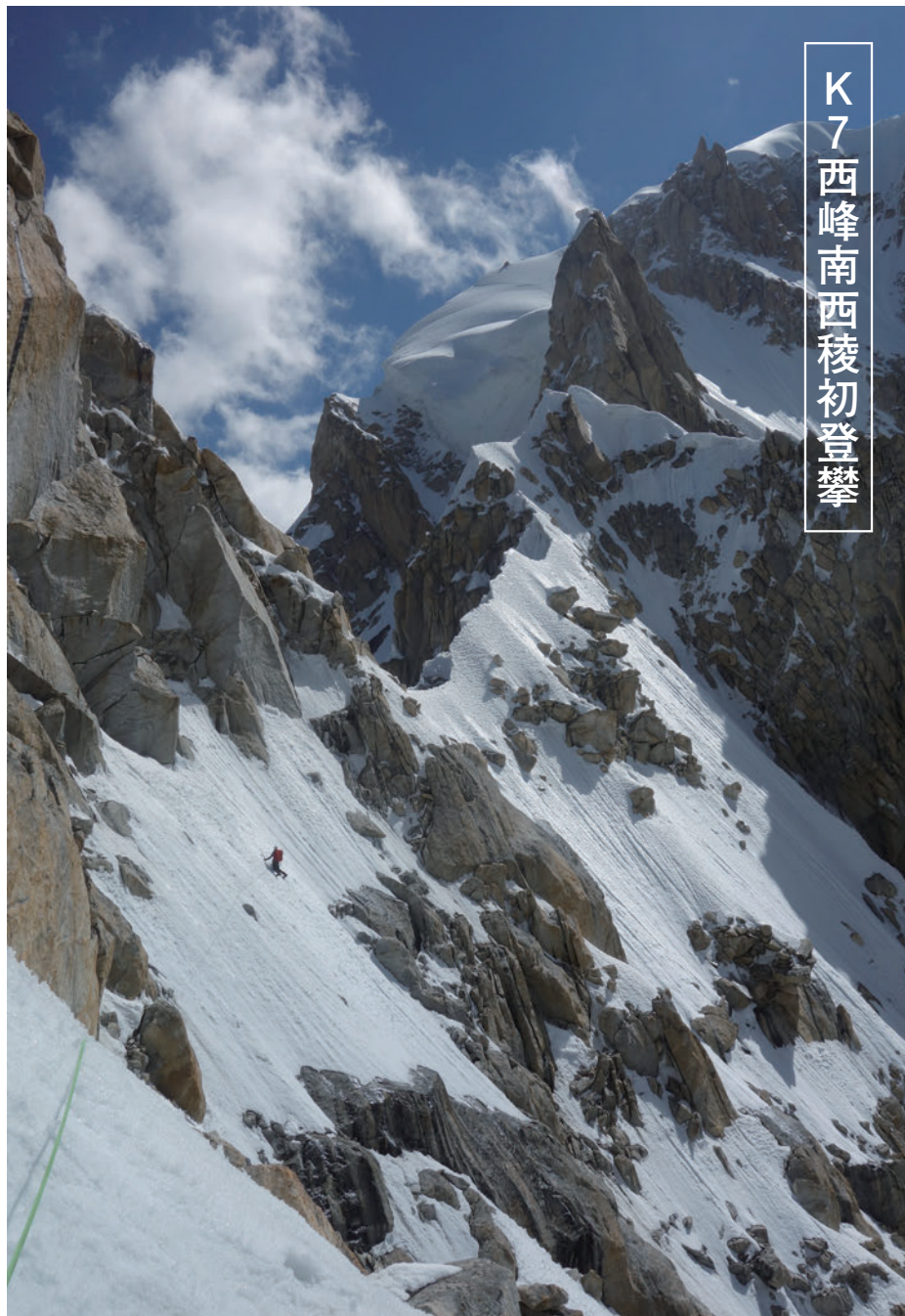


C 3 へ向かう途中、核心部のスラブをリードする中島



8 月 22 日 14 時半、山頂に立つ平出(左)と中島

K7 西峰南西稜初登攀



登攀4日目、バトルピークから先は、稜線右側の氷雪壁をトラバースする



登攀3日目の夕方、バトルピーク直下の雪壁をフォローする長門



8 P目(5. 11a)を登る横山





登攀3日目、33 P目(5. 10b)をフォローする横山、眼下に登ってきたピラーを見下ろす



登攀3日目、35 P目(5. 10a)の広大なフェースを登る長門



頂上プラトーへの最終ピッチを登る横山



登攀4日目、バダルピークからK7西峰へ続く稜線上から振り返る

ベアトリス東壁完全フリー化



ベアトリス東壁。ルートは正面のハングを越え、中央右のクラックを登る



1 P目の濡れたハングをエイドで進む佐藤



大掃除のあと、きれいになった6 P目(5. 12b)を登る増本



フリー化の成否を分けた核心部 10 P 目 (5 . 13a) を登る佐藤



9 P 目 (5 . 12b) をフォローする増本、高所ではレイバックムーブが苦しい



5 P目の朝。11 P目(5、12c)をオンサイトする佐藤



稜線上の不安定な雪稜の先にピークがあった



ベアトリス東壁。赤線が登攀ルート、5. 13a



ゴーアップ初日のビバーク



頂上アタック前夜。ポータレッジから望むK 6

グにはいつそう精を出し、その内容も、より具体的なものとなった。パタゴニア通いを続け、成果もポツポツ表われ始めた。2016年には同じメンバーでK7の再訪を企んでいたが、トリッキーな登山許可取得などに翻弄されて、パキスタンに行くことさえ叶わなかった。けれどその分、可能な限りトレーニングを積み上げておいて、より強くなって臨めばよいのだ、と割り切ることができた。

今回も当初は、2014年と同じメンバーで再訪する予定だった。しかし、2017年3月になって、佐藤裕介が同行を申し出た。モチベーションにも才能にもあふれる仲間だ。異論を挟む余地はなかった。問題は、この4人をどうやってチーム分けするか。しかし、これもすんなり決着がついた。増本と佐藤は、同じ氷河でビッグウォール・フリークライミングを目指すという。これには多くの心もぐらついた。ポータレツジにぶら下がりながら、ヒマラヤの巨大な壁をフリー・クライミングで越えていく——そんな光景を想像すれば、そそれないはずがない。

片や、多くの目指すのは、相当に泥臭い登山だ。「楽しい」という言葉だけに目を向ければ、軍配は彼らのプランに上がった。けれど、K7山群の頂に立ちたかったし、何より、ばくがパタゴニア以来継続してきた5年間の登山の総決算

をしたという思いの方が強かった。幸いにも長門もぼくと同じ思いを抱いており、ふたりでチームを組むことに決まった。

下部岩壁

2017年7月。ベースキャンプに着いてすぐに偵察と高所順応を繰り返したが、順応のたびに悪天に見舞われた。結局、標高5800m地点までしかたどり着けず、順応不足は否めなかった。当初の計画は2つあって、1つはK7主峰南西稜の初登攀であったが、よりテクニカルだが、標高が低いために高所の影響が少ないであろうバダル・ピークからK7西峰までの縦走を選んだ。

増本と佐藤がベアトリス東壁へ向けて先にベースキャンプを発つと同時に、いよいよぼくたちの出発も間近だという緊張感が走る。翌日、ベースキャンプに持つて来いたありったけのロープをかき集め、下部岩壁のフィックス作業に向かった。本当ならベースキャンプから完全なワンプッシュで本番に臨みたいところだったが、下部岩壁は見るからに核心の1つで、そのために時間を確保する必要があった。また、本番が始まってしまえば、一切の余裕がなくなるのは容易に想像できた。せめて1日くらいは、リ

ドもフォローもクライミングを楽しみたい。

とはいえ、8本のロープに加えて本番で使うギアや食料を入れたホールバッグはパンパンに膨れ上がり、荷上げ作業はまさに拷問だった。クラックの中には泥が詰まり、見た目に反して岩の表面はもろかった。5・11前半までのフリー・クライミングで一日中登り続け、9ピッチ登った外傾テラスにギアを残置して下降を始めた。下降中に雨が降りだし、下部のチムニー帯を下りるころには周囲は滝の様相を呈していたが、シャワーを浴びながら暗闇の中、アンカーを作って下降を続け、持参したロープすべてをフィックスした。当初の期待に反してクライミングを楽しむ余裕は一切なかったが、まあ、アルパインなんてそんなものだ。

2日間のレストを挟んだ8月5日。3時過ぎにベースキャンプを出発し、明るくなり始めたタイミングで、数日前に張ったフィックス・ロープをたどる。前回の最高点で荷物をまとめ、不要なロープやギアはすべてホールバッグに入れ、地上目掛けて思い切り放り投げる。アイツに再び会うのは、登山を終えてからになる。

分業制

ゴアアップを前にして、ぼくと長門の間で1つの決めこ

とをした。それは、岩壁のセクションはすべて長門がリード。そこから先はすべてぼくがリードというように、完全に分業制としたことだ。長門のクライミング能力をもってすれば、この岩壁は問題なく越えられるだろう。ぼくは彼よりもパタゴニアでの縦走の経験が多く、重荷に耐えて登るのには慣れている。かっこいいピッチをリードしたい、などというのは戯言だ。そうでもしなければ、この山は登れない。

長門がヘルメットを腰にぶら下げながら、窮屈なワイド・クラックを安定した登りでこなす。ビレイしながら、よほどのことがなければ、彼は岩壁の最後までロープを延ばしてくれらるだろうと確信する。5・10台のピッチまでは長門も軽いザックを背負い、ぼくは重いザックにあえぎながらのフリー・クライミングだ。もつと簡単であれば同時登攀で登り続けたいところだったが、壁は決して傾斜を緩めない。パタゴニアでは、アブローチ・シューズのまま5・11のクラックを同時登攀でこなしたが、倍以上の荷物を背負いながら、標高5000mの手つかずの岩壁を、ごつい登山靴で同時登攀する気にはなれない。難しいセクションでは長門は空身でリードし、ぼくは軽い荷物を背負い、ユマリーリングも交えつつ、しかし、できる限りロープにテン

ションを掛けないようにフォローする。持参した細いロープを使って長門が重いザックを荷上げする。メインロープに極力テンションを掛けないという作戦は、非常に重要だ。安易にフォローがユマリーリングをすれば、メインロープはあつという間に傷む。そうなれば、下手すると登山は継続不可能となる。だから重荷を背負ってでも、フォローは自力で登って来なければならぬ。一つ断言できるのは、その能力と、登れるグレードには相関がないということ。ここで必要とされるのは、全身のパワーだ。だからこそ、体格のいいほうが、すべてのピッチをフォローする必要がある。

遠目にはクラックは明瞭だった。しかし、いざ近付いてみると、その多くはフレアしていたり、完全に閉じてしまっていたり。時間を掛ければフリーで登れるであろうセクションは、迷わずエイドで越える。理想はいつだってフリー・クライミングだが、装備を極力切り詰めた短期速攻のアルパイン・スタイルで、そんなことにこだわっている余裕は一切ない。先はまだとてつもなく長いのだ。はやる心に反して、目の前に立ちはだかる岩は複雑極まりない。急峻な岩稜を一气に左から巻くことができたかと思えば、目の前には虚空が広がる。退却を余儀なくされ、気持ちを

新たに直上するクラックに入っても、乏しいクラックに手を焼き、時間を掛けて振り子トラバースで活路を見いだす。

バダル・ピークへ

2日目の夕刻、眼前に見覚えのある光景が広がる。3年前に苦労して越えたボロボロの岩稜だ。やつのことで前回のラインに合流するところには、とうに日没を迎えていた。それでも、一度登っている場所というのはなんと気が楽なことだろう。こういう登山では、技術的な難しさよりも、未知であるかどうかの方が心身に大きな影響を与える。暗闇の中を登る長門をブレイしながらも、「今夜はあそこで寝られる」という目算が立つだけで、ぼくたちの行動はいぶんと楽になった。

翌日は、3年前に登ったセクションを忠実にたどった。巨大な一枚岩にスパッと走ったクラックをたどる人工登攀で、岩壁部分は終わりを告げた。そこから先はぼくの担当だ。岩交じりの氷雪壁の同時登攀。そして、複雑な懸垂下降が合計4回。鼻水と涎よだれを垂らしながら、休まず登り続ける。急いで登ったにもかかわらず、バダル・ピークの山頂に着くと同時に日が暮れた。勝手知ったる場所ゆえにクライミングそのものは気楽だったとしても、体力的にはそ

れ以上のものが求められる。なまじ知っているからこそス
ピードアップは必至となつて、休んでいる余裕はむしろな
くなる。笑顔など、とうの昔に消えた。

バダル・ピークの山頂で迎えた4日目の朝からは、新た
な緊張が走る。再び未知の領域に足を踏み入れるのだ。バ
ダル・ピークから先のリッジは、いくつものギャップを従
えて岩峰と氷雪壁が交互に現われる。技術的な困難より
も、ルート・ファインディングの複雑さと、懸垂下降や同
時登攀など、的確かつ迅速なタクティクスを選択が求めら
れた。

しばらくは、リッジ南側の雪壁を懸垂下降も交えなが
らうまくつないで距離を稼ぐことができた。初日の夜を除い
てテントの中で寝ることができているとはいえ、疲労はた
まつてきている。スピーディに登ろうにも、数歩進んでは
立ち止まることを繰り返さずに登り続けることはできな
かった。

あえてクレバスに突入

いよいよリッジの最後に待ち受けるバットレスが迫つて
きた。ここを直登することは見るからに困難で、どうにか
して巻いて越える必要があつた。当初予定していたリッジ

南側の斜面を見渡すが、想像以上に傾斜が強く、かつ長い。
ここに来て、前々からうつつすらと頭の片隅にあつたものの、
本能が現実的に考えることを避けていた1つの案が去来し
始めた。向かつて左、リッジ北側のセラックの下を通過す
る。それは、眺めれば眺めるほど現実味を帯びてきた。遠
目には恐ろしいものとしか認識できなかった巨大セラック
だが、近づいてよく観察すると、安定しているように思え
た。少なくとも、ここから何かが崩壊する光景は目にして
いない。あれだけ「あり得ない」と思っていたものを、今
では「あそこしか考えられない」と解釈し始めていた。普
段は慎重な長門でさえも同じ意見で、そうなると「これは
大丈夫」という勝手の解釈にますます拍車がかかる。

危険は想像していたほど大きくないとはいえ、ゼロには
ならない。しかし、その危険を受け入れることによって得
られるアドバンテージは限りなく大きいだけでなく、ほか
を選択することによって受け入れなければならない危険も
また存在する。登山は、常に何かと何かのトレードオフな
のだ。今は好天が続いているが、今後も続くという保証は
どこにもない。この場所は、スピーディに登り終えてし
まった方がいい。

ふたりの間で、決断は瞬間になされた。一度決めたらも

う迷ってはいけない。すぐさま60mいっばいの懸垂下降で北側の氷壁に下り立った。ここからは、傾斜60〜65度の氷壁をひたすらトラバースして行く。疲れたなんて言っていない。いくらあのセラックは安全だと断言できても、その真下で悠長に過ごせるほど、ぼくたちのメンタルは強くも鈍感でもない。この通過に2時間近くは費やしたのだろうか。トラバースを終えてホッとしたのも束の間、目の前に迫った頂上プラトーに達するには、高さ30m近いセラックそのものを越えなければならない。フォローしてきた長門と相談する。ぼくは左から大きく巻いて、陰でよく見えないセラックのコーナーに活路を見いだそうとしたが、長門は、真正面の危うげに割れたクレバスに入っていた方がいいのではないかと、と言う。見るからに恐ろしい。けれど、もしそこに抜け道があれば、掛かる労力は一気に軽減される。よく見れば、確かに彼の言うようにクレバスを縫ってプラトーへ抜けられそうだと。

意を決して、ぼくはその中に足を踏み入れた。クレバスの中は、意外にも積もった雪をキックステップで登っていただくだけの簡単なものだったが、本質は別のところにある。ある瞬間を境に、途端に恐怖を覚えた。恐怖のあまり駆け足になり、心拍数が急上昇する。ぼくを覆っていた氷の回

廊は徐々に広がり、頭上に青空が見えた。クレバスの縁にアックスを叩き込み、一気に雪の斜面に這い上がった。止まっていた血流が再び全身に広がっていくような感覚だった。

長門を迎え入れ、別の小さなクレバスの中をビバーク地と決め、すぐに整地に取り掛かった。午後3時半だった。急いでビバーク地を作るのには理由があった。活かせるチャンスは活かしたい。この日のうちに山頂に立ちたいと思った。まだ3時間ほどは明るい。視界もある。もし明日になつて悪天が訪れたら、山頂までの標高差200mの歩きを残して敗退する可能性だって否定できない。それだけは、なんとしても避けたかった。

テントを建ててすぐに、ぼくたちは出発した。だが、すぐに腰までのラッセルとなった。日中の高温と日射によって、雪が完全に腐っていたのだ。足元は不規則に崩れ、まるでペースが上がらない。10分ほど掛けてラッセルをこなして下を見れば、テントはまだ目の前にある。

「明日の朝を待とう」

そう決めてさつさとテントに戻り、夕飯を食べ、薄っぺらの2人用シュラフに潜り込んだ。明日は1時起床だ。夜明け前から動き始め、明日のうちに下山しよう。ゴールは

もう目の前なのだ。

もう少し寝ようか

嫌な音で目が覚めた。まだ真つ暗になる前だったと思う。強い雪が TENT を叩く音だった。それでも、これは一過性のものだろうと高をくくっていた。しかし、期待に反してその勢いは増すばかり。チリ雪崩がひっきりなしに TENT を襲う。どこまでくたちはついていないのだろう。2 度の高所順応、そして今回。毎度のごとく雪に降り込められて敗退か？　ここまであんなに天気が良かったのに、なんでまたこのタイミングで……。時間がたっても、TENT に叩き付ける雪の勢いは収まるどころか、増しているようにさえ思える。さつき腰まで潜った雪の斜面のことを考えるだけで恐ろしい。いや待て、ぼくたちの食料にはまだ余裕がある。最悪、明後日の午前中に登頂したって、それから急いで下降すれば、その翌日にはベースキャンプに戻るはずだ。食料は 1 日分足りなくなるし、下山翌日にはベースキャンプを撤収して、バック・キャラバンを始めなければならぬけれど、ここまで来たらそれくらいのことでは喜んで受け入れよう。諦めるのはまだ早いぞ。いやいや、そんなことよりとにかく、お願いだからこの雪、さっ

さとやんでくれないか。

さまざまな思いが脳裏を駆け巡る。ポジティブに明日以降の行動を整理した次の瞬間に、再び TENT を襲うチリ雪崩。頭の中はネガティブな思考に侵される。まんじりともしないまま、起床時間の 1 時を迎えた。

TENT を叩く雪の音はまだやまない。長門と顔を見合わせる。

「とりあえず、もう少し寝ようか」

アラームを 4 時にセットし直し、再び寢床に就いた。だが、こんな状況で悠長に寝ていられる訳がない。それから 3 時間で、いったい何度のため息をついたことだろう。

4 時に起きたときには、TENT を叩く雪の音は消えていた。湯を沸かし、いつものルーティンで食事をとる。そうしているうちに、外は完全に明るくなった。TENT の扉を開ける。予想に反して、青空が見えた。恐る恐る雪の斜面を見上げて、驚いた。新しく積もった雪はほとんどなかった。きつと昨晚、降ったその場から斜面の雪は流れ落ち、ぼくたちのいるクレバス内に流れ込んで来たのだろう。だから、あれだけ TENT に当たる雪の音がやまなかったのか。すぐに準備を済ませ、小さなバック 1 つに水と簡単な食料、それと防寒着にヘッドランプだけ入れて、ぼくたちは登り

始めた。

登頂

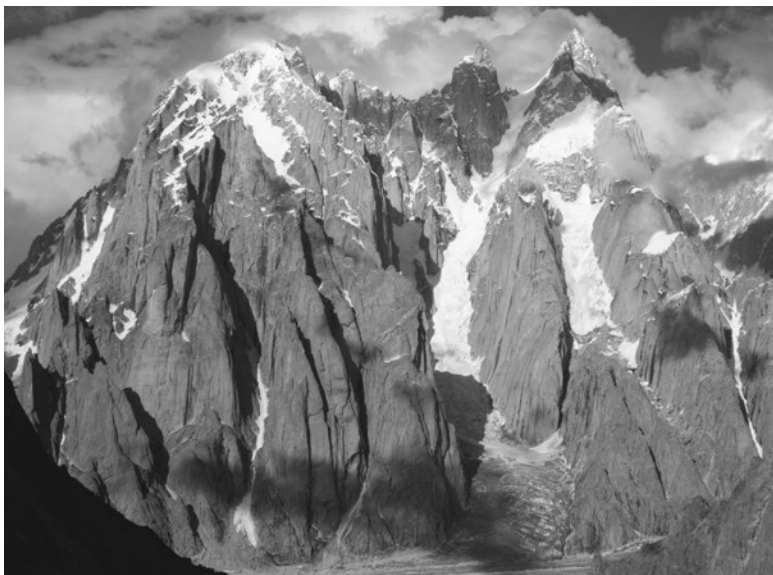
2時間近く歩いただろうか。広い雪のリッジを登っていくと、ちよつとしたコルに出た。ほんの少し前からガスが再び湧き始め、ぼくたちにまとわりついていてた。山頂がどこなのかまるで見当もつかないまま歩いてきたが、ここに来てようやく、眼前にドーム状の水の丘を認識した。偵察時に撮った写真を思い返し、これが山頂へと続く最後の斜面なのだと理解した。簡単なビレイだけ長門に頼むと、ぼくはそのまま氷の斜面を登り始めた。体が重く、なかなか進めない。それでもロープを30mほど延ばすと、傾斜は緩くなった。周囲には濃いガスが立ち込める。その場にしゃがみ込んで、数歩先の状況を手探りで確認した。そこは、虚空だった。

長門を迎え入れる。何か適当な雄叫びを上げたはずだ。そうやってぼくたち自身を鼓舞するようなものを。だけど意に反して、込み上げてくるものはあまりなかった。ぼくたちは簡単に写真だけ撮り、スノー・ピケットを1本埋めて懸垂下降を開始した。これからまだ標高差2400mにも及ぶ下降が控えているのだ。悠長に過ごしてなんかい

れない。先ほどのコルで水と行動食だけを胃袋に入れて、元来た道を降りていった。ビバーク地に戻るころには、青空が見え始めていた。テントを撤収し、北西壁の下降に取り掛かる。

スノー・ピケット1本で行なった最初のセラックの空中懸垂は恐ろしかったが、北西壁に入ってしまったえば、後は比較的容易に懸垂下降を繰り返していくことができた。途中からは吹雪となり、手袋や顔の周りに積もった雪を払いのけながらの下降となった。足元に近づいた氷河までの最後の下降は、V字スレッドのまるで効かない柔らかな氷で、アイス・スクリューを3本残す羽目になったが、この巨大な山から生きて帰るためなら惜しくはない。氷河に下り立ち、テントを張った。

6日目の朝。対岸の尾根に登り返し、それから陽光の差す反対側の斜面を下りていった。徐々に増え始めた緑が目にもぶししい。足どりは思いのほか軽く、モレーン上に転がるボルダーに目をやり、ラインを見いだす余裕さえあった。最後のモレーンを越えると、眼下に見覚えのある光景が現われた。赤いフライシートが並ぶ、ぼくたちのベースキャンプだ。遠目からも、見慣れたふたりの仲間を認識できた。きっと、のんびり洗濯でもしているに違いない。その瞬間



この写真では分かりづらいが、パダルピーク山頂から
K7西峰までは3 km近い複雑なリッジが続く

に、6日間張り詰めていた緊張が解けていくのが分かった。
意気揚々と、ぼくは最後の斜面を駆け下りた。

どちらもやればいい

その晩、コックのフセインが作ったケーキと、ぼくのお
手製のハチミツ酒で、ぼくたち4人はささやかな宴を開い
た。ベアトリス・チームの涎が出そうなクラックの写真と、
ジェラシーを感じるような彼らのエピソードをひとしきり
聞いて、ぼくと長門は顔を見合わせた。

「何か楽しいことあったっけ？」

しばしの沈黙の後、

「ない」

再び一瞬の沈黙の後、テント内は爆笑に包まれた。

そう、この6日間、楽しかった記憶が一切ない。けれど、
これほどまでに充実した登山は、ぼくの30年にわたる登山
経験の中でもあまり記憶にないのも事実だ。4人の会話の
中で、かの登山家ヴォイテク・クルティカによる「苦しみ
の芸術」という言葉が出た。今回の登山は、まさにそれだっ
たように思う。本気か冗談かは知らないが、増本がポツリ
と言う。

「俺は、もうそういうのがしんどいから、ビッグウオール・

フリークライミングを選んだんだ」

その言葉も理解できる。ぼくだって、今回のような登山ばかりやり続けるのは嫌だ。次はどこか僻地のビッグウォールで、彼らのような楽しいクライミングを繰り広げてほしいな、と思う。けれど、増本も佐藤もこれまで世界中で大きな山を登ってきた経験があるからこそ、こんな標高の高い不快な場所でもクライミングをエンジョイできたのだと理解する必要がある。そして一方で、まだ「苦しい芸術」を求めているもうひとりのぼくもいる。会話は次第に、次の遠征の話へとシフトしていく。

どちらもやればいいと思う。これまでだって、あまり深くは考えずにやりたいことをやり続けてきたただけだ。今回のクライミングは、これまでの登山人生の総決算だったと思うこともあるけれど、だからといって、これが唯一のゴールだとも思っていない。もっと難しく、もっと充実した登山はまだ可能だろうし、全く別のアプローチから登山を掘り下げていくことだってできるだろう。

偶然にも、ぼくたち4人は全員1979年生まれの38歳。アスリートとしてはもう下り坂だ。それでも誰ひとりとして、登山を続けることを迷ったり、クライマーとしての成長を疑ったりする者はいない。ぼくたちの強みは、夢を



毎日のように、BC周辺に転がるボルダーで遊ぶ

持つて登山を続けていること、それに尽きる。それさえ失わなければ、まだまだこれからも心弾けるような経験を積みむことができるに違いない。そんなぼくたち自身を祝福したい。それゆえのSun Patch Spur（サン・パッチ・スパー）なのである。

8月12日、来たときよりも大きな夢を抱いて、ぼくたちはベースキャンピングを後にした。

「日程」

7月11日 出国。

12月17日 イスラマバード、スカルドゥで準備後、フーシェまで移動。

18・19日 キヤラバン。チャラクサ氷河4200mにベースキャンプを設営。

22～25日 ドリフィカ北面にて1度目の高所順応。悪天のため標高5800mまで。

29・30日 ファロル・ピーク南面にて2度目の高所順応。悪天のため標高5450mまで。

8月2日 下部岩壁を9ピッチ登ってフィックス工作。

5～10日 登山本番。

12・13日 バック・キヤラバン後、スカルドゥまで移動。

14～17日 イスラマバードまで移動後、片付け。

18日 帰国。

「登攀概要」

K7西峰(6615m) 南西稜初登攀(バダル・ピーク南面からK7西峰までの初縦走)

Sun Patch Spur

ED+ / 5・11cR、A2、M5、90度、2300m+

期間…2017年8月5日～10日(8月2日に下部岩壁の

フィックス作業

メンバー…長門敬明、横山勝丘

バダル・ピークまでは、未登ラインからの35ピッチのロッククライミングと、同時登攀を含むロープ・スケール1000mのミックス・クライミング、並びに懸垂下降4回で3日間掛けて登頂。その先の未登の稜線は、ロープ・スケール1700mの同時登攀と2回の懸垂下降で山頂プラトーまで達し、2012年スロベニア隊の北西壁ルートに合流。ここから標高差200mの雪稜を歩く。登攀5日目の8月9日午前9時過ぎにK7西峰に登頂後、北西壁を二十数回の懸垂下降で氷河に降り立つ。6日目の昼前にベースキャンプへ戻った。

「使用ギア」

60mシングル・ロープ×1本、60mハーフ・ロープ×1本、キヤメロット・マスタールカム小サイズ×2セット、U.L.キヤメロット#0・4～#3×2セット、ナッツ×1セット、アイス・スクリュー13cm×3本・16cm×1本・22cm×1本、スノー・ピケット×2本、ナイフブレード×5本、アングルピトン×1本、60cmスリング×9本、120cmスリング×3本、カラビナ×12枚、捨て縄×20m、マイクロ・トラクション×4台

「下降残置ギア」

捨て縄×20 m、60 cm スリング×8 本、120 cm スリング×3 本、スノー・ピケット×2 本、アイス・スクリュー×3 本、ナイフブレード×1 本、アングルピトン×1 本

*この遠征は、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会の海外登山奨励金の助成を受けて実施されました。

「2017年夏 カラコルム3つの登攀」

ベアトリス東壁完全フリー化

文〓佐藤裕介 写真〓増本 亮、佐藤裕介

魅了された一本のクラック

高所順応と偵察を兼ねた山行で、気になっていたベアトリス東壁を近くの丘から見た僕らは、壁の中央、下から上まで見事につながる1本のクラックに魅了された。その傾斜は、取付から見上げる限り凄じく、今まで体験したことのないようなクライミングが待っている予感を得て、目標をこの壁に決定した。

チャラクサ氷河を訪れた僕らの目的は、ビッグウオール・フリー。傾斜のある未知の大岩壁をフリー・クライミングで登りたい。そして、ゴールはやっぱりピークだ。壁の先の最も高い所に立って終わりとしよう。重くなってし

まうけれど、雪稜登攀のための克蘭ボン、ダブルアックス、冬用のシューズも荷上げしながら、ビッグウオールを這いつくばる計画である。ベアトリス東壁は3P目を登ると雪の着いたバンドとなるが、それ以降は雪の付着がなく、壁での生活に必要な大量の水も荷上げすることになり、僕らは最大で100kg以上の荷物とともに壁を登ることになった。

ビッグウオール・フリーの理想は、下から順にオンサイト、もしくはレッドポイントしてロープを延ばしていくことだろうが、実際は、自分たちにとって特に難しいピッチでは、掃除やワークにかなり時間を取られる可能性が高かった。今回のトライでは、天候や限られた日程も鑑みて、

なるべくフリー・クライミングで前進しながらも、まずはピーク目指してエイド交じりでも進んで行き、下降時に完全なフリー化を試みるというスタイルで取り付いた。

1日目（快晴）

荷上げ後、2日間のレストを挟んで出発。日程は最大で10日間。快適なベースキャンプとはしばしお別れだ。

初日にアプローチして、そのまま懸案である1P目のハングに取り付いた。すぐ上の雪田からの滴りでひどく濡れていて、まずはエイドで越えてからフリーでトライ。びしょ濡れになりながらも意外にすんなりハングのフリー化を終えて、幸先のいいスタートとなった。氷河上に設置したABCで夜を迎える。

2日目（曇りのち大雨）

4時半起床。昨日張った1P目のフィックスをユマリーングしてクライミングを再開した。2P、3P目は安定したクライミングでマス（増本）がロープを引き、雪のあるテラスへ。すると予想外のボルトを見つけた。相当前にこの壁に取り付いたクライマーがいたようだ。未踏のラインと思っていただけに少々ショックだが、もう後戻りはでき

ない。自分たちのクライミングを続けるまでだ（下山後、ボルトは1997年、初登時のものと判明）。

小さな雪壁を、クライミング・シューズでキックステップして登り、4P目のクライミングが始まった。前半は、ガタガタしたコーナーを容易なクライミングで登るが、終盤、細くなったクラックのハングを乗越した部分からはクラックに泥が詰まり、エイド・クライミングとなった。泥が詰まった部分は短かったので、すぐに掃除してフリーで登り返す。

傾斜は増し、垂直から所々それ以上の強傾斜となる。コーナーのどん詰まりがクラックとなっているのだが、泥がひどく詰まり、とてもフリーでは登れない。泥をナッツキーでほじって、フレアしたクラックの奥の奥にオフセット・ナッツをきめていくような人工登攀が50m続き、精神力の要るピッチだった。終盤は流水のクライミングとなり、消耗が激しい。登攀時間は4時間にも及び、リードしたマスは、憔悴してクライミングを終えた。

夕方から雨は本降りとなり、壁は600mの巨大な滝と化した。激流の中を懸垂下降した僕らは、濡れ鼠となりながら壁から逃げ出した。夜も雨は降り続く。

3日目（曇りとときどき晴れ）

朝、壁を見上げると、信じたことに、全面滝と化していた壁の大半は乾いているように見える。「よしっ、今日からゴーアップだ」

本日、前半の大仕事は荷上げ。特に30ℓの水が追加されてからは、傾斜が少しでも緩いと摩擦で全く動かなくなっ
てしまい、超重労働。標高5000mを超えて、息も上がり
っぱなしだ。荷上げを終えて（すでに15時だが）、やっと
クライミング再開だ。昨日の最終エイドピッチと同様、ク
ラックに泥が詰まり、さらにコーナーは昨夜の雨で水が勢
い良く流れていた。最初の数mをなんとかフリーで試みた
ものの、すぐにテンション。その後はエイダーを取り出し
て、ずぶ濡れになりながらの苦しいエイド・クライミング
が続いた。終盤の20mは乾いたクラックとなり、フリー・
クライミングを交えてスピーディにこなす。しかし、終了
点を作り終えるとすでに18時である。

高度感抜群のフェイスにポータレッジを設置して、ピッ
グオールでの生活が始まった。

4日目（曇り）

垂直の壁にぶら下がりがながらポータレッジを積み、ユ

マールリングと荷上げから一日が始まる。少々濡れた5・10
dのコーナーを登り切ると、テラスに到着した。傾斜して
はいるが、この壁の中では非常に貴重なテラスだ。ここを
起点にして、この壁で最も強傾斜の部分に4Pフィックス
を張る予定だ。

テラスから始めの1Pはそれほど濡れておらず、顕著な
クラックが続いている。このピッチは本来目指していたフ
リー・クライミングで攻めたいと、アプミもエイドギアも
置いて、身軽にして取り付いた。小ハンク状の手前のク
ラックが悪いサイズでジャミングしづらく、傾斜も出てく
るポイントだ。レスト・ポイントとその核心部を行きつ戻
りつしながら、苦しい体勢でブラッシングしてから突っ戻
む。甘いジャミングをきめきれず、最終的にはガストンカ
チからデッド・ポイントで吼えながらガバをとらえる。プ
ロテクションを1つきめて、さらに傾斜の増したクラック
に進みステミングした。無酸素運動になってしまった時間
を取り戻すように激しく呼吸を繰り返し、レストする。ス
テミングから続くレイバックを一気に進み、息も絶え絶え
になりながら、小さなレッジに這い上がった。しばらく何
もできないほどに苦しいけれど、やりたかったクライミン
グができて僕はうれしい。

続くピッチはさらに傾斜を増してクラックも途切れがちで細く、いきなりフリーで突っ込める内容ではなさそう。マスがエイドで進んでいくが、核心はマイクロナッツの連続でかなり悪そう。2時間半かかって、やっと小テラスの終了点に到達。ロープをフィックスしてテラスへ戻った。

5日目（晴れ）

息を切らせながら強傾斜のユマールリングを終え、11P目となるコーナー・クラックの取付へ。傾斜は95度。コーナーに走るすばらしいクラックが続いており、一見して苦しいレイバックで切り抜けるのだろうかと思われる。しかし、残念ながらクラックは濡れていて、フリーで登るにはかなり無理があるようにも思えた。

快晴の朝で気分良く登りだが、出だしから予想以上にムーブもプロテクションも悪いクライミングとなり、シリアス・モード全開。ぬめって効かないジャムとステミングで進み、なんとか1つのナッツをきめる。こういう微妙なクライミングは、どうしても無酸素運動になりがちで、高所では激しく苦しい。意を決して恐ろしそうなレイバックへ突入。今にもすっぽ抜けるような濡れたクラックの縁でレイバックを続け、なんとかレッジに這い上がり、尋常では

ない苦しさに悶える。肺が潰されたようなかつてない苦しみに、意味もなく壁を拳で何度も叩きながらもがいた。ピレイヤーのマスを見下ろすと、まだ15mしか進んでいない。まだ30m以上は、かぶったコーナーが続いていた。

何度も諦めかけ、躊躇した。3度も落ちかけつつもなんとか耐えて、レイバック主体の苦しい50mを登り終える。ピレイ点のレッジで、僕は抜け殻のようになった。もうグリードは関係ない。今までで最高のオンサイト・クライミングだったと思えた。

クラックは途切れることなく続いているが、傾斜が落ちてきて落ち着いたクライミングとなっていく。濡れを気にするふうもなく、安定したクライミングで今日2P目をマスのこなし、僕はやっと出会えた、パリッと乾いたクラックに楽しくロープを延ばした。後半は気持ちのいいハンドジャムの連続で、歓喜の雄叫びを上げながら駆け上る。息が上がっても気分は最高だ。13P目を登り終えたと。思っていたよりも稜線が近く見える。もうここからは傾斜も落ちて、スピーデイに行動できるだろうと、明日は一気に稜線目指してラッシュすることにした。4P分のフィックスを下降して、今日は終了。

ゴーアップに備え、持参した「吊るしベーコン450g」

をふたりでペロリと平らげた後、明日も晴天が続くよう、祈りながら眠りに就いた。

6日目（快晴）

今日も最高の天気である。4Pフィックス・ロープをユマールリングして、クライミングを開始した。傾斜はおおむね90度以下となり、快適なハンド・クラックが続く。雪稜用の冬靴やアイスツールを荷上げしながら、4Pのクライミングで稜線に突き上げた。予想外に稜線の状態が悪く、不安定な雪を避けながら岩をクライミング・シユーズでトラバースして、岩峰手前に這い出る。稜線上の岩峰は完全にかぶっていて、左のそろそろな側壁を慎重にトラバースすると、雪稜の始まりとなった。頂上はすぐそこだ。冬靴に履き替え、ここまで苦勞して荷上げてきた克蘭ポンやアックスを取り出し、不安定な雪を踏み締めた。雪稜を70m慎重に進むとピークとなった。K6、K7をはじめ、無数の高峰をバックにピークに立つ。マスとがっちり握手した。やはりピークは最高だ。天候も最高で、のんびり過ぎして下降を開始した。

氷河から登り始め、すばらしいクラックをたどってピークまで到達し、僕らの1つ目の目標は達成された。これか

らは、全ビッチフリーでの完登を目指したトライが始まる。まずは最も難しそうで、この壁の完全フリー化の成否を決めるであろう10P目を探ることから始めた。ベースとなるポータレッジから2P目であるので、下降時に軽く掃除をしながらフリー化の可能性を探る。110度ほどの強傾斜が30mにわたって続くが、掛かりのいいホルルドが点在しており、それらを組み合わせるとフリーでの可能性が見えてきた。しかも、かなり楽しそうな内容に再びワクワクしてきた。明日は本格的に掃除とワークをして、RPにつなげたい。

7日目（晴れのち夕方曇り）

今日は壁全体の核心となるであろう10Pのトライである。まずはひとりユマールリングして、掃除とムーブの確認、プロテクション決めで1時間以上のワーク。行ける手応えを感じて、一度トップロープで試登後にプロテクションをプリセットした状態でトライした。左手は主にマイクロナツ系しか受け付けないような細いクラックの縁を力ちで保持して、右手はジャムやアンダークラッキングを繰り返しながら素早く進む。中間部以降は多彩なムーブでハンクを越えていくが、リズムが崩れて一気に呼吸が乱れた。なん

とか耐え、最後は荒い息をつきながらレイバックしてレッジへと到達した。

取付からこの壁を見上げたときも、エイドで切り抜けた2日前も、このピッチをフリー・クライミングで登る自信は全くなかった。「できちゃうもんだなあ」と、ロワーダウンしてもらいながら、登ったラインを感慨深く振り返る。ここまで内容の濃い、どつかぶりのピッチが、高所でのピッチオールのと真ん中に存在するなんて。そして、自分自身でフリー・クライミングで完登できたことに、静かな感動を覚えた。

完全フリー化まで残すところあと3P。午後からは、それらのピッチの掃除などに費やされた。特にマス担当の5P、6Pは、クラックに泥が詰まりまくっていて掃除が大変そうだ。この3Pは、午後になると、日差しによって暖められた上部雪田からの流水で濡れてしまうので、チャンスは午前中に限られる。マスは暗くなる直前までロープにぶら下がりながら、明日に備えてバイルを振りまくっていた。

8日目（晴れのち夕方雪）

下降しながら、昨日の夕方は流水で濡れていて、できる

か不明だった甘いレイバック・セクションの確認と掃除をし、朝一番で7Pをトライする。トライ3日目に登った際は流水がひどく、5mでフリーを断念したピッチだったが、今朝はからりと乾いており、レイバックとステミング主体のクラックらしいムーブから、中間部のフェイス・ムーブへと変化する。終盤は気持ちのいいジャムをきめながら、50mのすばらしいクライミングを堪能した。マスとハイタッチ！ このクラックだけでも、5つ星のスーパースターだろう。RPの余韻に浸る間もなく、下部のピッチに取り掛かる。

一見、きれいなクラックが続いていると思った5P、6P目（エイド時は55mの1Pで登っている）だが、トライ2日目に登ったときには泥が詰まっていた、エイド・クライミングで4時間以上掛けて登り切ったピッチだった。昨日のマスのがんばりで泥の大半はすでに除かれていたが、まだフリーで登るには汚れ過ぎていて、ブラシやナッツキーでの掃除が必要だった。正午、強い日差しに暖められた上部雪田からの流水が早くも到達してしまい、慌ててトライすることに。マスがフレアして効きの甘いジャムをきめながら、ジリジリと高度を稼ぎ、レイバックも絡めながら核心を越えていく。上部はすでに流水となった右壁に半

身浸かりながらも、粘って完登。偉い！

あと1Pだ。こうなったら今日中に完全フリー化を決めたいと、残る5P目をふたりに掃除するが、やはり流水が到達して、泥砂が残ったクラックはドロドロになりつつある。完全に流水になってしまいう前に、ここもマスがトライ。このピッチは傾斜のあるコーナー・クラックだ。所々濡れてしまったクラックにジャムをきめ、ステミングで粘りながら、マスはスカイラインに消えていった。

「ヒャッホー！」

マスが完登の雄叫びを上げ、僕もそれに応える。ついにこの壁の完全フリー化が成されたのだった。ポータレッジ目指してユマリーングすると、先ほど登った6P目はすでに完全な流水となっていた。ギリギリのタイミングで完登を決められたようだ。

ポータレッジにたどり着き、お祝いの夕食を腹いっぱい食べて寛いでいると、本降りの雨。好天周期も終わってしまうようだ。

9日目

結局、5泊した中間部のテラスでポータレッジを積み、まだ40kgはある、豚のようなホールバッグとともに下降し

て氷河に到達した。

ABCから見上げるベアトリス東面は、今日も凄じい傾斜でそそり立っていた。

【登攀データ】

BEATRICE (5800m) 東壁

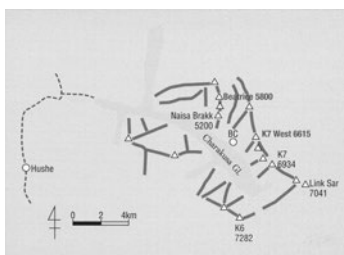
The Excellent Adventure フリー化 (600m / 5・13a)

メンバー…増本 亮、佐藤 裕介

期間…2017年8月1日～9日

ベアトリス東壁には現在、3つのルートが引かれており、The Excellent Adventure (750m / ED + A3 + … 初登時のグレーディング) は1997年、イギリスの3人パーティによって初登された、ベアトリス東壁中央を走るクラックをたどるラインである。今回は、ほぼ同ルートのフリー化となった。600m以上にわたってクラックが続く、すばらしいルートで、ルート上にあるボルトは終了点(下降点兼用)のみである。

ルートは主に3つのパートに分けられ、逆層ハング越えから雪田までの下部120m。特に傾斜の強い5～11Pの中間部はフリー化の際も核心となり、5・12台5P、核心ピッチには5・13aを付けた。上部6Pは傾斜が緩まり、



登攀をおえてK7西峰パーティと合流、左から佐藤、長門、横山、増本

おおむね快適なハンド・クラックが稜線まで続いている。さらにリッジ上のクライミング2Pと雪稜を経てピークに達する。ここまで充実したピッチが連続する、高所でのビッグオールは非常に珍しいだろう。我々のグレーディングは、オンサイトできずにエイド後にフリー化したものには、エイド時のグレーディングとデシマル・グレードを付けた。雨後や午後はクラックが濡れることがあり、一気に登りにくくなるが、グレードは登ったときの体感グレードとした。特に11P目は、乾いていればグレーディングよりかなり登りやすくなると思われる。

【ルート（各ピッチ概要）】

1P目…A1+後 5・11b/40m 濡れた逆層ハングから

スラブをトラバース。

2P目…5・10a/60m 左へ水平トラバース後、少々も

ろいフェイスを右上。

3P目…5・10b/55m 濡れたスラブ部分が悪い。

4P目…C1後 5・11a/40m 雪田テラスからコー

ナー。小ハングからは泥が詰まっている。

5P目…C2後 5・12a/20m 以後、7P目までは要

掃除であった。かぶったコーナー・レイバックとステミングを駆使して。

6 P目… C 2 後 5・12 b / 30 m 前半はレイバック、後半は甘いジャミングの連続でコーナーに行く。

7 P目… C 2 後 5・12 a / 50 m レイバックとフェイス・ムーブで変化に富んだ長いクラック・ピッチ。

8 P目… 5・10 d / 15 m フェイスを回り込み、濡れたコーナーに行く。

9 P目… 5・12 b / 30 m 傾斜が一気に増す。ボルダーチックな序盤から苦しいレイバック。最後のマントルも厳しい。

10 P目… C 2 後 5・13 a / 30 m 傾斜110度。クラックは途切れ途切れで、フェイス・ムーブ中心の核心ピッチ。

11 P目… 5・12 c / 50 m かぶったコーナー・クラックが50 m 続くピッチ。完登時は濡れていて非常に奮闘した。

12 P目… 5・11 a / 50 m 中間部までは濡れていて気が抜けないコーナー。

13 P目… 5・11 c / 60 m 完全に乾いて、ジャムの効く楽しいクラック。

14 P目… 5・9 / 60 m 快適なクライミングが続く。

15 P目… 5・10 a / 50 m 快適なクライミングが続く。

16 P目… 5・10 a / 30 m 快適なクライミングで雪田のあるテラスへ。

17 P目… 5・9 / 55 m (リッジ到達、壁終了) 傾斜はあるが容易なクライミングで稜線へ。

18 P目… 5・9 / 20 m 不安定な氷雪を避けながらクライミング。スラブが少々恐ろしい。

19 P目… 5・10 c / 45 m かぶった岩峰を避け、不安定な側壁をトラバースする。

20 P目… 雪稜70 m (山頂)

【使用ギア】

C 3 # 0 0 0 〓 2、X 4 # 0・1 〓 0・3、キャメロット U L # 0・4 〓 4 × 2 セット、C 4 # 5 〓 6 (ほぼ不使用)、ナッツ 2 セット、ピトン、リングボルト (5 P 目の終了点兼下降点として 2 本と、下降用で 2 本を使用)、エィダー、ロープ 60 m × 4 本

* [2017 年夏 カラコルム 3 つの登攀] は、『ROCK & SNOW』078 号 (山と溪谷社刊) より転載させていただきました。

黒部の山河と人を愛した伊藤孝一伝

西山 秀夫

プロフィール

伊藤孝一（明治25（1892）～昭和29（1954）年）

は、大正末期に立山から黒部の山河を跋涉した、名古屋の山岳愛好家であった。先祖は尾張藩に仕えた御用商人であり、豪商であったという。アルピニズムの対象として困難な登山を実践するわけではなく、登山記録をつくるのでもなかった。だから、登山家としては知られていない。登るだけでなく、山岳映画の撮影に非凡な着想を見る。結果として積雪期の北アルプス縦走の記録と、類稀な山岳映画を残すことになった。『日本百名山』が誰にも読まれ知られるごとく、伊藤孝一の業績が遍く知られることを願う

て本稿を起こす。

山への目覚め―碧梧桐の俳句から黒部への関心を抱く

伊藤孝一が登山に目覚めたきっかけは、俳人の河東碧梧桐（1873～1937年）ら3人の紀行を大阪朝日新聞で読んでからだという。

碧梧桐は子規や虚子から有季定型の俳句を学ぶが、五七五の定型に飽き足らず、新傾向の自由律に傾倒。その宣伝のために全国行脚を試みる。大正2（1913）年7月末に白馬岳へは「……黒部川の峡谷（猫又谷）をさかのぼって後、宿志の登山を果たした。」という。『日本の山水』（紫

鳳閣、大正4年）に著わした。

なお、猫又谷には登山道はなく、沢登りである。陸軍参謀本部陸地測量部が地形図を刊行したのは大正2（1913）年であった。「黒部の主」と呼ばれた冠松次郎が、黒部に本格的に入り始めたのは大正7年のこと。現在では登山者に必携の地形図であるが、当時の俳人が沢登りできたのも、黒部峡谷に精通した案内人がいたからこそと思われる。

大正4（1915）年7月、43歳のときに、針ノ木峠から槍ヶ岳まで日本アルプス主稜を24日かけて縦走。碧梧桐、天文学者の一戸直蔵、大阪朝日新聞記者の長谷川如是閑の3人と7人の案内人、人夫の計10人によって踏破し、『日本アルプス縦断記』（大鏡閣、大正6年）にまとめた。この登山隊の編成を見ると、現在のヒマラヤ奥地の遠征にも匹敵する。いまだ探検的な登山の時代であった。鍋、米、味噌を携えて、山菜を摘み、岩魚を釣り、野営する原始的な登山であった。

典型的な山岳俳句のみ引くと、

イワナ一尾々々包む虎杖の葉重ねて

石に命ある雪田の露頭かな

雷鳥の雛掌にすうすうと眠るかな

立山は手届く爪殺ぎの雪

駒草に岩なだれ山匂い立つ

鋭利な刃物で切り取ったような風景が写生されて、印象明瞭である。出典は栗田靖編『碧梧桐俳句集』（岩波文庫）。

伊藤は名古屋生まれの名古屋育ちで、全く登山の知識がなかった。大正初期から山歩きはしていたが、碧梧桐の活躍と新聞報道とで黒部源流の奥深い山岳地帯のあることを知ったのだ。男一代命を懸けるとまでは言わないまでも、未知への探求心が大いに刺激された。退屈な日常生活を脱して、秘境への好奇心であり、登山記録を作る目的ではなかった。

伊藤孝一の出自

伊藤孝一は、明治25（1892）年4月14日に名古屋で生まれた。9歳で父と死別、嫡出の後継がないために婚外子（庶子）の身で伊藤家に迎えられ、京屋吉兵衛7代目を継いだ。

瓜生卓造の小説『雪稜秘話―伊藤孝一の生涯』（東京新聞出版局、1982年、以後『秘話』と略）には、先祖は尾張藩に仕えた御用商人であると紹介する。名古屋の伊藤姓で御三家というので、伊藤次郎左衛門の家系図や川伊藤（堀川の右岸側の伊藤家を区別するための呼称で、のちには東

海銀行頭取の伊藤喜一郎が出た)も調べたが、名前がない。架空の人物かと疑う。

そこで、日本山岳会編『山岳』の新入会員の一覧表を見ると、大正5年7月に弟とともに入会していた。会員番号481。氏名の前に「特別」とある。多額の寄付をしたらしい。住所は名古屋市中区玉屋町4-9。

そうか、玉屋町といえば、徳川家康が名古屋城を築城した際、「清須越し」の御用商人が大挙して転居した場所だ。現在の名古屋市中区丸の内から中区錦の一带である。今は中区錦三丁目で、三菱東京UFJ銀行名古屋営業部(旧東海銀行本店)の本町通り周辺に住んでいた。林董一『尾張藩漫筆』には「碁盤割」とあり、当時は中心地だった。

さらに林董一『名古屋商人史』(昭和41年、中部経済新聞社)にあたりと、玉屋町に京屋吉兵衛(伊藤吉兵衛)の名前がある。資格は御勝手御用達格で上位になる。明治4年、維新で生き残った商人の一覧表にもあり、鼈甲べっこうの商いを生業としていた。京屋吉兵衛は実在していた。

伊藤孝一は愛知一中に入学、その後ほかの旧制中学を転々としたが中退。学業には恵まれなかったようだ。

本格的な日本山岳映画の嚆矢

伊藤孝一の業績を知るには、まず山岳映画を鑑賞するのが一番である。以下は立山博物館の作品紹介を転載。

「雪の立山、針ノ木越え」(1923(大正12)年3月)「雪の薬師、槍越え」(1923(24年)伊藤孝一隊撮影、構成・編集・羽田栄治、ナレーション・児玉清。

「伊藤孝一は、大正12年11月から翌13年の4月にかけて3度の雪山行を企て、上ノ岳冬期初登頂、薬師岳厳冬期初登頂を果たし、越中から奥黒部領域を踏破して黒部五郎・三俣蓮華・鷲羽の頂を踏み、槍ヶ岳に到達する(積雪期初縦走)。この山行の映画記録は未編集のまま信州有明の赤沼家に残置されたが、昭和40年に名古屋の報道カメラマン上田竹三(筆者注・大阪毎日新聞社名古屋支局写真部長、東京山岳会会員)によって見出される。フィルムには、雪の北アルプスを目指した男たちのバイオニアワーク、それを支えた山案内人たちの活躍、当時の服装や装備、やがて湖底に沈む僻村有峰の風景などが写し込まれ、日本近現代登山史に欠くべからざる資料となる。平成12(2000)年、資料調査に基づいて富山県「立山博物館」が作品化。」

この日本屈指の山岳映画は、拇池スキー場の赤沼健至氏経営のホテルでも鑑賞させていただいたことがある。

名古屋における登山熱の高まり

『山岳』の大正3（1914）年の雑録を読むと、名古屋の日本山岳会会員十数名の、初めての集会在柳橋の料亭でもたれた。同4年に旧制八高山岳会を数名で結成。その会員が日本山岳会会員と重なる。大正5（1916）年6月10日には、愛知県議事堂（当時は南武平町で、今の矢場町付近）で在名の日本山岳会会員および山岳愛好家有志晩餐会を開催。山岳講習会には2500名が集まった。日本銀行名古屋支店長の結城豊太郎が開会の辞を述べ、講師は高野鷹蔵と辻村伊助だった。9月には豊橋で志賀重昂を招いて講演会もあった。

前述したように、碧梧桐の活躍と足元の名古屋における登山熱にうなされるように、この高まりの中で、大正5年7月に弟の鎮之助とともに日本山岳会に入会したのである。25歳だった。

『秘話』によれば、愛知県下一の富豪だった、とある。伊藤藤殖産合名の社長だが、事業は家訓としてやらず、趣味に浪費するしかなかった。今の年収60億円、納税額11億円に相当する。この豊富な資金にものを言わせて、山岳映画の撮影を思い付く。フランスから映写機を輸入し、専任の撮影技師は名古屋の勝野銈四郎。信州大町の山案内人の赤沼

千尋、対山館の百瀬慎太郎らと深い交遊があった。

有峰・真川の小屋を拠点に厳冬の北アルプスへ

伊藤孝一の登山は、夏山から冬山へとヒートアップしていった。32歳となった。大町から針ノ木峠に登るため大正12年1月から入るが、2月に大沢小屋で吹雪のため停滞。大町側から越中側への横断は撤退する。この停滞は当時の新聞が遭難の憶測記事を書いて心配させた。

3月、越中側に回り、山案内人として宇治長次郎や佐伯平蔵らが同行した。立山登山、黒部川源流部を横断し、針ノ木峠越えを果たす。このときの映画は、7月に宮内省に献上された。半年後、有峰に入り、真川の源流に拠点となる豪華な山小屋を建設。上ノ岳（北ノ俣岳）、黒部五郎岳にも建設し、雪の薬師岳、鷲羽岳、槍ヶ岳、上高地への縦走の拠点とし、天気の良い日だけ行動した。

『山岳』（第17年第3号）には「雪の上ノ岳へ」と題した榎谷徹蔵の、大正12（1923）年12月25日から同13年1月4日までの紀行文がある。藤木九三ら朝日新聞の登山隊は、大多和峠を越えて有峰へ。そして、真川へと小畑尾峠越えをする難儀な旅だった。真川の小屋に泊まり、往時の小屋での贅沢三昧も活写（後述）されている。映画技師の

勝野も同行している。

『山岳』（第68年、1973年）の上田竹三の「伊藤孝一氏の足跡」によると、芦峯寺の総代・佐伯静に山小屋建設や人夫動員を約して20万円を支払った。今の20億円という。真川の小屋は有峰の旧家を2軒買い取り、解体して移築した。ほかに上ノ岳の小屋、黒部五郎の小屋を建設。特に真川の小屋は拠点となるため、堀田支配人夫婦を常駐させ、調理場、風呂場、写真暗室を備えた。小屋というより山の農家風で、炉が切られ、養鶏、野菜栽培、豆腐作りもできた。

黒部方面の登山者の拠点になっている折立は、新折立トンネルを抜けて道なりに行く。折立から右へ行く砂利道が伊藤の真川小屋に通じている。大正12年には凄惨なことが行なわれていた。日本屈指の山岳映画の撮影行であり、積雪期の北アルプス縦走記録の前夜であった。以下は上田竹三の文をそのまま引用する。

登山用具や食糧の配分（約三ヶ月分）が行なわれ、本隊は名古屋の5名、芦峯から立山初期のガイドである平蔵（志鷹）光次郎、伊三郎、新二郎、善正坊、福松、亀蔵、鶴松、勇蔵、弥曾太郎、徳助らが参加して、連日、有峰から真川へと豪雪のラッセルと荷上げを続けた。

食糧、天幕、防寒具、夜具、数台の写真機と現像用具、薬品、スキー、猟銃、弾薬などのほか、個人装備としてリュック、ワカンジキ、金カンジキ（筆者注・今のアイゼン）など。一方、輸送部員以外は真川に集結して太郎平ヘラッセル、来る日も来る日も吹雪の明け暮れの中を、荷物の整理と補給物資としてかもしか狩り、熊狩り、岩魚釣りに忙殺された。

そのうえ本隊員と人夫らは、初めて履くスキーの練習も日課の一つとして欠かせなかった。12月4日は晴天に恵まれたのに力を得て、太郎山へのアタック。伊藤氏らはその鞍部から白銀に輝く、薬師岳をはじめ黒部五郎岳、黒岳、鷲羽岳、雲ノ平などの大景観の撮影を欲しのままにし、再び真川に引き上げた。小屋には豪華な魚肉の料理が待っていて、一行の食欲と疲れを十二分に癒してくれた。当時の『山岳』に関西の榎谷徹蔵氏は、真川小屋は大ぶとんの上に厚い毛布を5枚も重ね、寝間着も毛織のシャツ、伊藤家の梶田支配人の手料理によるクマやウサギ、カモシカなどの料理も格別。真川の流れのほとりにアセチリ（レ）ン灯、おそろく太閤さんでもできなかったこと、と書いている。引用以上。

このような、完全な小屋を拠点にしての撮影行であった。

その成果は文章で読むより、映画を見ていただくことである。機会があればぜひにも鑑賞されたい。

黒部五郎の小屋は冠松次郎が利用した。『黒部溪谷』（平凡社ライブラリー）の「双六谷から黒部川へ」の中で、「この小屋は二間半に四間位の大きさでずいぶん太い材料と行き届いた設備で頑丈にできている。炉が二つに切っており、風呂もすえ、暖炉までも設けてあった。入り口の掛け板に五郎平ノ小屋とするしてある。名古屋の伊藤孝一氏がこの山稜を冬季に旅行するのを目的に建てられたもので、昨年十一月頃によく出来上がったのだということである。氷冷の夜臥を覚悟していた私はこの寶（たまもの）に感謝の意を表さないではいられなかった。」と激賞。大正13年8月5日のことだった。

有峰の狛犬の話

伊藤は、ダム建設で廃村の有峰から逸失する恐れのある狛犬八対を購入する。その顛末は前田英雄編『有峰の記憶』（桂書房、2009年）に詳述されていた。

平成10年に、立山博物館の特別企画展「山を撮る」で「山行記録ノート」が公開された。

伊藤は「有峰の狛犬の内最古の破損せぬ者二個が富山市

の銀行家某に売約が成立しかかっていた。其の売買の値は不明だが、有峰全村民の入札により落札した。価が二個百円であったそうである。八個全部を当方に於いて求め度いと話の結果四百八十五円で買い受けることになって契約した。……」の内容に関係者は驚いた。

赤沼千尋は『山の天辺』（東峰書房、昭和50年）「有峰悲歌」の中で「……東谷宮は拝殿の八体の像であった。此の拝殿は薬師に登攀できない部落民が之を拝したのであるといひ、此処には鉄を磨いて作った古円鏡が数多く奉納されていた。……（中略）……吾々はその社殿の縁上にあつてやるせなくしようんぼりと寄り合う木彫りの姿に限りない愛情を覚えたのである。そこで老夫婦に相談して焼酎一斗と金一封を献じ木彫りを菰包みにして私の家に送り込んだという次第である」と書いていた。平成10年まではこの記述が信じられて、引用もされていたのだった。

狛犬は名古屋の伊藤家に運ばれるが、戦争で疎開先の赤沼千尋の家に保管された。疎開先からは婦名するが、狛犬は赤沼家で保管されたままになった。前述のように赤沼が購入したことにされて昭和32（1957）年、松本市立博物館に寄贈された。平成12年になって大山歴史民俗資料館に譲渡の話があり、狛犬は丁ターンしたのである。

ここで同資料館のホームページから狛犬の概要を引用すると「有峰の狛犬は東谷宮の社殿のひさしの下に8体4対がおかれていた。明治43年（1910）の山岳雑誌の写真にのっている。大正10年（1920）有峰が県有地として買取られ廃村となった。紆余曲折を経て松本民俗資料館に収った。狛犬が社殿におかれた位置による違いからか、風雪の影響がみられ製作年代に相異があるか判断できないが村の成り立ちから室町期からさかのぼるとみられる。一説に鎌倉期という人もいる。作者は有峰の人より円空のような漂泊の彫り師だったかも知れない。4対はいづれも阿吽の様相で、角をもった対は2対みられ、儀軌（仏像製作の約束）にかなっている。

また、作物を荒らす野獣を調伏するために彫ったともいつている。」と伊藤も赤沼も名前を書かず、関係者を刺激しないような配慮が感じられる。

しかし、伊藤孝一の文化財保存の思いは達せられたのだ。同資料館に丁寧に扱われていることを知れば、伊藤も満足だろう。

実物を見学すると、ひび割れて今にも朽ちてしまいそう。しかし、貴重な歴史遺産であり、有峰の昔を偲ぶよすがになっている。

山岳（記録）映画の評価の消長

大正12年夏、「雪の立山・針ノ木越え」を公開。東京、大阪、名古屋、富山、松本、金沢の各地で上映会を開催すると、超満員の観客があった。一般大衆にも目で山岳景観のすばらしさを知らせた。この画期的な登山記録にもかかわらず、当時の日本山岳会からは無視された。前述したように、利用させてもらったはずの冠松次郎でさえ、「冬季に旅行する」といつて軽視し、登山とは認めなかった。

その背景は大正12年1月、板倉勝宣、三田幸夫とともに積雪期の立山へ登山、下山中に松尾峠で板倉が遭難死したことに起因する。同僚を亡くし、自身も遭難した榎有恒への配慮とも言う。このためか、安川茂雄『近代日本登山史』（あかね書房のち四季書館、1969年）には伊藤の記録の記載がない。瓜生は『秘話』の中で寡頭政治といって批判する。この冷遇に嫌気して、赤沼ともども戦前のうちに退会している。

『目で見る日本登山史』（山と溪谷社、2005年）には掲載された。平成元（1989）年の、榎有恒の死去を待つしかなかったのだろう。

伊藤の業績は、昭和40年に名古屋の上田竹三が発掘したことは前述した。その後研究が進められて、富山県「立山

博物館」は平成10（1998）年7月、特別企画展「山を撮る 山へカメラを向けた人たち」に続き、平成16（2004）年7月、特別企画展を開催した。「山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後五〇年『山嶽活寫―大正末、雪の絶巔にカメラを廻す』など、映像メディアに造詣の深い研究者らによって顕彰されている。長野県松本市や岐阜県高山市で山岳映画会が催されて、今、再評価の兆しがある。

伊藤孝一の不運

登山の道楽に打ち込み過ぎて、先祖代々の家産を失った話によく聞く。赤沼千尋と上田竹三は、撮影行に消費したカネは当時の40万円を下らないという。この散財が起因した、と語る。ところが、『秘話』によると、資産売却に伴う税金の訴訟絡みだったという。

伊藤孝一は、現在の名古屋駅に近い旧笹島貨物駅と名古屋港を結ぶ中川運河建設のために大正15（1926）年、名古屋市へ土地を売却。翌年、売却金額に相当する課税に立腹し、訴訟を起こす。運河建設で周辺の地価が騰がったためであった。周辺の土地も伊藤の所有だったから、相殺されたことになった。土地を売って納税することもできたが、訴訟に持ち込んだ。結局、滞納すればさらに加算税が

付く。伊藤は万策尽きて、昭和6（1931）年に破産となった。租税法主義は今も明治憲法と同じだが、税務当局の裁量権に負けたことと推察する。『秘話』には、一切を任せた弁護士とうまくいかなかったことも書かれている。ともあれ、江戸時代から土地という資産を蓄積してきた京屋吉兵衛七代目当主としては、「沽券にかかわる」（信用力）ことだったと理解する。

安曇野における交遊録と家族

百瀬慎太郎（1892～1949年）は明治25年、安曇野生まれで、同じ年の好もあつた。赤沼千尋（1896～1979年）も安曇野に生まれた。最初は北アルプスの夏の案内人として交遊が始まった。早稲田大学OBの「岳友会」のホームページに、石原きくよ氏の講演録「北アルプス開拓の先駆者 百瀬慎太郎」があるが、その交遊部分を引用させていただく。

「それまで山登りをするつてことはほとんど、雪のない時期が多かったわけなんですけれども、積雪期に立山針の木を越えようという目論見を百瀬慎太郎と伊藤孝一という名古屋の大富豪家だったんですけれども、このかたがとても慎太郎の人柄にひかれていて、惚れこんでいたんですね。

それで対山館に遊びに来ていたりしていたんですけれども、その伊藤孝一さんと、燕山荘を創られた赤沼千尋さんてかたですね。その三人でもって、立山針ノ木越えを積雪期にしようということを考えて実行するわけなんです。伊藤孝一さんの本なんかによりますと、これはちよつとした

思いつきで、慎太郎が開いたスキーの講習会の後、こたつでいっぱい飲みながら、話をしているうちに窓から白銀に輝く山が見えて、あの山をスキーですべったらさぞ愉快だろうなあってことから話が始まったことになっているんですけれども、とても気楽な気持ちで始めたつてふうになっているんですけれども、実はそれぞれの胸のうちには前々からそれなりの思いがあつたと思われます。伊藤孝一さんてかたは富豪ですから、そんなに働く必要もなかったんですけれども、趣味で映画をとて一生懸命やつてまして、自分の趣味のために、映画を創る人を一人雇つてらしたほど入れこんでいたんですね。ぜひとも雪山の映画を取りたいっていう目論見があつたんです。慎太郎は慎太郎で、スキーによる冬山の登山つてものをなんとかできないものかなあって思いがずっと胸の中にあつたのですから、『よし、ではやろう』ということになって、思いつきではじめたようになっていますけれども、それなりの綿密な計画を

立てて、充分な手はずをとのえて出かけていったわけなんです。」

スキー講習会を通じて、伊藤を中心に赤沼、百瀬の3人は水魚の交わりを得たのである。そのなかで百瀬は昭和24年に死去した。

『山の天辺』には『山けら』が再録され、伊藤孝一があとがきを書いている。赤沼と伊藤の葉書のやり取りは、ほとんど毎日だった。過去30年来、赤沼からもらった手紙の数は1000通を超えるだろうという。毎日か少なくとも3日に一度は手紙なり葉書が来た。赤沼との密接な交流が語られて、最後になると「只一つ忘れてならぬのは、この第一冊を百瀬の墓前に供えるということである。そして、妙なものを作つたなあ、と永遠の彼方から呵々大笑するであらう亡き友の声を、吾等二人は耳と心を澄まして聴き取らねばならぬ。」と結んだ。『山けら』の出版は、百瀬への追悼の意味と感じていたのだ。

昭和6年の破産後も、競売を逃れた資産で家族を養つた。人情紙風船のごとしと言うが、破産すると身辺から人が去つていった。それでも、越中芦峯寺と信州安曇野の人らとの親交は前述した。

昭和8年には、娘2人を連れて百瀬とその娘、奥村らと

針ノ木峠を越え、五色ヶ原に遊んだ。このときの記録映画が最後の作品となった。下山中、伊藤は何度も山を振り返って見たという。

その家族も次々に失う。昭和8年に長男、19年には妻、20年に次男、22年に生母、25年に三女と、身内の不幸が続いた。昭和26年に、傷心と失意のうちに名古屋を去って東京都三鷹市に転居した。27年には次女の死去が追い打ちをかけた。遺族は四女の伊藤都留子さんただ1人となった。昭和29（1954）年4月17日、享年62で他界。墓は中央本線・荻窪駅近くの西教寺の墓地で、多摩霊園の裏。武蔵野の雑木林の一角に眠る。

〈本稿は日本山岳会東海支部の支部報に掲載した「東海岳人列伝」の「黒部の山と人を愛した伊藤孝一」に、その後入手した参考文献で得た知見を反映させて、大幅に改稿したものである。〉

〈参考文献〉

「山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後五〇年『山嶽活寫』大正末、雪の絶巔にカメラを廻す」（富山県「立山博物館」、2005年）
赤沼千尋『山の天辺』『有峰悲歌』（昭和50年、東峰書房）

前田英雄編『有峰の記憶』（桂書房、2009年）
林董一『名古屋商人史』（昭和41年、中部経済新聞社）
安川茂雄『近代日本登山史』（あかね書房のち四季書館、1969年）

『目で見る日本登山史』（山と溪谷社、2005年）
日本山岳会機関紙『山岳』バックナンバー

『河東碧梧桐全集』10巻「日本の山水」「日本アルプス縦断記」（短詩人連盟・発行 蒼天社・発売 書店販売・文藝書房、2010年）

岩波文庫・近藤信行編『山の旅』明治・大正編のうち、長谷川如是閑の「日本アルプス縦断記」抄を採録

〈伝記小説〉

瓜生卓造『雪稜秘話 伊藤孝一の生涯』（東京新聞出版局、1982年）

石原きくよ『山を想えば人恋し』北アルプス開拓の先駆者・百瀬慎太郎の生涯（郷土出版社、1993年）

〈ホームページ〉

富山県「立山博物館」の作品紹介「雪の立山、針ノ木越え」（1923年3月）「雪の薬師、槍越え」（1923～24年）
大山歴史民俗資料館のHP「狍犬の概要」
早稲田大学OBの「岳友会」HPから石原きくよ氏の講演

録

〈ユーチューブ〉

「雪の立山、針ノ木越え」(1923年3月)

<https://www.youtube.com/watch?v=pe65jrr6U7c>

熊本滞在中のウェストンの足跡

田 上 敏 行

はじめに

本会名誉会員第1号であるウォルター・ウェストンの日本滞在中の足跡については、多くの研究者の調査によってかなり明らかになっている。ところが、仔細に見ると明らかにになっているのは明治24年以降の足跡であって、それ以前の来日初期の足跡、なかでも最初の赴任地だった熊本滞在中の足跡については、資料がほとんど見当たらないこともあって、これまで空白のままであった。

熊本に住む会員として、かなり以前からそのことが気に掛かっていたが、やっと数年前から少し本格的に調査を始めてみた。その結果、これまで不明だった点がいくつか明

らかになり、会報に「熊本のウェストン」として寄稿した。ただ、会報では紙面の制限があるので内容も圧縮したものとなり、分かりにくかったように思う。それに、できれば全体をまとめて読んでいただいた方が読者にも分かりやすいのではないかと考え、少し詳しく書き改めてみた。ただ、内容的にはいまだ不明の点が多い。本来ならもっと明らかにした時点で発表すべきかもしれないが、そうなるというになったら発表できるか見当がつかない。そんな訳で、とりあえず現在までに分かったことをまとめてみた。いわば「平成30年までに明らかになった熊本のウェストン」である。



熊本滞在中のウェストン
(The Church Missionary Gleaner 1889 より)

熊本滞在中の足跡を記した資料として Church Missionary Intelligencer and Record vol.14 に、ウェストン自身による書かれた Letters from Cambridge Men. From the Rev. W. Weston, Kumamoto, Japan という報告書がある。報告書は 1889 年 1 月 3 日付で熊本から英国の聖公会本部宛に発信されたもので、4 月 1 日に神戸に上陸した後、

熊本に赴任して、宣教師として活動した 12 月末までの 9 ヶ月間の足跡が記されている。熊本におけるウェストンを知る手掛かりとして最も詳細で、信頼できる資料であるから、本稿はこの報告書を軸に筆を進めたい。なお、この報告書の存在は安江安宣会員により見付けられたもので、会報 491 号に「ウェストンの来日第一報など」として紹介されていることを付記する。

* 年号の表記は、資料の多くが和暦のためそのまま使用し、必要に応じて西暦を使用した。

いつ熊本に来たのか

報告書によれば、明治 21 年 10 月 15 日に英国汽船で大阪を発って 17 日に長崎に着き、そこで熊本教区のブランドラム師の出迎えを受け、ブランドラムと同行して 10 月 21 日（日曜日）に熊本へ向かった。8 時間続いた悪天候の中を連絡船は出航し、熊本市の西方約 10 km にある百貫港^{ひゃっかん}に上陸している。

百貫港は熊本市を流れる坪井川の河口右岸にあつて、現在も漁港として運用されている。港の歴史は古く加藤清正によって開かれ、明治中期まで熊本市に最も近い外港としてにぎわった。明治 17 年から大阪商船会社によって大阪―

熊本間の定期航路が開設され、大阪、神戸、馬関（下関）、博多、長崎、百貫の航路で、それぞれ月3回往復していた。当時は熊本までの鉄道は開通しておらず、長崎―熊本間は船便がよく利用されていた。

おりから干潮のため（当日は大潮だった）連絡船は接岸できず、沖に投錨した船から小舟に乗り継ぎ、さらに干潟を歩いて上陸に苦労した様子が記されている。当時は港から熊本市内まで人力車が1時間半で連絡していたが、たまたま出払っていたのか、港から6〜7mi歩いて熊本にたどり着いた、とある。おそらく坪井川に沿って歩き、熊本城の東側にあたる桜井町にあったブランドラム宅に落ち着いたと思われる。

ここで熊本滞在中のウェストンを語るときに忘れてはならない人物として、ブランドラムについて少し述べたい。

ジョン・バプス・ブランドラム John Babs Brandram（1858〜1900年）は、英国ケンブリッジ大学で修士の学位を取り、英国聖公会の宣教師として、姉で女性宣教師のメアリー・エリザベス・ブランドラムとともに1884年5月に来日し、長崎で布教活動にあたる。1887（明治20）年5月に熊本へ転任、開港地以外に住んだ初めての

CMS（英国国教会伝道協会）の宣教師だった。同年8月に聖十字教会が開堂した後は、同教会や区内3ヶ所（立町、上通町、新町）にあった講義所で宣教師として活動する。特に五高生や九州東岸部への布教活動を精力的に行なった。熊本市名誉市民の福田令寿は『百年史の証言』の中で、明治20年代の回想として「そのころ、ブランドラムという



ブランドラム

若い宣教師がおりました。姉さんも婦人宣教師として一緒に来りましたね。非常に熱心な人で、とくに五高生の伝道に力を入れたのです」と記している。

後述するように、ウェストンは1890年と91年の2回にわたって九州の山6座を登り、その中で当時、九州本土最高峰とされていた祖母山にブランドラムと一緒に登っている。そのときの記録は、91年発行の Handbook for Travellers in Japan (『日本旅行案内』) 第3版に掲載されている。

どこに住んでいたのか

報告書では、「熊本に着いて最初の6週間ほどは宿舍が見付からず、ブランドラム師と彼の姉が住んでいた住宅にやっかいになった」と記している。その理由として、この街は11年前に起こった西南戦争のため戦火で家々が焼失し、復興の真最中であって、適当な借家を見付けることが非常に難しかった、と述べている

ブランドラム宅については、明治27年に市内を流れる白川東岸の新屋敷町に転居した後の資料は散見されたが、それ以前の、熊本市内中心部に住んでいたころの資料は見当たらず、長く不明のままだった。

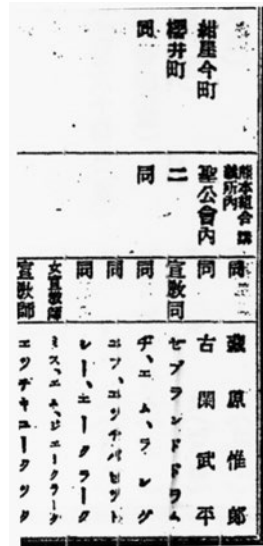
ところが、2016年9月に、熊本市で明治3年から現在まで営業を続けている富重写真館の開業150周年記念展が開催された。多くの展示物の中で筆者の目を惹いたのが、撮影記録ともいべき「写真来客名簿」だった。写真館はウェストン滞在時にはすでに存在しており、彼が勤務していた教会から比較的近い場所にあったので、もしかしたら写真に関心が深かったと思われるウェストンが訪れたことがあって、その記録が残っているのではないかと直感し、写真館に問い合わせてみた。ところが、本来同館には創業以来の名簿があつたが、昭和28年に熊本市を襲った大水害によって店の裏手を流れる坪井川が氾濫して、多くの資料が流失し、辛うじて残った名簿も劣化がひどくて、現在はずべて県立美術館に保管され、修復作業がなされているとの回答だった。

そこで県立美術館に連絡し事情を説明したところ、原本を解読し、活字化された資料を入手することができた。早速名簿を調べところ、最も古いと確認できたのは明治22年10月からの部分であり、後述するように、すでにウェストンが熊本を離れた後のものだった。念のため名簿の後の部分調べたら、明治23年1月14日に、ブランドラムが2人の子どもを連れて撮影に訪れた記録があるのを見付けた。

現在の住居表示は熊本市中央区上通り7-35で、跡地は和教奇司館というホテルになっていた。実は、この地には明治28年に創業された「司ホテル」という、熊本では老舗のホテルがあったが、2007年に営業不振から東京の不動産投資会社に営業権を譲渡して現在の名称となった。先に、ブランドラムが明治27年に熊本市の中心部から新屋敷町に転居した事実を述べたが、司ホテルが同じ場所に明治28年に創業された事実と合わせて考えると、同地がブランドラム宅から司ホテルへと変わったことが裏付けられる。

報告書には、ブランドラム宅に6週間ほど下宿した後「ようやく或る小荷物運送会社（原文では Parcels Express Company）の二階で、寝室、居間の二部屋つきをみつけたが、階下は会社の事務室だった」と続いている。熊本着任

小荷物運送会社の特定についてはかなり前から調査を続



日本全国教会便覧

けていたが、報告書に書かれた記述以外に場所を特定する手掛かりがなく、また、当時の運送店に関する資料もほとんど残っていないかった。全国的な企業であれば「社史」などが残されているが、地方の小規模な企業についてはその資料はほとんど残されていないからである。当時は資料に残っていない小規模の運送店もあったと思われるが、ウェストンが Company と表現していることや、外国人を下宿させることが可能な家屋であることなどを考え合わせると、ある程度の規模を持つ運送会社ではないかと思われる。ところが、明治20年代初期の資料は見当たらず、わずかに『熊本区誌（原本は明治14年発行）』と『熊本商家繁盛図録（原本は明治19年発行）』の2冊があるのみだった。前者には通運会社は1店だけが紹介され、後者には荷受問屋が4店、通運会社が1店紹介されていたが、通運会社は住所が同じ（熊本区新1丁目）ことから、両社は同じ会社と思われる。会社の名称は「内国通運会社熊本分社」で、のちの日本通運熊本支店である。

このほか当時の新聞広告で小荷物運送会社を探したが、該当する運送会社は見当たらなかった。

ところが、そのころ並行して調べていた第五高等学校（第五高等学校の前身）の設立準備に関連して、『五高七十

年史』の中に「明治20年6月4日付を以て、第一高等中学校長兼東京高等師範学校監事から、本校に転任を命ぜられた野村校長は（中略）同月21日帰熊、桜井町17番地の内国通運会社に止宿し、7月13日を以て同所に仮事務所を設けた。（中略）20年8月8日の午前8時より、桜井町の仮事務所の階上に於いて相談会を開き……」という興味深い記事があるのを見付けた。おそらく前述の新1丁目にあった内国通運会社熊本分社が移転した会社と思われるが、『内国通運株式会社発達史』や、そのほかの資料でも詳細は不明だった。

そこで、2016年の日本山岳会年次晩餐会に出席するため上京した機会を利用して、港区高輪にある物流博物館（日本通運が源流である）を訪ねて調べてみた。調査したのは、明治21年ごろに桜井町に内国通運会社熊本分社があったことの確認と、そこにウェストンが居住していたことを示す手掛かりとなる資料の存在であった。ところが、同博物館には熊本支店が開設された明治23年以降の資料がなく、桜井町に内国通運会社熊本分社が存在したことを示す資料は見当たらず、ウェストンの居住に関連する資料もなかった。

とりあえず内国通運会社の初期の社員録の写しなどを持

ち帰り、社員録にあった人物名を調べたところ、同一名の人物が明治21年の桜井町17番地の地券台帳に記載されていることが分かり、そこから調査を進めた結果、明治20年初めから25年末にかけて、内国通運会社熊本分社が桜井町17番地に存在したことが確認できた。この期間はウエストンが熊本に滞在していた時期を含んでいる。その後の調査で、明治20年2月1日付の熊本新聞に、内国通運会社が1月31日に新1丁目から桜井町へ移転した記事があるのを確認した。

さらに、桜井町17番地の現在の住居表示である熊本市中央区上通り5-10を地図で確認したところ、驚いたことに道幅5mの桜井通りを隔てて、ブランドラム住居跡の真正面にあたることが分かった。仮にここが転居先なら、ブランドラム宅に下宿しているのと同じようなものだから、ウエストンにとっては好都合だったのではなかろうか。

これまで述べてきたことを整理すると、この場所にあった内国通運会社熊本分社が小荷物運送会社であること、「階上」とあるので建物が2階以上であること、建物の一部が貸部屋として使用された実績があること（第五高等学校仮事務所として、20年7月13日から同年10月1日まで使用されている）など、ウエストンが報告書に書いている記述



右側の4階建てがブランドラム宅跡。反対側が内国通運熊本分社跡

と大方の部分で符合することが分かった。したがって、確証はないが、ほかに小荷物運送会社の資料を見出せない以上、ここにウェストンが居住していたと考えるのが最も妥当ではないかと思われる。余談になるが、当時の桜井町は市内に住む外国人の多くが居住している地域だった。そして、今回の調査ではこれが限界であった。後述するようにウェストンが小荷物運送会社の2階に住んでいたのは、おそらく1ヶ月くらいだと思われるが、その間にウェストンがそこに住んでいたことを証明する郵便物や名簿などの物証が見付からなければ、居住の事実は確定できない。この後の課題は、(存在するならば)未発見の郵便物や名簿を見付け出すことだろう。

勤務していた教会は

報告書には、ウェストンが勤務していた教会についての記述は見当たらない。しかし、明治26年に発行された天田儀八編纂『日本全国教会便覧』によれば、当時の熊本におけるCMSの教会は熊本聖公会だけであつたし、長崎までウェストンを出迎えに行ったブランドラムが同教会の牧師だったことから、ウェストンの勤務していた教会は熊本聖公会と断定してよい。当時の教会について、前述した福田

令寿は『百年史の証言』の中で、「明治20年代に熊本でわりによく働いておった教会は三つですね。一つは英国の国教派。聖公会と今は言いますが、そのころは監督教会といっておりました。熊本市紺屋今町の白川堤の、今の消防局のところに教会がありました。まア、各派の中では一番金持ちでしたからね。かなり勢いがよかったです。」と記している。文中にある白川堤の消防局は昭和59年10月まで存在していたので、筆者もその場所をよく覚えていた。その後、同教会は明治40年5月に白川対岸のやや上流部にあたる新屋敷町へ移り、現在の教会名「熊本聖三一教会」に改称された。

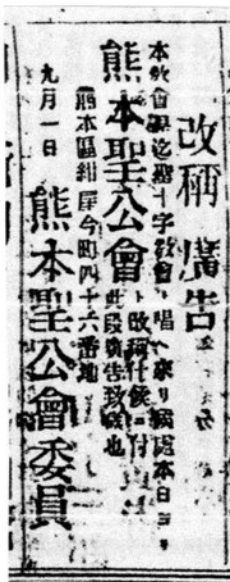
熊本は「神風連」に代表される保守的な土地柄である反面、明治9年の熊本洋学校生徒らによる熊本バンドの地でもあり、キリスト教は早くから伝えられていた。『熊本聖三一教会百年史』によれば、明治11年に聖公会宣教師モンドレルによつて宣教が開始され、活発な伝道の成果もあつて信者も増加し、明治19年には自力で教会堂を建築するための具体案が作られた。さらに明治20年2月には日本聖公会総会で、九州の宣教拠点熊本とする方針が定められた。当時の熊本は九州の行政機関が集中する都市であり、九州の中央に位置する地理的要因もあつたと思われる。そんな

情勢のなか教会堂建築案は具体化し、明治20年8月11日、紺屋今町に教会堂が完成し、聖十字教会と名付けられた。九州で初めての日本人の手に成る教会と言われる。明治20年5月には、長崎で布教活動していたブランドラムが姉とともに熊本に定住し、聖十字教会を拠点に活動を始めた。

教会の名称は、理由は不明であるが明治20年に何度か変わっている。当時の新聞によれば1月まで監督教会とされていたが、その後聖十字教会と改称され、さらに9月に熊本聖公会と改称されている。したがって、ウェストン着任時の名称は熊本聖公会とするのが正しい。建物の詳細については、教会が熊本県に提出した「会堂既設届」に、敷地坪数130坪5号1号、建物坪数は、会堂28坪、休息所15坪、門番所5坪と記されていた。写真や図面が残っていないため建物の外観は不明だが、Church Missionary Intelligence and Record vol.13に、同年10月ころに教会を訪れた、福岡教区のハッチンソン司祭の報告があり、「夕方、私たちは新しい教会へ歩いて行った。とても素朴で控えめな建物だった」と記している。当時の逸話にも「新築会堂は直ちに満員となった。今少し宏大な会堂を建てていたならばよかったと語り合った程だった」とあるので、比較的小さな会堂だったと想像できる。

教会跡の現住所は中央区紺屋今町46-1で、現在は熊本市の慶徳地域コミュニティ・センターとなっている。ウェストンが下宿していた上通りのブランドラム住居跡から、徒歩で20分くらいの距離になる。

ウェストンが熊本に派遣された理由は不明だが、『熊本聖三一教会百年史』は序文で「南九州と東九州への伝道基地としての役割と、県内各地への伝道拠点としての役割」を挙げる。同様に川村宏『神戸市歴史紀要』12号は「熊本を拠点とするための宣教師の増員と、不慣れなウェストンを基礎固めの終わった熊本に置いて、ブランドラムを開拓伝道に出す予定だったのか」と述べている。その後の調査でブランドラムの足跡が延岡、大分、竹田、上野（高千穂）に見られることから、筆者も同意見である。



改称広告



熊本聖公会教会跡

どんな活動をしたのか

熊本での活動については、かなり資料を探したが、確認できたのは報告書の記述のほかに、わずかに幻燈会案内の新聞記事があるだけだった。報告書には「当地に到着以来、私はある男子学校（原文では boys school）でブランドラム師と英語を分担して教えることになった。ここでは1時間の英語の学課のあと、10分から15分間、聖書のレッスンがあった。生徒の中には数名のクリスチャンがおり、ほかに1、2名の洗礼志願者や、キリスト教に興味をもつ者が数名いた。」と記されている。

キリスト教史学会編『宣教師と日本人』によれば、聖公会各派の宣教方針には違いがあり、米国系では教育、医療。英国系は伝道中心、教育限定。カナダ系は伝道、教育とされている。前述の『百年史の証言』にあるように、ウェストンより先に当地で宣教活動していたブランドラム姉弟は、五高生の伝道に力を入れていたので、ウェストンもこれに従ったものと思われる。当時の聖公会は英語教育を布教の手段とする傾向があり、日本で有数のエリート校である五高生（当時は五中生）を入信させることができれば、将来は上流社会や知識人などをはじめとする、日本社会各層への接触が可能になると考えていたようだ。

文中の男子学校について校名はないが、前述のようにブランドラムは五高生の伝道に力を入れていたので、在職確認のため第五高等中学校の英語科教師について、『第五高等学校外国人教師履歴』を基に調査してみた。ところが、意外なことに当時の外国人英語教師の中にブランドラムの名は見当たらなかった。正確に言えば、ブランドラムの名はあるにはあったが、嘱託講師となったのは明治31年9月から翌年3月までの在職で、時期が全く違っていた。したがって、ブランドラムとウェストンが英語を教えていた学校は、第五高等中学校以外の学校ということになる。当時の資料にも、ブランドラムが「五高生に教えていた」とあっても、「五高で教えていた」とする記事は見当たらなかった。

学校について調べを進めたところ、*The Light of Japan: Church Work in Japan* に、熊本市の教会について紹介した記事があるのを見付けた。記事には「1887年には教会と学校の両方を建設し……」とあり、これまでその存在が不明であった学校があったことが分かった。さらに前述した福岡教区のハッチンソン司祭の報告書に、聖十字教会に行った数日後に訪れた学校の記事があり、「私たちは月曜日に *native school* を訪れた。そこではミス・ブランドラムと彼女の弟が英語を教えていた。生徒にはキリスト教によ

る指導、運営がなされていた」と記されていた。*native* という名称とキリスト教主導の語学教育がなされている様子から、おそらく前述の教会と一緒に建設された学校と思われる。

報告書には授業の内容が述べられ、45分間のリーディングの後、15分間のキリスト教の講話が行なわれていた、とあり、授業の仕方が、ウェストンが男子学校で行なっていたそれと極めて似ていると思われた。この記事が書かれたのは明治20年10月中旬であり、ウェストンの着任とは1年の時間差があるので断定はできないが、当時の資料の中に、これ以外にブランドラムが教えていたとされる学校を見出せないのも、おそらくここが、ウェストンがブランドラムと英語を分担して教えていた学校と考えるのが妥当ではないかと思われる。*native school* については学校の名称や所在地が不明だったが、明治20年7月19日付の熊本新聞に、関連すると思われる記事があるのを見付けた。

当該記事は「英学舎」という見出しで「区内廣丁に設立せし英学舎は本月五日、仮に開舎式を施行せし由にて、教師ブランドラム師および……（中略）……英国宣教師ブランドラム師は男子を教授せしとの事なり」と記されていた。聖十字教会が完成したのが明治20年8月11日で、英学舎

○英學會 區内蘭丁ニ設立スル英學會本月五日假ニ開會式と施行せし由ニテ教師ブラッドラム氏及び中村氏は演舌をどわとて當日集りし人ニハ委員及び會員共ニ合衆ニ五十名餘ありと云ふ其後入會する者も日に二三人づゝありて科目ハ三級に別ち第三級ハナレヨナル第一級本及び第二讀本第二級ハ同第二讀本及び第三讀本第一級ハ同第四讀本文典及び万国史等ニテ講義と會話ハ三級共に教授ある由尤も授業時間ハ午前八時三十分より十一時三十分迄と女子ハ午後二時より五時迄を男子教授に用ゐると云ふ其教師には英國婦人及び長崎女學校卒業生坂本安史が女子を教授を英國宣教師ブランドラム氏及男子を教授を蘭丁の事なり

熊本新聞に掲載された「英学会」の記事

が設立されたのが同年7月5日ごろだとすると、両者の建設時期はあまり違わないので、「教会と一緒に建てられた学校」は英学会と考えてよいのではなからうか。また、native schoolと英学会は、ともにブランドラムが英語を教えていた点で一致する。したがって、以上に述べたことを整理すると、教会と一緒に建てられた学校、native school、英学会、の3校はすべて同じ学校を指していると考えるのが妥当と思われる。ただ、ウェストンの報告書では「男子校」とされているのに、英学会の記事では、授業時間が別とはいえ「共学校」となっていることが疑問だったが、その当時の熊本手取カトリック教会のコール神父の日記に、疑問を解くヒントを見出した。

植原恭子『手取カトリック教会資料・熊本の町日記』によると、1889（明治22）年3月15日の日記に「……Mr. Brandram、彼の姉のMiss Brandram、そしてMiss Smith、彼らは桜井町に住んでいた。二人の令嬢たちは数人の日本人の女性達のための学校を創っていた」とあり、女子校が存在していたことが分かった。ここからは筆者の個人的見解になるが、20年7月に英学会は「共学校」として仮開校したが、当時の学校は男女別学が原則であったため、その後新たに「女子校」が創られ、ウェストンが英語を教えて

いた21年10月ごろまでには、結果的に「男子校」となったのではなからうか。今のところその経緯を裏付ける資料が見当たらないので、詳細は不明である。

前記のハッチンソン報告書によれば「学校の生徒は100人を超える」とあり、ある程度の規模を持つ学校だったようだが、教会付属の、いわば私塾のような教育機関であったようで、当時の教育関係の資料にも該当する学校は見当たらなかった。したがって、先の疑問点も含めて、英学舎の詳細については今後の研究課題であろう。なお、記事にある区内廣丁（現在の中央区南坪井町7丁目付近）は、ブランドラム住居跡から比較的近い位置にある。

ウェストンの滞在中、熊本では熊本新聞と紫溟新聞の2紙が発行されていた。そこで、滞在の前後の期間を含めて新聞の記事を調べてみた。両紙ともにキリスト教関連の記事が散見されたが、ウェストン関連の記事は、明治21年12月25日付の熊本新聞の記事のほかには見当たらなかった。当該記事は「クリスマス」という見出しの、以下のような記事だった。

「今二十五日はクリスマスの日なるを以て午後第七時半より区内新町忘吾会舎に於て当地の聖公会と英学舎の人々が發起にて幻燈会を催す由なるが聞く処に拠れば該幻

燈は今度ウェストン氏が新に持ち来りし鮮明なる観を呈す……」

文中にある忘吾会舎は、当時の新1丁目（現在の西区新町1丁目4）にあった社交クラブであり、英学舎とあるのは前述した区内廣丁にあった聖公会系の学校であろう。前掲書『百年史の証言』は、「各教派が集まって、連合説法会というのを、よくやっておりますもん。やっぱりまた教会の勢力が小さかったから、一つの教会で集会をやっても、聴衆が多く集まらなかった。そこで合同して聴衆を多

熊 本 新 聞

○クリスマス 今二十五日はクリスマス

の當日あるを以て午後第七時半より区内新町忘吾會舎に於て當地の聖公會と英學舎の人々が發起て幻燈會を催す由なるが聞く處に據れば該幻燈は今度ウェストン氏が新お持ち來りし鮮明なる觀を呈すはをのよし因に記す當夜の幻燈は同祭に縁故なき人には一切縦覽を許さざる筈ありと云ふ

○西郷隆盛の出現 山形縣下南置玉郡關村は

熊本新聞に掲載された「クリスマス」の記事

く集め、なるべく広く一般社会に訴えようという考えですね。当時、新町に忘吾会所というのがありました。富岡知事発案の当時の社交クラブで（中略）合同の説法会はしばしばその忘吾会所でやったんです。後には各教会がまわり番に会場になりましたが」と記している。

幻燈会の内容や報告については、その後の新聞を調べたが見当たらなかった。

いつ熊本を去ったのか

熊本を離れた時期については、Church Missionary Intelligencer and Record vol.15 に記載されていた。同書目次に Resignation of Rev. W. Weston (ウェストン師の辞任) とあり、本文に「私たちは、ウェストン氏が視力の障害から日本語の研究を放棄せねばならないことを非常に残念に思う（中略）去年の初めに電気治療を受けるため東京に住むことになり熊本を離れた」と記されている。同書の発行は1890年であるから、去年の初めは1889（明治22）年の初めということになる。さらに「初め」は何日くらいか推理してみると、ウェストンの報告書が1月3日付で熊本から発信されていることや、同書に書かれている At the beginning of last year は、（昨年）年頭または年始と解釈

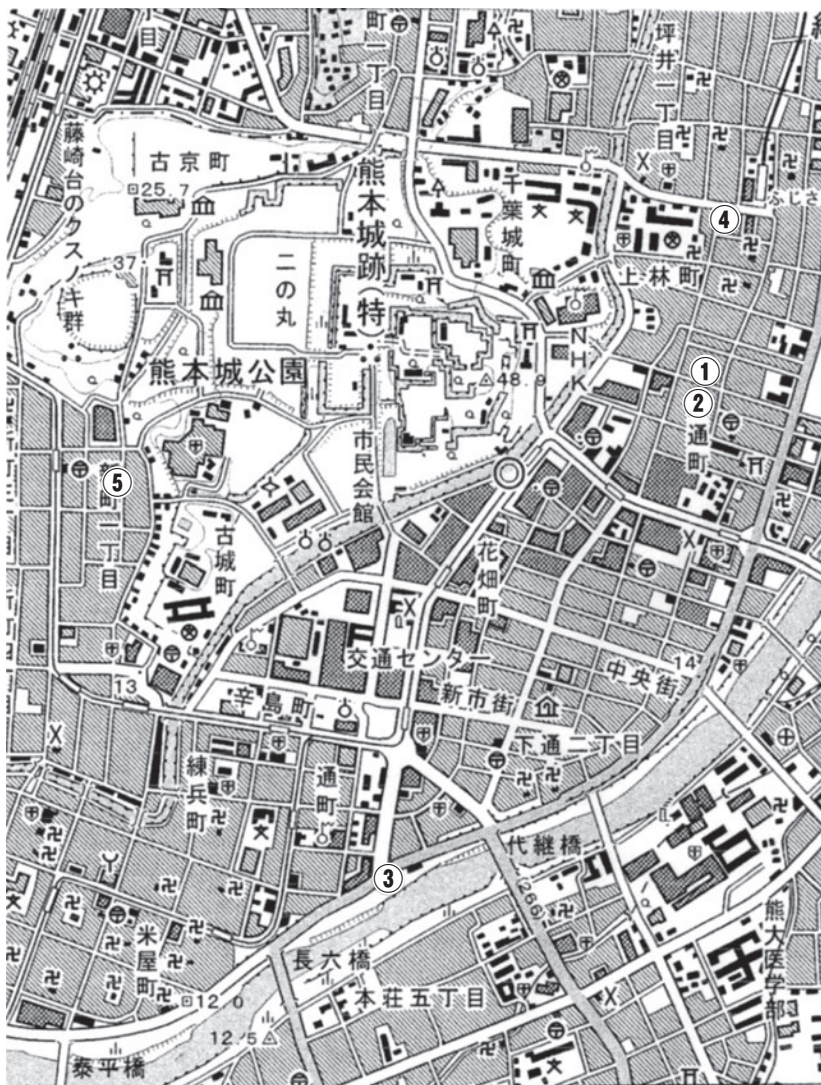
すべきことを合わせて考えると、おそらく報告書を発送した直後くらいに熊本を離れたのではないだろうか。この後の消息は、明治22年6月12日付の「基督教新聞」にある幻燈会の記事の中の「ウェスタン氏は眼病の為め暫時東京に滞在し……」に続くと思われる。

熊本に着任したのが1888年10月21日であり、翌89年1月の早い時期に熊本を離れたということになると、熊本に滞在した期間は2ヶ月半しかなかったわけである。熊本滞在中の資料がほとんど見当たらない理由は、そのためだろう。

再び熊本へ

1889年1月に熊本を離れたウェストンは、翌90年に熊本を再訪する。目的の一つは九州の山に登ることだったと思われる。前述したように、90年と91年の2回にわたって九州の山6座を登っており、『山岳』第82年所収のウェストン年譜に「彼は祖母山を始め、桜島、霧島山の2つのピーク、阿蘇山、金峰山（熊本）に登り」と記されている。

同様の記述は、『山岳』第5年第1号のウェストン自伝や、英国山岳会入会時の山行経歴（田畑真一『ウェストンの信濃路探訪』所収）にもあるが、これらには金峰山（きんぱ



この地図は国土地理院発行の2万5000分の1地図を使用、調製したものである。

- ①ブランドラム住居
- ②内国通運熊本分社
- ③熊本聖公会教会
- ④英学会（特定されていない）
- ⑤忘吾会舎

うぐん)の記載がない。ところが、91年発行の Handbook for Travellers in Japan (『日本旅行案内』)第3版には Ascent of Kimbo-san (金峰山へ登る) という記事があり、同書の序文にはウェストンの執筆協力に対する謝辞が述べられているので、記事の執筆者がウェストンであることは間違いないと思われる。

さらに1917年11月第1週発行の『The Japan Weekly Chronicle』には「……私は九州の主な山々、例えば金峰山、阿蘇山、祖母山、霧島の二峰、桜島の登山記を書いた……」とある(前田司「日本アルプスの発見」・京大人文研『19世紀日本の情報と社会変動』収録)。

金峰山は熊本市の西にあって、市内のどこからも見え、市民に親しまれている山である。熊本滞在中のウェストンも、一度は登ってみたいと思っていたに違いない。「ウェストン自伝」や「山行経歴」に金峰山がないのは、おそらく標高が低く(665m)、知名度もほかの5山ほどではないので、省略したのではなからうか。

「金峰山へ登る」には、登山時期を特定できるような記述が見られない。英国山岳会入会時の山行経歴には、1890年に阿蘇山、祖母山に登ったことが、おそらく山行順に書かれている。また、前述の『The Japan Weekly Chronicle』

には、九州の主な山々である金峰山、阿蘇山、祖母山……の登山記を書いた、とあり、両者を比較すると山行の順序は、Chronicleの記事では最初に金峰山があるが、その後の阿蘇山、祖母山の順序は両者とも同じである。以上から推理すると、90年に登った山は金峰山、阿蘇山、祖母山の順ではなからうか。このうち祖母山には、11月6日にブランドムと登ったことが「矢津田日記」で確認されている。したがって、金峰山に登った日は、11月6日より前(その間に阿蘇山にも登っていると思われるので)、おそらく10月下旬ごろではなかったかと思われる。

「金峰山へ登る」を検証してみると、熊本城の西側にある、現在の段山踏切付近で工事中の線路を横切って鳥崎へ進み、岳林寺から鎌研坂を登って峠の茶屋へ出た後、北廻り登山道(仁王さんコース)を登っているようだ。山頂からの展望の記述は、市街地が広がった以外は現在のそれとあまり変わっていない。そして、「比較的、標高の低い金峰山の山頂から、これほど雄大で美しい展望が得られることはほとんど知られていない」と結んでいる。

なお『日本旅行案内』第4版以後は、記事の内容が簡略化されている。

おわりに

30年くらい前、元熊本支部長の西澤健一氏（故人）との雑談の中で、熊本に滞在していたウエストンのことが話題となったことがある。西澤氏の話では、山岳会本部からウエストンの略年譜作成のため熊本滞在中の資料調査の依頼があり、その当時、熊本聖三一教会に所属するクリスチャンだった西澤氏は、立场上、教会の資料を自由に見ることができたのでかなり綿密に調べたが、という訳かウエストンに関する資料は何も残っていなかった、と聞いたことがあった。それ以来、熊本滞在中のウエストンのことは筆者の頭の片隅にあり、いずれ機会があったら調べてみようと思っていた。数年前になつてようやく本格的に調査を始めたが、そこで改めて西澤氏の言っていた「何もありませんでした」の意味が分かった。熊本では戦災と1953年の大水害によって明治期の教会資料の大部分が失われてしまっていた。ようやく去年くらいから、おぼろげながらも全体像が見え出した。そこで冒頭で述べたように、ここらあたりで、分かったことだけでもいったんまとめておこうと思った。時が経てば経つほど資料は散逸して、調査は困難になるように思われたからである。偶然にも今年は、ウエストンが熊本に赴任して130年の節目にあたる。こ

のような機会に、これまで空白だった熊本滞在中のウエストンについて、いくらかの新しい事実を紹介できることは、筆者として喜ばしい限りである。

〈参考文献〉（主なものを掲げる）

『熊本聖三一教会百年史』（熊本聖三一教会百年史編集委員会、1979年、熊本聖三一教会）

『百年史の証言・福田令寿氏と語る』（熊本日日新聞社編集、1971年、日本YMCA出版部）

『ハンナ・リデル』（ジュリア・ボイド、吉川明希訳、1995年、日本経済新聞社）

『日本アルプスの発見・両洋文化の交流』（庄田元男、2001年、茗溪堂）

『異人たちの日本アルプス』（庄田元男、1990年、日本山書の会）

Church Missionary Intelligencer and Record vol.13, vol.14, vol.15

Church Missionary Gleaner vol.15, vol.16

このほか熊本市歴史文書資料室および国立国会図書館デジタル・コレクションの資料を引用した。

杉本誠と山岳写真

財 津 達 弥

はじめに

1956年、日本山岳会マナスル登山隊が世界第8位の高峰、ネパール・ヒマラヤのマナスル（当時8125m）登頂に成功、1950年代から1970年代にかけて全国に登山ブームが巻き起こった。『アルプ』『岩と雪』『ケルン』といった格調の高い山岳雑誌が次々と誕生し、雑誌の表紙やグラビアには、写真が多用されるようになった。岩登り、動植物、スキーなど山の専門的な知識と撮影技術とを兼ね備え、優れた成果を示す写真家が登場した。

日本の山岳写真研究の先駆者として知られる杉本誠が『岳人』編集部で活躍したのは、この登山ブームの只中であつた。1963年1月号から12月号まで、同誌に連載「日

本山岳写真史ノート」を執筆し、1965年5月号から2年余りの間、同誌の編集長を務め、山への関心を牽引した。写真家の水越武は、その杉本誠の主な業績として、「誰も手をつけていなかった日本の山岳写真史、畢生の名著ともいえる『山の写真と写真家たち』（講談社、1985年発行）の公刊」と、「国内外で山岳写真の展覧会を企画」を挙げている（注1）。

本稿では、杉本誠の山岳写真研究がどのような経緯をたどったかを、『山の写真と写真家たち』の発刊までと、「国内外での山岳写真の展覧会」の2章に分けて概観し、銀板、ガラス湿板、ガラス乾板、フィルム、そしてデジタルの順に変わり、誰でも写真を写すことができるようになって

た現在において、杉本誠の収集作品を引き継いだ美術館・博物館が、検討すべき事項などについて若干の考察を試みるものである。

I 『山の写真と写真家たち』 発刊まで

杉本誠は1927年4月5日、愛知県挙母町（現・豊田市）に父杉本坦^{しずか}と母とく^{とく}の四男として生まれた。杉本坦は、1889年生まれで、長年、挙母町助役、戦後は豊田市農業協同組合長など要職を歴任した人物で、俳句や和歌、随筆、茶道に造詣が深かった（注2）。また、昭和初期にはカメラを入手し、家族のスナップ写真などを数多く残している。10歳年上の兄の次郎は父親の影響を受け、将来、写真で身を立てようとしていたが、1943年に27歳の若さでこの世を去った。杉本誠も小学生5年生のとき、父親から写真機を譲り受け、撮影していたという。これら少年期の体験が、その後の山岳写真研究の素地になったと考えられる。

小学校を卒業後、1940年に挙母中学校（現・愛知県立豊田西高等学校）の第1回生として入学した。中学生時代の生活について、「運動場を先生と生徒が一体になって



中学時代の杉本誠（『炎の中の青春—愛知県舉母中學校第1年生の記録』1986年）

作り上げ」、「戦局の激化にともなうて級友が次々に入隊するという状況」となり、「最後には、学徒勤労令により、全員が軍需工場に動員されるという事態にまで到つ」（注3）た、と回想している。1944年、国文学を学ぼうと神宮皇學館大學（現・皇學館大學）に入学するが、1945年8月15日に日本が降伏、翌年4月、愛知学芸大學（現・愛知教育大學）に編入学し、1948年3月に同校を卒業した。その後、三好中学校で一時教鞭を執った後、名古屋で従兄弟と教材関係の出版業を始めたが、大手勢力拡大により経営不振に陥ったこともあり、1952年、中日新聞社の校閲部に中途採用で入社した。

1955年に中日新聞社東京支社に異動となり、その後、記者として文化部や社会部で勤務した。1962年7月下旬、「早めの夏休みをとり、数日間を槍ヶ岳周辺で過ごして出社したら、留守中に私は中日新聞東京支社編集局社会部から、企画局出版部への異動が発令されていた」(注4)との回想録が残されている。同年8月から『岳人』編集部に入り、口絵とグラビア・ページを担当した。自身はこの異動について、「美術記者クラブに所属しながら、写真展の紹介や写真ニュースを書いていたから」(注5)と記述している。異動後2ヶ月くらいの間に山の写真を撮る人たちが会っているうちに、彼らが「山岳写真は正當に評価されていない」(注6)と感じていることを知った。そして、山岳写真は、日本の写真の世界では後進地帯にあるのだろうか、という疑問が生まれ、それでは歴史的にはどうであったかと考えるようになり、当時、東京・御茶ノ水にあった岸記念体育会館敷地内の日本山岳会ルームに通い、『山岳』をまづ読みふけたという。

そこで同年11月、杉並区阿佐ヶ谷の高野鷹蔵(会員番号3)邸を訪ね(注7)、12月には千代田区富士見町の武田久吉(会員番号5)宅を訪ねた(注8)。さらに翌年の1963年には北区岸町の冠松次郎(会員番号237)宅を訪ね

ている。日本近代登山の歴史の扉を開いた人々の話を直接聞き、原資料を目にすることができたことに力を得て、1963年1月号(通巻177号)から連載「日本山岳写真史ノート」までの執筆が始まった(189号、1963年12月号まで)。

日本山岳会の生みの親の一人である武田久吉について、杉本誠は「同氏の所蔵される資料と正確無比な記憶は、日本の山岳史の宝庫といつていい」(注9)と記述している。周りからは「生きた登山史」とも呼ばれる存在で、群を抜いた経験と知識、記憶力を持ち合わせていた武田久吉は、杉本誠に「山岳写真史の完成をさせなさい」と声を掛けた。杉本誠は武田久吉に触発され、民俗学への知見を深めるため、日本民具学会と山村民俗の会にも入会している。

杉本誠が購入した最初の山岳書は、1951年に朝日新聞社から出版された『田淵行男 山岳写真傑作集』であった(注10)。あのような写真を撮影したのは、どんな人物なのだろうという期待感を持っていたが、新聞社や雑誌社などからの写真掲載の依頼が殺到していたため、編集者の間では、田淵行男宅を訪ねても会うことは難しい、という話がある。杉本誠は10回目の連載記事執筆のため、何度か田



田淵行男『山岳写真傑作集』（アサヒカメラ臨時増刊）1951年

淵行男に取材の依頼を申し込んだ末、本人との面会が実現、聞き取った内容を原稿にまとめると同時に、「一人の山」と題された5点のモノクロームの組写真とともに紹介した。その後、『私の山岳写真』（東京中日新聞出版局、1964年）の編集を担当することとなった。

1965年、『岳人』5月号（206号）からは、杉本誠が編集長を務めている（1967年11月号、241号まで）が、1969年、杉本誠は東京から名古屋へ異動となり、『岳人』編集部から離れた。しかし、知り合った山岳写真家との交友は続き、写真展や出版記念会に出掛けては本人から話を聞き、情報や資料を蓄積していった。

杉本誠に連載「日本山岳写真史ノート」の続編の話が来

たのは、前の連載から16年余り経過した1979年7月のことであった。この「続・日本山岳写真史」の連載は、1980年1月号（391号）から1982年1月号（415号）まで計25回続いた。

『山の写真と写真家たち』は、前述の『岳人』の2つの連載の原稿を加筆訂正し、まとめられた。同書が発刊となったのは、続編の連載の終了から3年後の1985年4月、杉本誠が中日新聞社を定年退職した翌年の58歳のときであった。書籍化のための再取材の際入手した河野齢蔵に関する情報や資料も加えられた。

杉本誠の調査は、ジャーナリストらしく、「インタビュー



杉本誠『山の写真と写真家たち』1985年

（聞き取り）を主たる手段としている。そのため同書の本文中には、個人の発言が会話体で入っている。写真作品を理解するためには、カメラや感光材料の種類の多様化や性能の進化が、写真家の表現にどのような影響や効果をもたらしたか、把握する必要がある。同書には撮影に使用されたカメラや感光材料の進歩についての記述が、各所に掲載されている。読者はこの記述によって、写真家の表現と写真技術の進化の関連性を知ることができる。さらに同書には、「もうひとつの日本登山史」という副題が付けられている。時代時代の特徴的な山岳写真を数多く掲載しつつ、「歴史をこの目で見、自ら歩き、作り上げてきた人びとの証言を一言でも多く記」（注11）すことで、日本の近代登山の黎明期であった明治末から昭和末までの歩みを、読者が俯瞰できるように構成されている点も同書の特徴といえる。

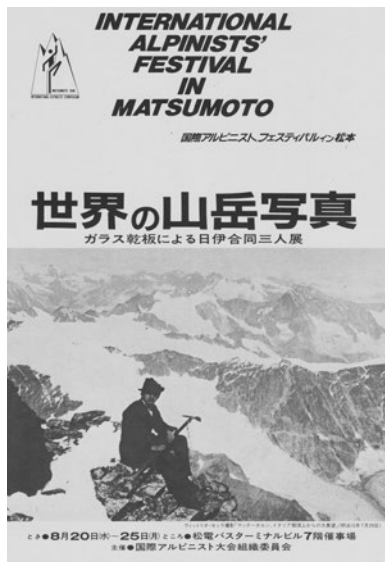
杉本誠は『山の写真と写真家たち』の刊行にあたって、「写真家にとって作品は命である。作者の手を通しているオリジナルプリントが理想である」（注12）と考え、複写や印刷からの転載を極力避け、ガラス乾板やフィルムなど原版から印画を使用している。当時、日本でも美術館や博物館に写真が収蔵されるようになったこともあり、「オリジナル・プリント」の認識が高まりつつあったという背景が

ある。「オリジナル・プリント」とは、写真家が自分の作品として認めたプリントのことである。作者の没後に著作権者の許可を得て、作家自身の意図に添うよう制作されたプリントは、「エステート・プリント」という別な呼び名が用いられ、「オリジナル・プリント」とは区別されている。

Ⅱ国内外での山岳写真の展覧会

(1) 《世界の山岳写真〜ガラス乾板による日伊合同3人展》

杉本誠は57歳で定年退職した後、生まれ育った愛知県豊



《世界の山岳写真〜ガラス乾板による日伊合同三人展》の案内パンフレット

田市を拠点として、これまでの知識、経験、人脈を活かし、数多くの写真展の企画・監修に携わっている（注13）。

最初に監修した展覧会は、「山岳写真のパイオニアであったのみならず、冬季登山のパイオニアでもあった」（注14）ヴィットリオ・セラの写真作品を中心とした《世界の山岳写真》ガラス乾板による日伊合同3人展（1986年）で、その後《フォスコ・マラーニ展》東洋への道（1989年）、《水越武写真展》自然へのまなざし（1993年）、《ウェストンの見た明治・大正の日本展》（1996年）、《日本アルプス はるかなる山々の写真展》と《日本の山岳写真80年展》の日本・イタリア同時開催（1998年）と続いた。

最初の展覧会のきっかけは、1986年、59歳のときに、イタリアの小都市ビエッラにある「ヴィットリオ・セラ山岳写真資料館」を訪問し、セラの作品に感動、日本展開催を願い出て許可されたことに始まる。杉本誠が世界の山岳写真界で、最も早くから名の通っていたヴィットリオ・セラ（1859～1943年）を知ったのは、1962年、『岳人』編集部に入った年であったという。明治末の『山岳』の雑誌欄に短信風に載っていたのを目にし（注15）、その2年後の1964年秋、『岳人』が通巻200号を迎えて記念

特集号を企画することとなった。その際、ヴィットリオ・セラの作品掲載を思い立ち、なんとか締め切りに間に合わせた（注16）。

それから22年後の、『山の写真と写真家たち』を発刊した翌年の1986年、二十数年間の山岳写真研究にひと区切り付けるため、杉本誠はイタリアのビエッラにある「ヴィットリオ・セラ山岳写真資料館」を訪問している。1943年に亡くなったヴィットリオ・セラの山の道具、カメラ、特に貴重なガラス乾板は、遺族とイタリア山岳会によって同館で保存されていることに感動し、日本での展覧会開催を願い出たところ、ルビドコ・セラ館長から保存されている乾板からニュー・プリントを作り、50枚の作品を日本に送ることが許され、その展覧会開催について任されることになった。

ヴィットリオ・セラの父ヴェナンツィオは写真のパイオニアで、イタリアで最初の写真術教本を著わした人物であったが、ヴィットリオ・セラが若いころに他界したため、伯父のクインチノ・セラが彼の父親代わりとなった。ヴィットリオ・セラの伯父クインチノは政治家で、イタリア山岳会（CAI）の設立者でもあった。父から写真を教わり、登山に凝っていた伯父の影響を受け、20歳のときに、

すでにビエッラから近い山の上で大型カメラによるパノラマ写真の撮影を試み、1881年にはモン・ブラン頂上で写真を撮り、1882年7月にはマッターホルン頂上から12枚つなぎ写真によるパノラマ撮影に成功している（注17）。

ヴィットリオ・セラの写真の主なもの、30×40cmという巨大なガラス乾板で撮影されている。まだ日本に近代登山の夜明けが訪れる以前に、4000m級のアルプスの山頂に「重いカメラをかつぎあげ」（注18）、数多くの傑作を残し、山岳写真の元祖ともいえる存在となったのである。

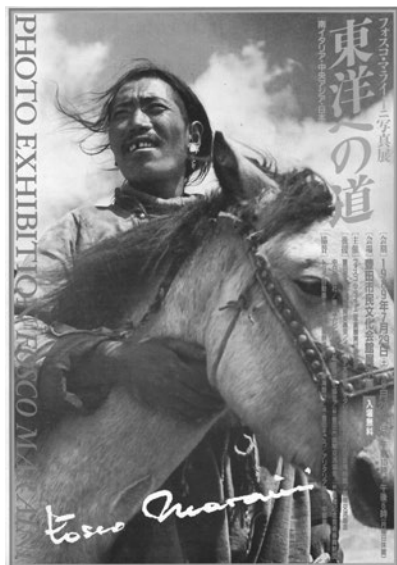
ヴィットリオ・セラから遅れること約20年、日本の3000m級の高山に、キャビネ判のガラス乾板の写真機を担ぎ上げ、撮影した河野齡蔵（1865～1939年）と、河野と同じ松本市出身の穂苅三寿雄（1891～1966年）の3人の作品を一堂に集めて、『世界の山岳写真』ガラス乾板による日伊合同3人展』というタイトルの展覧会を、1986年8月20日から25日までの会期で、松電バスターミナルビル7階の松電ターミナルホール（松本市）で開催した。この杉本誠が最初に監修した展覧会は、松本市が中心となって行なわれた「国際アルピニスト大会」のイベントの一つに位置付けられたこともあり、多くの注目を集め

た。

翌年の1987年2月10日から3月29日まで、前記3人に武田久吉らの作品と、同時代のクラシック・カメラを加えた展覧会『山岳写真の源流展』カメラと乾板で見る100年前からの世界の秀峰』を棒の手会館（豊田市）で開催、さらに展覧会タイトルを『山岳写真の源流展』ガラス乾板による100年前からの山と人びと』と変更し、ワキタギャラリー（名古屋市、同年5月29日から6月3日まで）と、富士フォトサロン（東京、同年7月3日から9日まで）の2会場で巡回展を開催した。4会場の来場者は2万人を超えた。展覧会終了後、杉本誠はヴィットリオ・セラの作品50点を豊田市に寄贈している。

(2) 『フォスコ・マライーニ展・東洋への道』

1988年、杉本誠は『山岳写真の源流展』の報告のため、イタリアを訪問した。その際立ち寄った国立トリノ山岳博物館で開催されていた企画展『フォスコ・マライーニ写真展』の巡回展を日本で開催しないかと、同館の副館長から勧められたが、作品点数が180点にも及ぶ大写真展であり、会場や経費その他大きな困難が予想されるため、杉本誠は答えを保留して帰国した。



《フォスコ・マライーニ展・東洋への道》の案内チラシ

フォスコ・マライーニ（1912～2004年）は、1930年代後半、日本に留学、北海道大学医学部に所属し、アイヌ信仰やイクパスイについて研究した。その後、京都帝国大学（現・京都大学）でイタリア語を教えたが、第2次世界大戦末期にイタリアが降伏したため、敵国人として抑留生活を強いられた。終戦後はマッカーサー元帥の秘書を務めた後、フィレンツェ大学で日本語と日本文学を教えた。

日本の文化に深い関心を寄せた文化人類学者であり、写真家、登山家としても広く知られる存在であったこと、ア

メリカ軍による名古屋空襲後、豊田市にある広済寺に移送され、生活していたことなどから、豊田市での開催が実現に向けて大きく動き出すこととなった。

翌1989年1月に、杉本誠はイタリアのフォスコ・マライーニ宅（フィレンツェ市）を訪問、豊田市での展覧会は、イタリア展の巡回展ではなく、2万点に及ぶフィルムを基に、フォスコ・マライーニとともに日本展のために新しく構成することとなった。作品251点を選定し、『山岳写真の源流（ヴィットリオ・セラ写真展）』開催から2年後の1989年7月29日から8月20日まで、豊田市民文化会館で『フォスコ・マライーニ展・東洋への道』を開催した。この展覧会では、日本、南イタリア地方、チベットのカラコルム、ヒンドウ・クシュなどで撮影された写真作品が中心であった。会期中の来場者は約1万3000人に達し、出展作品は展覧会終了後、豊田市に寄贈されている。この展覧会の開催を通じて杉本誠は、国立トリノ山岳博物館のアルド・アウデイズイオ館長との強い信頼関係を築き、その後交流は長く継続されることとなった。

(3) 《水越武写真展・自然へのまなざし》

水越武（1938年～）は、26歳で田淵行男に師事し、

穂高岳一筋で撮り続け、1971年、33歳で山岳写真家デビューを果たした。その後、アメリカ、カナダの国立公園や、エベレスト、アンナプルナなど海外の山の精力的な取材、撮影を通じて一層視野を広げ、「生態系から見た日本列島」を主題に捉え、最初の成果として1991年、『日本の原生林』（岩波書店）を世に出し、第41回日本写真協会年度賞を受賞し、注目される存在となった。

杉本誠は1981年、「続・日本山岳写真史」の連載22回目（注19）に、「ネイチャー・フォトを目指す」人物として水越武を取り上げるなど、早くから注目していた。1993年は、水越武が写真家を志して30年目にあたる年であっ



《水越武写真展・自然へのまなざし》の案内チラシ

たことや、1991年に「豊田インターシティフォーラム1991」に講師として出演していたこともあり、5月1日から9日の会期で、『水越武写真展・自然へのまなざし』（会場：豊田市文化会館）を開催することとなった。展覧会初日にはフォスコ・マライーニが招かれ、「3枚のK2」として、ヴィットリオ・セラ（1909年撮影）、フォスコ・マライーニ（1958年撮影）の作品が、水越武（1989年撮影）の作品とともに特別展示され、来場者数は8025人に達した。出展作品100余点は展覧会終了後、水越武から豊田市に寄贈された（注20）。

その後、水越武の大規模な個展は国内外各所で開催された。《今、地球を歩く》（2000年12月12日から2001年1月14日まで、豊田市美術館）、《ヒマラヤ／白と黒（原題「HIMALAYA BIANCO E NERO」）》（2003年9月23日から2004年1月25日まで、国立トリノ山岳博物館）、《水越武写真展「大地への想い」》（2007年5月12日から7月1日まで、東京都写真美術館、展覧会企画／関次和子）など相次いで開催された。東京都写真美術館の展覧会図録には、「自然へのパスポートを持った写真家」というタイトルの杉本誠の論稿が掲載されている。



《ウエストンの見た明治・大正の日本展》
の案内チラシ

(4) 《ウエストンの見た明治・大正の日本展》

1991年に「日本アルプスの父」として知られる英国人登山家、ウォルター・ウエストン（1861〜1940年）自身の撮影と収集による写真コレクション1250点を、国立トリノ山岳博物館が入手した（日本関係分はそのうち250点）。同館はフォスコ・マライーニに監修を依頼し、その資料を活用した展覧会の開催を決定した。1995（平成7）年9月、フォスコ・マライーニは杉本誠に「今、ウエストン展の監修をしている。日本でやるべき写真展です」との手紙を送った。杉本誠は同展の図録を取り寄せ、日本展開催を決め、早速、実行委員会を結成するな

ど準備に着手した。

杉本誠は1996（平成8）年5月に、フォスコ・マライーニ監修の《ウエストン写真展・日本の魅惑（原題「L'INCANTO DEL GIAPPONE」、会場：国立トリノ山岳博物館）を観覧、その後、日本展開催のため展示用写真92点（2点後送）を受け取った。同年10月1日から13日まで、《ウエストンの見た明治・大正の日本展》を、前年11月に開館した豊田市美術館で開催した。この年は、ウォルター・ウエストンが著書『Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』（邦訳名『日本アルプスの登山と探検』（ジョン・マリー社発行）を出版して100年目にあたる年であった。展覧会開催に合わせ、アーネスト・サトウを通して明治天皇に献上された同書の特別装丁本を宮内庁書陵部から借用し、展示公開した。また、展覧会初日に国立トリノ山岳博物館のアルド・アウディーズイオ館長を招待、同氏が持参したウォルター・ウエストンの原板6点も展示した。わずか2週間足らずの会期であったにもかかわらず、来場者数は1万229人であった。同展の巡回展が松本市立博物館で1997年5月31日から6月15日まで、東京都写真美術館で同年6月28日から7月6日まで開催された。また、杉本誠は出展作品の大半を、展覧会終了後に豊

田市へ寄贈している。

(5) 《日本アルプス はるかなる山々の写真展》

1996年5月、杉本誠は《ウェストンの見た明治・大正の日本展》の打ち合わせのため、国立トリノ山岳博物館を訪問した際、『山の写真と写真家たち』所載の山岳写真展開催の打診を受けた。その後アルド・アウディーズイオ館長は、その監修を杉本誠に依頼、1998年に開催に向けた準備が本格始動した。

杉本誠は、『山の写真と写真家たち』で取り上げた写真家の中から、河野齡蔵、志村烏嶺、辻本満丸、石崎光瑤、武田久吉、冠松次郎、穂苅三寿雄、田中薫、坂下隆栄、船越好文、風見武秀、内田耕作、三浦敬三、柴崎高陽、田淵行男、依田孝喜、大森弘一郎、藤本高嶺、横田祐介、安久一成、白旗史朗、山下喜一郎、三宅修、小森康行、内田良平、川口邦雄、山本和雄、水越武、新妻喜永の計29人、120点の山岳写真を選び、近代登山旗揚げの時期の明治30年代後半から、その約80年間の山岳写真の変遷を俯瞰できる構成とした。

準備中に日本でも同時開催しようという話が起こり、2組の展示用プリントを急遽制作することとなった。そし



《日本アルプス はるかなる山々の写真展》(国立トリノ山岳博物館) 初日の様子

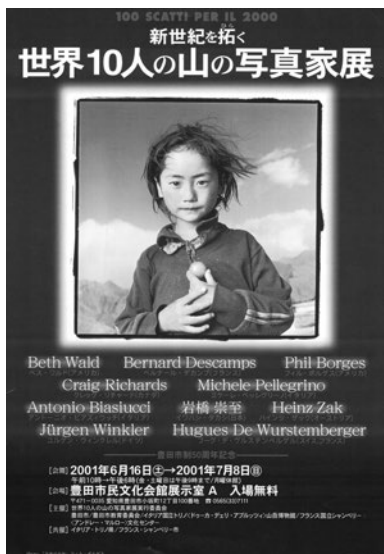


《日本の山岳写真80年展》の案内チラシ

て、展覧会の名称は、《日本アルプス はるかなる山々の写真展》(原題「ALPI GIAPPONESI FOTOGRAFI DI MONTAGNE LONTANE」日本展名称は「日本の山岳写真80年展」となり、国立トリノ山岳博物館での会期は、1998年5月15日から8月30日までで、展覧会終了後、出展作品は国立トリノ山岳博物館所蔵品となることが決まった。

日本展は6月2日から6月14日まで豊田市美術館で開催した後、7月11日から8月30日まで田淵行男記念館で巡回展示することとなった。同展開催中に、翌1999年9月7日から11月4日まで、東京都写真美術館の企画展として、

《山を愛する写真家たち〜日本山岳写真の系譜》(展覧会企画/関次和子)開催の準備も進められた。《山を愛する写真家たち〜日本山岳写真の系譜》では、《日本アルプス はるかなる山々の写真展》および《日本の山岳写真80年展》には出展されなかった大木樫、太田四郎、百瀬藤雄、手塚順一郎、勝山爲如、長谷川伝次郎、岡田紅陽、三木慶介、白川義員、山田圭一、岩橋崇至、平野武利、伊藤孝一、塚本閣治の作品も加えられ、《日本アルプス はるかなる山々の写真展》の約2倍の作品数(239点)の展覧会となった。2000年には秋田市立千秋美術館と松本市立博物館で巡回展が開催された。同展の展覧会のカタログには、杉本誠の解説文「日本の山岳写真と写真家たち」が掲載されている。《日本の山岳写真80年展》終了後は杉本誠が出展作品を自宅で保管していたが、2006年9月5日から10月1日まで、《山 記憶と表現〜杉本誠収集作品によるモノクローム写真の世界〜》を開催するため、田淵行男記念館に貸し出したことが契機となり、2009年2月に安曇野市に寄贈した。寄贈後は、同年7月16日から8月23日まで、《絆 山との対話〜今よみがえるモノクローム山岳写真の証言〜》が、安曇野市豊科近代美術館で開催されている。



《新世紀を拓く～世界10人の山の写真家展》
の案内チラシ

(6) 《新世紀を拓く／世界10人の山の写真家たち展》

2000年、フランスのシャンペリー市のエスパ・マルローで、世界山岳フォーラムが開催されることとなった。その関連行事として、山々を有する世界140ヶ国の代表者たちを歓迎するため、《2000年のための1000シャッター・新世紀の10人の山の写真家たち展》(原題「100 SCATTI PER IL 2000」)が6月6日から7月30日まで開催されることとなり、組織コーディネーター18人のうちの1人に杉本誠が選出された。

この写真展には、オーストリア、ドイツ、フランス、イタリア、スイス、日本、カナダ、アメリカから10人の写真

家を選出され、日本からは岩橋崇至が参加した。シャンペリー展終了後、国立トリノ山岳博物館(イタリア)、トレッロ市(スペイン)、バンフ市(カナダ)、豊田市へ巡回したのち、国立トリノ山岳博物館の収蔵品となることとなった(展覧会図録の編集も国立トリノ山岳博物館が担当した)。

豊田市展は、2001年6月16日から7月8日まで、杉本誠が中心となった実行委員会が主催者となり、豊田市民文化会館で開催した。報道機関配布資料には、同展の趣旨として、「写真は山岳景観に限らず、山とそこに住む人たちの結びつきにレンズが向けられていて、苛烈な環境、あるいは豊かな自然の中で、人間がどのように生活しているかを、パタゴニア、モロッコ、チベット、ガテマラ、スイスなどを取材地に写されている。」との記載がある。

(7) 国立トリノ山岳博物館について

前述のとおり、杉本誠が企画監修した展覧会の大半は、国立トリノ山岳博物館との連携のもと開催された。国立トリノ山岳博物館の歴史は古く、1874年に世界で最初に来た山岳博物館である。1863年にイタリア山岳会がトリノで発足したため、その事務局が同館に置かれることとなった。1942年に、その時代の王の名前をもらって



杉本誠、国立トリノ山岳博物館正面入口にて

ルイジ・アメデーオ・デイ・サボイア・ドゥーカ・デユリ・アブルツィという名の山岳博物館になった。ドゥーカ・デユリ・アブルツィは、1897年にアラスカ探検、1899年から1900年にかけて北極点に到達、1906年のルウエンゾリ、1909年のカラコルム、K2、1928年から1929年にソマリア探検を行なった著名な山岳家、探検家でもあった。

同館にはこのときの道具や写真のほか、山岳写真、映画、ポスターなど山岳に関する世界各国の資料を数多く収蔵しており、イタリア国内のみならず、カナダなど海外の博物館とも情報交換のネットワークを持っていた。

ヨーロッパ屈指の山岳博物館の視野の広い資料収集に触れたことは、大きな刺激になった、と杉本誠は回想している（注21）。

おわりに

調査の過程で新たに発見したガラス乾板で写された明治から昭和初期の写真は、登山も容易ではなかった時代のものであり、現存している数も少ないため、杉本誠は「撮影した本人が健在なうちに、歴史的に意味があり、保存の価値があると思う写真を、しかるべき個所、あるいは機関に寄託」（注22）するべきであると考えた。1905年に発足した日本山岳会では当初、寄贈の申し出があればすぐに受け入れていた。そのため寄贈された資料の整理が追いつかず、資料の背景も正確に記録、伝承されない状況が続いていた。1976年、日本山岳会内に資料委員会が設置され、資料の受け入れ基準を制定し、台帳整備に力を入れられるようになった（注23）。しかし、年々増加する寄贈資料を、日本山岳会が所有するスペースだけでは管理しきれなくなり、博物館などに寄託されるようになった。幸い1980年代後半から、国内各所に美術館や博物館が新設されるようになり、山岳資料を収集、寄託を受け入れる施設も増加

していった。日本山岳会資料委員会は、1997年に山岳専門の博物館との情報交換の場と、博物館同士のネットワーク作りを目的として、全国山岳博物館等連絡会議を開催した。第1回は上高地山岳研究所で開催され、第2回以降は毎年1回、主に山岳会本部で継続的に開催されている。徐々に参加館が増え、趣旨に添った成果を挙げられるようになった。日本山岳会が定期的に開催しているこの全国山岳博物館等連絡会議は、杉本誠が想い描いていた「山岳写真に関心を寄せる複数の人」による研究会の役割も果たしているといえよう。

「山岳写真は、日本の写真の世界では後進地帯にあるのだろうか、と歴史的にはどうであつたかと考える」ことから始まった杉本誠の研究は、「山岳写真史の完成をさせなさい」という武田久吉からの激励を受けて、さらに高い目標に書き換えられた。しかし、山岳写真史はそもそも完成するものなのだろうか。歴史とは書き換えられたり、付け加えられたりしていくものである。記録写真だから優れている、表現としての写真だから優れていない、というものもない。人々が知りたい情報を伝える手段として記録と伝達の要素を重視していた時代から、「伝統的・古典的な写真ではない写真」が求められる表現の時代への移行、という

のが写真史の定説であり、杉本誠が『山の写真と写真家たち』で示した山岳写真の歴史も同様の流れとなっている。杉本誠は、『山岳・写真家』の条件（『岳人』1982年4月号（418号）に次のように記している。

先人の足跡を踏まえたうえで、いかに飛躍するかが、これからの人たちの課題となる。その一つの立脚点として、私は「自分の写真表現は何か」を置いた。（中略）このような主体性は、写す人自身がわが胸中をのぞき込んで見つけ出すものであり、ある時間をかけて構築していくものだ。（中略）もし、先人の写真に学ぶところがあるとすれば、山をどう写したかではなく、どう見たかを知ることにある。

ひと口に山岳写真といっても、未開の地の探検を記録したものもあれば、動植物の研究の成果、美しい自然に対する感動を表現したものなど様々である。登山史における山岳写真研究は、登山史を語ることであり、写真史における山岳写真研究は、写真史を語ることである。杉本誠が記しているように、「山岳写真の歴史は、登山史と写真史が重なり合い合いまぜになつて進むものであ」（注23）り、価値を判断する基準も様々である。どのような写真がすばらしいのかという答えを求めても、たやすく見付かるものではない

く、評価は常に暫定的ものでしかない。しかし、写真家は自問自答を繰り返しながらも撮り続けること、美術館や博物館は、山岳写真史の変遷を意識しながら、歴史的に価値のある写真の収集、展示活動を継続していく必要がある。

〈杉本誠 略年譜〉

1927（昭和2）年【0歳】 4月5日、愛知県拳母町（現・豊田市）に父杉本坦と母とく、の四男として生まれる。

1940（昭和15）年【13歳】 4月、拳母中学校（現・愛知県立豊田西高等学校）の第1回生として入学。

1944（昭和19）年【18歳】 4月、神宮皇學館大學（現・皇學館大学）に入学。廃校指令発令により2学年で修了。

1946（昭和21）年【19歳】 愛知学芸大学（現・愛知教育大学）に移る。

1948（昭和23）年【21歳】 3月、愛知学芸大学を卒業。4月、12月、三好中学校勤務。

1949（昭和24）年【22歳】 従兄弟と教材関係の出版業「グリム館」を始める。

1951（昭和26）年【24歳】 グリム館を閉じる。

1952（昭和27）年【25歳】 中日新聞社（名古屋本社校閲部）に入社。

1955（昭和30）年【28歳】 中日新聞社東京支社に異動となり、以後、記者として文化部や社会部で勤務。

1962（昭和37）年【35歳】 8月、『岳人』編集部に入り、口絵とグラビア・ページを担当する。

1963（昭和38）年【36歳】 『岳人』（1月号から12月号まで）に「日本山岳写真史ノート」を連載。

1964（昭和39）年【37歳】 田淵行男著『私の山岳写真』（東京中日新聞出版局）の編集を担当する。

1965（昭和40）年【38歳】 『岳人』5月号（206号）から編集長となる（1967年11月号、241号まで）。

1967（昭和42）年【40歳】 中日新聞社名古屋編集局婦人家庭部に異動となる。以後も山岳写真の資料収集、取材を継続。

1969（昭和44）年【42歳】 中日新聞社名古屋編集局婦人家庭部次長となる。

1978（昭和53）年【51歳】 中日新聞社名古屋編集局婦人家庭部編集委員となる。

1979（昭和54）年【52歳】 中日新聞社名古屋編集局婦人家庭部部長となる。

1980（昭和55）年【53歳】 『岳人』1月号（391号）から「続・日本山岳写真史」を連載（全24回）。

1982（昭和57）年【55歳】 中日新聞社名古屋編集部デスク長となる。

1984（昭和59）年【57歳】 6月30日、中日新聞社を定年退職。7月1日、中日新聞社に再雇用される。

1985（昭和60）年【58歳】 4月20日、『山の写真と写真家たちもうひとつの日本登山史』（講談社）を出版。12月31日、中日新聞社を退社。

1986（昭和61）年【59歳】 8月20日から25日まで、ヴィットリオ・セラ、河野齡蔵、穂苅三寿雄、『ガラス乾板による日伊合同3人展』を松電バスターミナルビル（松本市）で開催。この年から豊田市の主任研究員（嘱託）として勤務する（1989年まで）。

1987（昭和62）年【60歳】 2月10日から3月29日まで、前記3人に武田久吉ら計9人の作品に同時代のクラシック・カメラを加えた『山岳写真の源流展〜カメラと乾板で見る100年前からの世界の秀峰』を棒の手会館（豊田市）で開催。5月29日から6月3日まで、『山岳写真の源流展〜カメラと乾板で見る100年前からの世界の秀峰』をワキタギャラリー（名古屋市）で開催。7月3日から9日まで、同展を富士フォトサロン（東京）で開催（出品作家の登山日記、スケッチ帳などを展示初公開）。

4会場の来場者は2万人を超える。

1988（平成63）年【61歳】 イタリアの国立トリノ山岳博物館（トリノ市）を訪問。企画展『フォスコ・マライーニ写真展』の日本展開催を副館長から勧められる。

1989（平成元）年【62歳】 1月にイタリアのフォスコ・マライーニ宅（フィレンツェ市）を訪問し、日本展のための作品251点を選定、展示構成について打ち合わせる。7月29日から8月20日まで、『フォスコ・マライーニ展・東洋への道』（注25）を豊田市民文化会館で開催。来場者は約1万3000人。展覧会終了後、出展作品を豊田市に寄贈。9月30日、豊田市役所を退職。

1993（平成5）年【66歳】 5月1日から9日まで、『水越武写真展・自然へのまなざし』を豊田市民文化会館で開催。展示作品180点、来場者数は8025人。展覧会終了後、出展作品は作家が豊田市に寄贈。

1995（平成7）年【68歳】 フォスコ・マライーニから手紙が届き、ウエストン展の日本開催を勧められる。以後、実行委員会を結成するなど準備に着手する。

1996（平成8）年【69歳】 5月にフォスコ・マライーニ監修、国立トリノ山岳博物館主催の『ウエストン展・日本の魅惑』を観覧後、展示用写真を受け取る。10月1

日から13日まで、《ウェストンの見た明治・大正の日本展》を、前年11月に開館した豊田市美術館で開催。来場者数は1万229人。展覧会終了後、出展作品は豊田市に寄贈。11月7日、『山岳』（第91年、149号、日本山岳会）が刊行される。同書掲載のため、「写真展『ウェストンの見た明治・大正の日本』開催のいきさつ」を寄稿。

1997（平成9）年【70歳】 5月31日から6月15日まで、《ウェストンの見た明治・大正の日本展》を松本市立博物館で開催。6月28日から7月6日まで、《ウェストンの見た明治・大正の日本展》を東京都写真美術館で開催。冠松次郎の原板750点を発見する。「豊田市の文化及び芸術の振興に顕著な功績があり、人格や見識が分野を越えて社会に模範的影響を与え、その業績が多くの人々に認知されるとともに最も文化的と賞賛される個人又は団体」に与えられる豊田文化章を受章する。

1998（平成10）年【71歳】 2年前のウェストン展の打ち合わせの際要請のあった、杉本誠監修による日本人写真家29人120点の写真展を国立トリノ山岳博物館で開催する話が本格化する。5月15日から8月30日まで、国立トリノ山岳博物館で《日本アルプス はるかなる山々の写真展》（原題「ALPI GIAPPONESI FOTOGRAFI DI

MONTAGNE LONTANE」を開催。6月2日から6月14日まで、《日本の山岳写真80年展》を豊田市美術館で開催。7月11日から8月30日まで、《日本の山岳写真80年展》を田淵行男記念館で開催。展覧会終了後、イタリア展出品は国立トリノ山岳博物館所蔵品となる。7月25日から8月30日まで、《山を撮る―山へカメラを向けた人たち―①》が富山県「立山博物館」で開催される。

1999（平成11）年【72歳】 3月11日から5月30日まで、《IMPRESSIONI DI VIAGGIO》がイタリア国立トリノ山岳博物館で開催される。9月7日から11月4日まで、《山を愛する写真家たち―日本山岳写真の系譜》が東京都写真美術館で開催される。同展の展覧会図録掲載のために、「日本の山岳写真と写真家たち」を執筆。

2000（平成12）年【73歳】 12月12日から2001年1月14日まで、《今、地球を歩く―水越武写真展》を豊田市美術館で開催。同時に地元のアマチュア・カメラマン5人の写真展も開催。6月6日、フランスの世界山岳フォーラムの関連行事で、シャンペリー市で行なわれた《2000年のための100シャッター・新世紀の10人の山の写真家たち展》（原題「100 SCATTI PER IL 2000」）の組織コーディネーター8人のうちの1人に選出され、

開会式に参加。8月4日、岩橋崇至『北アルプス大百科』(ティビーエス・ブリタニカ)が出版される。同書に「初期山岳写真の語るもの」を寄稿。

2001(平成13)年【74歳】 4月9日、田淵行男記念館開館10周年記念・田淵行男賞写真作品公募の選考委員長を務める。6月16日から7月8日まで、『新世紀を拓く』世界10人の山の写真家展』を豊田市市民文化会館で開催。

2002(平成14)年【75歳】 10月20日、『北アルプス黎明 穂荻三寿雄ガラス乾板写真集』(信濃毎日新聞社)が出版される。同書掲載のための「雪つかぬ槍のごとくに——穂荻三寿雄の生涯と作品」を執筆。

2003(平成15)年【76歳】 9月23日から2004(平成16)年1月25日まで、『HIMALAYA BIANCO E NERO』がイタリア国立トリノ山岳博物館で開催される。展覧会図録掲載のため、「水越武の写真」(原題「LA FOTOGRAFIA DI TAKESHI MIZUKOSHI」)を執筆。

2005(平成17)年【78歳】 3月26日、第2回田淵行男賞写真作品公募の選考委員を務める。4月23日から6月23日まで、『ナチュラリスト・田淵行男の世界』が東京都写真美術館で開催される。展覧会図録掲載のため、「極

め尽くした山と蝶——田淵行男の生き方」を執筆。

2006(平成18)年【79歳】 9月5日から10月1日まで、『山 記憶と表現』杉本誠収集作品によるモノクローム写真の世界』が田淵行男記念館で開催される。12月20日、『山岳』(第101号、159号、日本山岳会)が出版される。同書掲載のため、「長老と共にある日々——高野鷹蔵、武田久吉、冠松次郎」を寄稿。

2007(平成19)年【80歳】 5月12日から7月1日まで、『水越武写真展「大地への想い」』が、東京都写真美術館で開催される。展覧会図録掲載のため「自然へのパスポートをもった写真家」を執筆。

2009(平成21)年【81歳】 2月、これまで収集してきた日本人山岳写真家のプリントなどを安曇野市に寄贈。7月16日から8月23日まで、『杉本誠収集作品寄贈記念特別展 絆 山との対話——今よみがえるモノクローム山岳写真の証言』が、安曇野市豊科近代美術館で開催される。

2017(平成29)年 8月11日、逝去(享年90)。

〈謝辞〉

〈杉本誠略年譜〉は、生前の杉本誠本人による複数の経歴

書を基礎とし、関連資料を参照しながら作成した。時間的制約のあるなかで進めた今回の調査で、山岳写真の収集、研究、展覧会の企画・監修のみならず、民俗や教育評論、学校沿革史編纂など多層な活動の記録が残されていることを確認したが、その活動・業績を網羅的にまとめることは困難であったため、今回は山岳写真に関連した事柄を中心にまとめた。今後、杉本氏所蔵の資料整理により、さらに内容が充実していくと考える。なお、今回の調査を進めることができたのは、杉本香苗、井鍋雄介、水越武の各氏の協力があったからである。各氏には心から感謝を申し上げる次第である。

〈注記〉

- 1 水越武「山岳写真に愛された杉本誠さん」会報「山」(870号、日本山岳会、2017年)9頁
- 2 松井孝宗「寄贈資料紹介 牧野敏太郎作品二題」『豊田市郷土資料館だより』(66号、2009年)3頁
- 3 杉本誠「はじめに」『炎の中の青春―愛知聖母中学校第1回生の記録』(1986年、第1回生の記録編集委員会編集・発行)1～2頁
- 4 杉本誠「山の写真と付き合って四十年」『青淵』(63

5号、渋沢青淵記念財団竜門社、2004年2月号)46頁

5 杉本誠『山の写真と写真家たち』(講談社、1985年)109頁

6 前掲書

7 杉本誠「長老と共にある日々―高野鷹蔵、武田久吉、冠松次郎」『山岳』(101年、日本山岳会、2006年)8頁

8 杉本誠「長老と共にある日々―高野鷹蔵、武田久吉、冠松次郎」『山岳』(101年、日本山岳会、2006年)10頁

9 杉本誠「日本山岳写真史ノート 取材余話」『岳人』1963年12月号(189号、東京中日新聞社)8頁

10 杉本誠「日本の山岳写真と写真家たち」『山を愛する写真家たち 日本山岳写真の系譜』(東京都写真美術館、1999年)15頁

11 杉本誠『山の写真と写真家たち』(講談社、1985年)111頁

12 前掲書

13 杉本誠「写真展「ウェストンの見た明治・大正の日本」開催のいきさつ」『山岳』(91年、日本山岳会、1996

- 年) 163頁
- 14 アーノルド・ラン(馬場勝嘉・諏訪永蔵訳)『登山百年史』(世界山岳名著別巻 あかね書房、1967年) 162頁
- 15 杉本誠「重いガラス乾板を高山に担ぎ上げた先駆者たち」『アサヒカメラ』(朝日新聞社、1986年8月号) 152頁
- 16 つまり杉本誠が、ヴィットリオ・セラの生の写真を国内に取り寄せ、雑誌上で最初に紹介した人物だった。
- 17 その後ヴィットリオ・セラは、ドウーカ・デュリ・アブルツツイ公と1897年にアラスカ、セント・エライアス(5489m)に初登頂し、1899年から1900年にかけては北極点に到達、1906年にはアフリカ中部、ルウェンゾリ(5109m)の初登頂も果たしている。1909年には、またもやアブルツツイ公と一緒にヒマラヤに遠征して、カラコルムやネパールのカンチェンジュンガ周辺に足を延ばした。1928年から1929年にソマリヤ探検も行ない、山岳家、探検家として著名となった。
- 18 アーノルド・ラン(馬場勝嘉・諏訪永蔵訳)『登山百年史』(世界山岳名著別巻 あかね書房、1967年) 161頁
- 19 杉本誠「続・日本山岳写真史22」『岳人』1981年10月号(412号、東京中日新聞社) 115頁
- 20 「水越武写真展報告書」(水越武写真展実行委員会、1993年8月) 16頁
- 21 杉本誠「時代を映した山の写真が現代の私たちに語りかけてくれること」『岳人』2006年10月号(712号) 73頁
- 22 杉本誠「続・日本山岳写真史22」『岳人』1981年10月号(412号、東京中日新聞社) 256頁
- 23 「委員会紹介 資料映像委員会の活動と今後の課題」会報「山」(日本山岳会、2007年11月号) 8~9頁
- 23 杉本誠『山の写真と写真家たち』(講談社、1985年) 111頁
- 24 その後フォスコ・マライーニの個展は、『フォスコ・マライーニと京都〜日本と東洋を愛したイタリア人』が1990年9月11日から24日まで京都市国際交流会館で、『イル・ミラモンドーレンズの向こうの世界 フォスコ・マライーニ写真展 60年間のイメージの記録』が2001年11月8日から12月4日まで東京都写真美術館で、『フォスコ・マライーニ展・東洋への道』が2002年4

月29日から6月1日まで北海道立文学館で開催されている。北海道立文学館での展覧会初日の4月29日には、「フォスコ・マライーニ〜人と作品を語る〜」との演題で杉本誠が講演を行なっている。

四国の山に残る皇室とのゆかり

——大嘗祭に必要な阿波忌部の籠服

尾 野 益 大

西日本第2の高峰・剣山（標高1955m）の東北東約15kmに位置する四国の徳島県美馬市木屋平の三木山（560m）頂上近くに、天皇家の祭事と関わる三木家がある。阿波に住んでいた氏族「阿波忌部」の直系子孫と伝わる屈指の旧家で、住宅は建築後400年を超す徳島県最古の民家として知られる。1976（昭和51）年に国の重要文化財（重文民家）に指定された。三木家が関わる天皇家の祭事とは、927（延長5）年に完成した法令の施行細則「延喜式」のとおり、皇太子様が天皇に即位したのち、初めに行なわれる皇室の重要儀式「大嘗祭」のとき、大麻で織った反物「籠服」を供え納める「御殿人（皇室に納めるま

での統括責任者」という特別の身分だ。三木家が所蔵する史料や大献、公家が残した日記などを取り上げ、阿波忌部、三木家の歴史と役割について紹介する。

山々に囲まれ、山と密接に暮らす

鎌倉時代から数えて28代目当主の三木信夫さん（81）は、兵庫県の関西学院大学に通っていた時代に山登りを趣味にしていた、日本アルプスを縦走したりして、立山、白馬岳、燕岳、槍ヶ岳などに登った経験がある。

現在は登山と遠ざかっているものの、山々に囲まれた山上に住むため、むしろ趣味の登山以上に山と密接に関わっ



三木山の頂上近くにある三木家（中央）



建築後 400 年以上たつ三木家の屋敷

て暮らしている。清浄な水と空気に恵まれて過ごしているのだ。

周囲を見渡すと、南方にはブナ林が覆う四国山地の雄峰・高城山（1628m）、東は美しいピラミダルな山容が目を惹く東宮山（1091m）、北は「阿波富士」の別称があり、長い修験道の歴史を持つ霊峰・高越山（1133m）と峰続きの奥野々山（1159m）が鎮座する。

麓から三木山へとバスも通れるしつかりとした道路が建設されたのは1989（平成元）年ごろだから、それ以前は麓から上り約30分、下り約15分の山道を歩くのが当たり前だった。1947（昭和22）年までは電気も通じておらず、明かりといえば囲炉裏やランプだった。

大阪府でサラリーマンを終えた三木さんは日々、悠々自適のスタイルで過ごしながらも、全国の重文民家約120軒の当主が創る「NPO法人・全国重文民家の集い」の運営に1993（平成5）年から携わり、副代表幹事を経て2017年から代表幹事を務めている。

天皇6代の大嘗祭で鹿服を調進

三木さんによると、所蔵する鹿服関係の古文書（徳島県指定文化財）から、はっきり分かるのは、先祖が13〜14世

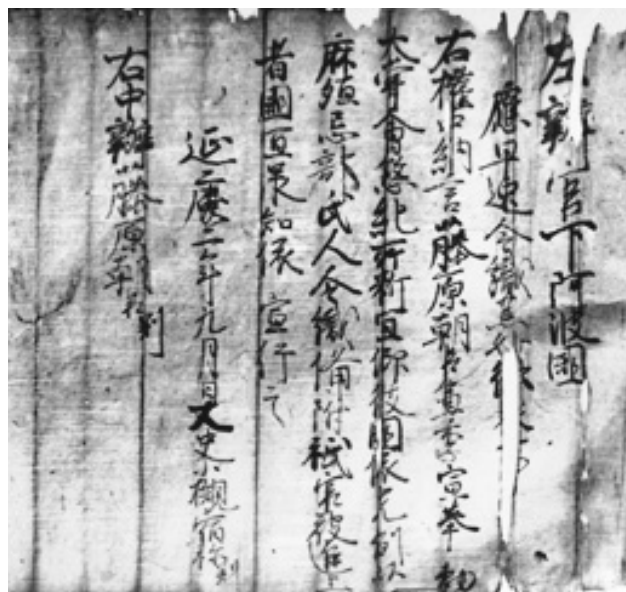
紀にわたって行なわれた大嘗祭で天皇6代（第90代亀山、第93代後伏見、第95代花園、第96代後醍醐、北朝第1代光厳、北朝第2代光明）に鹿服を調進したことだ。「調進」は朝廷からの命令・依頼を受け、作り納めるという意味の言葉。

文書の記述に共通する趣旨は、天皇の命令を受けた都の役所が、阿波国または阿波国司（行政官）に対して「阿波忌部に鹿服を織ってもらうように」と命令・依頼し、天皇の使者である勅使（ちくし）を受け取るために派遣する、としている点。

つまり、三木家が鹿服を調進した律令制の下では、行政を担う太政官と、大嘗祭や諸国の官社を総括する神祇官（じんぎかん）があり、大嘗祭のときは天皇の命令を受けた神祇官が太政官に通知し、太政官の弁官（事務機関の書記局）が阿波国か阿波国司宛に「官宣旨」（上位者から下位者に下し与える文書）と「太政官符」（上級官司から被官に命令する文書）を作り、同じ日付で送付した。

それらを受け取った阿波国司は、同じ内容の文を書いて「官宣旨案」「太政官符案」を作成し、三木家に直接届けたと考えられる。

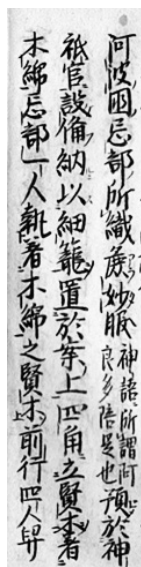
三木さんによると、阿波国司から送られた文書は本来な



第 95 代花園天皇の大嘗祭の官宣旨案（1309 年）



第 95 代花園天皇の大嘗祭の太政官符（1309 年）



鹿服に関する記述がある延喜式の文面

ら三木家に届けられる以前に、三木家がある旧麻殖^{おえ}地域の地方官「麻殖郡司」に届けられると考えられがちだが、麻殖郡に郡司がいたという記録は見つかっていない。「忌部の長者がいた」という記録があるだけだ。

郡司は、その土地の伝統的な豪族が任命され、終身官となつた例があるため、三木家が麻殖郡司に相当する有力者の役割を果たした可能性が高い。三木さんは「現段階では、現存する文書群は阿波国司から三木家に直接届けられたとしか考えられない」と分析する。「大嘗祭の儀式の内容は延喜式に記されているから分かる。しかし、鹿服の調進が阿波国や阿波国司を通じて行なわれるといった手順、方法は延喜式には記されておらず、三木家の古文書からしかつかめないのが現状。その点で、大嘗祭に関する家の古文書は極めて貴重」と三木さん。

即位後行なわれる一代一度の大嘗祭

大嘗祭は、「皇室の伝統祭祀」と位置付けられている皇位の継承儀礼。三種の神器のうち剣や璽^し（勾玉^{まがたま}）などを引き継ぐ「剣璽等継承の儀」をはじめ、即位後初めて三権の長と全国の知事らに会って即位を宣言する「即位後朝見の儀」、国内外の賓客に即位を宣明する「即位礼正殿の儀」といった国事行為ののちに行なわれる。

即位後に初めて行なわれる新嘗祭^{にいねさい}（新穀を神と食べる収穫祭）で、さらに一代一度の大祭の「大新嘗祭」であることから、略して「大嘗祭」と呼ぶ。

このため最も重要な皇位の継承儀礼は即位礼の儀および大嘗祭とされ、2つを合わせて「大礼」または「御大典」という。

大嘗祭は「大嘗宮の儀」と「大饗の儀」から成る。三木家が調進してきた鹿服は、大嘗宮の儀にとつて不可欠な祭祀具とされる。大嘗宮の儀の際、悠紀殿、主基殿、廻流殿など仮設の宮殿が設けられ、鹿服は悠紀殿、主基殿の両神座に安置される。延喜式では、このとき鹿服とともに三河国の「繪服」と呼ばれる絹織物も由加物の供え物として安置されることになっている。

鹿服は大麻で織つた反物を指す。鹿服の材料となる大麻

の栽培も三木家が行なってきた。三木家が標高500mを超す山上に住んでいる理由は、正に大麻の栽培と結び付いている。

三木さんは布にするための良質な大麻の栽培条件についても熟知しており、「標高500〜700mの西日の当たらない場所」「朝霧に包まれる場所」「強い風雨にさらされない場所」「大麻の茎が大人の小指ほどにしか育たない場所」などを必要条件として挙げる。

三木さんは「古代に大麻の栽培に適した風土の地を探し求めて開拓し、忌部郷、のちに麻殖^{おまのこり}評となり、麻殖郡、江戸時代に麻植郡になった」と語る。大麻は人々の普通の生活にも役立てられていたが、三木山は特に匭服に用いられる、優れた大麻が栽培できる「大麻の聖地」とも言える。

大麻の栽培と関係があるかどうかは不明だが、三木家の屋敷はかつて、現在地のやや上部の「八石」というならかな山の斜面や、西に隣接する檜原地区の断崖上にそびえる明神岳にもあったと伝わっている。八石からは、かつて三木家の一族と推測される鎌倉時代の五輪の塔など墓石百数十基が見付かっている。

途絶えた時代には神祇官が代行

大嘗祭は、南北朝時代から江戸時代の政情不安時には途絶えたことが分かっている。大嘗祭が実際に行なわれたときでも、阿波忌部の匭服が調進されない時期があった。103代後土御門天皇を最後に、応仁の乱などで221年間途絶えていた大嘗祭の実施を認めたのは、江戸幕府5代將軍・徳川綱吉だった。

ところが、復活した1687（貞享4）年。113代東山天皇の大嘗祭では、阿波忌部の匭服調進は実現しなかった。次の114代中御門天皇の大嘗祭は再び中断された。

ようやく115代桜町天皇から122代明治天皇までは大嘗祭が行なわれたが、三木家からの匭服調進はなく、代わりに神祇官が織った麻布に「忌部所作代」と表示して悠紀殿、主基殿の神座に匭服として安置したという。「匭服は阿波忌部が織った麻布に限っての呼び名。神祇官の忌部代行事官の主導で織った麻布は『匭服』とは呼ばない。匭服は古来、必ず阿波国忌部氏が織ったものを用いるという皇室の伝統がある」と三木さんは強調する。

三木さんは当時、阿波からの匭服調進がなかった背景について調べた結果をこう説明する。徳島藩が、江戸幕府や神祇官から忌部神社の所在について質問を受けたとき、徳

島藩は「忌部神社の所在は不明」と偽って答えたというのだ。江戸幕府や神祇官は「忌部神社がないのであれば、氏人の忌部氏も絶えたであろうと判断した」というのである。忌部神社は、徳島県内では大麻比古神社（鳴門市）や八倉比売神社（徳島市）と並び、延喜式の神明帳に載る「式内社」または「式社」と呼ばれる全国2861社のうち、大社に属する353社に入る。調進される鹿服は、三木家に安置された後、出発したと考えられる。

阿波忌部の氏族三木家は、安土桃山時代の天正年間に武士をやめて政所として、名字帯刀をもって支配地三木山を居住地としてきた。さらに江戸時代は、名字帯刀で御目見得庄屋役を務めた時期がある。しかし、三木家ら阿波忌部の存在を含め、忌部神社の所在までもが忘れられていたといえる。

御衣御殿人が誓った忌部の契約

光厳天皇の大嘗祭と、後醍醐天皇の大嘗祭に関する三木家文書からは、大嘗祭で鹿服調進の奉仕者として御衣御殿人13人（忌部長者は三木家）を選んでいることが分かる。

この中で、忌部一族が「盗み、強盗、夜討ち」などの犯罪行為は別として、大事な事柄は評定の多数決で決めた。

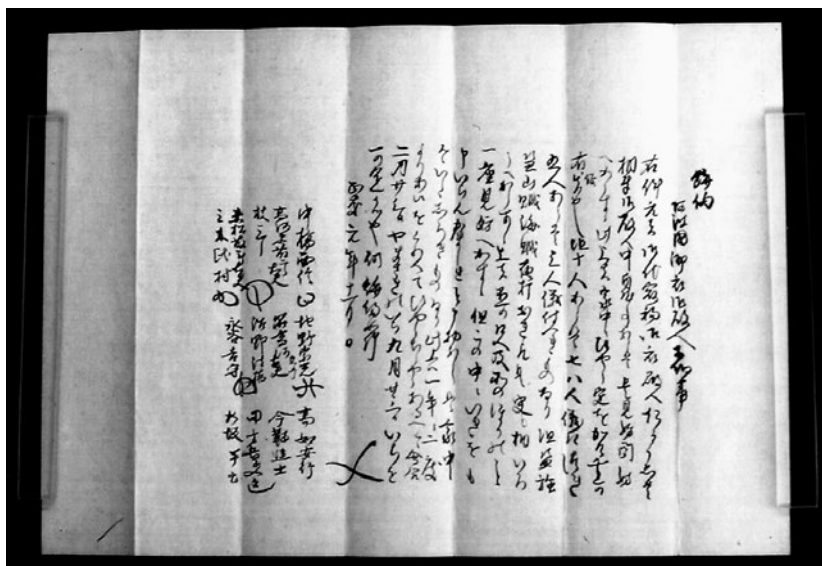
「10人なら7、8人がつければ決まり、5人なら3人がつければ決まる」などという具体的な内容だ。互いに助け、協力し合おうとの誓いも記され「忌部の契約状」といえる大変貴重な史料だ。

後醍醐天皇が隠岐に流されたり、鎌倉幕府が減んだりして世の中が混乱しているころのものだけに、地域の安全のため結束を固めたことがうかがえる。

忌部の契約状の文書は、さらに別の事実も教えてくれる。「会合二月廿三日やまさきのいち九月廿日いちを可定者也」と書かれていて、「やまさき」で「いち（市場）」を開いていたことが分かる。「やまさき」とは、吉野川市山川町山崎に現存する山崎忌部神社を指していると見られ、忌部という地区に位置するため、「忌部の中心地」として考えられている。

御衣御殿人13人の子孫と伝わっているのは三木家の先祖のほか、衆議院議員を務める後藤田正純さんの先祖の名前「今鞍進士」が挙げられる。正純さんの大叔父が、警察庁長官や副総理を歴任した後藤田正晴さんである。

後藤田家は、美馬市木屋平の北東に隣接する吉野川市美郷さとの出自である。木屋平や美郷は、ともにかつては麻植郡内のそれぞれ独立した村だった。



御衣御殿人 13 人による忌部の契約状と言われる古文書（1332 年）

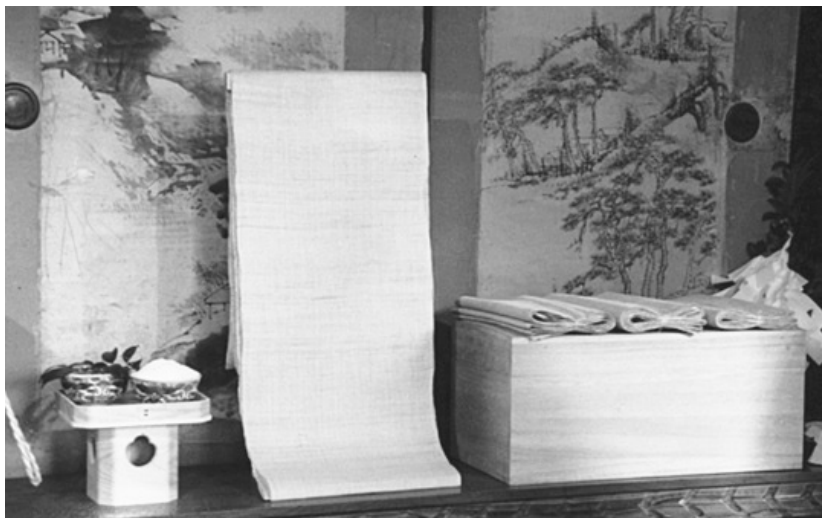
577 年ぶりに大正天皇で復活

三木家の鹿服調進が復活したのは、123 代大正天皇の大嘗祭だった。光明天皇の大嘗祭以来、577 年ぶりのことだ。三木さんの祖父宗治郎さん（当時は徳島県川島町長）が携わり、宗治郎さんは 124 代昭和天皇の大嘗祭でも奉仕した。

また、信夫さん自身は 1990（平成 2）年 11 月に行なわれた今上天皇の大嘗祭で、地域の人々の協力を得て役割を果たした。時代が大きく変わったこともあり、三木家を中心とする旧麻植郡に属した旧木屋平村と旧山川町がそれぞれ協議会を立ち上げ、栽培から供納までをやり遂げたのだ。

90 年 4 月の麻の播種式から約 100 日たって抜麻式があり、初蒸式を経て 8 月に初紡式。続けて織り初め式を終えると、麻布 4 反が徳島県旧山川町の山崎忌部神社で約 1 ヶ月間かけて織り上げられた。いよいよ 10 月 27 日に皇居に向けて出発、同 30 日に宮内庁の掌典職の清祓、祝詞奏上があって皇居の神嘉殿に納められた。

そして、11 月 22 日午後 4 時 35 分、大嘗宮の儀が行なわれる大嘗宮の東側の悠紀・主基両殿の神座が奉安され、午後 5 時 20 分、両殿の神座に鹿服 2 反ずつが置かれた。大嘗祭



平成の大嘗祭に供納された鹿服。皇居へ届ける前は三木家に安置されていた

は23日午前3時34分にわたって行なわれた。

三木信夫さんは「地域の方々の物心両面の支援と協力、そして真心によって鹿服を調製、供納することができた」と振り返る。

また、平成の大嘗祭で宮内庁の掌典職掌典、祭事課長として奉仕した故鎌田純一さんの著書『平成大禮要話』には、「大嘗宮について、延喜式に規定されるところを尊重しつつ、ことに大正、昭和の記録に着実に当り、規模に於いて、それと同等として造営された」と記されており、分単位で記録した次第細目については、「前例に正しくならつたこと、すなわち、それはまた古例をよく継承されて斎行されたことを察することができるであろう」と書かれている。

貴重な文献『古語拾遺』と公家日記

12世紀以前の、三木家が携わるまでの鹿服調進についてはどのようなものだったのか。古文書などの史料は全国で1点も見付かっていない。

最も有名な文献は、大和朝廷の始まりから806（大同元）年の51代平城天皇まで、阿波忌部が鹿服調進を続けてきたと伝える『古語拾遺』（斎部広成撰、岩波文庫、1985年）で、現在も手軽に入手できる。「斎部」は、阿波忌

部とは別に都にいた忌部氏が、803（延暦22）年に改姓した文字である。『古語拾遺』は、忌部氏族の伝承をはじめ、『古事記』と『日本書紀』を補う、古代史の貴重な文献とされる。

朝廷の祭祀を担当していた忌部氏が大化の改新後、同様の職掌の中臣氏なかつらに押されて勢いが振るわなかったため、忌部氏固有の職掌の回復を願った内容だ。イザナギ、イザナミの二神の国生みから、天平年間までの祖先の功業を記しており、正史に漏れた伝承も含む。

もっと分かりやすく言くと、忌部氏が平城天皇に提出した「憤怒と嘆きと訴えを吐露した書」と言える。

そのほかは、公家の日記に頼る以外にない。67代三条天皇の大嘗祭にまつわる『小右記』しょうゆうきは、右大臣藤原実資の日記。『寛弘九（1012）年八月十七日、阿波国から言ってきたのは、龜妙御服は去年織りまいらせ進上を終わっており、再び織ることはできません……』といった内容だ。

82代後鳥羽天皇の大嘗祭に関する『山槐記』さんかいきは、内大臣藤原忠親の日記。「元暦元（1184）年八月二十二日、私が質問して言った。阿波国の荒妙神服の事であるが、平家が四国に在陣しよって往復の交通が途絶している。また九州へも不通である。（大嘗祭のように）期限のあることに

ついてどうするのか」などと書かれている。

84代順德天皇の大嘗祭に関する『三長記』は、権中納言藤原長兼の日記。「建暦元（1211）年九月六日、三河国からの神服、阿波国からの荒妙の御衣、三ヶ国（紀伊、淡路、阿波）から献上する由加物、行幸のお供をする稚児などの事に關し使いを差し遣わす文書が上奏された」と記されている。

加えて、神祇伯の仲資王なかすけおうが書いた日記『仲資王記』の建久五（1194）年の記述などが知られている。

歴史と伝統の上に成り立つ現代

徳島県内はもとより、三木家がある小さな地域でもこうした史実を知らない人たちが増えてきた。朝廷と深く関わる伝統的な祭事、なかでも皇室にとって重要な儀式と関係している事実は極めて重い。

龜服調進は、阿波忌部が当初から長年、引き継がれたことが分かる文献や古文書などの文字史料の裏打ちがあつてこそ実現する。思い付きで提案したり、実施したりする一度のイベントではない。このようにきちんと証明できる伝統は次代に残し、歴史のページを重ねていかなければならないのではないだろうか。

今上天皇は2019年4月30日に退位されると、皇太子様が5月1日に即位することになる。同時に年号も改められ、新しい時代が始まる。大嘗祭は11月14、15日に行なわれる予定だという。そうなると、三木家は再び阿波忌部の御殿人の役割を果たすため、亀服を供納することになるだろう。

阿波忌部が織った麻布だけが、なぜ亀服でなければならなかったのかに思いを巡らせるとき、大嘗祭のみならず、阿波忌部の歴史と伝統の奥深さが理解でき、歴史と伝統を守り、受け継いだ人々の誇りと苦勞がしみじみと分かる。

そして、歴史と伝統の未来がこれからどうなっていくのか、阿波と皇室を結ぶ糸の未来がどうなっていくのか、にも想像が膨らむ。いまだに分かっていない事柄については、社会科学の目による説明が待たれる。

現代の私たちの暮らしは、実は否応なしに歴史と伝統の上に成り立ち、進んでいる。山に親しむ人々は、四国の山を思うとき、あるいは三木山周辺の山々を訪ねる際、自然環境や山の人生、そして「皇室の秘儀」といわれる大嘗祭と阿波忌部を巡り、いろいろな思いを抱くに違いない。

*本稿執筆にあたり、四国の中世史研究家で、日本山岳会

会員でもある福家清司さん（会員番号8070）の研究成果も参考にさせていただきました。

図 書 紹 介

北村昌之 著

『メコンを下る』



めこん

2017年6月6日刊

四六判 678ページ

5500円＋税

地球上に残された未踏の大河、すなわち水源から河口までの全流踏破がまだ成されていないかったメコン川に挑み、11年を懸けて4909kmを下り切った探検と冒険、そして旅の記録が本書である。

巻頭のグラビアを含めれば700ページ近い大冊。書いたのは東京農業大学探検部で監督を務める北村昌之だが、5回にわたって繰り返された遠征自体には、著者のほか同部の現役部員やOBたちが入れ替わり立ち替わり参加した。つまりは、東京農大探検部という組織がメコン川の全流初踏破という大目的に

向かって取り組んできたプロジェクト全体の記録ではあるのだが、この本にはそれを主導してきた著者の個性と資質の豊かさが濃厚に立ちこめている。いわば「記録」を超えた読み応えのある探検紀行の「作品」であり、情熱の籠った「物語」と呼んでもいいだろう。

その物語はまず、大河の「最初の一滴」が生まれる現場から始まる。東南アジア最大の河川でありながら、それまで未知だったメコン川の水源。それを突き止めるため、中国・青藏高原の源流域を踏査して地理的探検に挑むのがこの大長編の第一章だ。日本での地図と文献の研究に始まり、外国人未解放区での活動を中国科学院と提携することで可能にし、乗り込んだ現場ではさまざまなトラブルに遇いながらも、自動車旅から馬とヤクでのキャラバンへ、そして、徒歩での溪流行へと歩を進めていく旅の展開には、さながら古典的な探検記を読むような醍醐味がある。

そして、水文地理学に詳しい人なら、あるいは沢旅の好きな人なら分かるだろうが、一本の河川の数ある支流の中から本流のそのまた本流を探し出し、遡行して水源の一点（源頭、中国語では「正源」）を特定するという「科学的な作業」の難しさ、それゆえの面白さがこの第一章には描かれている。

支流の合流点に出合うたび、水量や流速を計り比べて、念のため分水嶺の峠を越えて別の支流も調べるといふ地味な作業を

繰り返した末、たどり着いた氷河の舌端で「正源」はついに発見されて、著者らは源頭最高峰（5632m）への初登頂も果たすのだが、その過程の詳細な記述には、学術的意義を当然のこととする著者らの正統派探検への意思が滲み出ており、見事な成果とも相俟って、これだけで一冊の探検記を読み終えた実感があるほどだ。

とはいえ、大方の読者にとっては、この本の圧巻はやはり前半の大部分を占める「激流部突破の冒険」ということになるのだろう。

水源発見と源流部踏査を終えた著者らは、その5年後からカヌーやゴムボートでの川下りに行動を転じ、中国科学院と提携しながらの遠征を繰り返していく。青海省からチベット自治区へ、雲南省へと下降の足跡が延びるなか、次々と現われる難所を切り抜けていく様子は、息をもつかせずに読み進ませる緊迫感と迫力に満ちている。

周囲の地表から水面まで10000mも20000mも切れ落ちている深い渓谷。ひとたび入り込めば脱出不可能となる未知の谷底で、航行不能な激流と遭遇したとき、隊は舟ごとの大高巻きを余儀なくされる。台風直後の増水した日本の川で訓練を積んだとはいえ、大河メコンの上・中流部の激流は難易度において比較にならない。命を懸けての突入か、困難と労苦を伴う大がかりな高巻きか。難易度と隊員の實力を見極めながらの決断

を絶えず迫られ、際限のない危険と疲労に苛まれながら、それでも飽かずに下流を目指す姿勢からは、探検の目的達成に懸けた著者らの情熱と気迫が、読む側にもひしひしと伝わってくる。

おそらくは引き締まった文体の力もあるのだろう。その文体が、後半のラオス、カンボジア、ベトナムの流れを下る章に入ると一転、緊張が解けて大河の浪にたゆたう舟や筏さながらに詩情豊かなものになっていくのも本書の魅力だ。著者の人柄もあるのだろうが、随所に溢れ出してくるユーモラスな表現と、河岸の人々とのやりとりからは、『ハックルベリー・フィンの冒険』を読んでいるような楽しささえも感じられる。人によつては、この後半部分にこそ著者の真骨頂を見ることがだろう。

源流部の地理的探検から中流部の激流の冒険へ、そして、下流部の見聞豊かで人間臭い川旅へと、大きく場面を変えながら続く大河への取り組みは、こうして見ると場面ごとに別の面白さがあり、言い換えれば、文字どおりの大河小説を読み継いでいくような多彩な楽しさがこの本にはあるのだ。それだけではなく、行動の記述の合間には地理や歴史の豊富な資料と情報が自然な形で織り込まれ、面白がつて読むうちに、メコン川の全体像と、現代における河川の探検とはどのようなものであるかがよく分かる仕掛けにもなっている。

著者の北村は、大学院を出てもまった定職には就かず、母校探検部の無給監督を務めつつこの11年の探検に青春を懸

け、本書の執筆にはさらに11年をかけたという。だとすれば、その年月による思考と表現の熟成が、700ページ近い大冊の全編に反映しているといっても過言ではないだろう。事実、大冊でありながら読み飛ばせる箇所や退屈するところは少しもなく、評者にとっては久々に緊張感と興奮と、読む喜びが持続する読書体験となった。

そして、読みながらの実感や読後感で、評者が個人的に抱いたのは、「これは著者だけでなく、大学探検部という存在にとっても、記念碑的な出版物になるだろう」という思いだった。著者の発想力や行動力、自然や人々への観察眼、研究成果の知識の活用、正確さを目指す表現力などがともに秀逸であり、「大学探検部」というものが生み出した最良の人物像、あらまほしき現代の探検家像といったものが、そこに見えたからである。

「探検とは知的情熱の肉体的表現である」とはチェリー・ガラードの至言だが、情熱にも表現にも、一度きりの火花ではない持続の志が必要だ。そして、持続する志には成長や成熟が必ず伴う。大河の地理的水源に迫る学究の目と、危険な激流に挑み、乗り越えていく冒険家の心や技術、川面から歴史や人々の暮らしを思う旅人の旅情を併せ持つ著者は、実直で磊落^{磊落}そうなる人柄の下、遠征ごとにそれらを育み、情熱の傘下に収めて、実際の緻密な行動に移してきたのだろう。

その肉体的表現の果てにあるべきなのは、探検のもうひとつ

の必須要件、知的な営みに戻っての「報告」なのだが、それがこのように丁寧かつ実り豊かな形で成されたことに、探検界の仲間として大きな安堵感と喜びを禁じ得なかった。

本書は、数多くいる探検部出身のプロの作家やノンフィクション作家の「作品」とは少し違って、自らの探検そのものに執着した著者が、その探検の全体を余すところなく誠実に、作為を優先せずに描き尽くそうと努力した結果、作品としても成功している本である。いわば探検家の鑑のような人物が、鑑のような書を著わしたのだ。

今時の出版事情を考えれば、多彩なテーマを含む探検の記録を大長編の一冊に収められたことも、探検終了から12年も経って出版できたことも、奇跡に近いと言えるだろう。それだけの価値を認めて著者の意思を尊重し、執筆を励まし続けた出版社側の労を多としなければならぬが、おかげで世に現われるべき本が現われるべき姿で生まれ出た。

それを見届けたという喜びは、評者だけでなく、読み終えて著者らの行動内容を知った多くの読者が抱くことだろう。今時、型破りの大冊ゆえに高価な本になつてはいるが、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

(岡村 隆)

五十嶋一晃 著

『立山ガイド史 II』



五十嶋商事(株) 2017年6月刊

A5版 782ページ

4300円+税

2013年8月に発行された『立山ガイド史』の続編・第2部である。400年以上も前からの立山信仰と山小屋、ガイドの系譜、人物像が前回と同じく780ページ余に収められた。貴重な論考、資料の集大成であり、著者執念の大著である。地域は剱岳、立山、薬師岳、黒部川周辺に限られるが、越中の古くからの山と人、登山と文化との関わりが詳細、精緻に読み取れる労作。第1部にプラスしてデータベースとしての価値も一段と増すことになった。

第2部に何が加わったのか。著者自身によると(一)従来の山案内人の伝記や評伝では登山案内にかかわる記述が少ないので、登山案内実績という側面から実態の解明を試みようと考えた、(二)戦後の立山ガイドの代表的な人びとの活動を通してそ

の時代のガイド史をまとめ、(三)今後ガイドに求められる山岳文化的側面を探究したかったから——以上の3点を挙げている。

どんな山行を、ガイドの誰が、どのように案内したかを記述しようとするのが(二)の試みで、人物評と併せ興味深い読み物となっている。

たとえば第一章「近代登山の黎明・隆盛期の山案内人」で、著者が立山山麓の先駆者として挙げたひとりが初代の佐伯平蔵(芦峯寺出身)である。1919(大正8)年7月、当時42歳で案内人歴10年の平蔵は、日本山岳会・近藤茂吉の剱岳・黒部別山・黒部川・牛首尾根・鹿島槍の初踏破で案内を務めている。激流の黒部川を空中ロープウェイを架けて渡ったときの様子を、登山史に詳しい山崎安治の記録「山の序曲」黒部川の仙境で紹介している。

この山行は黒部開拓史に特筆される記録であり、踏破はガイド平蔵の並々ならぬ力量があったからできたと評価する。仙人谷と黒部川の合流点は兩岸が高い絶壁となり、狭い峡谷に無数の滝が懸かっている、一行にとってここを如何にして渡河するかが大問題であった。そこで10mくらいの木を数本切り倒し、切りそろえて筏を組んだ。一方を壁に固定し、飛び込み台のように突き出して強力(荷担ぎ)のひとりが川に飛び込んで対岸に泳ぎ着く。そのあと2本のロープを張って荷物と人を運ん

だ。伐採に取り掛かってから8時間を要したという。五十嶋さんは「当時は山登りに、いろんな工夫をこらしている」と実績を評価し、「平蔵は人に対しては素朴であったが、山登りにかけては闘志をむき出しにする激しい気性をそなえていた」と人となり語っている。

平蔵は1921（大正10）年、富山県令（道路案内業取締規則）によって発足した立山案内組合の初代組合長である。そのころは登山が、雪のないピーク・ハンティング時代から岩登りや積雪期の登山が多くなる時代。平蔵は金沢の第四高等学校生・澤田武太郎から、これからの雪山は輪カンジキでなくスキーが使われるようになると聞かされると、旅行部の部員と一緒に新潟県高田でスキーを習い覚え、案内人組合にスキーを導入したと書き添える。100年前の進取の気性に富んだガイドだった。

この時代、平蔵と同じように先駆的登山に同行し先導役を務めた案内人として宇治長次郎、宮本金作、佐伯八郎、佐伯亀蔵、佐伯宗作、志鷹光次郎らが詳しく紹介されており、ほかに大正から昭和の第二次世界大戦の戦中にかけて行なわれた立山案内人の登山案内記録38件と65人の案内人リスト、さらには案内人リストから12人をピックアップしてそれぞれの特徴、業績にページを割いている。

第二次大戦以降は第二章「新時代の立山ガイド」として20

0ページ余にまとめられている。詳しく取り上げているのは戦前戦後にまたがって活躍した佐伯文蔵、劔岳の生き字引と言われた佐伯栄治、著者が《生来の自然人》と称する佐伯富男、《登山とスキーの一体化を目指す》五十嶋博文、《劔岳を愛し、劔とともに生きてきた》佐伯友邦らである。南極観測で活躍し、その後、立山の自然環境保護に貢献した佐伯富男については、これまで語り尽くされた感がある。そこでこの章では「えっ、そんなことが!?」と驚かされる佐伯栄治の「秘話」を紹介したい。

第一次南極観測隊がオングル島に昭和基地を開設した1957年の話である。基地開設は1月29日。南極大陸の水縁から西4kmに位置していて南極大陸のものではない。初代越冬隊長の西堀栄三郎は『南極越冬記』で、同年3月27日に西堀以下8人の越冬隊員が《二段になったシワの下、露岩の上にあがって大陸に初めて足を印する》と記している。

だが、実は越冬隊より先の2月14日に同観測隊に設営担当として加わった村山雅美ら5人が大陸の地を踏んでいた、というのだ。村山は立場上そのことを公にしなかったが、5人のなかに立山ガイドの佐伯栄治、宗弘、安次の佐伯姓3人がいて、栄治が2007年3月、立山カルデラ砂防博物館で開かれた「立山から南極へ：展」のギャラリートークで、進行役に促されて概要を手短かに話した。宗弘もその席にいたという。（注）

本書の五十嶋さんは初上陸を確かめるため2015年、間もなく90歳を迎える栄治さんと会って1957年2月14日に何があったのか詳細を尋ねる。

以下―。その日の観測船「宗谷」では、翌日帰国の途に就く隊員と越冬隊のお別れの会が開かれた。昭和基地で留守番役を務めた村山さん、栄治さんら5人は「ここまで来て大陸を踏まないのでは、南極へ来た意味がない」と話し合い、そろって大陸の地を踏もうということになった。雪原を歩き「1時間余りで着いたと思うが…」と記憶をたどった栄治さん。「こっそり」の行動で、その後長く「秘話」を語ることにはなかったという。

この一件については、初期の南極観測に参加した中村純二さん（東京大学名誉教授）の「個人行動に属するので報告する意義も認めるほどでなかったのかも知れませんが、事実の発掘としては大変興味があります」という感想が添えられている。確かにそのとおりである。

以上、佐伯平蔵、佐伯栄治のおふたりに絞って本書の一端を紹介したが、冒頭、五十嶋さんがガイド史第2部で意図した項目のうちの（三）の文化的側面について▼黒部源流の山名表記▼江戸時代・立山信仰を具現化した女性の「癒しの儀式」の現代的復元▼棟方志功・祈りの立山登山▼富山県における祝旦「山の日」の意義、つくと森林文化活動、などが取り上げられている。いずれも貴重な論考、資料である。

巻末に「既刊『立山ガイド史』の補遺・修訂表」が20ページもある。4年前発刊のガイド史には、「一部の調査不足、新しい情報や事実が出てきたことのほか、既刊ガイド史では十分な校正を怠った」と詫び、間違ったままの立山ガイド史を残すわけにいかないので大幅に修正することとした、と書いている。史実に向き合う誠実さに頭が下がる。

（成川隆顕）

（注）本書に「密かに南極大陸へ日本人初の上陸」という見出しで紹介されたこの件については、ギャラリートークのあと間もない6月、朝日新聞が「ニッポン人脈記」のなかでほぼ同じ内容で報じている。

角幡唯介 著

『極夜行』



文藝春秋 2018年2月刊

四六版 356ページ

1750円＋税

グリーンランド東岸北部は、19世紀以降の北極探検史上、主

要な舞台である。著者が特異な旅行の場を、この地を選んだことと無縁ではあるまい。

東岸最北の村、シオラバルク（北緯77度47分）から、北東15 kmにグリーンランド氷床に見かけ上接続する独立氷帽から流れ出るメーハン氷河の末端があり、そこから独立氷帽の頂上を越え、南側の露岩域（ツンドラ域）に出て、ダラス（カネ）湾に面する海岸の狩猟小屋のあるアウンナット（メーハン氷河末端から60 km）に向かい、そこから海岸沿いに50 km進み、ダラス湾に面するイヌアフィシユアクの狩猟小屋に向かう。その後、ダラス湾沿いに200 km北上、ケネデュー海峡でエルズミア島に渡り、北上して北極海に向かうというのがこの旅の（建前上の）計画だと著者は述べている。今回はダラス湾北上前で旅が終わっている。

スミス海峡からケネデュー海峡、北極海へ至るルートは、19世紀後半の北極点到達の主たる舞台の一つで、多くの探検の歴史が刻まれた地域である。独立氷帽南の露岩域、イングルフィールド・ランドは、スミス海峡を1852年に探査した探検航海者（英）の名前に因んでいる。第1回国際極年（1882〜3）にエルズミア島北端に観測基地を設けた米国隊の迎える船は翌年到達できず、翌々年に迎えが行ったとき、当初25名の隊員が6名しか生存していなかったという。1891、93年、ペアリーはグリーンランド北部の探検に独立氷帽を越え、イン

グルフィールド・ランドに入り、そこから東に向かっている。

1975年3月30日、北西航路沿いにアラスカに向かう植村直己がシオラバルクから氷帽経由、この露岩域に下り立ち、アノイトー岬（スミス海峡の最狭部）からカナダに渡っている。シオラバルクから海岸沿いに行く海水上のルートは取れないようだ。

アウンナット小屋付近には、北地磁気軸極（双極子磁場の収束点）があり、地球物理学的に重要な地点でもある。

角幡唯介の『極夜行』のなかでも記述されているが、今は無人域であるこの露岩域に、かつて通年居住の村があった痕跡が残されている。10〜12世紀の温暖期（グリーンランド南部にバッキングが移住した時代）が16世紀ごろから寒冷気候（小氷期）に転じ、海水の凍結拡大などの変化によって海獣狩猟が途絶え、村廃棄となったのであろう。

シオラバルクからアウンナットまで70 km足らずの狩場へは、夏なら10日ほどの道のりであるが、角幡の『極夜行』の旅では27日と3倍近い日数を要している。旅行中さまざまな苦難に直面したのは、旅をあえて「極夜」の下で行なうことを目的にしたことにほかならない。暗夜下での苦難との闘いこそが旅の目的なのだろう。それゆえ適切な「時期」と「場」を選ぶという探検行の基本ルールはあえて無視している。また、著者が「新しい探検」の実践の場としてこの地を選んだ理由の一つは、そ

こが「歴史的探検の場」であつたからだろう。

著者は「極夜という暗がり」下での旅と、その終わりの「太陽を再び目にする瞬間」に意味を求めた旅なのだ。著者の言葉を借りると「旅の目的は極夜世界を洞察すること。極夜は想像を絶する世界であり、完璧に（現今の社会）システムの外側の領域であり、マニユアルや正解のない、混沌とした世界であり（その探求こそ）古い地理的探検に代わる新しい探検のテーマ」ということであろうか。こうした著者の考えの受け止め方は人さまざまであるが、「極夜」の実体験のない読者にとっては観念論の域を出まい。とはいえ、著者の「極夜下での旅」の描写は読者の想像を補つて余りある。

1年に1日「太陽が出ない日、沈まない日」が生じる地点が、北極圏の天文学的定義（北緯66度33分線）である。「白夜」はその反対の現象で、北極点では1年の半が極夜、半が白夜である。南半球では同じ現象が半年違いで生じている。

「極夜」の期間は緯度によって異なり、「極夜行」の舞台となつた地域（北緯77度〜79度）では、10月下旬から2月中旬まで太陽を見ることはない。しかし、「極夜」は1日24時間「真っ暗闇」というわけではなく、地平線下を運行する太陽と地平線との高度変化で、真昼の暗さ（天文薄明）は時期で異なり、また、これに月の満ち欠け、南中高度の変化によって「極夜の暗闇」に変化が生じる。その微妙な「暗さ」の差を著者は巧みに利用し、

困難を克服する様は本紀行の読みどころの一つである。

著者がこの旅行で試みたことの一つは、「GPS」を使わないことである。著者は、「GPSに位置決定の判断を委ねると、結果的に自分で命を管理するという土台を機械に委ねることになる」、「極夜そのものを身体で知覚し、その情報をもとに極夜とは何かを洞察する」、「闇の中、自力でルートを探り、位置を確定するというプロセスを通じて外界との接点を増やす」と語っている。

GPSを持たず天測で位置の確定を行なうことは、南極内陸調査では20年前まで必須の航法技術で、それ自体は難しい技術ではない。しかし、「暗闇」の下、しかも重量制限を余儀なくせざるを得ない単独行動では一氣に難度が高まる。天測は天体の目標（星、太陽）の高度角を測ることが基本観測であるが、高度角測定のための基準（水平面）の設定が難しい。経緯儀を使えば問題ないが、重量からその使用は難しい。今回の旅では特別の暗夜用六分儀を用意しようであるが、独立氷帽上で失っている。使えたとしても、観測では相当な技術的困難があつたに違いない。

極夜の探検では、好まなくとも「極夜の旅」を強いられる旅は相当あり、その結果の犠牲者も相当数に上るであろう。自発的に行なわれた「極夜行」では、本書にも述べられている、スコット隊隊員チェリー・ガラードらによる『世界最悪の旅』が

有名である。この旅はペンギン・ルッカリで卵の採取という科学目的で、極夜期のマイナス50度の寒気と強風を冒して行なわれた、文字どおり「最悪」の旅であった。

評者も1970年に日本隊最初の内陸基地建設のために、昭和基地南東300kmの地点に向かつて、冬至過ぎに昭和基地を出発し、23日間（夏期行程は3〜4日）かけた「極夜行」を行なったことがある。標高（みずほ基地、2230m）が高まるにつれての気温の低下、高い地吹雪、雪上車の寒冷障害と日々旅の厳しさが増す状況を経験したが、最大の困難はそうした旅行環境の悪化とともに、旅行隊にパニック状況が生じたことである。日々下がり続ける気温に慄き、寒さによって位置観測もできないのでは、という不安が多く、隊員の心に過り^{よ過ぎ}始めたのである。パニック状況発生の背景は「寒さ」にあることはもとよりであるが、隊員にとって初めての「極夜」という非日常的な体験にあったことは間違いない。

気温はある程度下がると、低気圧が入り込み、一気に気温上昇（マイナス55度からマイナス30度になると、蒸し暑いと感じる）が生じ、また、新設基地の位置は経緯儀による天測で「秒」レベルの精密観測が行なわれたが、「太陽の存在」がいかに日々の人の意識の根底にあるかを実感したのである。

本紀行は「極夜」という舞台の下でのさまざまな「困難」を主題にした冒険行で、その困難さ、状況の複雑さを著者が高度

な生存技術、精神力で克服していく様子を、卓越した描写力で克明に描いている。純文学風の冒険談といえど著者から響きを感じようだが、「新たな探検表現」かどうかは読み手の感受性のレベルにもよるが、「極夜」の織りなす自然が見事に描かれた紀行である。

最後に蛇足であるが、「白熊」が本紀行の主役を演じており、その生存能力に著者が完膚なきまでに敗れたことはなぜか、という思いを付記しておく。

（渡辺興亜）

ステイブ・R・バウン 著 小林政子 訳

『最後のヴァイキング ローアル・アムンセンの生涯』



国書刊行会 2017年5月刊

菊版 366ページ

3500円＋税

文明に逆行するかのよう列強が覇権を争い、世界が激しく揺れ動いていた100年前、それは探検の時代でもあった。極地にシルクロードの砂漠にチベットに、大国の思惑と威信、小

国の矜持、個人的榮譽と野心が錯綜する。本書は、そんな激動の時代にひとり嚴寒の極地に夢を追いつけたアムンセンの生涯を描いた伝記文学の労作である。

探検には英雄が生まれ、そして悲劇がある。それだけに読む人を魅了し、気分は高揚する。100年前のアムンセンを読む、それは知の探検でもある。

アムンセンの最初の極地は、1897年、25歳のベルギー隊での南極越冬だった。そこで装備とあらゆる障害に対する準備がどれほど重要かを学んだ。1903年(31歳)には北極海の「北西航路」の大航海に成功する。この極度に厳しい条件下での探検で何より学んだのは、原住民イヌイットの習慣やイグルー作り、犬ゾリの使い方、極地で生きる方法についてであった。これが成功に導いたのだ。この北西航路探検中に、ノルウェーはスウェーデンから独立。アムンセンは国家の誇りを高めたとして、一躍、新国家の英雄になった。

そこで、ナンセンのフラム号で北極点を目指す準備を始めるが、エドウィン・ピアリーが北極点到達に成功、彼の北極計画は影の薄いものになり、アムンセンは新しい目標―南極探検に計画を変えた。この計画変更はイギリスのスコットの南極計画より先だったのだが、世間では彼が北極点を目指していると思っていたから、密かに南極を目指したのは世界を欺いたと後々批判されることになる。しかし、スコットは、計画を大々

的に発表することで他国の探検隊を牽制し、競争相手を諦めさせ、南極を自分とイギリスのものにしたかったのだ。本当のところは、アムンセンは資金調達とフラム号を北極探検のために借用したので南極探検を秘密にせざるを得なかったのだが、この計画変更は、王室とナンセンにだけは事前に通知された。また、スコット隊には「フラム号は南極へ向かっている」と打電して知らせた。

アムンセンは、2年間じつくりと計画を練った。彼は極地の経験もあり、犬ゾリとスキーという優れた方法をよく知っていた。しかし、スコットは極地の経験がなく、それどころか雪にも慣れていなかった。そして動力ソリと小型馬を使うという失策を犯す。アムンセンはシャクルトンの失敗から大いに学んだが、同国人のスコットの計画にはその失敗の教訓は活かされなかった。アムンセンは兵站に取り組み、食糧準備、最高の効果を発揮する補給所の間隔、アザラシ製の服、犬の餌、軽くて扱いの簡単な装備、自らの南極体験を活かして、準備に時間を費やした。その上で目的達成のためにはチーム力が最も重要なことを熟知していた。犬がソリを引き、隊員がスキーで進む。計画は単純明快だった。「基地から南進を繰り返して次々シェルター兼食糧貯蔵所を配置しておく」と戻りは荷物を運ばずに進む。これは、かつて私たちが冬山登山で実践したボーラー・メソッドと呼ぶタクティクスである。また、風雪の雪原でコース

を見失わないために、目印の旗を付けた標識を突き立て、途中に大量のアザラシの肉を備蓄して帰路の安全に配慮した。

厳しい越冬を終え、1910年10月20日、極点へ出発。南緯82度の最後のデボを過ぎると旅は人にも犬にも苛酷過ぎるものとなった。衰弱した数頭の犬が射殺され肉になった。12月14日午後3時、とうとう南極点に到達した。このときアムンセン39歳、そこは地球上の人間が住む所から最も遠い地点であった。毛皮にスキーの5人、17頭の疲れた犬たち、ソリ3台。アムンセンは持参したノルウェー国旗を立てた。それは「命を懸けて闘った全員の名誉」のためであった。そして1月30日、フラム号で南極を離れた。

それから9年後の1920年には北東航路探検を成し遂げ、次は「極地探検の未来は空にある」として、1923年、北極海上空を横断する大陸間飛行を試みるが、最初の飛行は無様に失敗、1925年も飛行艇の故障で失敗する。1926年、今度はアメリカ人エルズワース、イタリア人ファシスト・ノビレとともに、イタリア国家所有の飛行船による北極横断飛行を計画、イタリア政府はこれを世界に向けて宣伝した。1926年5月11日、スピッツベルゲン出発、5月12日午前10時半、北極点上を旋回してからアメリカに向かい、ノーム北方に着陸した。こうして最後に残された地理上の空白部は、飛行船という考えられもしなかった手段によって明らかにになった。空という

新しい時代が到来したのだ。南極点到達から15年以上が経っていた。

本書で注目すべきは、著者が当時の「ニューヨーク・タイムズ」から多くの記事を丹念に読み込んでアムンセンの行動と人物像を伝え、アメリカでの生活も明らかにして物語に生氣を与えたことである。また、長期間極地にいて家庭を持たず、家族や友人とは疎遠だったアムンセンにも愛を告白した人妻の恋人はいたし、経済的には探検の資金作りに終生苦労し、1924年には破産もした。しかし、北極は将来ヨーロッパとアジアを結ぶ最短ルートであり、空軍基地として重要だ、との未来を見据えた鋭い認識を示した人物であることも明らかにした。アムンセンは、好奇心に満ちた探検家であり、新たな目標を実行する比類ない能力の持ち主であり、先見の明があるリーダーであり、謙虚に極地原住民の習慣や技法を活用した人であった。さらに、妥協を嫌う個人主義の彼は、自分で資金を調達することによって国家や後援者の束縛から自由であった。

飛行船の成功後、不対立したノビレが1928年5月、新型飛行船で遭難、行方不明になると、アムンセンはフランスの飛行艇で救援活動に向かい、帰らなかった。劇的に北極に消えたのである。

著者はカナダ人のノンフィクション作家。文体は説得的で、歴大な事実の積み重ねから、かつてのイギリスの批判に対して

も彼の正当性を論証して見せて、従来のアムンセン像を一新する。その生涯において、北西航路、南極点、北東航路、飛行船での北極点横断を成功させ、そして北極で死んだ。最も忌み嫌ったイタリヤ人救援のために飛行し、行方を絶ったのだ。まさに著者の言うとおり「北極の人」であった。ノルウェー語でローアル、「栄光ある者」としてアムンセンは、55歳でその生涯を終えた。

今や南極は、極点に単独・無補給・徒歩で到達する時代であり、未知への畏敬と探検への憧憬は失われ、観光地として消費される時代になってしまった。地球温暖化が叫ばれる今日、改めて極地、自然、そして探検とは何か。最後のヴァイキングの鋭いまなざしは、現代の我々にそれを問いかけているように見える。

(絹川祥夫)

レベッカ・ソルニット 著 東辻賢治郎 訳

『ウォークス 歩くことと精神史』



左右社刊 2017年7月刊

四六版 517ページ

4500円+税

著者レベッカ・ソルニットは、大学や研究機関に属さない自由な立場から環境、人間と場所、社会変革などをテーマに旺盛な執筆活動と多くの著作を発表している人ということだ。本書は、ペンギンブックスから2001年に刊行された『Wanderlust: A History of Walking』の全訳である。

著者の名が我が国で知られるようになったのは、2010年に翻訳刊行された『災害ユートピア なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』(高月園子訳 亜紀書房)という、2005年の巨大ハリケーン・カトリーナがもたらした災害を書いた災害社会論が、直後に東日本大震災を体験するというタイミングで、我が国でも多くの読者を得たという(訳者あとがき)。

本書の原タイトル『ワンダラスト』は、「さまようことへの

抑えがたい渴望」というような意味だ。

広い分野の膨大な関連書を渉猟し、読み込んだうえで、それらの思考に染まることなく、彼女自身の肉体で歩行、登高、遍歴を体験しながら考察を展開していくというのが本書の特徴だ。歩くことによって語り続ける著者の体験と論考は、読者を休ませず、次々と思わぬ場所や時代へと導いていく。

「歩くことは無数のアマチュアの分野であり、歩行の歴史は人の歴史だ」、「歩くことは人生のミニチュアだ」と言い切る。地図も旅行も巡礼も登山も遠足も、二足歩行の人類の歴史だともいう。

書き出しは、著者の住むサンフランシスコ郊外から太平洋の岸辺まで歩くことから始まる。アメリカ合衆国にヨーロッパから流れ着き（彼女の母方のルーツはアイルランドからの移民）、アメリカの異質な文化で折れ曲がり適応し、変化していく跡をたどろうとする。ここでは、軍事基地化で農地を追われた先住民や農民の歴史を語り、広島・長崎の核犠牲者や生存者、仏教僧やフランシスコ会の修道士にも思いをいたし、現実の核被爆問題に話は展開する。80年代に、カリフォルニアからネバダ核実験場へ反核マーチ参加を端緒にさまざまな社会的活動に関わるようになったということで、「歩くことの歴史」に目を見開いたと語る。

米大陸を精神的に歩いた人として、ヘンリー・D・ソローを

挙げ、古いアメリカ時代の地道な肉体的労働と安息への憧れを語る（第一章）。

次いでジャン・J・ルソーや哲学者たちの、歩きながらの思索の歴史を語る。ルソーの多数の著作は、徒歩旅行と哲学的な歩行によって生まれたものと言う。

また、アフリカやチベットなど世界各地の巡礼者の歩行による時間感覚や感性の変化など、広い分野の膨大な文献を読み下しながら、歩くことが記憶や思考、精神に与える影響を連綿と説いていく。

詩人ワーズワースの徒歩旅行熱中ぶりを興味深く紹介している。英国内はもとより、1790年には革命さなかのフランスへ渡ってアルプス地方、ライン川地方をくまなく歩き通したり、アメリカ大陸の大徒歩旅行もやつたり、18万miを歩きながら詩作に励んだ計算になり、徒歩旅行なくしては、詩は生まれなかったという。

第八章では、歩く文学者を次々と列伝的に論考していく。19世紀のヨーロッパは、主として上流階級や文人の間では「徒歩旅行」がとても盛んだったことで、多くの旅行記や文学が生まれたと聞くと、新大陸ではジョン・ミューアは徒歩旅行、とりわけ原野ワイルダネス歩きウィルダネスの文筆の元祖と著者は言う。

西海岸で育ち、暮らしている著者はトレイル歩きと登山に大きな関心を寄せていて、わけてもクライミングの熱心な実践者

である。ヨセミテでクライミングに熱中して、本書の随所にトレイル歩きとともに岩壁登攀のシーンが描かれている。

第九章「未踏の山とめぐりゆく峰」では、ペトラルカは登山と風景の美学史上の元祖と言われているが、はるか昔から登山する者は世界中にいた。ペトラルカの登山は、宗教とは無縁、ロマン主義に胚胎された行動だ。この意味での「登山史」は、18世紀の終わりごろ、ヨーロッパ・アルプスで一部の無鉄砲な人間の好奇心と新時代の感性で、山麓や山道を歩き回るのはなくて、「頂上」に至ることこそ唯一の意味あることという企てで始まった。そして登山術、ガイドという職業が発展したのだと、分かりやすい説明をする。

新大陸でも20世紀のはじめ、48州の最高峰・ホイットニー山に登頂した登山者は、山頂に小さな岩を積んだ塚に埋め込まれていたインディアン^①の矢を見付けたという。ロマン主義登山の始まる以前から、米大陸でも山々は人々の関心と歩みを惹き付けていたのだろう。

また、山に登ったと記録にある最初の人間のひとり^②は、馬車で泰山に登った秦の始皇帝（BC3世紀）だったと、著者の涉猟^③ぶりには驚きだ。

さて、現代アルピニズムやヒマラヤ登山の精神的側面についても熱く語り、多くの有名登山家を祖上に載せる。例えば、新ルート開拓や初登頂をした者は尊敬されるし、帝國的な振る舞

いの発露とも見なされるが、実利的見返りや戦うべき相手がないにもかかわらず、全スキルを投じ、英雄的美徳が投入される。例としてリオネル・トレイの自叙伝『無益なものの征服者』（邦訳書タイトルは『無償の征服者』）を挙げている。マロリーへの有名な質問「なぜエベレストに登るのか？」は、禪の公案に引かれるというし、危険で苦勞の多い登山の代償は象徴的な成果のみと、10本の指を失っても英雄になったモーリス・エルゾークのアンナプルナ初登頂の事例を挙げる。

李白、寒山、芭蕉も登場し、日本の修験道と富士登山にも触れている。山やで旅好き本好きの人には、この章で引用されている名著のいくつかは見逃せないだろう。

第一〇章は、著者が長年親しむシエラネバダ、ヨセミテに多くのページを費やす。

1857年に英国のアルパインクラブ創立とほぼ同時期に、ヨーロッパ各地に山岳会やアウトドア活動のクラブが急増したのだが、米国でもいち早くアラチア山岳会（マウンテン・クラブ）が創立され、北米大陸でも活発な登山活動が展開されたとは、評者は初めて知ったことだった。

米国最大規模のウォーキング（登山）クラブであるシエラクラブについては、創始者ジョン・ミューア^④らのクラブ創設の理念のアパラチア山岳会との違いを語りながら、その後の活動の歴史と思想の矛盾を指摘していて興味深い。

ドイツのワンダーフォーゲル運動やボーイスカウト運動の歴史や活動にも言及し、山地や原野の所有権の歴史にも話が及ぶ。十一章からは、山や荒野から離れて、街角の人生、都会の生活者、さまざまな職業や社会階級ごとの歩行者の行動と思想の考察へと、著者の興味は展開していくのである。

そして最終章は、歩行の歴史が刻まれたイギリス、わけても「労働者階級によって起こされたクライミングの革命」(1950年代にドン・ウィランズやジョー・ブラウンが主唱した。評者注)で有名なブーク地方を歩いて本書を締めくくろうと、著者は考えた。しかし、産業化時代の荒廃した工場跡のクライミング・ジムで過去を振り返るのは無意味だ、著者の考察したいのは「歩行」の過去ではなく未来だと、急転してクライミング仲間とラスベガスへ向かった。

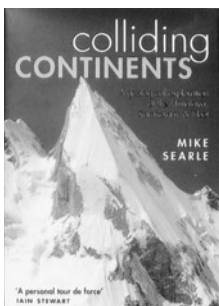
人工的で巨大な新興都市をくまなく歩き回り、観察しながら、成立の歴史と現状を反芻してから、午後はコロラドのレッドロックスのキャンプサイトへ向かう。トレイルから振り返ると、ひととき濃いスモッグに覆われたラスベガスの街は褐色のドームのようだったという。トレイルや岩場には野生動物や小さな花の群落のほか、人っ気はない。この太古の場所から波乱と謎とスモッグに包まれた未来を見通すことはできない。過去に築かれた歩行の歴史の前途をつなぐ道に続く者があるのか?とアレグリーに満ちた筆の捌き方だ

堂々500ページを超える本書の巻末は、注釈と膨大な引用テキストの総覧に22ページも費やされていて、著者の渉獵ぶりと翻訳者の労苦を察することができる。たくさん引用を往き来しながら、じつくりと静かに味読したい一書である。(松澤節夫)

Mike Searle 著

『Colliding Continents

—A Geological Exploration of the Himalaya, Karakoram & Tibet』



Oxford University Press 2013

XXIV + 438pp.

£28

今から30年ほど前になるが、Continents in Collision (1982)という一般に向けた調査報告書の紹介を『山岳』に書いたことがある(ほかに2冊本の学術報告が1984年に出ている)。1980年に創立150周年を迎えた英国地理学協会が主導し、パキスタン地質調査所とイギリス、そして中国の研究者が

3ヶ月にわたって共同調査（IKP）を行なったというもので、舞台はカラコラム・ハイウェイが開通した直後の西部カラコラムのギルギット、フンザ地域であり、正にそこは書名のごとく「ユーラシア大陸とインド亜大陸が衝突する場」である。

それから30年後に表題の著書が出版された。タイトルがよく似ていること、そして、表紙に使われた写真の峰が、40年近く前に私も訪れたゴンドコロ氷河（マツシヤールム峰の南西側、フシエ川流域）にそびえる鋭鋒であることから、大いに興味を惹かれた。まず最初に確認したのは前著との関係であるが、全く関わりがないようで、文献中にも登場しない。

10年⁸から10年⁶間というような時間単位の中で大陸同士の衝突と沈み込みと、ヒマラヤそしてチベットの隆起という雄大な規模の地質学的現象の解釈および解明は、その後の30年間で大いに進展し、詳細な議論の段階に達している。地質学や地震学を含む地球科学そのものが、プレート・テクトニクス理論によってかなり根本的なところから見直され、全く新たな視点から研究し直されるようになった。数年前の『地学事典』もすぐに古びて役に立たなくなってしまうくらいに、さまざまな関連分野を巻き込んで進展し、分化して新しい概念が生まれ、用語が新たに作られるという活気のある研究対象になっている。

インド亜大陸がユーラシア大陸に衝突したというのは確実だが、具体的にそれぞれの接続部分、特に西の端や東の端はどの

ような状態になっているのかを知るのは容易ではない。接合する前に開けていた大陸間の海（テーチス海）とその堆積物はどこへ行ったのか、ヒマラヤ自体が上昇を始めたのはいつか、どれほどの圧力で岩石が変成し、続成作用が起こり地層が捻じ曲げられズレているのか等々、直接現地に赴いて岩石や地層を調べ地質図を作成するなど、地道に一つ一つ細かく調べていかねば分らないことばかりである。しかも、世界最高の山岳地帯でそれを行なう地質調査が容易なはずはなく、これまでも登山の心得のある者だけが行ない得た仕事であった。最近では地域開発も進み道路の開削も始まり、地形図もそろい衛星写真が利用できる時代となって、以前よりは多少は便利になってきた。

「ヒマラヤの地質」と言えばA・ガンサーのGeology of the Himalaya (1964) がその嚆矢といえる著作であり、それまでに各探検隊などが遺したヒマラヤ地域の調査成果をまとめてヒマラヤ全体の構造図と地質図を作成した。（ヒンドウ・クシユ、チベット、NEFAは空白のままとなっている。）ガンサーは加えて、インダス川源流とブラマプトラ川源流が線状に連なるヒマラヤの裏側にユーラシア、インド両大陸の縫合部があると、続く時代の焦点ともなる見解を示してしていた。スイス人のガンサーは地質学者であるとともに登山者であり、1936年に先輩地質学者のA・ハイムとともに中央ヒマラヤ、ガルワールと西ネパール、そしてチベット側にも入って興味深い探検記

Thron der Götter (1938) と地質調査報告 Central Himalaya (1939) をまとめている。そして、1960年代から70年代には特別の許可を得てブータン・ヒマラヤに入って限なく調査を行なう、Geology of the Bhutan Himalaya (1983) を上梓している。

ネパール・ヒマラヤに関しては開国後から地質調査も本格的に始められ、日本の研究グループも継続して入って成果を上げているが、内陸に位置するカラコラムについては蓄積そのものが少ないばかりか、中部ヒマラヤとは違い水平方向に大きく「への字」に湾曲するという複雑な地質構造をしている。1929年と1954年のK2隊のA・デジオが、シャクスガム地域も含めた調査に基づく浩瀚な報告書^{こうかん}を出版しているが、以後は国境紛争や政治的理由から1970年代までカラコラムへの入域は全くできなくなっていた。前記のIKPの少し前に（アメリカの資金補助を得て）パキスタン地質調査所から発行された Geodynamics of Pakistan (1979) は、1970年代から進みだしたプレート・テクトニクスに基づくヒマラヤ構造論、特にパキスタン北部、カラコラムの構造に関してアメリカ、オーストラリア、フランス、イギリス、ソ連、イタリア（デジオ）、スイス（ガンサー）などからの研究論文を載せている。

IKPの範囲がカラコラムの西部であったのに対し、紹介する本書は副題にあるように広義のヒマラヤ、ヒンドゥー・クシュ、カラコラム、パミール、チベット、雲南、ビルマ、アン

ダマン諸島に範囲が及ぶ。すなわち、両大陸の衝突とその影響範囲の全域をたどったものである。最西端にあたるイランは著者の調査範囲を外れているが、対岸のアラビア半島東端のオマーンが加えてある。それは、両大陸間にあったテーチス海のかつての深海堆積物（オフイオライト）が地表に現われている場所であり、プレート・テクトニクスで語られるヒマラヤ形成史に関わる地質的証拠の一つだからである。

著者のマイク・シアールは1970年代後半から30年以上にわたって大学や財団などから研究費の援助を得て、ヒマラヤ、カラコラムを歩き、地道に精力的に調査を重ねるフィールド・ジオロジストであり、現在はオックスフォード大学で地球科学を教えているヒマラヤ地質研究の第一人者である。2008年には、長年の実地調査での功績に対して英国地質学協会よりマーチソン・メダルが贈られた。

本書の巻末には自身の詳しい探検年表が2012年まで載せられており、学生時代の1976年に、パタゴニアの岩峰を皮切りにアンデスを北上した3ヶ月間の初登攀を含む登山と探検から始まり、クルのホワイト・セイル登攀、そして、1980年にはネパールでランタン・リルン南壁を試みた（このときの記録は Alpine Journal に載っている）。そのランタン登山のときに遥かに続く山並みやその先に広がるチベットを望んで、2つの大陸が衝突したことで造られた偉大なヒマラヤやカラコラ

ム、チベットの形成に深く思いを致し、その解明を目指すべく以後30年間、ヒマラヤでの調査登山に進むことになった、とある。

1985年にはカラコラムへ初めて入ってK2のアブルツツイ稜を7000mまで登り、岩石サンプルを持ち帰り、マツシャールムも試みて、バルトロ氷河のすべての支流を探った。翌年は登山仲間とガルワールに入ってシブリンに登り、ガンゴトリ氷河の地質図を作った。その翌年から3年間は登山も組み込んだ地質調査を行ない、カラコラムの山と谷を隈なく探っている。特に1988年にはバルトロの岩峰群ビアーレ、ロブサン・スパイアー、トランゴ・タワーに登っているというクライマーでもある。以後も毎年ラダック、チベット、ヒンドゥークシュ、ネパール、シッキム、パミールへと次々に入ってゆく。また、この間にタイやミャンマー、雲南各地、ミニヤコンガにも行っている。最近の数年は、ネパール（エヴェレストの地質図作成）とアンダマンとマレー半島が多い。

これだけ調査に時間とエネルギーを使って、よく執筆ができると思うくらい多数の論文を書いている。カラコラムについては前記の4年間の成果をまとめ、地質と岩石調査のほかに地形や氷河についても詳しい詳細な研究書 *Geology and Tectonics of the Karakoram Mountains* (1991) を執筆し、1/25万の中部カラコラム地質図を完成させて付図とした。さらに共同編集・

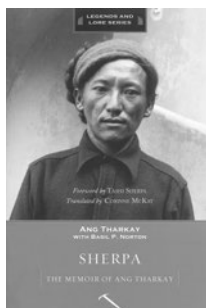
執筆者として5冊の学術書も編んでいる。なかでも *Himalayan Tectonics* (1993) は、シアールがまとめきれない地域の地質や岩石や構造の研究を集めたもので、前記の *Geodynamics of Pakistan* を大きく発展させた新しい成果である。オマーンの大規模なオフィオライト岩体（旧テーチス海海底地層および上部マントルの構成岩とされる）の研究も1970年代から始めており、*The Geology and Tectonics of the Oman Region* (1991) をまとめて地質図も作成した。さらに *Tectonic Evolution of the Oman Mountains* (2014) を編んでいる（最近、日本でもオマーンのオフィオライトが注目されだして、数年をかけて現地で掘削作業を行なっている）。

シアール2冊目の著書である本書は、これまでに訪れた（広義の）ヒマラヤの全地域について自身の活動概要を具体的にまとめ一書にしたもので、プレート・テクトニクス理論から導き出された最新のヒマラヤの形成史を、一般向けに分かりやすく説いたものである。各地域については探検史や研究史も載せてあり、現地協力者とのエピソードも記され、大部分を自身で撮影した美しいカラー写真とカラー図版が220枚も使われている。おそらく今までにこのようなヒマラヤの「地質学的登山記」は書かれたことはなく、山頂部の構造までを含めた登山・探検記として読むことができる。巻末には地質構造や岩石の變成作用、鉱物組成や放射性同位体による年代測定の原理などが

まとめられ、本書に使われた地学用語の解説と地域的な言葉集、そして、章ごとの註と文献目録が付けられている。(児玉 茂)

BY Ang Tharkay With Basil P. Norton

『SHERPA THE MEMOIR OF ANG THARKAY』



Mountaineers Books Seattle U.S.A.

2016年刊
204ページ

これまで、多くのヒマラヤ遠征記を読んできたが、どれも隊長や隊員たちの遠征記だった。この伝記は助っ人として参加したシェルパの珍しい遠征記でもあり、民俗学的な記述も多く、新鮮だったので紹介しよう。

シェルパといえば1953年、ヒラリー卿とともに世界最高峰エヴェレスト初登頂に成功したテンジン・ノルゲイが有名だが、その3年前に8000m峰アンナプルナに初登頂したフランス隊M・エルゾーグの登頂記（日本語版『処女峰アンナプルナ』訳・近藤等）に記されていたアン・タルケたちの活躍によつ

て、シェルパというヒマラヤ高峰登山には欠かせない献身的な助っ人の存在を世界の人々に知らしめている。

そのアン・タルケが40代のころ、著者のB・P・ノートンに自伝の執筆を依頼した聞き書きである。彼は読み書きができなかったので、すべて記憶をたどって話している。1954年にフランス語版で出版されたが、広く読者の目に届かなかった。嬉しいことに、ようやく2016年、英語版が出版された。

第1章…子ども時代と初めての遠征参加

1. 子ども時代

1907年、エヴェレストの麓、クインプのクンデに生まれた。標高4000mのクンデはヒマラヤの高峰に囲まれ、外界から隔離された辺境の地だ。母親は地元のリダー格と諍い、チベットから追い出され、ひとりて国境を越え6日間かけてクンデにたどり着き、そこで父に出会って結婚した。

父には幼い弟がいたので、祖父からの遺産を受けず自力で生活する決心をしていた。シェルパ社会において、親の資産は一番若い子どもが継承するのが一般的だったからだ。貧しく、隣接地を購入する金がなかったが、その土地の持ち主に身寄りがなく僧院入りをすることになったので、なんとかと土地と家屋を手に入れて引越すことができた。

2 部屋の平屋造り、壁は石積み、屋根は草木の枝で葺いてあるという小さな家だ。一つは家族が、もう片方の部屋は家畜用に使用した。この地域の家は東向きに建てられ、日の出とともに活動するのに便利だった。

クンデでは皆が貧困だが、大所帯の我が家は食べるだけでも大変だった。そんなとき、チベットとの国境線のすぐ近くに住んでいた叔母が、6歳の私と一緒に住もうと声を掛けてくれた。6年後に父が私を連れ戻しに来るまでの間、独身の叔母から我が子のように可愛がってもらい、一緒に過ごした日々は一生忘れたいものとなっている。

実家では自給自足のため、羊や牛の放牧や見回りといった牧畜と、朝食のツアンパ用の小麦、ジャガイモ、カブ、ニンジンなどの農耕も行ない、働き詰めだった。父は小金を貯めては羊毛の仕入れにチベットに行き、戻ると米と交換していた。大量の羊毛から毛布や絨緞を織るなど羊毛事業は順調になり、父とともにしばしばチベットに出掛けるようになった。

この旅でチベットの人も親しくなり、大きな市にも通うようになっていった。通い慣れた道だが、厳冬の寒さは格別だった。シェルパたちはなめしていない革靴を履き足を守る。山村ではこのような靴作りはお金になった。また伸ばした髪の毛を丸めて頭の上に置いて、防寒対策をした。そのため母は、髪を梳くときにバターを付けていたのだ。父はこの地方では珍

しく酒やチャンを飲まず、静かで討議や論争にも加わらない人だった。

クンデでは水汲みが最大の問題だった。ときには2 kmも離れた隣村まで出向いたし、母は40ℓ入りの木桶を背負って日に何度も往復していた。冬には水を割るところから始めねばならず、大変苦労した。また、冬は冷え過ぎるので小麦を除いたコーンや蕎麦は粉に挽いて、木枠の籠や皮袋で保管したし、ジャガイモやニンジンの保管用に、畑地に2×2・5 mの穴を掘らねばならなかった。

叔母の家から実家に戻った年に、寺院で儀式的な祭礼があった。そのころ父は、林の中で樹を切っているときに斧の頭が飛んで来て足に当たり、重傷を負って、高熱が続いていた。我が家では祭礼に米をお供えするどころか、飢餓が迫っていた。そのため近所から塩を借りて、米作の限界地であるライ族が住む遠方まで行き、米と交換したが多量な量は入手できなかった。しかし父が回復すると、米作地でも信用があったので必要な米を入手できるまでになった。

父は私の祭礼参加用にウールのスーツを買ってくれた。クンデとタンボチエの間にある小さな村の、親戚の所で草刈りを2年間手伝った。暑い日に上着を脱いで置いていたら盗まれたこともあった。18歳のときには酷い赤痢を患って長期間ベッドで横たわっていたが、母の献身的な看病で回復した。この赤痢は

遠くナムチェ・バザール辺りまで広がった。

少年期はヒマラヤの峠越えなど広く歩き回った。雪を頂いた高峰を見ると、心から敬意を表した。当時、自分は将来このように山と関わる仕事をするとは思っていなかった。外界のことは何も知らず、山奥の百姓で過ごすものと思ひ込んでいたが、父が私を大都會のダージリンに送り出してくれた。インド人や外国人も大勢いて、自分にとっては全くの新世界で、驚異と神秘に満ちた近代生活の虜になった。

私は25歳でまだまだ幼稚だったが、ともかくダージリンに住み着くことにした。妻となる18歳の女性とも出会った。クンデで顔見知りの女性だったが、ダージリンで再会し恋に落ちたのだ。彼女はナムチェ・バザールで生まれ、少女時代はシェルパの住む地域で過ごしていた。彼女の父はたびたびチベットに出かけ、私の父親と同行することもあったのでお互いによく知っていたのだ。

1年ほどダージリンに滞在しながらチベットやカリンポンにも出かけた。ライセンスなしのタバコ運搬で儲けるためだった。あるとき、皆と別れて密林の中をヤタン村に行き、案内人になった親戚やポスト・ランナーになっている人たちとも出会い、互いに喜び合った。将来妻となる彼女の父親は、ここで薬草集めのビジネスをしていた。ダージリンに戻って結婚し、新生活を始め、数ヶ月後クンデに父母を訪ねた。

2. チベットへの旅

父とチベットに行くとき、クンデや周辺の村人たち15人でナンパ・ラ（5800m）を越え、50kmほど先のチベット人の村まで往復した。そこはチベットの大きな交易市場として栄え、住民とも仲良く、我々の村人との結婚も多かった。

最初にナンパ・ラを越えたとき、頭が裂けるような痛みと頭痛に襲われ、視力にもトラブルが出た。考えもすっきりせず、どこに向かっているのか目まいがしてふらつき、目は焦点が合わず、父に支えられて峠を越えた。低所を下りてからも、ときおりおかしくなった。しかし、3kmも歩いたら目もバランスも少しずつ戻った。最初、私の周囲に火花を散らす山々があるような気がした。そのことを話すと、同行の友人が一番近い山を指して「この山はシェルパたちにとって神聖な山で、そこに宿る神さんがあなたの気を惹こうとしている。ただちに小さな岩を拾い、高い所から見下ろす白いピークに投げよ」と言った。岩を投げると次第に回復してきた。この旅で知ったのは、チベットに行くのに途中の村で2度2、3泊してナンパ・ラを越すことだった。その後、毎年チベットに何回も通った。

3. シェルパの里と住民たち

この章は1951年、エヴェレストのシプトン隊にシェルパとして初めて参加した際のE・シプト隊長の著書「Mount Everest Reconnaissance Expedition」に負う所が大きい。ヒマ

ラヤ登山者にとってシエルパの里はメツカのような所だ。北部はクーンブ、南部はソロ・クーンブと呼ばれ、エヴェレストはクーンブの北にあり、シエルパがたくさん住んでいる。交易所としてはナムチュエ・バザールが最大で、ほかにターメ、クムジュン、パンボチュエ、クンデなどがある。そのクンデで私は生まれた。住民の大半は仏教徒で、ネパールやチベット人の巡礼者も大勢訪れる。ソロ・クーンブは地表が硬い岩に覆われ、岩のない土地は痩せ地である。クーンブにはいわゆる「道路」は全くなく、山道ばかりだ。荷物の運送は、ラバなど動物たちか人が担いで運搬するしか手段がない。

4. シエルパとして

私が20歳少し前に、ブルース隊長率いる遠征隊に参加した仲間が荷物を背負ったままで実家を訪ねてきた。彼の話をわくわくしながら聞き、彼に続こうと決心した。直後、この仲間と一緒にクンデからライ族の住む近くまで穀物の買い出しに出かけ、往復の3日間遠征の話をつづり聞くことができた。道中、偶然泊まった宿で、遠征などに興味を抱く若いシエルパニ(シエルパの女性)がダージリンから帰ったところで、新しい遠征隊が若いシエルパを募集していると教えてくれた。遠征隊参加のため食料など準備する必要があると思っていたが、経験のあるシエルパが、衣服、食料、登山靴など遠征に必要なものはすべて遠征隊が支給してくれるので、ダージリンまでの道中の費用

だけ用意すればよい、ということも教えてくれた。なんとか工面した手持ち金も途中で足りなくなり大変だったが、偶然葬式に出会いご馳走にあり着くなど、苦勞をしながらダージリンにたどり着いた。早速 The Himalayan Club の事務所を訪問したが、遠征隊は出発した後だった。次の遠征隊に参加できるまでの生活費が必要だったので、病院建設の石運びをした。3ヶ月後、12人のシエルパとともに10日間、背に荷を担ぎキャラバンをした。結果は帰路の費用にもならず、雇い主とのトラブルなどもあり苦勞した。

1931年、ドイツのカンチエンジュンガ遠征隊に初めて山仕事のポーターとして雇われた。雇い主との約束では、最初に氷河にたどり着いたポーターたちはその後も上部で働ける約束だったが、サーダーたちの紛争に巻き込まれて約束は反故にされ、ダージリンに戻るしかなかった。その上、悪いことに病気に罹り、瀕死に近い状態でダージリンにたどり着き、自分が石運びをした病院に入院、仲間たちに助けられて体調を回復することができた。

1933年3月3日、H・ラトレジ隊長率いエヴェレスト遠征隊のサーダーとして、先頭切つてダージリンを出発したことは忘れることのできない日となった。

5. エヴェレスト遠征

エヴェレスト遠征に8回参加し、その内4回はチベット側か

らだった。自分もサードーとして参加した1951年、ネパール側からのシブトン隊の遠征は、1953年のE・ヒラリーとテンジン・ノルゲイの初登頂に大きな効果をもたらした。また、この遠征で私がルーツ工作の役を果たせたことを喜んでいる。

以下の遠征記はシェルバの目から見た登山記で、シェルバやポーターたちの採めごとや凍傷を治す方法、イエティのエピソード、ラマ僧のことなど、シェルバの本音が窺い知れる。

なお、最初のエヴェレスト遠征(1933年)、第2回エヴェレスト遠征(1935年)、第3回エヴェレスト遠征(1936年)、第4回エヴェレスト遠征(1938年)、第5回エヴェレスト遠征(1951年)と、記述が続く。

第2章 ほかの遠征隊

1. ナンダ・デヴィへの私の初遠征(1934年)
2. カブル(1935年)
3. 2回目ナンダ・デヴィ(1936年)
4. カラコルムへの私の初めての旅(1937年)
5. 2回目カラコルム遠征(1939年)

第3章 アンナプルナ(1950年)

1. フランス隊と初めての出会い

1948年暮れに、デリー駐在のフランス外交官からフランス隊への参加要請を受けた。私は全ポーターの指揮官で、サードーを命じられた。隊員たちはシェルパたちに丁寧に紳士的に接し、今までの遠征隊と違って梱包の開閉にも一緒に気軽に共同作業をやってくれた。シェルパたちもM・エルゾーグ隊長はじめ隊員全員の名前を覚えた。

2. 入山ルート

インドのナウタンワからネパール国境を越え、プトワル経由でカリ・ガンダキ沿いに遡行した。途中で何回かポーターたちのストライキに悩まされ、ポーターへの支払い用にネパール通貨を準備していなかったため、バザールでの換金にも苦労した。ダウラギリの白い綺麗な巨峰を眺めてツクチェ着。BC設営が始まったが隊員たちも一緒に作業をし、近くにあった寺院でのお祈りも傾聴してくれた。この温かい登山隊の態度にシェルパとの強い絆が生まれた。この寺院はチベット人巡礼者も多く訪れたが、隊長が巡礼者たちに寄進してくれたのも嬉しかった。

3. 偵察

隊長は2隊に分けてダウラギリとアンナプルナの偵察をしたが、決定的なルートは見付かっていなかった。ルートを見付けなるべく尽力してB Cに戻ったところ、ラマ僧が訪ねてきた。隊長は私に通訳を依頼した。隊員がダウラギリへの登頂成功なるかと尋ねたところ、僧はダウラギリを諦めアンナプルナを勧めた。隊長はアンナプルナ頂上を目指す決定をした。私は隊員たちの食事を用意したが、隊員たちは美味しいと言って食べた。過去の遠征で初めての嬉しい言葉だった。シエルバにはアイゼンを支給し、使い方の特訓もしてくれた。隊長と私は偵察に向かい5500mに達した。隊長は写真を撮り、私は帰路の目印にケルンを積むのに忙しかった。翌日、登り直し、ムクチナート・ヒマールの6200mでアンナプルナ頂上が見えた。全員で喜び、お礼に寺院を訪ねたが僧は留守だった。

隊長はアタック計画を私に説明し、隊を2隊に分けた。出発直前に1人の隊員と医師からムクチナートに連れていくよう依頼され、良い前兆を感じた。隊員と医師は各寺院を訪問し、私は聖地を訪ねる機会をくれたことに感謝した。尼僧が歌い踊って歓迎してくれた。B Cに帰着したところ隊長たちはアンナプルナに向け出発し、キャンプは準備に忙しかった。私はツクチエに残って隊長の次の指示を待った。

4. アタック

5月末、ノエル隊員が隊長からの、ただちにできるだけ多く

のポーターを集めてほしいとのメッセージを持ってB Cから下りてきた。24人のポーターを集め、隊長の必要とする荷を運び上げた。すでにCⅢが設営されていた。翌日CⅠに上がると、シエルバとポーターたちはCⅢに荷上げに出ている。CⅣから下りてきた隊長は私を見付け、アタック態勢の進捗具合を知らせてくれた。私はこの数日間の行動、ムクチナートを訪問し登頂成功を祈ってきた、神は私の念願を聞いて下さると話した。隊長と一緒にステップを切ってCⅢに着き、ただちに食事を用意した。

翌日CⅣに向かった。CⅣ―A（中間キャンプ）は氷河上にセットされていたが、隊長は2000m下を下ろすよう指示した。その翌日、CⅣ―Aに引き返し、登攀用具を荷上げた。頂上が見えた。同日、CⅤを設営すると言うので、懸命の努力の結果、予定地までたどり着いた。7300mに達し登攀を続けたが、風雪が強烈になり約2000m登ってCⅤとした。

隊長はもし私が一緒に行くなら、明日出発だ！と言った。私はこのすばらしいアタックを一緒にできることが嬉しかった。彼の申し出を断ることは冷淡過ぎると思ったが、自分の足は凍傷で痛みだしており、自分の足がすべて凍り付くのが怖かった。そして、彼の顔を見詰めて言った。「私には隊長と同じように栄光を享受する資格はない。この名誉を与えて下さったことを嬉しく思い、一生忘れません」と答え、「神が隊長とラシユナル

を守って下さる」と言って、私はCⅣ―Aに戻った。翌朝、CⅤから下りてきた隊員から隊長たちはアタックに向かったと聞いた。より居心地の良いCⅣに下りた。午後には酷い降雪になり、自分たちも雪崩を恐れた。夜中に自分のテントも完全に雪に埋まったので這い出し、岩の裂け目に入りテントや荷物を守った。雪は容赦なく終日降り続いた。

5. 勝利

自分はCⅣでひたすら登頂を祈っていただけで、目撃者として隊長たちが成し遂げたアンナプルナ初登頂の偉業を語る資格はない。6月5日夜明けに、わずかな叫び声が聞こえた。急いでCⅤに向かうと、上部から下ってきた2人の隊員がクレバスに半分埋まっている。血は冷え切った。同行していた隊員たちと手分けして駆けつけ救い出し、隊長、ラシユナル、テレイ、そしてレビユファアの4人をCⅣ―Aまで下ろし、上部にいた隊員は全員がそろった。シャッツ隊員は隊長のビッケルとカメラを取り戻しにクレバスに戻った。雪盲になったテレイ隊員を連れて下ろし、同じく酷い雪盲のラシユナルも続いた。

ここからも長い苦痛と困難を伴う下山が始まった。クローワールと氷河を横切り、深い新雪の中ゆつくりと下っていると、目の幅広いクラックが突然開いて落ち込み、3人がはまり込んだ。隊長は登り直そうとしたが、下に2人のシェルパがぶら下がっていた。私はほとんど目が見えないテレイを安全にCⅡ

まで案内し、登り返した。ラシユナル隊員も雪盲とともに足を凍傷にやられていたので担架で担いだ。隊長も酷い凍傷にやられていた。レビユファアは耳が凍傷になっており、CⅡは世界最高所の病院だった。隊長は「我々はアンナプルナから帰った、私とラシユナルは頂上に立った」と言った。医師が指揮を執り下山に取り掛かった。

6. 下山

自分はケガ人4人の面倒を見ながら、支給品と用具の梱包に多忙を極めたが、医師の方がもっと忙しかった。患者から患者を飛び回り、科学的治療を施す医師の動きに敬意を表した。彼のお陰で少しずつ痛みは和らぎ、危険な状態から脱した。最大の問題は、CⅡからBCに患者たちを下ろすことだった。ソリにレビユファアを乗せ4人のシェルパでCⅠまで下ろし、隊長のもとに引き返した。医師が彼を再診察後、6人で隊長をソリに乗せて下った。たくさんセラックや岩のバンドを越えるのに苦労した。その後も急峻な岩場を下降し、恐ろしいセラックの下を這い進み、深雪に足を取られ、そのたびに隊長の傷が悪化しないか気になった。疲れながらも、シェルパたちはCⅣに残した装備などを取りに引き返そうとしていると隊長に伝えたところ、個人装備などはすべて弁償するので2度と上に登るな、と指示を受けた。

CⅠには誰一人欠員はいない。隊長が皆で登頂祝いをやろう

と言出し、隊長のいるテントを囲んで集まった。シエルパ

ちは隊長の寛大な器量に触れ、キャンプに唯一本残っていた
シヤンパンで祝杯した。

翌日、患者は隊長を含め一人ずつキャンバス・バッグに入れ
て、順番にシエルパがC IからB Cに下ろした。続いてシエル
パたちはC Iをたたみ、疲れながらも、食料や用具をB Cに担
ぎ下ろした。その後、細い路、林の中、激流の流れる川を渡り、
長旅の後バトワルに帰り着いた。

7. パリの1週間

1953年3月、エルゾーグ隊長から映画「Victory on
Annapurna」試写会に合わせてパリへ招待された。ホテルや観
光、フランス山岳会のレセプションなど、まるで別世界に迷い
込んだような夢心地の体験だった。

*

アン・タルケはテンジンの名声に隠れてしまったが、数年前
にインド・ヒマラヤに足繁く通う日本女性登山家から借用した
「For Hills To Climb」(註)と彼女の話の思い出した。ダージリ
ンにある有名なヒマラヤ登山学校は、1953年、ヒラリー卿
とともにテンジン・ノルゲイが世界最高峰エヴェレストに初登
頂したことを記念して、インド初代ネルー首相が1954年11
月4日、当時インド登山界をリードしていたナレンドウラ・ダ
ハー・ジャヤールを校長に、テンジンを主席教官に迎え設立し

た。しかし、日本に4年間留学した登山愛好家の校長の孫娘か
ら「日本人を含めた多くの人はテンジンが初代校長と誤解をし
ている」と聞かされた。テンジンの名声の陰に隠れた人がほか
にもいるのだ。

(南井英弘)

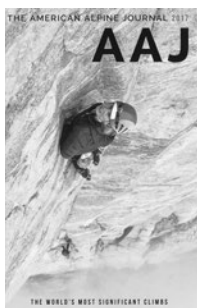
(註) 編集者 = Aamir Ali 発行者 = The Doon School Old
Boys Society, New Delhi 発行 = 2001年、44ページ

The Alpine Journal 2017



The Alpine Club
2017年刊
480ページ
£26.00

The American Alpine Journal 2017



The American Alpine Club
2017年刊
384ページ
US\$35.00

The Alpine Journal 2017

巻頭を飾るのはミック・ファウラーの「セルサンクで再結成」。

ミックは今年62歳、昔だったら高峰登山からとうに引退している年齢だが、今なお現役として海外登山を続け、今世紀に入ってピオレ・ドール賞を2回受賞している。

若いころはすいぶん無茶な登山を繰り返した。英仏海峡に面したケント州の白亜の断崖を、アックスと克蘭ボンを駆使して登ったり、毎年冬になるとモリス・ミニの小さな車体に仲間たちと荷物を押し込み、ルーフキャリアにも荷物を満載して、片道1000kmの遠路をいとわず、週末になるとロンドンからスコットランド、さらに北西の離島へ足を延ばしてクライミングし、月曜にはその足で出勤した。そのころ親の勧めもあって英国歳入庁の役人になった。

25歳を過ぎるころから海外登山に乗り出し、アンデスやカフカスなどで腕を磨いた後、1987年にはスパンティーク北西壁の初登攀に成功した。スパンティークは標高7027m——高峰居並ぶカラコルムにあって決して高い方ではないが、グラインド・ジョラス北壁を思わせる様相の、高さ2000mを超すその巨壁は、北西方から遠望すると、夕日を浴びて金色に輝くのでゴールデン・ピラーと呼ばれる。それをミックとビクター・ソーンダースは、1984年にフンザに近いボイオハグー

ルから遠望して、「次は、あれ」と決めたのだった。

それから3年後の1987年、ミックとソーンダースはカラコルムに戻って行き、見事そのゴールデン・ピラーの初登攀に成功した。ふたりは固定用のロープを持たず、リーダーは荷物を背負ったまま登り続け、壁の中でビバークを5回重ねて、ようやく勝ち得た初登攀だった。さらに、世界各国の山岳誌に発表した報告記事に添えた写真が注目を集めた。ナイフで削ぎ落としたような、すっきりした岩稜に夕日が当たって、まさにゴールデン・ピラー黄金の岩柱だった。

その後、ミックは相変わらず週末クライマーを続けながら、年に1度、ひと月前後の海外登山を続け、1997年にはインド、ガルワールの岩塔、チャンガバン（6864m）北壁の初登攀に成功し、高峰におけるアルパイン・クライミングの第一人者として認められるようになった。

一方、ソーンダースはその後、シャモニを拠点としてガイド業に勤しみながら、エヴェレストやアマ・ダブラム、チョー・オユーなどに繰り返し登る一方、セブン・サミッツも達成した。そんなふたりが、ゴールデン・ピラー初登攀から29年後の2017年、再びコンビを組んでインド、キシュトワール山群のセルサンク（6050m）の初登攀に成功した。ミックは61歳、ソーンダースは66歳になっていた。

前回ふたりで初登攀したスパンティーク、ゴールデン・ピラー

より山頂の標高が1000mほど低く、壁の高さも1000mとほぼ半分になった。ルートの困難度も(記事では触れていないが、たぶん)易しくなっているだろう。それでもルートの性格は雪と岩と氷のミックスで、両者全く変わらない。

長期的な視野を持って広範に資料を渉猟し、多種多様な引き出しを手元にそろえて、その中から自分の条件——年齢や休暇の都合、資金力、得意な登り方など——を勘案して、そのときどきの自分に最適な登攀対象を探し出す能力が、ミック・ファウラーにとって最大の強みだろう。

コズミン・アンドロンの「ザンスカールのスーパークローワール」は、文なしが集って遠征に行きたいということで、ザンスカールのT6(6431m)に食い込む氷の溝を、一直線に登った記録。高さ1200m、総合グレードEDで、最大斜度75度、WI4+ M5/6 6bのルートは、夕日に赤く染まってモンブラン・デュ・タキユルのクローワールを思わせる。隣合って伸び上がる何本ものの岩稜も魅力的だ。

「危険と共に暮らした一年」は、イギリス人若手クライマーの筆頭と目されるトム・リビングストン(26歳)が、2016年の1月から12月までに成功したルートを列挙して、自分の縦横無尽な活動ぶりを披露している。

1月にロープにぶら下がって作業してる最中に、手指を2本負傷したが、その4日後にはスコットランドのアイスグレード

VIIIからIXという最高難度に近いルートを登った。

3月に入るとシヤモニへ渡り、貧乏暮らしをつづけながら現地で知り合ったオーストラリア人とドリユ北壁の初登ルートや、グランド・ジョラスのウォーカー稜を冬季登攀した。4月はスポーツルートに専念し、La Ligne Noir(8a+)に成功して、自分としての最高グレードを達成した。

5月はスコットランドのアラン島で(E8 6c)のルートを登り、6月はスコットランドの北東端に接するオークニー諸島へ行き、ホイ島のセント・ジョーンズ岬にあつて、イギリスで最も印象的な岩壁といわれるThe Long Hope Route of Hoyのフリー化ルート(E10/11 7a)のフリー第2登に成功。7月はウェールズで登り込み、その後、チェコのロープメーカー、テンドンの招待でノルウェーを訪れアダム・ロオンドラとクライミングを楽しみ、8月になって再度シヤモニへ行き、悪絶をもって知られるグラン・ピリエ・ダングルのDivine Providence(ED+ 7b+ 900m)と、ドリユ西壁のアメリカン・ダイレクトを登り、9月にはカナダへ行つて、マウント・アルバータ北壁のHouse = Underson(VI WI5+ M8)を完登した。10月には高所作業をして稼きながら、北ウェールズのシークリフ、ゴガースのRock of Ages(E7 6b R)を2度訪れて、なんとか完登した。12月には高所作業で稼いだ金でパタゴニアへ行き、フィッツ・ロイのSupercañata(WI4 5・8

1600m)を登った。世界を股にかけて、よく登ったものがある。

この記事は、たぶん、リビングストーンの活躍に注目した編集者が依頼したものだろう。写真をちりばめているものの、報告文は無味乾燥といえば無味乾燥。しかし、そこに出てくる固有名詞と数字を丹念に追っていけば、高所作業で稼ぎながら仲間たちと付き合い、先輩クライマーの助けを借り、ときにメーカー主催の紀行文コンテストに応募して、オールラウンドに腕を磨いていく様子が見えてくる。

次の「ダイヤモンド・リッジ」は、スコットランドのベテランクライマー、サイモン・リチャードスンが、2016年7月28〜30日に初登攀したグランド・ジョラス南面に引いた新ルートの記録。ツバメ山稜を挟んで北面も南面も、網の目のようにルートが交錯するグランド・ジョラスに、まだルート開拓の余地があったとは、目から鱗である。それも苦し紛れの変則ルートではなく、自然なラインで高さ1600m、グレードも(5c A0)だそうだ。イギリス人の面目躍如といったところだ。ポール・ラムズデンの「ニエンチェンタングラ南東峰」は、ラサから至近の7026m峰北壁初登攀の記録。山選びから登山許可の取得に至るまで数年に及ぶ経緯や、パートナー選定の理由、現地入りしてからの登山の進め方など、多岐にわたる事柄を、簡潔な文章で要領よくまとめている。

ほかに、「聖なる山——雲南はクライミング・パラダイスか?」では中村保さんが、崑明北西部に乱立する4700〜5000mの岩山を紹介している。また、ステイーブン・ヴェナブルズが南大西洋の孤島、サウス・ジョージア島の地形と登山について、永年にわたる成果を見通している。

そうかと思うと、アルプスとドロミテに関する記録として、スイス人クライマーのロジャー・シェーリとステファン・ジーグリストにドイツ人のトマス・フーバーを加えた3人による、アイガー北壁の名ルート、メタノイア(ジェフ・ロウが初登、1800m VII A4 M6)の第2登や、ビッツ・バディレ北東壁の新ルートAmore di Vetro(800m M5 R)など、注目すべき新ルートの登攀について、その登攀史を振り返りつつ紹介している。

The American Alpine Journal 2017

このアメリカ山岳会の機関誌を見て目につくのは、世界各地の登山エリアを広範に取り上げようという姿勢である。だから400ページ近い本書の構成は、巻頭から90ページまでに10本の長編記事をまとめ、続く250ページで世界各地の登山短信を、地域別に分けて数多く載せ、末尾の30ページ余りに書評や追悼記事、索引、グレード比較表などを詰め込んでいる。

長編記事の最初の1編は、A Jでも取り上げている、ニエン

チエンタングラ南東峰の北壁初登攀の記録で、3つ目はテン
シヤン山脈のキジル・アスケル(5482m)北壁のロスト・
イン・チャイナ(1200m ED WI5+ M6)を初登攀
した記録。後者の壁はロシア人の故ルーチキンやオディンツォ
フ、ファブレスなど世界的なクライマーたちがやって来ていく
つものラインを引いた壁で、3年連続でアイス・クライミング
世界女王だったパペートはより困難なルートへ向かい、3回目
の挑戦でようやくものしたのだった。ほかにバフィン島のピッ
グウォールや、カナダのプリティッシュ・コロンビア州の穴場
ルートの登攀記録、グリーンランドやパタゴニアの記録などが
並ぶが、なかでも目立つのは、ヴィタリイ・ムシエンコが10ペー
ジにわたって書く「黄金時代^{イェルツェイ}」という記事。

著者のヴィタリイは、1986年にチエルノブイリ原発事故
が起きた際には、現場の近くに住む母親の胎内にあり、被曝し
ながら生を享けた。以来十代になるまでずっと被曝治療を中心
に暮らし、精神的なものでなく肥満と喘息に悩まされていた。
だが、母親とアメリカに移住して高校に入り、サッカーを始め
て体を動かす喜びを知ったおかげで、体重が50kmほど減った。
資格を取って看護師として勤務するようになった。

仕事仲間からハイキングの手ほどきを受けて登山に目覚め、
次第にピッケルとクランポンの世界に入っていく、2009年
の冬にはシエラネバダ山脈の南端に近いマウント・ホイット

ニー(4417m)に登頂した。ヴィタリイはオンラインのク
ライミング・フォーラムに参加して「カリフォルニアのどこか
に、未踏峰はありませんか?」と書き込んだ。

そんな質問にまともに答えてくれる人がいるはずもなく、
ヴィタリイは独りで山登りを続けた。その年、登頂峰が50座を
超したところから自信がついて、2011年にはデナリ、さらに
南米へ遠征した。それで気づいた——これは見当違いの買い物
だった。7週間の遠征で1山登るより、2、3日でこなせる地
元の山を数多く登った方が、充実感を得られるだろう、と。

2012年から活動の中心を、地元カリフォルニアのシエラ
ネバダ山脈南端部に絞った。その年、ビッグナズラックで
キャッスルトン・ロックに新ルートを拓き、続けてもう少し規
模の小さい岩場で腕を磨いて、2015年には高さ650mの
キングス・バブズ・ウォールに全18ピッチのエンペラー(V
5・12a)を開拓した。この年、新ルート開拓やフリー初登に
成功したルート数は併せて17本。自分にとってクライミングの
喜びは、困難の追求というより自由の発露にある——と悟った。

だが、ヴィタリイを導きともに夢を育んできた仲間が、突然
亡くなった。健康で強靱な人でさえ明日の命は分からない。ま
してや自分は胎内被曝者、この貴重な時間を金稼ぎに費やすよ
り、山の中で過ごす。そう考えて、ヴィタリイは7年間続け
た仕事を辞め、自分が好きなシエラネバダ山脈南部のマウン

ト・ホイットニー周辺の山々で過ごすことにした。

2016年の6月下旬に、まずホイットニーの北東方約3kmのギャンブラーズ・スベシャル(3940m)周辺の岩場へ行つて、高さ300mから700mの壁に新ルートを2本拓き、引き続き、アメリカ本土の最高峰ホイットニー(4417m)の高さ500〜700mの東壁に、(V 5・11)クラスのルートを3本拓いた。いずれも、有名なクライマーが開拓した既成ルートと既成ルートの間を走るクラックを登る、ナチュラル・プロテクション中心のルートだった。

ヴィタリイはそれ以前に、ハッピー・ドームという易しい山に初登頂して、東方にガーディナー山(3933m)の針峰と、北方にクラレンス・キング山(3933m)の恐ろしいな三角錐を見ていた。

7月に入ると、その2つの山へ向った。15kmの長いアップローチをこなした後、まずクラレンス・キング山に北西面から直登してドリーマー(V 5・11)とした。驚いたことに、その岩場の中間点、ヘッドウォールの始まる地点まで、懸垂下降に使ったと見られる残置支点があった。翌日は峠を越えてガーディナー山麓へ行き、標高3050mの湖畔に泊まり、高さ400〜500mの岩場に、5・10〜11のルートを2本作った。「何十年前に、フレッド・ベッキーがこいつを登っていたら、あの『Fifty Classic Climbs in North America』に選ばれていただろ

うな」と、友人が言うほどのすばらしいルートだった。

ホイットニーの北西80kmに位置するテビピテ溪谷は、よくヨセミテ溪谷と比較されるが、それは100年前のヨセミテ——道路の終点から30kmも歩かなければ到達できず、人混みもなければ、遭難しても救助してもらえない可能性ゼロのヨセミテ。毒樫やアナコンダのように太いガラガラヘビ、生き残りのグリズリー、知られざるネイティブ・アメリカン、大トカゲもいる。原生自然が残るそのあたりで一番有名な岩場はテビピテ・ドーム(2349m)だが、ヴィタリイたちの目標は、溪谷をさらに3km遡った対岸の岩場、ワツイ・ウォールだった。パートナーはプロ・スノーボーダーを目指したものの、骨折と脳震盪の繰り返しに堪えられずに諦め、シエラネバダ山脈南部の岩登りに専念するダニエル、さらに1人応援を頼んで、前年に途中まで登って放棄したルートに戻ってきた。頂上直下にツルツルなオーバーハングが出現して諦めかけたが、試しに取り付いてみると、際どいエイド・クライミングでそこを切り抜けることができた。インフィニティ・プール(VI 5・11+ R A2)は全21ピッチ、ヴィタリイが拓いたルートで最長だった。

そのようにして2016年の夏のシーズンが終わるまでに、新ルートを21本完成させた。しかし、ヴィタリイ自身にとつてハイライトとなるのは、これら初登攀の数々ではなく、エヴォリューション岩稜の単独完全縦走だという。このルートはシェ

ラネバダの13000フィート峰を20座縦走するもので、全長13km、総合グレードVI級で5・9のピッチを含み、普通は数日かかるが、ヴィタリは「独りで3日間奮闘してこの岩稜縦走を成し遂げ、自分の限界を広げ、シエラネバダ山脈南部に関する知識を深めることができた」と書く。こんな言葉からも、筆者がクライミングを楽しみ、シエラネバダを愛していることが分かる。

またAAJでは近年、Recon（偵察）というシリーズ記事載せ、毎号、世界各地の未知な要素の強い山域を取り上げて、登山史や新規ルート、今後の可能性などを解説している。この号では「ザ・サーク圏谷」と題して、カナダ北西準州のアンクライマブルズ山群を取り上げている。副題に「その山々や岩壁群は、アンクライマブル登れないどころか、65年余り前から人を魅了し、いまだ開拓の余地は計り知れない」とある。

（海津正彦）

追 悼

高室 陽二郎さん



たかむろ ようじろう
(1929～2017)
会員番号 2890

高室さんが逝去されて1年が経った。寂しい限りだ。高室さんを知る誰もが惜別の気持ちのなかで空しい時が過ぎていったと思う。私もときおり、たまらない寂しさが押し寄せてきて心の定まらない日が続いた。

そんな気持ちを少しでも整理しようと山仲間と話合って、昨年の11月23日に高室陽二郎さん「山と人を語る会」を開催し

た。皆さんの思い出のスピーチは多彩で、それぞれの方が語る高室さんの「山の世界」からは、広くて大きな人柄や優しさを改めて感じて、心は少し落ち着いた。

高室さんの山との関わりは、著書『山と人』の「私的独断的回想五十年」と「同六十年」に、面白く載っている。例の軽妙な文章は当時の登山界の風情や、山に正対する高室さんの純粋な気持ちが表わされていて思わず引き込まれてしまう。

報道関係の経営や多面的な文化活動から、気難しくて近寄り難い雰囲気に見られがちだが、実は意外と天真爛漫で、とても愉快でユニークなところがあった。一方で記者魂からか何事も確かさを求め、物事の解明を大切にしていた。この幅の広さと深さが、私たちにとって大きな傘であり、また魅力でもあった。

高室さんの「山の世界」は大きく3つの時代を経ている。初期は、南嶺会（昭和22年）と、日本山岳会（昭和23年）に入会して、旧山梨工専山岳部を経て山梨大学山岳会の設立（昭和24年）に参加したことで、高室さんが登山の理念や技術を身に付けていった時代だ。

山岳部に少しでも役立てようと南嶺会で学んだものを、そつくり部活動に導入するのが入会の目的だったが、次第に先輩たちの山への真摯で大きく取り組む姿勢にすっかり染まって、相対の頻度で山に入った。当時の南嶺会登高記録から高室さんの主な山行を見ると、昭和22年の鳳凰三山・白根三山縦走、昭和

23年の甲斐駒、金峰山、鳳凰地藏岳、八ヶ岳権現岳等々、翌年には厳冬の甲斐駒、鳳凰、7月は南アの全山縦走と若者らしい、がむしろな山行きだった。このころは山梨県山岳連盟と日本山岳会山梨支部が表裏一体で発足(昭和23年)した直後で、岳連や支部の行事にも積極的に参加していた。昭和24年10月末に国体登山部門が富士山で開催されたときも、県代表として参加している。そして、昭和27年には支部の常任委員に就任して会務も経験した。回想記には終戦直後の登山の状況が記されて貴重な内容になっている。

次は短かったが伸び伸びと自由に北海道の山を登った増毛での教師時代だ。新聞社を辞めて、昭和29年に道立増毛高校に赴任した。翌年、地元の登山愛好者3名と増毛山岳会発足に参加した。同時に暑寒別岳への全校登山を実現するために山岳部を創設して、昭和31年には学校行事の「暑寒別岳全校登山」が実現した。登山技術を持った新任のバンカラ教師に、同僚はもとより生徒たちが山への情熱や確さを感じ、絶対の信頼で賛同したのでらう。この全校登山は、以後、閉校になる平成23年まで50年以上続いた。暑寒別岳や群別岳の増毛山地をはじめ北海道の山々に大きな足跡を残した。

増毛高校へは4年間の赴任だった。昭和33年、郷里山梨に戻り新聞記者として再び活躍することになる。戻ってから百瀬舜太郎・岳連会長や三井松男・山梨支部長に信頼され、諸事業

に参加した。昭和35年には増富、金山平に木暮碑が再建されることになり、10月の第1回木暮祭除幕に向けて尽力した。生涯「木暮祭」への思い入れは強かった。しかし、昭和40年ごろから報道の第一線で活躍するようになり記者業は繁忙を極め、ときおり山に登る程度で、山岳界とは少し疎遠になっていった。そのような状況から日本山岳会も昭和45年に退会となってしまった。

報道機関の役員としての知見と誰もが認める山岳文化の第一人者、高室さんを山梨の登山界は放っておかなかった。平成2年10月、皆に請われて山梨県山岳連盟の会長に就任した。卓越した経営手腕はたちどころに問題点を整理し、組織の結集を図った。まさに「新生」山岳連盟の発端となった。

同じころ、永く活動が停滞していた山梨支部も平成2年8月に再構築が図られた。組織は別でも山岳連盟と支部は表裏一体との設立の経緯もあり、高室さんは平成3年4月に、日本山岳会会員(会員番号2890)に復活した。

変化する登山界への対応と山岳県・山梨に相応しい山岳連盟を目指して、次に取り組んだのは全体の底上げだった。本格的な遠征隊を平成5年に中国のアムネマチン峰へ、平成8年にパキスタンのデイラン峰へと相次いで派遣し、支部会員も多数参加した。

忘れてならないのは、高室さん自身が持つネットワークを駆

使して山梨の登山界の地位を上げたことだ。自治体や関係団体と連携を取りながら、山岳行政の効率良い展開を実践した。「やまなし山の日」の事業や高山植物保護活動、山を清掃するクリーン作戦等、積極的に取り組んだ。また、山岳連盟が不得手な山岳文化や山岳環境に関する事業、関連するイベント開催等は支部に展開を任せていった。支部が平成7年から5回にわたって続けてきた、フォーラム「南アルプスの将来像」はその一つだ。結果をまとめて平成9年に支部と岳連で県知事へ「山梨県の山岳環境の将来像について」を提言した。続いて、山や登山の研究、安全登山の普及、山岳文化の継承や研究を目的とした「山岳総合センター」設置も両者で県へ陳情した。センター建設は果たせなかったが、関係機関に大きな刺激を与え、要望どおり県の政策推進室に山岳担当を置くことになり、山岳行政の一本化が進んできた。旧芦安村（現南アルプス市）との連携も深めた。南アルプス北部の山岳拠点の象徴となった南アルプス芦安山岳館（平成15年3月開設）の開設準備、運営に深く関わった。また、平成17年に日本山岳会が『新日本山岳誌』を発刊したとき、山梨関連の山座解説を48座受け持ち執筆もした。登山が歴史、文学、芸術、自然科学等あらゆる分野に広がることを実践して、私たちに山岳文化として残した功績は大きく、その遺産は引き継がれている。

平成15年5月に、13年間にわたって務めた県山岳連盟会長を

惜しまれながら退任して、名誉会長に推挙された。退任2年後に、山梨支部が存在の意義を懸けた事業「第1回山の博覧会」が平成17年10月に開催された。この事業の運営にも深く関わり、その助言は、平成26年の第10回まで継続する大きな後押しとなった。

著書『山と人』を手に取り高室さんとのことを振り返ると、50年以上にわたって、高室さんの大きな傘に守られていたことが数々思い出される。感謝を言う機会もなく逝ってしまい、残念としか言いようがなく悔やまれる。

「高室さん、ありがとう」と、これからも感謝の心を持ち続けて少しでも高室さんに迫り着く努力をしたい。

合掌

（平成30年3月31日『甲斐山岳』第十号Ⅱ改稿）

（略歴）

昭和4年…甲府市高室町に生れる

昭和22年…旧山梨工業専門学校山岳部入会

昭和22年…南嶺会入会

昭和23年…日本山岳会入会

昭和24年…山梨大学山岳会発足に参加

昭和28年…山梨日日新聞社入社

昭和29年…同新聞社退職、北海道立増毛高等学校教諭



はせがわ りょうてん

(1947～2017)

会員番号 6699

長谷川 良典さん

昭和33年…山梨日日新聞社再入社
昭和55年…山梨日日新聞社代表取締役常務
昭和62年…山梨放送代表取締役専務
平成2年…山梨県山岳連盟会長（～平成15年）
平成3年…山梨放送代表取締役社長
平成13年…(社)日本山岳協会副会長（～平成14年）
平成15年…山梨県山岳連盟名誉会長（～平成29年）
平成29年4月17日逝去（享年87）

（内藤順造）

突然、長谷川良典さんの訃報が届いた。私の尊敬する登山家
がまた一人、この世を去った。事故ではないにせよ、まだ早過
ぎるではないか、残念としか言いようがない。私と長谷川さん
との付き合いは、1979年から80年にかけての約10ヶ月間、
日本山岳会チヨモランマ登山隊の偵察隊と本隊にほぼ限られ
る。当時、長谷川さんは間違いなく「明治（大学）のエース」
だった。日本山岳会のエースでもあった。そんな人と大部分の
期間行動をとみにし、その人柄に触れ、多くを学んだことは、
私にとって貴重な財産となった。以来、私は長谷川さんを尊敬
し、それは今も変わらない。その長谷川さんのために、もう何
もできないのは残念だが、せめて当時を思い出すことで追悼の
気持ちを表したい。

日本山岳会は、中国チベット自治区からの登山解禁とともに
チヨモランマ登山の許可を取得し、1979年秋に偵察隊を派
遣することになった。偵察隊長には齋藤惇生さんが選ばれ
た。医師であり、中国語に堪能、AACK（京都大学学士山岳
会）隊のサルトロ・カンリ初登頂者である。隊員は長谷川良典、
高見和成、尾崎隆、磯野剛太。ついては京大からも隊員を1人、
との配慮があったらしく、私も参加できることになった。日本
テレビの中村進、読売新聞の北川敏孝、岡島成行の各氏が加わ
り合計9人。登攀隊員は経験豊富な実力者がそろっていたが、

だれもそんな様子も見せず、ほとんど実績のない初対面の私にも親切で、ほっとした覚えがある。長谷川さんにしても、ナンダ・デヴィの縦走成功をはじめ大変な山歴も自分からは語らず、少し後で知ったくらいである。長谷川さんは年齢は私より1つ上になるが、登山の経験・実力の差は圧倒的であった。また、後で分かるのだが、チベットの仏教はもとより文化や歴史にも詳しく、さらに中国語を学ぼうとする姿勢など、私にはただ感心することばかりであった。

偵察隊は9月15日、北京に到着した。海外登山の経験がある隊員たちも、中国での登山はもちろん初めてである。中国側にしても、外国登山隊の受け入れは初めてに近く、お互いに慣れないため初めのうちは戸惑いもあったが、中国側の、遠来の客をもてなすという姿勢の下、次第に打ち解けていった。

9月26日、ロンブク氷河末端に着き、BCを設けた。標高5150mまで車で入ることができるのは驚くが、道中はかなりの難行であった。本隊では、クラシック・ルートの北東稜と、新ルートの北壁とから登頂を目指すので、偵察も二手に分かれて行なう。北東稜には長谷川、横山、中村、北川の4名が、また北壁には高見、尾崎、磯野、岡島が向かう。中国側は、北東稜には王洪宝、ニマザシ、ロラン、尚子平が、また北壁にも4名が協力員として同行する。

北東稜ルートは、中国隊がすでに2度にわたって登頂を果た

しており、中国側にとってはよく知ったルートである。日本人を案内して行くという姿勢からか、長谷川さんの示した行動計画に中国側から異論が出たが、最後は納得して長谷川案に従うことになった。

ヤクが東ロンブク氷河を6500mのABC予定地点まで荷揚げしてくれる。これにも驚いたが、ネパール側より地形の傾斜が全般に緩いため、このようなアプローチが可能になる。

BCからC1、C2と約500mずつ高度を上げ、高度順化を図りながら6500mのC3に全員がそろったのは10月11日だった。まずは順調と言つてよい。ここまでは、氷河といってほとんどがミディアル・モレーンなど岩屑の上を歩くので、運動靴のまま来てしまいいささか拍子抜けしていた。これからはピッケル・アイゼンの世界になる。

12日、いよいよノース・コルに向かつての偵察とルート工作に出發する。ノース・コルへはおよそ標高差500mの急な氷雪壁。途中に大きなクレバスも見える。6人が3人ずつのザイル・パーティーで登る。ここでも中国側が先導する形で、まず王、ニマザシ、ロランの3人が、固定ロープを張りながら進む。それに長谷川、横山、尚子平が続く。雪面にアイゼンが効き、特に難しさはない。次第に高度を上げていくが、どうもこれまでのルートと違うようだ。右手のチャンツェ寄りの斜面を直上しており、やがてノース・コルへ向かつて上部に見える氷崖の下

を左ヘトラバースぎみに進むように方向を変えた。

そこで長谷川さんが王とルートについて協議しようと、独りで固定ロープをつかみながら先へ進んだ。先行パーティに追いついて、言葉を交わしている。様子を見てみると、どうもルートは変更せずに進むようだ。そこで残った2人は長谷川さんのザックを持って動き出そうとした。ちょうどそのとき、突然、鈍い音を感じたと同時に、雪面が大きく割れて動き出した。雪崩だ！ とつさにピッケルを雪面に刺して自己確保の姿勢をとったが、尚と私の周囲の雪は動かなかった。雪とともに4人が落ちていく。私たちはそれをただ見ていることしかできなかった。下には大きなクレバスがある。その下は平坦な雪面が続き、次第に傾斜が緩くなる。あの雪面まで流れれば助かるのでは、と期待した。雪崩の一部はクレバスに落ち、また一部は下の雪面に流れ、やがて停止した。固定ロープも流されていた。1本がクレバスに引き込まれているように見える。4人はともにクレバスに吸い込まれていったようだ。大変なことが起こってしまった。

ともかく、搜索と救援だ。尚と2人、急ぎクレバスに向かう。尚の確保で横山が下り始めたところ、長谷川さんの姿がクレバスのすぐ下の雪面に見えた。長谷川さんは生きている！ 急いで長谷川さんに近寄ると、意識はあり、呼び掛けに返事をする。鼻血を出し、顔面には打撲の跡があり、背中などの痛みを訴え

る。至急安全な所に移したい。しかし、ほかの3人も探したい。長谷川さんが脱出して来たと思われるあたりを確かめるが、人影も、装備も、また王とロランがアンザイレンしていた黄色いロープも見えない。雪崩の一部はクレバスを越えて下の雪面に達し、デブリが薄く広がっている。見たところ全身が埋まるほどの厚さはなさそうだが、3人の姿は見えない。

可能性はクレバスだ。尚子平とクレバスに戻り搜索するが、手掛かりはない。

C3から雪崩に気づいた中村・北川が救援に来てくれるのが見えた。長谷川さんを2人に託すため、横山が確保して下る。中村に長谷川さんを託したときは、雪崩の発生から1時間半が過ぎていた。長谷川さんは2人に支えられながらC3に向かった。

再びクレバスに戻り搜索するが、手掛かりはなかった。残念ながら搜索をいったん打ち切り、ザックを回収してC3へ帰る。皆は同時に到着した。

長谷川さんをテントに収容し、酸素を毎分3ℓ吸わせるとともに抗生物質を飲ませた。次第に落ち着いて、ぬるま湯を飲んだ。しばらくすると、楽になったので寝るまで酸素は要らない、と言う。茶も飲んだ。寝るときには酸素を毎分0・5ℓにセツトした。BCとは無線が通じないので、中村が連絡役を買って出てくれ、BCに向かう。

翌日、13日になると、長谷川さんはかなり回復して、背中の痛み以外はそれほど問題はないと言う。餅、ミカンの缶詰、茶などをとる。小便が出るのは安心材料だ。驚異的な回復に喜ぶ。

中村が26時間、不眠不休の行動でBCから戻った。医師である齋藤隊長をはじめ皆が救援に来るとのこと、気が楽になる。14日、まずヤク使いが2人、続いて北壁側・中ロンブク氷河から高見・尾崎・磯野が到着。さらにヤクとヤク使いが、齋藤と岡島、曾曙生とカチューが順次到着した。曾と齋藤で協議の結果、3人の生存は絶望的で遺体の収容も困難であり、捜索は現場写真撮影のみとなった。

長谷川さんは、痛みをこらえながらも自力でBCまで歩くことができた。亡くなった3人のためC3にケルンを積み、BCに慰霊の石碑を立て、25日、BCを離れた。

偵察隊は、追悼会や反省会ののち帰国した。日本側は登山の中止も覚悟したが、中国側はこの遭難を教訓として、本隊を成功させようと励ましてくれた。

長谷川さんはクレバスに架かるスノー・ブリッジにたまたま落ちたことが幸いし、自力で脱出できた。重傷を負ったが、生死に関わることはなく、現地でも急速に容態は良くなっていた。帰国後は順調に回復し、翌年の本隊にも参加できることになった。鍛えた身体が物を言ったということだろう。

明けて1980年。私は30名の先発隊の1人として2月22日、日本を発つて、3月5日にはBCに到着した。同じ日、渡辺兵力隊長や長谷川さんを含む本隊9人が日本を発った。3月22日、私は加藤保男さんとともにABCに入った。いやでもあのクレバスが目に入る。クレバスに消える固定ロープもそのまま。クレバスに眠る3人を思い、ぜひとも事故なく登山を終えたいと思う。昨年の高所順化が残っているのか、私の調子は良く、3月25日、山下松司さんと2人、ついに初めてノース・コルに達することができた。責任の一端を果たすことができたようで、嬉しかった。

3月28日、長谷川さんはABCに上がってきた。長谷川さんには、口には出さないが、絶対にこの登山を成功させるという強い意思が感じられた。昨年のケガからも完全に回復し、調子は良さそうで、遅れを取り戻すように大活躍した。私はC4、C5への荷揚げなど、行動をとる日が多かったが、常に冷静沈着、状況を的確に判断し、無理はせず、しかも着実に行動を進めていく姿は、だれもが信頼するものだった。

4月23日、荷揚げが完了し、隊は最後の登頂態勢に入る。26日に頂上アタック時の人員配置を発表。アタック隊の中に、長谷川さんの名前はなかった。心電図の検査で異常が見られたためである。本隊で医療主任を務める齋藤偵察隊長は、1973年、AACKのヤルン・カン隊で登頂隊員の1人を失った経験

を繰り返さないため、非情とも見える診断を下したのだった。長谷川さんはさぞ無念であつたらう。しかし、その気持ちを表には出さず、淡々と受け止めているようだった。私は後半になつて少し膝を痛めた時期もあり、長谷川さんと2人でC5に入るこゝになつた。アタック隊がABCを出る日、長谷川さんは自分で頂上に埋めようと用意してきた王、ニマザシ、ロランら3人の写真を加藤さんに託した。

頂上アタックは、最終的には加藤さんと中村進さんの2人になつた。5月3日、テレビ機材の重さもあり、疲労の激しい中村さんは8750mで登頂を断念する。加藤さんは見事単独登頂を果たしたが、その夜、2人は超高所で離れ離れのビバークとなつた。この夜は、チョモランマとしては稀なこと、ほぼ無風であつた。天気予報係としてアタックの日程変更を進言した私は、ほっとした。

4日、2人はサポート隊の活躍もあり、C6に収容された。5日、我々はC5から2人を出迎えに登る。7800mの中国隊のキャンプ跡を過ぎてしばらく登つた所で、加藤さんが下りてきた。中村さんも、山下・三谷両君とともに下りてきた。ここまで来れば大きな問題はないだらう。私は先にC5に戻つてお茶を沸かして皆を迎えた。ひと休みしてから皆、C4へ下る。この登山が終わろうとしている今、昨年から秋からのことを思った。長谷川さんも同じ思いだったようだ。

「歩きながら去年の10月12日、中村さんに支えられて、うめきながらノースコルの斜面を下つたことをしみじみ思い返した。チョモランマはあの事故に始まつた。そして今最後の下りを下っている。すべて終わった。」と公式報告にある。

C5で過ごした5日間、長谷川さんとの会話は、実のところあまり覚えていない。ふたりとも口数が多い方ではないし、登頂態勢に入っているので、トランシーバーにも注意を払わなければならぬ。北壁の事故もあつた。会話も少なかったのだらう。

はたしてC5のことかどうか、今は定かではないが、「もう一度、身体を作り直して、またヒマラヤに戻つて来たいね」と長谷川さんが言つたのは覚えている。静かな意思表示だった。私も同感、いつかまた、ヒマラヤに登る。

私は数年後にブータンや雲南の機会を得たが、楽しいことも、悲しいことも経験した。一方、長谷川さんはすぐにヒマラヤに戻つて来た。1981年にはエベレスト西稜へ向かつたが、惜しくも登頂はならなかつた。そして1991年には、明治大学チョモランマ登山隊を率いて、ついにチョモランマに戻つて来た。未踏のカンシユン・リッジからの登頂は果たせなかつたが、難ルートに全力で当たり、的確な判断で撤退を決意した、納得のできる登山だったのではないか。

チョモランマから何年かたつて、私は武庫川女子大学（兵庫県西宮市）で教員を務めていた。そこへ明治大学山岳部OBの植村直己さんが講演に来られた。おそらく、植村さんが兵庫県出身であり、日下見学長が山好きであつたことによるのだろう。また、私の上司にあたる安田武教授は、1970年の日本山岳会エベレスト登山隊のヤッケなどの装備を設計した人である。そのヤッケを、植村さんは非常用として常に携行していたという。そのご縁もあつたかもしれない。

講演の後、学長室での懇談に私も呼んでいただいた。植村さんとは初対面になる。植村さんは私を見るなり、「長谷川がお世話になりました」と言われた。これには驚き、また感動を覚えた。ああ、長谷川さんは、こういう人たちのいる明治大学山岳部で育ち、そして、その中核となつて、また後進を育てている。長谷川さんが尊敬すべき登山家である理由の一つがここにある、と得心した。

この文を書くために、公式報告『チョモランマ・チベット』（1981年、講談社）を読み返した。皆が力の限り努力したことがよく分かる。そして、その結果が、4人の友人を失いながらも新ルートを含め3人の登頂であつた。厳しい登山だった。そこに参加できたことは、私にとって得難い経験となつた。ただ、その日々とともに過ごした人たちの幾人もがすでにこの世

になく、そして、長谷川さんもその一人となつたことは、真に残念である。

長谷川さんの葬儀に参列した。山岳関係者以外にも、大勢の人たちが長谷川さんの逝去を惜しんでいた。長谷川さんが社会の広い範囲、様々な場面で活躍し、親しまれ、尊敬されていたことがよく分かる。皆、私と同様に、長谷川さんのことを終生忘れることはないだろう。

〈略歴〉

1947年…東京都足立区に生まれる

1965年…明治大学文学部入学、同時に体育会山岳部に入部

1969年…同大学卒業

1970年…名前を「慈典」から「良典」に改名

1974年…その後、世界的な冒険家となる植村直己さん（5年先輩）とネパール・ヒマラヤに初見参、ダウラ

ギリ山群北面を偵察

1975年…チューレン・ヒマールに未踏の西稜から登頂

1976年…日本山岳会ナンダ・デヴィイ・印合同登山隊に参加、東峰から西峰（主峰）へ世界初の縦走に成功

1977年…ヒマルチュリ東尾根からの登頂を目指したが、頂上を目前にして雪崩事故が発生、断念する

1979年…日本山岳会登山隊としてチョモランマ北面を偵察

するも、雪崩に巻き込まれてクレバスに落下、肋骨を5本折る

1980年…日本山岳会チヨモランマ登山隊に参加、登頂メン
バーの有力候補だったが、直前の健康診断で心電
図に異常が見つかり登頂を断念

1981年…明治大学エベレスト登山隊に参加、西稜からの登
頂を目指したが、頂上直下98mにて涙を飲む

1984年…冬のマッキンリー（現・デナリ）の単独初登頂後
に行方不明となった植村直己さんの第2次捜索隊
に参加、植村さんが頂上に残した日・米国旗を回
収する

1991年…明治大学チヨモランマ登山隊に参加、東壁カン
シユン・リツジからの登頂を目指すも敗退

1994年…父の跡を継ぎ真言宗豊山派・観音寺第29世住職に
就く

2017年…5月19日、逝去

（横山宏太郎）

杉本 誠さん



すぎもと まこと
(1927～2017)
会員番号 10027

杉本誠さんが昨年8月11日に、豊田市の生家で90歳で亡くな
られた。北海道の自宅で知らせを受けたが、お盆と重なったこ
ともあって飛行機のチケットが取れず、私は葬儀に参列できな
かった。お話を聞きに、あるいはお願いに何度もお邪魔した、
懐かしい母屋の仏前にお線香を上げることができたのは、もう
蟬時雨も寂しくなった秋風が立つころだった。

全身全霊で本当に良い仕事をしたら、真っ先に理解して喜ん
でいただけたと考えていた方だった。私は心の大きな支えを
失った。

杉本さんと初めてお会いしたのは1979年、私の故郷・豊橋での「カラコルム五大氷河学術踏査」の報告を兼ねた写真展の会場であった。杉本さんは東京新聞出版局発行の山の専門誌『岳人』の編集長を長く務められたが、このときは名古屋本社に戻られていて、中日新聞の美術記者として来て下さった。『岳人』の連載「日本山岳写真史ノート」などを読んでおり、その名をよく知っていたこともあって、私はかなり緊張して臨んだ。

駅近くの三愛というギャラリーで丁寧に作品を見ていただいた後、場所を移し、年代なども正確に何度も正し、それまで経験したことのない入念な聞き取りを受けた。それは新聞記者らしい、注意深く緻密なインタビューだったことを鮮明に覚えている。取材を終えたその足で近くの市役所に寄って、私が疎開先から戻った年を確かめて名古屋に帰られたことを後から知った。翌日、その記事が紙面を飾ったが、これも今から考えると、私のヒマラヤの写真が一人でも多くの人の目に触れるようにという、特別な温かい配慮であったことに気づく。それから約40年、親しくさせていただき、たくさんのお褒めを受けた。

杉本さんと山との結び付きは、1962年に中日新聞の社会部から『岳人』編集部に移られた後からだと思われる。そこでグラビア・ページを担当され、誰も手を付けていなかった日本の山岳写真史に興味を抱かれた。日本の近代登山の黎明期に活動した高野鷹蔵、志村鳥嶺、武田久吉といった方たちとも直接

に会われ、「日本山岳写真史ノート」の連載を1963年1月号から始められた。その後、時間を置いて1980年1月号から再び「続・日本山岳写真史」を書き続けられ、この2つの原稿が基になって『山の写真と写真家たち』（講談社）が生まれた。

時間を掛け、忍耐強く資料に当たられ、執筆されている。生前、私は杉本さんの自宅にお邪魔した折に見せていただいたが、しっかりと作家別に集められた膨大な量の資料に驚いた。オリジナル・プリントを整理ダンスから本当に慈しむように一枚、一枚取り出して、注意深く大切に扱われていたことが印象深かった。

ここで、オリジナル・プリントに対してどんな考えを持っておられたか少し触れておきたい。

「最も信頼できるのは印画そのものである。いつも目の届くところに置き、ときにルーペで隈なく調べる。そのうち、全体の構図、焦点の位置などが浮かび上がってくるのである。作者の意図、後世への伝言はプリントの中に込められている」（水越武写真展『大地への想い』（東京都写真美術館）カタログより）。

割れやすいガラス板に感光乳剤（臭化銀ゼラチン）を塗ったガラス乾板によって撮影されたものは、杉本さんが引き伸ばしをした時点ですでに70〜80年経過していて、原板の損傷が甚だしく、プリント製作が困難を極めたというお話も伺った。

「想像を絶する不便さの中で先人たちがピントグラスに山を映

してきた歩みを知って欲しかった」(『山の写真と写真家たち』)とも書かれている。このようにして、1985年に畢生の大作ともいえる『山の写真と写真家たち』(講談社)が結実した。

ここでは、主だった山岳写真家と言われる人たちが時代順に取り上げられている。23年間という長い歳月を費やし、様々な考察や深い洞察を試みた力作だが、それは直接インタビューされていることもあってリアリティがあり、文章から作家の体温や感動が伝わってくるようだ。ほとんどの方が故人となった今、本当に貴重な記録となった。「明治から大正の初めにかけて活躍された方々に健在なうちにお会いでき、主として乾板からの密着焼きや引伸しが多かったのは何よりも幸運であった」と述べられている。今からでは不可能なことである。限らない時間と労力を要する面倒な仕事を、最後まで独力で完結させた。この困難な作業に杉本さんを突き動かす力となったものは、山の写真に対する深い理解と愛情であったと私は信じる。

もう一つ、杉本さんのお仕事で忘れてならないものに写真展の企画がある。60歳を過ぎてから国内外で山岳写真の展覧会を企画された。日本の昔の山の写真などを海外に紹介し、外国からも持ち込んで国際交流を進められた。ウォルター・ウェストン、ヴィットリオ・セツラ、フォスコ・マラーニなどである。マラーニ展は京都、豊田など縁のある所で開催された。

私は直々にマラーニさんとお会いする機会があったり、1

993年に出した『HIMALAYA』(講談社)に文章を寄せていただいたこともあった。そこで、マラーニさんが1938年に来日して最初に研究生活をされた北海道大学のある札幌で開催できないかと考え、いろいろな方の力を借りてなんとか実現した。杉本さんはとても喜ばれて北海道まで来て下さり、会場の北海道文学館でマラーニさんについての講演をされた。その後、私は5日間ほど同行し、昔の山岳写真界の話にゆっくり耳を傾けることができた。

杉本さんは、80代を迎えられてからはすべての公務から退かれ、執筆活動からも離れられた。それは見事というほかはなく、大いに学ぶべきことと肝に銘じた。ときたまお訪ねすると、お疲れを案じつつも次々と変わる話題に時間を忘れた。写真や山よりも民俗学に関しての話題が多かったような記憶がある。長く「山村民俗の会」にも所属されていて、『飛騨の民具』(矢来書院、1977年)などの著書もある。

私は27歳を過ぎてから写真の道に入ったこともあって、『山の写真と写真家たち』に登場してくる先輩の多くの方々は世を去り、面識がなかった。長谷川伝次郎、冠松次郎、船越好文などといった、戦前に良い仕事をされ活躍された方は、杉本さんによつて初めて知ることができた。

どんな道にしろ、志を持って夢を追求する実作者は、確かなその道の歴史観が求められる。ゼロから突然生まれる創造は少



ひらい ごう
(1931～2017)

会員番号 6078

平位 剛さん

なく、写真で最も大切な視点に関しても、模倣や継承の上に生まれるものが多いと思われる。先人の歩みをたどることで、そこから新たな可能性を見付け出し、これから進むべき道が見えてくる。その手掛かりとなるものを、『山の写真と写真家たち』で杉本さんが遺して下さった。その恩恵は計り知れない。

〈略年譜〉は「杉本誠と山岳写真」(財津達弥)を参照。

(水越 武)

私(土石川)が先生と最初に登山したのは50年前のことです。私は学生で山岳部に入部し、先生は広島大学で医師として活躍されていた時期です。冬の大山を登り、元谷でラッセルの訓練、中野原でスキーをした記憶があります。その後、パミールとチトラールの遠征に3度連れて行ってもらいました。

1969年、広島大学医学部山学会小バミール遠征隊は、シェール・コー(6392m)に登頂します。先生は前年2月にアフガニスタンに行き、政府高官との知遇を得てワハンの入域許可を得ました。69年6月に日本を出発し、パキスタン経由でアフガニスタンのカーブルに到着。7月に隊員4名でカーブルをトラックで出発し、イシユカシムからワハンに入り、イシユムルグ谷を南に詰めました。7月27日、4550mのモレーン上にBCを設営。31日に3人でBCを出発し、北面からC1、C2を設営し、5000mからアタックを開始します。氷雪の棚、氷壁、稜線を進み、8月5日にパキスタンとの国境の頂上に立ちました。

翌日、下山途中で滑落し、ザイルで3人とも棚状の雪面で停止。8日、ようやくBCにたどり着きました。当時はインターネットのない時代で、JACの機関誌『山岳』やヒンドウークシユ・カラコルム会議などで情報を得ていました。そのヒンドウークシユ・カラコルム会議は約2日間の日程で、泊まり込みで開催されていました。1970年、第1回磐梯高原、そし

て盛岡、大垣、蒲郡、横浜に先生と出席しました。

1971年の広島大学医学部山学会パミール遠征隊は、セラ・ワハンのコー・イ・ハーン（6020m）に初登頂しました。前回同様にクンドウーズまではトラックで、その後は馬・ロバによるキャラバンで、ワハンの中央部に位置するイシツクに着きます。7月6日、イシツク谷に向け出発し、その氷河（のちに「広島氷河」と名付けられた）伝いに進み、雪や氷の斜面を登って18日、5名で頂上に立ちました。北には大パミールの山々が見渡せました。セルセラ・ワハン山塊に入り、登山したのは我々が最初です。

ワハンはパミールとヒンドゥー・クシユ山脈の間の、アフガニスタンの北東端から盲腸のように東に延びる高所渓谷地帯です。玄関口のイシユカシユムから東西300km、南北15～65kmで、北はタジキスタン、南はパキスタン、東は中国に囲まれています。1800年代、露英の国境問題が起き、ワハンはその緩衝地帯となります。1979年、ソ連軍のアフガニスタン侵攻と、その後、タリバーンによるテロが続き、ますます入域が困難となりました。2回の遠征後、ワハン登山の交渉ルートを失い、アフガニスタンは遠くなりました。第6回ヒンドゥークシユ・カラコルム会議で招待したブルハーン・ウディーン殿下（旧チトラール王国の高官）のご助力により、ワハンの南に位置するチトラールでの登山活動ができるようになりました。

1976年、広島大学医学部山学会チトラール北西探踏隊は、シャ・ヤーズを目指しました。パキスタンのチトラールを7月6日、3名でトラックにて出発し、馬に乗り、氷河の途中にBC（5460m）を設営。氷河を進み、氷壁を登り、稜線に出ましたが、やせてもろい岩稜が立ちはだかり、高度5800mで登高を断念しました。

さらに1979年、広島大学医学部山学会チトラール北西探踏隊は、シャ・ヤーズに3名で再挑戦しましたが、同じく高度5800mで登山を中止しました。

以後、山学会での登山活動はなく、先生はカラツシユ谷、チトラール北部のダルコット峠周辺のトレッキングを約10回行ないました。そして、ブルハーン殿下、北部同盟指導者のマスード司令官などの庇護により、1998年、バロギール峠から初めてパミールでの単独踏査が始まりました。1999、2000、2001年と、3年続けてパミール踏査を行ないました。これまでのワハン登山、チトラール北部ダルコット峠紀行、パミール踏査をまとめて、03年に『禁断のアフガニスタンパミール紀行』を発刊、04年に秩父宮記念山岳賞、05年に中国文化賞を受賞しました。

その後もパミール踏査を続け、2015年、『ワハン回廊』を刊行します。2度のワハン登山と2011年まで計11回のパミール踏査で、ワハン全域を踏査した記録写真真集です。

アフガニスタンの首都カーブルからワハンの西玄関口のイシユカシムを経由し、オクサス河合流点まではトラックで入ります。1969年にその頂を踏んだ東部ヒンドゥー・クシユ山脈のシェール・コーを南に眺め、そしてパミール河を遡ります。先生が学生時代、最初にパミールという知識が加わったと書かれている、ゴードン著『世界の屋根』にあるスケッチに描かれたカラ・イ・パンジャの城址を経由して、1971年に初登頂したワハン山脈のコーイ・ハーンに達します。

高仙芝の連雲堡趾、監視塔址を訪れ、さらに東にワフジールと小パミールでのキルギス人の放牧地と、そこから中国国境を展望しています。ワハン山脈の峠を越え、大パミールでは夏でも雪の降るビクトリア湖の全貌を踏破して、玄奘とマルコポーロの足取りを推察しています。東部ヒンドゥー・クシユ山脈の7峠、大・小パミールを結ぶワハン山脈越えの5峠、中国へ向かう2峠を踏んでいます。その間、キルギス人の放牧地の季節別居住地、男女の服装、靴、乗り物、家畜、機織り、フェルト作り、ユルトの内部、チーズ作りなど、住民との信頼・交流がなければ撮れない写真がふんだんに載っているのです。

2000年に、私は福山記念病院に転勤しました。すでに先生は同病院に勤務されており、診療科は異なりますが、一緒に働くことになりました。先生の患者に対する診察姿勢、患者やその家族に説明する言葉遣いなど、私は診療姿勢を深く反省し

ました。病院に泊まり込むことも多く、ほぼ毎年ワハン、パミールに行き、帰国すると翌日には病院で仕事を始められていました。先生の活力には脱帽でした。卓抜した記憶力と知識、冷静な判断力により、ワハン登山やパミール踏査に成功されたと思います。

2017年8月24日、その先生が亡くなりました。発病から2年半、毎日の奥さんの介護のいかにもなく、意識の改善が見られないまま、静かに息を引き取られました。私にとっては、登山のすばらしさを体験させていただき、また、医師としての基本を教えて下さいました。先生に感謝して、ご冥福をお祈り申し上げます。

〈略歴〉

1931年…広島市に生まれる

1957年…広島大学医学部医学科卒、産婦人科医。広島大学医学部助教授、広島女子大学教授などを経て

1997年…広島市安佐市民病院院長を定年退職、福山記念病院勤務

広島大学医学部在学中に医学部山岳部に入部、北アルプスを中心に四季にわたり登山を始める。

1967年…広島大学ヒンズークシユ遠征隊員
1969年…広島大学医学部山学会小パミール遠征隊長

1971年…広島大学医学部山学会パミール遠征隊長

1976年…広島大学医学部山学会チトラール北西探踏隊長

1979年…広島大学医学部山学会チトラール北西探踏隊長

その後、チトラール周辺、北部山岳地帯を十数回トレッキング

1998年…パロギール峠からワハン入域

1999～2001年…3年間、アフガニスタン・パミールを

踏査

2004年、05年、06年、07年、09年、10年、11年…ワハンを

踏査

〈著書〉

『禁断のアフガーニスタン・パミール紀行』（2003年、ナカニシヤ出版）

『ワハン回廊』（2015年、霞ケ関出版）

（土石川勝司）

田中 壯佑さん



たなか そうきち

(1940～2017)

会員番号 7968

我々がそれを知ったのは昨平成29年の春先である。治療に専念するので病院も老人保健施設長も辞める、日本山岳会の群馬支部長も退任したい、と伝えてきたという。夏ごろ、私は田中さんに元気を出してもらおうと思い、根井事務局長に「田中さんは暇ではないだろうか、支部報の編集でもしてもらっては？」などと言っていた矢先に訃報が届く。

「覚悟の人だった」と高崎市倉渕町の東善寺の村上泰賢住職は言う。寺へ奥さんと赴いたのは2月ごろだったというから、胃癌の発見直後か。「私は生きる覚悟をしたい」と言い、「宏岳院

医燈壯光居士」の戒名を付けてもらい、葬儀の相談までし、墓石を建て開眼までしたという。

ちなみに泰賢住職は群馬県高体連登山部の元委員長で1980年の夏休みに、自ら群馬県内の高校登山部顧問を隊長としたインドのシャルミリ(6096m)峰を初登頂したときの隊長である。東善寺は幕末の重臣で官軍に処刑(斬首)された小栗上野介忠順の菩提寺である。小栗は幕末に外国奉行、勘定奉行、陸軍奉行、軍艦奉行、海軍奉行などを歴任した江戸幕府の重臣であり、横須賀造船所の生みの親でもある。また、赤城山などの埋蔵金伝説の主としても知られる。

亡くなる数日前の9月1日には、「山の空気が吸いたい」と言って赤城山へ行き、車からは降りなかったが、冷気を吸って帰ってきたという。前橋生まれの山好きとしては、赤城山が「近くて良い山、ふるさとの山」だったであろう。

今から50年も昔、私は5月の連休に八ヶ岳の全山縦走をして前橋駅へ着き、バスを待っていた。そのとき特大のキスリングを背負って自転車で帰る田中さんと会う。鵬翔山岳会の合宿帰りだったと思う。

田中さんと一緒の山は1972年春、群馬県山岳連盟のダウラギリIV峰(7661m)だった。田中さんは1年前の71年にマナスル西壁を経験していて、我が隊唯一人の8000m峰経

験者だった。群馬初の鳴り物入りヒマラヤ登山も、松井高重郎さんの高山病死などで登山は失敗に終わった。医師としての田中さんには辛い思いをさせてしまった。登山隊の報告書には、田中ドクターによる克明な検証がされていた。

同時期に韓国のマナスル隊で、登山中の鵬翔山岳会の先輩・安久一成さんが雪崩遭難死する。田中さんはC1のテントで、声を上げて泣いた。休養でBCへ下りたとき、田中さんは独りでBC横の大岩に、安久さんの慰霊文を大きく彫った。

2008年秋、2度目の雪男捜索隊で、私は71年以来6度目のコーナボン・コーラBCを訪問したが、その岩が見付からない。ツタや背丈の高い草が大岩を覆い隠していたのだ。私はツタを切り、草を刈ってきれいに掃除した岩の写真を田中さんに送った。丁寧な礼状がすぐに届いた。

安久さんは国内でたくさんの登攀記録を有し、1962(昭和37)年春、全日本山岳連盟隊でレンボ・ガン(6979m、ビッグ・ホワイト・ピーク)初登頂、東京オリンピックのあった1964(昭和39)年春、全日本山岳連盟(当時の長野岳連)隊でギャチュン・カン(7952m)初登頂、1970(昭和45)年春、三浦雄一郎さんのエベレスト・スキー隊にも主力メンバーとして参加していた、日本有数の登山家であった。

73年秋の第Ⅱ次RCCエベレスト南壁隊では、南壁攻略のス

ピードが鈍り始めたところ、東南稜隊の登攀リーダーに指名される。10月中旬の強風、地吹雪、シエルパの雪崩遭難による進捗の停滞、無力感は隊員を弱気にさせ、諦めムードも漂う。南壁が駄目なら、少しでも可能性がある東南稜から誰か頂上に立つてほしい、と登攀リーダーとしては思う。

当時、エベレストの秋季登頂は成されていなかった。鵬翔山岳会の後輩・石黒久と、のちに秋、春、冬のエベレスト三冠王となる加藤保男が登頂に成功するが、アタックに出るとすぐに連絡が途絶え、翌朝になるまで登頂の成否も、2人の生死さえも分からなかった。

南峰基部でビバークし、足に凍傷を負った加藤たちがC2に生還したときの田中さんの、涙が凍ったくしゃくしゃの写真の顔は忘れられない。その加藤が82年12月、冬のエベレストに登頂して三冠王達成後、ヒラリー・ステップの下で待っていた小林利明とビバークしたまま帰らなかったが、小林も鵬翔山岳会の後輩であった。

80年5月2日、日本山岳会のチョモランマ北東稜、北壁登山隊で、北壁の第1次アタック隊が8500mまで登るも時間切れで断念、引き返す。同日、C4からC5（最終キャンプ）へ移動中の小林利明と宇部明が7900m付近で雪崩に遭い、宇部が転落死亡するが、宇部も鵬翔山岳会上越支部の後輩である。厳しく、激しい時代であった。

私は81年春、カンチエンジュンガで両足に凍傷を負い帰国。田中さんに電話をすると、長野の佐久総合病院へ来いという。脳外科病棟に入院させられ、診察は外科医が出張。朝夕ご飯をお代わりするほど丈夫な凍傷患者に外泊許可を出し、自分の家に泊めて奥さんの手料理で一杯飲ませ、翌朝、一緒に病院へ戻る。ほかの患者がうらやむ、優雅な入院生活だった。

2013（平成25）年、日本山岳会の群馬支部設立を断わり切れなくなり、支部長就任のお願いに藤岡の老人保健施設へ田中さんを訪ねる。しばらく山へ行っていないので駄目だ、と言う。「お孫さんと山へ行く理由もできるではないですか」と攻める。洪々引き受けてくれたが、条件は「八木原君が事務局長をやるなら」だった。私も洪々引き受けて、支部は無事にスタートした。施設長室にはマナスル（71年、78年）やエベレスト（73年）などの写真が掛けられていた。

田中さんの告別式当日、式場へ入ると自ら選び製作した中学時代の兄弟4人の谷川岳登山から高校山岳部、社会人山岳会、4度のヒマラヤ登山、家族登山がスライド・ショーとして流されている。最後には感謝の言葉まで添えられていた。告知を受けてから始めた、最後の仕事だったという。

私などには、末期癌を宣告され、生きられる日にちの数を知った人の、特に医師という職業を持つ人の心の内を察しようもないが、田中さんは家族にさえ痛さ苦しさを訴えることもなく

逝ったという。医師としての矜持か。見事な覚悟の上の人生の締めくくりであった。

〈略歴〉

昭和15 (1940) 年.. 8月7日、群馬県前橋市に生まれる
 昭和29 (1954) 年.. 谷川岳登山(中学3年生、兄弟4人で)
 昭和31 (1956) 年.. 前橋高等学校入学、山岳部へ入部
 昭和38 (1963) 年.. 鵬翔山岳会入会
 昭和44 (1969) 年.. 群馬大学医学部卒業。八海山西面・屏風岩壁初登
 昭和46 (1971) 年.. 春、マナスル(東京都山岳連盟隊、第2登、西壁(北西稜))日本スポーツ賞受賞
 昭和47 (1972) 年.. 春、ダウラギリIV峰(群馬県山岳連盟隊、南面およびグルジャ・ヒマール南東稜)
 昭和48 (1973) 年.. 秋、エベレスト(第Ⅱ次RCC隊、登攀リーダー、秋季初登頂)
 昭和50 (1975) 年.. 日本山岳会入会(紹介者「原真、浅見正夫、会員番号7968」)
 昭和53 (1978) 年.. 秋、マナスル(イエティ同人オリンピック登山隊、アルパイン・スタイル、日

本初の冠登山隊

昭和54 (1979) 年.. 佐久総合病院(脳神経外科医長)
 昭和56 (1981) 年.. 日本登山医学研究会設立に参画
 昭和62 (1987) 年.. 日本体育協会(2018年4月より日本スポーツ協会)公認スポーツ・ドクター
 昭和63 (1988) 年.. 第8回日本登山医学シンポジウム(会長、群馬県みなかみ町で開催)
 平成9 (1997) 年.. 日本山岳協会医科学委員会常任委員
 平成14 (2002) 年.. 公立藤岡総合病院付属外来センター(センター長を5年間)
 平成15 (2003) 年.. 公認スポーツ指導者表彰(日本体育協会)
 平成19 (2007) 年.. 公立藤岡総合病院 介護老人保健施設しらさぎの里(施設長を10年間)
 平成22 (2010) 年.. 日本登山医学会功労賞受賞
 平成25 (2013) 年.. 公益社団法人日本山岳会群馬支部長(2期4年間)
 平成29 (2017) 年.. 9月4日、病没。享年77

(八木原図明)

宮本 数男さん



みやもと かずお
(1929~2017)
会員番号 10622

宮本数男さんは2017（平成27）年10月12日、ご逝去されました、享年88でした。宮本さんは1929（昭和4）年大阪に生まれ、幼少時に父の故郷である福井に移住されました。1945年、終戦のとき、石川県境の刈安山に登り、心の癒しと日本海に沈む夕日に感動し、以来、山登りを続けておられたと聞きました。

1950年に福井山岳会へ入会。劔岳や白山と周辺の山々で岩登りや冬山の経験を積みました。1961年には、深田久弥氏を荒島岳へ案内されています。作家の立松和平氏が『岳人』

に連載中の「日本百霊山」では、泰澄大師の開山とされる白山、越知山の現地取材に案内役をされました。

1971年、福井県初の海外遠征登山であるマッキンリー（現・デナリ）の登攀隊長として、すべての事柄にリーダー・シッブを発揮されました。県知事、教育委員会、県体協、テレビ、新聞等へ協力と後援を依頼。参加隊員の属する職場に対しても依頼状の発送や直接訪問。費用は県岳連加盟団体や参加隊員所属団体、所属会員から協力を得、さらに県内の多くの民間会社、各市町村からの好意で募金も集まりました。そして、富士山2月合宿、劔岳小窓・早月尾根合宿やスキー・トレーニングと、多忙の極みでした。参加隊員の一人として準備から遠征の間、この場では表わせないほど多くの事柄で大変お世話になりました。このとき、長年勤務された福井県庁の要職を辞され、建設設計事務所を設立されました。

その後、福井山岳会会長を35年、福井山岳連盟会長を11年歴任。1987年には山岳同好会福井くろゆりクラブを設立されました。

日本山岳会へは福井岳連の会長時代の1990年、当時の富山岳連会長・藤平正夫氏に勧められ入会。その翌年の9月、立山の全国支部懇談会で、そのとき副会長であった松田雄一氏から福井支部設立を要請され、1991年11月に40名の会員で福井支部を設立、事務局長に就任。2000年から支部長を務め

られ、2011年、支部創立20周年を期に退任されました。

国内外の山に多く登られています。日本百名山、北陸百名、日本三百名山を完登。日本山岳会のアルパイン・スキークラブ代表もされました。海外ではマッキンリーの後、1988年からカナディアン・ロッキー、キナバル山、台湾の中霸尖山や玉山、雪山、キリマンジャロ、アコンカグア、エベレスト・トレッキング、ヨーロッパ・アルプスの山岳スキー・オートルートなど。1999年からはチベットの6000m級の未踏峰に興味を持たれ、チュングローズ峰、中国甘肅省大雪山群無名峰、ラーン峰、ヤーチー峰、ロンズラ峰、チュンガチュンシャン峰、ジャナリズ峰、クーラカンリ山群無名峰、モンタカンリ第Ⅲ峰、ダカンリ峰に挑戦。

2005年のジャナリズ峰は日本山岳会創立百周年事業として福井支部から6名が参加、主体となって登頂しました。2010年のダカンリ峰のときは、宮本さんは81歳でした。標高5700mまで登られたところで時間切れとなり、断念されました。中国登山協会から入山許可を取って活動していたのですが、突然、中国の軍隊が実弾演習を開始し、下山させられたのです。活動期間が4日間短くなり、参加者14人を班分けして、順次アタック開始、6人が登頂しました。もう1日か2日あれば、天気も良かったので多くの登頂者が出たと思いましたが（故三田村さんのピッケルは、マッキンリー登山で同じ班であった

田路が頂上に立ててきました）。

日本山岳会創立百周年事業として「中央分水嶺踏査」が実施されましたが、無雪期には道がない所は積雪時に実施しました。一例として、岐阜県境の油坂峠―白本―滝波山―美濃平家を、重いテントと食糧を持って参加、久しぶりのテント泊を楽しめました。

1996年には長年の自然保護活動、登山の普及活動などに対して藍綬褒章を、1999年には福井新聞社文化賞を受賞されました。特に自然環境保護には力を注がれていました。長年続けてきた南越前町夜叉ヶ池の絶滅危惧種「ヤシヤゲンゴロウ」の保護活動や、白山国立公園三ノ峰・赤兎山登山道の草刈り作業、里山「泰澄の森づくり」を始められ、これらは引き継ぎ実施されています。

なかでも「泰澄の森づくり」は、古くから人間が関わるなかで保全・形成されてきた里山の再生を目指しています。トンボやカエル・ホタルなどの生息地である里山の緑と水辺など身近な自然が広がる地域において、自然環境を保全するとともに、自然と調和した人間活動の体験を通して自然の仕組みを理解する自然教育の場として、さらには自然と人間との関係を見詰める直す場としての整備活動を、地域の特性に応じて実践されました。クリ、クヌギ、コナラなどの落葉樹の植樹、下草刈り、遊歩道の整備、ガマの駆除、シイタケ櫓木作り、花壇の整備など、

宮本さんの遺志を受け継いで福井支部が継続しています。

登山の普及活動としては白山の親子登山、白山開山の泰澄大師修行された越知山への泰澄トレイルと泰澄祭の実施を企画され、泰澄トレイルと泰澄祭は今なお継続されています。また、福井県の歴史や故郷の山々に精通しておられました。分県登山ガイド『福井県の山』初版・改訂版や、新聞・山の記事の連載など福井県内の山に関する著作も多く、2016年に出版された『ふるさと福井の山』が最後になりました。これらは今も多くの人々に読まれています。

「山に登るのは努力の一步、人生を開くのも努力の一步」を座右の銘として、そして、人生を15年周期で送りたいと思っておられました。生まれてからの15年間は感性を育てるとき、その後の30歳まではいろいろなものにチャレンジし、自分の才能を見出すとき、45歳まではその才能に磨きをかけるとき、60歳までは若い人たちを育て、理想に向かって努力するとき、75歳までは今までの経験を活かして人生を送るときと定め、実践されていきました。冒険心や未知へ挑む心を最後まで持ち続け、福井県山岳連盟、加盟団体各会をはじめ県内岳人、山を志す人々に夢と感動を与えていただきました。晩年には、日本の秘湯巡りのついでに山旅をするのだと、秘湯のスタンプを集めながら山旅をされておられました。

福井県の登山界、日本山岳会福井支部の発展にご尽力いただき

いたことに深く感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(田路繁男)

大久保 春美さん



おおくぼ はるみ
(1949～2018)
会員番号 7249

2018年1月3日、大久保春美さん(旧姓清水さん)が亡くなりました。享年68、ご家族はもちろんですが、友人にとっても早過ぎるお別れでありました。

私が清水春美さんに初めて会ったのは1980年3月、場所は代々木の国立競技場でした。日本山岳会の日印合同女子登山隊に医師として参加することになった私が13年間、山から遠ざ

かつていたことを知った高本隊長と清水副隊長が、ユマールの使い方をレクチャーするために競技場の外階段を使わせてもらう特別の許可を取ったのでありましょう。

日本山岳会では1968年より日印合同女子登山隊を送り出しており、春美さんは1976年、カメット（7756m）を目指す第2回日印合同登山隊の隊員として参加、さらに1980年の第3回日印合同登山隊の副隊長として参加、ケダルナート・ドーム（6831m）に登頂し、C4直下から4700mのドーム基部までのスキー滑降を行なって、かねてよりの夢を実現させています。

登山隊の常として、山が終わると全員が集まることは難しいのですが、女性の場合は結婚して、仕事も続けて、育児もとなると山はますます遠くなってしまう。春美さんは神奈川県立のリハビリテーション・センターに勤務していましたが、埼玉県立総合リハビリテーション・センター設立準備の段階で埼玉県に採用され、結婚、出産、育児を行ないつつ仕事を両立させていたものと思われまします。

ケダルナートの山仲間、隊長であった高本信子さんが事故で早世したため、その母上に会の集まりには声を掛けて、山の思い出話を共有していただくようにしてありました。このようなことは婦人懇談会の理事で、登山隊を送り出すことに尽力された山口節子先輩の配慮によるところが大きく、隊員であった

インド女性来日の際は、春美さんはじめ全員が再会を楽しみました。

インドの登山では、聖地ガンゴトリへのキャラバン中、その日のロッジに着くと春美さんが2人1組のペアを、あみだくじで決めていたことも懐かしい思い出です。集団生活では、このようにたわいもないことがチームワークづくりに役に立つことを、彼女はよく知っていました。

日本山岳会では、「山の日」制定を実現させようとするプロジェクト・チームを理事会で立ち上げましたが、たまたま理事会のメンバーの一員であった私も、微力ながら名前を連ねていました。国民の祝日として決定した後もプロジェクト・チームは「山の日事業委員会」として存続することが決まり、執行部でこの委員会担当となったのが大久保春美副会長でしたので、顔を合わせる機会が多くなりました。そんな委員会の帰り道、おりしも大型連休が始まるころに、誘われて大久保家の佐久の山荘にお邪魔することになりました。ご家族が山荘に集まるのは連休後半の由にて、その前に2人で浅間山が見える山に登ろう、ということになりました。「雪山讃歌」発祥の地として有名な、麓の旧鹿沢温泉の登山口に車をデポして、角間峠から浅間山を眺めながら1981mの角間山へ。このとき私は、リタイアしてからは誕生日に人間ドックを受けることにしている、と

話して彼女にも勧めました。なぜこのようなことを言ったか覚えていませんが、春美さんの食欲がいまひとつであったからのような気がします。

翌日私は横浜に戻りましたが、春美さんは楽しみにしていた畑仕事に取り掛かって、今ごろは耕耘機相手にいい汗をかいていることだろうと自分に言い聞かせていました。ところが、「連休明けに受診し、腹部の腫瘍でステージⅣと宣告され、その足で自宅に近いホスピスを予約しました」と衝撃的な電話を受け、言葉を失いました。

「障がい者スポーツ」と口で言っても、障がい者に寄り添ってスポーツの楽しさを知ってもらおうとすると、容易なことではありません。たとえば、私はスポーツ・ドクターの資格を持っていますが、障がい者スポーツ・ドクターの資格は持っていないので、指導士はおろか、医師として接することもできません。春美さんは障がい者に対するスポーツのコーチあるいは指導士としての訓練を受けて、コーチ、指導士として関わりを深めたいき、選手団の団長にもなったわけで、これは大変なことであると言えます。

春美さんは埼玉県立総合リハビリテーション・センターの設立当初より埼玉県に採用され、県の組織の改変もあったかと思われれますが、後年は福祉局健康増進担当部長として活躍され、

2009年3月末日にリタイアされています。そして、現場での活動に止まらず、委員長として「障がい者のスポーツ環境づくりガイドライン」策定のための調査研究事業を行ない、ガイドラインとしてまとめています。このガイドラインは、広く障がい者のスポーツ環境づくりに役立っているということです。

余命宣告を受けてから、ご家族や主治医と話し合ってスベインの旅を実現させたことも春美さんらしい、すばらしいことですし、ご夫君の春美さんへの信頼度が大きいことも、素敵です。ご夫君の「恵まれた人生であった」との回顧のお言葉を、謹んでお伝えします。

〈略歴〉

1949年…東京都八王子市に生まれる

1971年…東京女子体育大学を卒業、同大学山岳部OG。日本山岳会入会、紹介者は川上忠義、吉澤一郎両氏。会員番号7249

1976年…第2回日印合同女子ヒマラヤ登山隊に参加。隊はカメット(7756m)の7400mまで到達後転進、アビ・ガミン(7355m)に登頂

1980年…第3回日印合同女子ガルワール・ヒマラヤ登山隊に副隊長として参加、ケダルナート・ドーム(6

831m)に登頂

2008年…北京パラリンピック日本選手団団長

2009年…福祉局健康増進担当部長を最後に埼玉県を定年退職

2010年…広島2010アジア・パラ競技大会日本選手団団

長

2013～15年…日本山岳会埼玉支部長

2016～17年…日本山岳会副会長

そのほか日本障がい者スポーツ協会理事、埼玉県障害者スポーツ協会副会長、富士見市教育委員などを務める

(堀井昌子)

会 務 報 告

2017年(平成29年) 4月～2018年(平成30年) 3月

(◎総会 □理事会 ◇人事 ☆事業)

◇2017年度役員・評議員・支部長

会 長 小林政志

副 会 長 重廣恒夫、野澤誠司、中山茂樹

常務理事 神長幹雄、永田弘太郎、谷内 剛、古川研吾

理 事 大久保春美、安井康夫、清登緑郎、斎藤 繁、星 征雅、
近藤雅幸、波多野あをい

監 事 平井拓雄、石川一樹

委員会の担当理事

【総務】谷内

【デジタルメディア】永田

【改革事業推進】小林

【財務】古川

【資料映像】神長

【山岳編集】神長

【会報編集】神長

【国際】神長

【図書】神長、近藤

【自然保護】近藤

【支部事業】重廣

【記念事業】重廣

【遭難対策】中山

【山行】清登

【「山の日」事業】清登

【科学】斎藤

【YOUTH CLUB】野澤、中山、星、波多野、古川

【医療】斎藤

【山岳研究所】安井

【家族登山普及】波多野

評 議 員 成川隆顕、橋本 清、今村千秋、吉川正幸、西村政晃、

黒川 恵、高原三平、坂井広志、高野 剛、野口いづみ、

古野 淳、佐野忠則、萩原浩司、新井 梓

支 部 長 (北海道) 西山泰正・(青森) 中村 勉・(岩手) 阿部陽

子・(宮城) 富塚和衛・(秋田) 今野昌雄・(山形) 野堀嘉

裕・(福島) 小林正彦・(茨城) 浅野勝己・(栃木) 渡邊雄

二・(群馬) 北原秀介・(埼玉) 松本敏夫・(千葉) 三木雄

三・(東京多摩) 竹中 彰・(神奈川) 込田伸夫・(越後) 遠藤家之進正和・(富山) 山田信明・(石川) 中川博人・(福井) 森田信人・(山梨) 深沢健三・(信濃) 塚原賢勝・(岐阜) 高木基揚・(静岡) 有元利通・(東海) 高橋玲司・(京都・滋賀) 松下征文・(関西) 金井良碩・(山陰) 中井俊一・(広島) 八幡 浩・(四国) 尾野益大・(福岡) 高木莊輔・(北九州) 関口興洋・(熊本) 松本莞爾・(東九州) 加藤英彦・(宮崎) 荒武八起

□平成29年度第1回(4月度)理事会議事録

日時 平成29年4月12日(水)19時00分～21時00分

場所 集会室

出席者 小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・谷内各理事、平井・重廣監事

欠席者 勝山・星理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 次期(平成29～30年度)役員人事(理事・監事)について

以下の会員を次期理事・監事候補者とするについて審議した。

理事《再任》大久保春美(7249)、小林政志(7915)、

神長幹雄(9722)、中山茂樹(11319)、星征雅(14837)、谷内剛(14951)、《新任》重廣恒夫(7931)、安井康夫(8494)、清登緑郎(8612)、野澤誠司(9863)、永田弘太郎(12319)、斎藤繁(14143)、近藤雅幸(14972)、波多野あをい(15208)、古川研吾(15888) 監事《再任》平井拓雄(7292)、《新任》石川一樹(11022) (賛成13名、反対なしで承認)

2. 支部長の交代(宮城・広島)について

申請のあった以下の支部長交代について審議した。宮城支部新支部長・富塚和衛(14612)、広島支部 新支部長・八幡浩(7091) (賛成13名、反対なしで承認)

3. 高額寄付の受入承認について

東海支部からの高額寄付事前申請および高尾の森づくりの会からの高額寄付受付報告について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

4. 平成29年度特別事業補助金について

東海支部、四国支部、越後支部、関西支部、栃木支部、山形支部に対する平成29年度特別事業補助金について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

5. 再生委員会の廃止について

日本山岳会再生委員会を6月の現理事会任期満了をもって解散し、来期以降に事業推進組織を新設することについて審議した。

(賛成13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 平成28年度事業報告書(案) について(佐藤)
平成28年度事業報告書(案) について協議した。
2. 広島支部の「富士山における滑落死亡事故」等について(佐藤)
平成28年11月20日(日)に発生した広島支部「富士山における滑落死亡事故」について、その後の状況の確認と当会の対応について協議した。

【報告事項】

1. 3月受付分の入会希望者43名(うち復活3名) および準会員入会希望者29名について入会承認を行なったとの報告があった。
(小林)
2. 7件の寄付金および1件の募金受入れ、1件の募金開始についての報告があった。(吉川)
3. 熊本支部設立60周年に伴う寄付金の募集開始の申請について報告があった。(吉川)
4. 「公益社団法人日本山岳協会」の名称が、平成29年4月1日より「公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会」となったとの報告があった。(佐藤)
5. 第2回全国「山の日」フォーラムからの後援名義の使用申請について、これを承認したとの報告があった。(佐藤)
6. 第5回小島烏水祭・全国支部懇談会(茨城支部)への助成金につ

いて報告があった。(吉川)

7. 4月18日(火)に開催される「平成29年度第1回評議員懇談会」の開催について報告があった。(佐藤)
8. 2月14日～3月29日の間に行なわれた各委員会に対するヒアリングの結果について報告があった。(大久保)
9. YOUTH CLUBの組織改編について報告があった。(山田)
10. YOUTH CLUBの組織改編に伴う「沢登り同好会」の解散について報告があった。(佐藤)
11. 同好会「里山歴史研究会」の設立について報告があった。(佐藤)
12. 第11回日中韓3国学生交流登山の開催概要について報告があった。(佐藤)
13. 関西支部「東ネパール登山隊2016」の仮報告書について報告があった。(佐藤)
14. 「上高地山岳研究所ミニ水力発電」の長野県1村1自然エネルギープロジェクトへの登録について報告があった。(大槻)
15. 7月9日(日)～10日(月)に開催される「2017年度自然保護全国集会」について報告があった。(山田)
16. 外務省の渡航中止勧告地域への山行委員会主催海外登山の対応状況について報告があった。(大久保・佐藤)
17. 日本極地研究振興会からの新規会員紹介と寄付の依頼について報告があった。(佐藤)
18. 6月23日(金)～25日(日)に開催される平成29年度安全登山普及指導者

中央研修会について報告があった。(佐藤)

19. 「安全登山ハンドブック2017」の配布について報告があった。

(佐藤)

20. 「山」4月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1. 群馬県知事からの谷川岳危険地区の登山禁止について

2. 九州地区5支部懇談会 5月20日(土)～21日(日) 海峡ビューしもの

せき(下関市)

3. 茨城支部10周年記念式典 6月17日(土) ホテルマロウドつくば

(土浦市)

4. 熊本支部設立60周年記念式典 11月18日(土) アークホテル熊本

(熊本市)

【今後の予定】

1. 平成29年度第1回評議員懇談会 4月18日(火)17時～ 集會室

2. 平成29年度監事監査 5月9日(火)

3. 5月度常務理事会 5月10日(水)

4. 5月度理事会 5月17日(水)

5. 平成29年度通常総会 6月24日(土)14時～ 主婦会館 プラザエフ

□平成29年度第2回(5月度)理事会議事録

日時 平成29年5月17日(水)19時00分～20時55分

場所 集會室

出席者 小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常

務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・

谷内各理事、平井・重廣各監事

【審議事項】

1. 平成29年度通常総会の開催について

平成29年度通常総会の開催にあたり各事項について以下のとお

り審議した。

日時 平成29年6月24日(土)午後2時より

会場 主婦会館 プラザエフ 〒102-0008 東京都千代田

区六番町15番 03-3265-8111 (賛成15名、反対

なしで承認)

【決議事項】

第1号議案 平成28年度事業報告(案) 承認の件 (賛成15名、反対

なしで承認)

第2号議案 平成28年度決算報告(案) 承認の件 (賛成15名、反対

なしで承認)

第3号議案 平成29・30年度役員(理事・監事)(案) 選任の件 (賛

成15名、反対なしで承認)

報告事項

1. 平成29年度事業計画および予算の件

2. その他

(賛成15名、反対なしで承認)

2. 平成29年度特別事業補助金(追加分)について

平成29年度特別事業補助金の追加補助について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

3. 新支部長の就任承認について

申請のあった以下の支部長交代について審議した。

青森支部 新支部長 中村勉(9498)

山形支部 新支部長 野堀嘉裕(15137)

静岡支部 新支部長 有元利通(9703)

京都・滋賀支部 新支部長 松下征文(12629)

宮崎支部 新支部長 荒武八起(10735)(賛成15名、反対なしで承認)

4. 上高地山岳研究所への絵画寄贈について

会に対する物品の寄贈は原則として受けないこととしているが、千葉潔画伯(15639)から申し出のあった絵画の寄贈について総合的に検討した結果、これを受けることとした。(賛成15名、反対なしで承認)

【報告事項】

1. 4月受付分の入会希望者17名および準会員入会希望9名について、入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2. 第5回小島烏水祭について報告があった。(山田)

3. 広島支部総会について報告があった。(佐藤)

4. 広島支部における富士山滑落事故報告書取りまとめ状況について

報告があった。(佐藤)

5. 平成28年度中に遭難対策委員会に提出された支部および委員会との登山計画書の提出状況について報告があった。(佐藤)

6. 永年会員に対して寄付の依頼を行なうことについて報告があった。(佐藤)

7. 平成29年度賠償責任保険の契約について契約更新の報告があった。(佐藤)

8. 平成29年度会費滞納除籍対象者について報告があった。(佐藤)

9. 「山」5月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1. 日本山岳文化学会 創立15周年記念講演会・祝賀会 5月27日(土) 14時30分～17時40分 明治大学紫紺館

2. 富士山測候所を活用する会 第12回通常総会及び特別講演会 5月28日(日) 14時～16時 PORTA神楽坂7階 東京理科大学

第3会議室

3. 全国山の日協議会 第3回通常理事會・第2回定時評議員会 5月30日(火) 17時～18時30分 弘済会館4階「梅会議室」

4. 「梅棹忠夫・山と探検文学賞」受賞式 6月3日(土)13時30分～15時 信濃毎日新聞社 長野本社講堂

5. 第71回ウェストン祭 6月4日(日)10時～ 上高地

6. 田淵行男写真展「山岳写真傑作展」 6月6日(火)～10月1日(日) 田淵行男記念館

7. 平成29年度「静岡県富士山ガイドンスin東京」 6月9日(金)14時

～16時 フクラシア浜松町 会議室B

【今後の予定】

1. 6月度常務理事会 6月7日(水)18時30分～ 集会室
2. 次期役員候補者連絡会 6月8日(木)18時30分～ 集会室
3. 6月度理事会 6月14日(水)19時～ 集会室
4. 平成29年度通常総会 6月24日(土)14時～ 主婦会館 プラザエフ

□平成29年度第3回(6月度)理事会議事録

日時 平成29年6月14日(水)19時00分～20時45分
場所 集会室

出席者 小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常

務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・

谷内各理事、平井・重廣各監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 新支部長の就任承認について
群馬支部より申請のあった支部長交代について審議した。
群馬支部 新支部長 北原秀介(8267)(賛成15名、反対なしで承認)
2. 同好会規程の改正について
同好会規程(C 21)の設立手続きおよび活動状況の把握に関

連する条文の改正について審議した。(賛成15名、反対なしで承認) 改正日を平成29年6月14日とする。

3. 2017年度学生部ザンスカール遠征隊の派遣と援助金の依頼、募金について

2017年度学生部ザンスカール遠征隊の派遣と援助金の依頼、募金について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

4. 募金開始について

広島支部より申請のあった平成28年11月富士山遭難者への見舞金およびYOUTH CLUBより申請のあった学生部ザンスカール登山隊の募金開始について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 三国学生交流登山の今後について(中山)

三国学生交流登山の今後の継続について協議し、その意義と実施内容等を踏まえ、今後の継続協議とすることとした。

2. 本部会議室の同好会等の利用について(吉川)

本部会議室の同好会等の利用について協議し、現在の利用状況の分析を踏まえ、今後の継続協議とすることとした。

【報告事項】

1. 5月受付分の入会希望者15名および準会員入会希望者10名について、入会承認を行なったとの報告があった。(小林)
2. 広島支部における富士山滑落事故報告書取りまとめ状況について

報告があった。(佐藤)

3. 寄付金および助成金の受け入れについて報告があった。(吉川)

4. 医療委員会より「第2回景信山メデイカル・ハイキング」および「第37回日本登山医学会学術集会」について報告があった。(野口)

□

5. 安曇野山岳美術館から申請のあった「大谷一良版画展」の名義後援について、これを承認したとの報告があった。(谷内)

6. 日本山岳・スポーツクライミング協会役員の就任について報告があった。(谷内)

7. 日本ロングトレイル協会より申請のあった「山」5月号巻頭記事のHPへの掲載について、これを許可したとの報告があった。(神長)

8. 『山岳』2017年の内容について報告があった。(神長)

9. 会報「山」6月号の発行について報告があった。(節田)

10. 平成29年度通常総会における葉書の集計状況について報告があった。(佐藤)

11. 日本山岳会再生委員会で検討されたJACマーク入りグッズの試験販売開始について報告があった。(佐藤)

【連絡事項】

報告

1. 2017年「登山医学セミナー(東京・大阪)」7月8日(土)10時20分～16時 東医健保会館 2階大ホール 7月9日(日)10時30分～16時10分 大阪医科大学 臨床第一講堂

【今後の予定】

1. 平成29年度通常総会 6月24日(土)14時～主婦会館 プラザエフ

2. 臨時理事会 6月24日(土)総会終了後 主婦会館 プラザエフ

3. 同好会連絡会 7月3日(月)19時～ 104会議室

4. 7月度常務理事会 7月4日(火)18時30分～ 集会室

5. 自然保護全国集会 7月9日(日)～10日(月) 岐阜市

6. 7月度理事会 7月12日(水)19時00分～ 集会室

7. 山岳4団体役員懇親会 7月20日(木)18時30分～ 南国酒家(渋谷区)

◎平成29年度通常総会

6月24日(土) 午後2時00分～

東京都千代田区六番町 主婦会館 プラザエフ

出席者144名、委任状982名、議決権行使2046名。会員数4889名

議案 1. 平成28年度決算報告

2. 平成28年度事業報告

3. 平成29・30年度役員選任

議案審議はいずれも原案どおり可決承認された。本総会では、かねてより検討を重ねてきた財政基盤の強化策が成果を上げつつあり、厳しい財政状況に改善の兆しが見えてきたことが報告された。小林政志会長は、会長挨拶で、「28年度は会員数の下げ止まり、コスト圧縮に成

果が見られた。29年度は黒字化も視野に入ってきた。今年度は執行部も人が入れ替わり、新体制となる。今後も元気な日本山岳会を目指していきたい」と述べた。

□平成29年度第4回（7月度）理事会議事録

日時 平成29年7月12日(水)19時00分～21時25分

場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、安井・齋藤・星・近藤・波多野各理事、

平井・石川各監事

欠席者 大久保・清登各理事

【審議事項】

1. 組織改正について

記念事業委員会、再生事業推進ワーキンググループの新設および公益法人運営委員会を改革事業推進委員会と改称することについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

2. 評議員の選任について

以下の会員を新たに評議員とすることについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

橋本清、今村千秋、成川隆顕、野口いづみ、古野淳、吉川正幸、

萩原浩司、新井梓、落合正治

3. 海外登山助成金審査委員会委員の選任について

海外登山助成金審査委員会委員の選任について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

4. 平成29年度（前期）海外登山助成金審査報告について

海外登山助成金審査委員会の審査報告を受けて審議し、平成29年度（前期）海外登山助成金を以下の登山隊2隊に対し助成することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

同志社大学山岳部「極西ネパール登山隊2017」

クライミングクラブ バルブランチ「2017バルブランチ

ンドヒマラヤ遠征隊」

5. 秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の選任について

秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の選任について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

6. 収益事業に伴う株式会社駅前アルプスとの覚書締結について

再生委員会が収益事業の具体策の一環として検討された当会と「株式会社駅前アルプス」（名古屋市中区）間でのグッズ販売に関する覚書を締結することについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

7. 支部助成金および新入会員報奨金の送金について

平成29年7月に支給する支部助成金について会員および準会員1名に付き2000円、新入会員等獲得報奨金を会員および準会員1名に付き4000円を送金することについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 記念事業委員会の概要と委員会メンバーについて（重廣）
記念事業委員会の業務概要と委員会構成メンバーの構想について協議した。

2. 今後の会議日程について（谷内）

今年度の常務理事会、理事会を含む主要会議の日程について協議した。

3. 支部合同会議の議案等について（谷内）

9月23日（土）～24日（日）に開催される支部合同会議の主要議案等について協議した。

4. 三国学生交流登山の今後について（中山）

三国学生交流登山の今後の継続について協議した。

5. 入会者の増強について（永田）

入会者の増強策について協議した。

【報告事項】

1. 6月受付分の入会希望者9名準会員入会希望者9名について、入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2. 7月8日（土）開催の関東地区実務担当者のための「支部事業情報交換・交流会」（支部事業委員会主催）の報告があった。（重廣）

3. 7月3日（月）開催の同好会連絡会（総務委員会主催）について報告があった。（永田）

4. 7月9日（日）～10日（月）開催の自然保護全国集会について報告があつ

た。（近藤）

5. 『山岳』2017年の内容について報告があった。（神長）
6. 『山』7月号の発行予定について報告があった。（神長）

【連絡事項】

1. 東京都山岳連盟第3期役員の内案について

2. 熊本支部設立60周年記念式典および記念登山について
3. 第21回ミセス・ウェストン祭記念式典開催について

【今後の予定】

1. 8月度常務理事会 8月1日（火）18時30分～ 集会室

2. 新旧役員懇談会 8月4日（金）19時～ 新宿中村屋

3. 新入会員オリエンテーション 9月2日（土）13時30分～ 104号

室・集会室

4. 支部合同会議 9月23日（土）～24日（日） 主婦会館 プラザエフ

5. 第33回全国支部懇談会（茨城支部） 10月13日（金）～14日（土） つくばグランドホテル（つくば市）

□ 8月の理事会は夏休みのため休会

□ 平成29年度第5回（9月度）理事会議事録

日時 平成29年9月13日（水）19時00分～21時10分

場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・星・近藤各理事、平井・石川各監事

欠席者 大久保・波多野各理事
オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 監査法人との財務に關しての指導・助言業務契約の継続について
当年度の太陽ＡＳＧ有限監査法人との財務に關しての指導・助言業務契約の継続について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

2. 雪崩救助方法の標準化に關する協議会について

「雪崩救助方法の標準化に關する協議会」設立に当たり、加盟団体となることについて審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

3. 599ミュージアム・ワーキンググループの解散について

599ミュージアム・ワーキンググループの機能がすでに各委員等によつて果たされているため、解散することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 支部合同会議について（永田）

9月23日（土）～24日（日）に開催される支部合同会議の議題について協議した。

2. 入会者の増強について（永田）

今後の会員数の推移の分析と入会者増強のための方策について

協議した。

【報告事項】

1. 7月受付分の入会希望者9名、準会員入会希望者1名、8月受付分の入会希望者14名1団体、準会員入会希望者5名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2. 8月29日（火）に発生した広島支部「幌尻岳事故」の状況について報告があった。（中山）

3. 8月7日（月）～14日（月）に開催された第11回3国学生交流登山について報告があった。（中山）

4. 今後の3国学生交流登山の日中韓での協議について報告があった。（中山）

5. 上高地梓川右岸専用水道事業組合の平成29年度負担金について報告があった。（野澤）

6. 山研の定期消防設備点検作業と報告書について報告があった。（野澤）

7. 各支部でのYOUTH CLUB設置の展望について報告があった。（野澤）

8. 医療委員会主催のメディカルハイキングを今後春・秋2回の開催とするとの報告があった。（野澤）

9. 広島支部の募金活動について報告があった。（古川）

10. 平成28年度決算において公益性の適格基準を満たしているとの報告があった。（古川）

11. 平成29年度秩父宮記念山岳賞の審査予定について報告があった。
(谷内)
 12. 同好会「JACグローバルクラブ」の設立承認を行なったとの報告があった。(谷内)
 13. 今年度の晩餐会の概要について報告があった。(永田)
 14. カシオより販売提案のあった「PRO TREK Smart」の機能概要について報告があった。(永田)
 15. JAC主催山行における事故発生時の理事への連絡について報告があった。(永田)
 16. 本部会室の照明器具の更新とこれに掛かる経費の予算化について報告があった。(永田)
 17. 「山」9月号の発行について報告があった。(神長)
- 【連絡事項】
1. 石川直樹写真展「POLAR」9月5日(火)～平成30年1月8日(月)・
(祝)
 2. 田淵行男写真展「田淵行男が愛した安曇野Ⅱ」10月3日(火)～平成30年2月4日(日) 1、2ともに田淵行男記念館
 3. 第21回2016「植村直己冒険賞」授賞式・記念講演会 9月30日(土) 開場12時30分 開会13時30分 豊岡市日高文化体育館
 4. 千葉工業大学体育会山岳部60周年記念式典 10月14日(土) 15時～
千葉工業大学津田沼校舎
 5. 福岡支部創立60周年記念事業 10月13日(金)、12月9日(土)

6. 国立登山研修所創立50周年記念式典・祝賀会 11月26日(日)受付開始13時～ 開会14時 富山市パレプラン高志会館2Fカルチャーホール

【今後の予定】

1. 10月度常務理事会 10月3日(火)18時30分～ 集会室
2. 10月度理事会 10月11日(水)19時～ 集会室
3. 第33回全国支部懇談会(茨城支部) 10月13日(金)～14日(土) つくば市つくばグランドホテル
4. 第33回宮崎ウェストン祭・記念山行(宮崎支部) 11月3日(金)～4日(土) 西臼杵郡高千穂町五ヶ所公民館ほか
5. 熊本支部設立60周年記念式典および記念登山 11月18日(土)～19日(日) 熊本市アークホテル

□平成29年度第6回(10月度)理事会議事録

日時 平成29年10月11日(水)19時00分～20時35分

場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、清登・斎藤・星・近藤・波多野各理事、

平井監事

欠席者 大久保・安井各理事、石川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 「山のお弁当」に関する㈱アーバンとの契約締結について

「山のお弁当」に関する㈱アーバンとの「商標権及び名称使用権設定契約」の締結について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 記念事業について(重廣)

記念事業委員会の「120周年事業策定・推進(案)」について協議した。

2. 計画書について(重廣)

登山計画書の提出および計画のチェック体制について協議した。

3. 冊子「山のエチケット(仮称)」について(中山)

科学委員会の提案による冊子「山のエチケット(仮称)」の発行について協議した。

4. 復活会員制度について(永田)

復活会員の入会金について協議した。

5. 広島支部「幌尻岳事故」について(中山)

広島支部「幌尻岳事故」について情報の確認と今後の対応について協議した。

【報告事項】

1. 9月受付分の入会希望者9名、準会員入会希望者4名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2. 富士支部からの寄付金受入事前申請および寄付金14件について報告があった。(古川)

3. 支部合同会議の状況について報告があった。(永田)

4. 年次晩餐会の概要について報告があった。(永田)

5. 秩父宮記念山岳賞審査委員会より「本年度は該当者なし」との報告があった。(谷内)

6. AVSAR協議会の発足会の状況について報告があった。(中山)
7. YOUTH CLUB委員会の外部への業務委託契約の内容について報告があった。(中山)

8. 日本ヒマラヤ協会創立50周年について報告があった。(中山)

9. 「ルームの電灯器具の交換」の経緯とコストについて報告があった。(永田)

10. 「山」10月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1. 中央大学山岳部90周年記念祝賀会 11月19日(日)13時 中央大学

駿河台記念館 2階ホール

【今後の予定】

1. 第33回宮崎ウェストン祭・記念山行(宮崎支部) 11月3日(金) 4日(土)

2. 平成29年度第1回評議員懇談会 11月15日(水) 17時~19時 10
4号室

3. 熊本支部設立60周年記念式典および記念登山 11月18日(土)~19日

(田) 熊本市「アークホテル」

4. 年次晩餐会 12月2日(土) 12時30分～(受付開始) 京王プラザ
ホテル

□平成29年度第7回(11月度) 理事会議事録

日時 平成29年11月9日(木)19時00分～20時42分
場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・星・近藤・波多野各理事、

平井・石川各監事(齋藤理事は所用のため協議事項4まで欠席)

欠席者 大久保理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 平成30年度「特別事業補助金」の募集について

平成30年度「特別事業補助金」の募集について審議した。(賛成
13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 名誉会員の推薦について(小林)

名誉会員の推薦状況について協議した。

2. 平成29年度第7回指導者講習会実施要項について(重廣)

支部事業委員会主催の平成29年度第7回指導者講習会実施要項
について協議した。

3. 広島支部「幌尻岳事故」について(中山)

広島支部「幌尻岳事故」について情報の確認と今後の対応につ
いて協議した。

4. 復活会員制度について(永田)

復活会員の入会金減額提案について、改革事業推進委員会での
検討結果を受けて協議した。

5. 支部連絡会議の議題について(永田・谷内)

12月2日(土)に開催する支部連絡会議の議題について協議した。

6. 評議員懇談会の議題について(谷内)

11月15日(水)に開催する評議員懇談会の議題について協議した。

【報告事項】

1. 9月13日～10月8日受付分の入会希望者14名(うち復活会員1

名)、10月受付分の準会員入会希望者5名について入会承認を
行なったとの報告があった。(小林)

2. 熊本支部からの寄付金1件、東九州支部からの助成金1件、永年

会員からの寄付金1件の受入について報告があった。(古川)

3. 理事の記念式典等の会費支出状況について報告があった。(古川)

4. 第33回全国支部懇談会について報告があった。(重廣)

5. 新潟県山岳協会創立70周年記念海外登山講演会(共催越後支部)

について報告があった。(重廣)

6. 11月1日(水)に行なわれた広島支部での講演会の概要について報告
があった。(中山)

7. 11月7日(火)に行なわれた広島支部との面談の状況について報告があった。(重廣)

8. 上高地山岳研究所の閉所作業について報告があった。(安井)

9. 慶應義塾福沢研究センターからの資料借用申請に対して許可を行なったとの報告があった。(神長)

10. 後援名義使用申請3件について許可を行なったとの報告があった。(永田)

11. 年次晩餐会の概要について報告があった。(永田)

12. 科学委員会からの「山のマナー」冊子制作の協力要請に自然保護委員会が応じ、今後、委員会として携帯トイレ普及促進活動を行なっていくとの報告があった。(谷内)

13. 「山」11月号の発行について報告があった。(神長・節田)

14. 財務委員会からの勧告について報告があった。(古川)

【連絡事項】

1. 富士山国有林におけるニホンジカの重点的な捕獲実施について

2. 日本勤労者山岳連盟「望年会」12月7日(木) 18時30分～(受付開始) 19時～21時30分 日本勤労者山岳連盟事務所

【今後の予定】

1. 支部連絡会議 12月2日(土) 10時30分～12時 京王プラザホテル

42階「高尾」

2. 年次晩餐会 12月2日(土) 12時30分～(受付開始) 京王プラザホテル

3. 事業計画・予算等

・平成29年12月初旬 平成30年度支部事業計画・予算(提出依頼)

・平成30年1月中旬 平成30年度支部事業計画・予算(提出期限)

・平成30年1月下旬 平成29年度支部事業報告・会計報告(提出依頼)

・平成30年2月下旬 平成29年度支部事業報告(提出期限)

・平成30年3月下旬 平成29年度支部会計報告(提出期限)

☆平成29年度年次晩餐会

12月2日、東京・新宿の京王プラザホテルで開催。全国から517名が参加した。

小林会長は冒頭の挨拶で、「第2回『山の日』記念全国大会、全国の33支部では山の日になんで家族登山など様々な事業が行なわれ、山の日第2段階に入ったと思う。山の日を契機にさらに山や自然に触れ合う人のすそ野を広げ、次世代に引き継ぐ活動を行なっていくことが、本会の使命と考える」と述べた。また、資金・会員増強の推進、制度改革、コスト削減など(財務上の黒字化)に成果が表われていると語った。さらに創立120周年に向けたビジョンも示した。

会は物故会員78名への黙祷の後、新永年会員32人の紹介と同会員代表の挨拶、新入会員・新入準会員代表の挨拶があった。また、ゲストとして迎えたデナリ南西壁をスキーで滑降した佐々木大輔氏、NHKカメラマン・関裕一氏の記念講演も行なった。出席者は食事やお酒を

交えながらの交歓を楽しんだ。

□平成29年度第8回（12月度）

理事会議事録

日時 平成29年12月13日（水）19時00分～20時45分

場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・谷内

各常務理事、安井理事、平井・石川各監事

欠席者 古川常務理事、大久保、清登、齋藤、星、近藤、波多野各

理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 広島支部「幌尻岳事故」について

「幌尻岳事故」を受け広島支部への対応、今後の遭難対策委員会の対応方法、関係官庁への報告について審議した。（賛成8名、

反対なしで承認）

2. 遭難対策規程改正について

遭難対策規程について全会員を対象に登山計画書の提出を義務付けることを軸に改正することとした。（賛成8名、反対なしで承認）

3. 上高地山岳研究所の外壁および屋根の塗装工事について

経年劣化による上高地山岳研究所の外壁および屋根の塗装工事

の予算化について審議した。（賛成8名、反対なしで承認）

【協議事項】

1. 登山計画書の提出システムの構築について（中山）

遭難対策規程の改正と連携した登山計画書の提出システムの構築について協議した。

【報告事項】

1. 11月9日～12月12日受付分の入会希望者13名（うち復活会員1名）、準会員入会希望者9名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2. 熊本支部、永年会員からの寄付金を含む計6件の寄付金の受入について報告があった。（谷内）

3. 熊本支部創立60周年、国立登山研修所創立50周年各記念式典への出席について報告があった。（重廣）

4. 第1回記念事業委員会の開催状況について報告があった。（重廣）

5. 遭難対策運用要領改正について報告があった。（中山）

6. 「JAC学生部ザンスカール遠征2017」、早稲田大学「ラジオダタ遠征」2隊の遠征報告があった。（中山）

7. 年次晩餐会の開催状況について報告があった。（永田）

8. NPO法人静岡山の文化交流センターからの後援名義使用申請について許可を行なったとの報告があった。（永田）

9. 「山」12月号の発行について報告があった。（神長・節田）

【連絡事項】

1. 日本山岳・スポーツクライミング協会「平成30年新春懇談会」

1月13日(土) 13時から15時(受付12時30分より) アルカディ
ア市ヶ谷「富士の間」

2. 東京都山岳連盟「2018年都岳連新春の集い」 1月20日(土)15
時開宴(受付14時30分より) ホテルJALシティ田町 東京

【今後の予定】

1. 事業計画・予算等

・平成30年1月15日 平成30年度支部・委員会 事業予算(提出
期限)

・平成30年1月31日 平成30年度支部・委員会 事業計画(提出
期限)

・平成30年1月下旬 平成29年度支部・委員会 事業報告・会計
報告(提出依頼)

・平成30年2月下旬 平成29年度支部・委員会 事業報告(提出
期限)

・平成30年3月下旬 平成29年度支部・委員会 会計報告(提出
期限)

■ 1月の理事会は休会

□平成30年度第9回(2月度)理事会議事録

日時 平成30年2月14日(水)19時00分～21時10分

場所 集會室

出席者 小林会長、重廣・野澤各副会長、神長・永田・古川・谷内
各常務理事、安井・清登・齋藤・近藤・波多野各理事、平
井・石川各監事(所用のため近藤理事は業務執行報告2ま
で、平井監事は審議事項1まで欠席)

欠席者 中山副会長、星理事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 「第16回視覚障害者全国交流登山大会」への後援および募金の承
認について

「第16回視覚障害者全国交流登山大会」への後援および募金活
動開始について審議した。(賛成11名、反対なしで承認)

2. 寄付受入の承認について

寄付受入および管理規程第3条2による100万円以上の金銭
の寄付2件、計400万円の受入について審議した。(賛成11
名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 山岳保険について(永田)

山岳保険の周知と加入促進について協議した。

【報告事項】

1. 1月受付分の入会希望者5名、準会員入会希望者1名および2月
受付分の入会希望者7名、準会員入会希望者5名について入会

承認を行なったとの報告があった。(小林)

2. 寄付金および助成金受入21件について報告があった。(古川)

3. 広島支部再生委員会の開催状況について報告があった。(重廣)

4. 支部事業委員会主催「平成29年度第7回登山教室指導者養成講習会」への申込み状況について報告があった。(重廣)

5. 海外登山助成対象登山隊審査委員会の平成29年度(後期)「海外登山助成対象登山計画」への応募状況について報告があった。(重廣)

廣)

6. 大久保春美理事の死去に伴う役員変更登記完了について報告があった。(谷内)

7. 「職員就業規定」等の改正作業状況について報告があった。(近藤)

8. 年次晚餐会関連の収支について報告があった。(永田)

9. 「会員データ管理システム」の改修および保守の外部委託について報告があった。(永田)

10. 準会員から正会員への移行手続きについて報告があった。(永田)

11. 会員増強策の会報への掲載について報告があった。(永田)

12. 「個人情報保護法」改正による名簿作成の注意について報告があった。(永田)

13. 「山」2月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1. 全国山の日協議会「2020年の国民の祝日『山の日』について」
2. 医療委員会主催講習会「雪山の医療」平成30年2月26日(月)19時

00分～20時45分 104号室

3. 医療委員会主催「第2弾・登山のためのストレッチ教室」平成30年3月9日(金)18時50分～20時50分 東京体育館第1会議室

4. 科学委員会主催 2018年フォーラム「登山を楽しくする科学X」平成30年3月10日(土)13時00分～17時00分 立正大学品川キャンパス11号館1151教室

【今後の予定】

1. 常務理事会・理事会

・平成29年度3月度常務理事会 平成30年3月6日(火)18時30分～

・平成29年度3月度理事会 平成30年3月14日(水)19時00分～

2. 事業計画・予算等

・平成30年2月28日(水) 平成29年度支部事業報告(提出期限)

・平成30年3月31日(土) 平成29年度支部会計報告(提出期限)

□平成29年度第10回(3月度)理事会議事録

日時 平成30年3月14日(水)19時00分～21時00分

場所 集会室

出席者 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・

谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・星・近藤・波多野各
理事、平井・石川各監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1. 平成30年度事業計画について

平成30年度事業計画について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

2. 平成30年度予算概要について

平成30年度予算概要について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

3. 職員就業規定の改正について

職員就業規定を改正することについて審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

4. 平成29年(後期)海外登山助成対象登山隊審査について

海外登山助成金審査委員会の審査結果を受け、平成29年(後期)海外登山助成対象登山隊として「K2 [861m] West Face Project」に対し、15万円の助成を行なうこととした。(賛成14名、反対なしで承認)

5. 平成30年度上高地山岳研究所

管理人雇用契約およびアルバイト採用契約について

平成30年度の上高地山岳研究所管理人雇用契約およびアルバイト採用契約の締結について審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

【協議事項】

1. 平成30年度委員会等予算査定の概要について(古川)

財務委員会からの平成30年度委員会等の予算査定の概要につい

て協議した。

2. 包括保険制度の導入について(永田)

当会主催山行における山岳保険未加入者に対応するために包括保険制度を導入することについて協議した。

【報告事項】

1. 入会希望者10名、準会員入会希望者10名および準会員から正会員への移行希望者4名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2. 助成金1件の受け入れについて報告があった。(古川)

3. 一般社団法人・日本山岳検定協会からの「平成30年度山の知識検定(第8回)」への名義後援申請(株)実業之日本社からの「ブルーガイド創刊ラインナップ電子復刻版」(仮称)への著作権許諾申請に対し、これを承認したとの報告があった。(永田)

4. 広島支部再生委員会の開催状況について報告があった。(重廣)

5. 平成29年度第7回登山教室指導者養成講習会の開催状況について報告があった。(重廣)

6. 第2回記念事業委員会の開催状況について報告があった。(重廣)
7. 遭難対策規程および遭難対策運営要領の修正箇所について報告があった。(中山)

8. 平成30年度新永年会員候補者および平成29年度末除籍滞納予定者について報告があった。(谷内)

9. 理事会等日程の変更について報告があった。(谷内)

10. 家族登山普及委員会主催「家族登山教室」2018年の年間予定
について報告があった。(波多野)

11. 「山」3月号の発行について報告があった。(神長・節田)

【今後の予定】

1. 常務理事会・理事会

・平成30年度4月度常務理事会 平成30年4月3日(火)18時30分～

・平成30年度4月度理事会 平成30年4月11日(水)19時00分～

支部の活動報告

北海道支部

2017年度は支部定例山行で初めて本部山行委員会とのコラボ企画の「花の山旅大雪山・富良野岳」を実施。道外から14名が参加し、支部会員と道外会員の交流を図ることができた。2年目となる「山の日ファミリイ登山」は8月11日に札幌の三角山・大倉山・荒井山で開催し、一般から募集した23名と支部の会員・会友10名が山歩きを楽しんだ。このほかの公益事業では恒例の子供サマーキャンプ、大雪山高山植物盗掘防止パトロール、NHK文化センターの登山教室、支笏湖復興の森、下草刈りなどを実施した。一方、支部会員、会友の登山技術向上を目指して岩登り研修、沢登り研修、雪崩事故防止講習会を開催した。四季を通じての定例山行を道内各地の山で実施して会員・会友相互の交流を図った。昨年度から海外登山調査研究活動としてスタートした千島列島の勉強会を11月に開催、会員・会友13名が参加した。また、年7回の支部通信、会報「スプリ」の発行、親睦のための集会などの事業、行事を実施した。

《会議》

* 4月15日(土) 支部総会 2016年度事業報告、会計報告、

2017年度事業計画、予算案、準会員制度導入に伴う支部規約の改正案、支部役員の改選などについて審議、議案のすべてを承認。出席101名(当日出席者40名、委任状61名)。

* 定例の常任委員会 4月・3月に毎月1回開催。5・11名出席、前月までの活動報告と今後の事業計画などを協議。

《山行・野外活動》

* 雪崩事故防止講習会 1月14日(日) 札幌郊外中山峠で実施。講師1名、支部会員・会友10名参加。

* 岩登り研修 ○5月18日(木) 小樽・赤岩 講師1名 アシスタント3名 参加者3名 ○7月13日(木) 小樽・赤岩 講師2名 アシスタント1名 参加者2名 ○9月7日(木) 小樽・赤岩 講師1名 参加者4名。

* 沢登り研修 6月24日(土) 札幌市南区 神威岳木挽沢(地形図名「コピキ沢川」) 講師2名 参加者3名。

* 定例山行(夏山) ○6月30日(金)・7月3日(月) 大雪山黒岳・旭岳縦走/黒岳・黒岳石室往復/富良野岳 ※本部山行委員会とのコラボ企画 道外会員14名 道内会員11名参加 ○7

月8日(土)～9日(日) 上ホロカメットク山～十勝岳～美瑛岳縦走 6名参加 ○7月22日(土) 風不死岳・楓沢 13名(支部部外者1名含む)参加 ○8月5日(土)～6日(日) 大雪山・愛山溪～愛別岳 5名参加 ○10月28日(土)～29日(日) 道南お月見山行 写万部山／美利河丸山 12名参加。

*定例山行(山スキー) ○1月17日(水) 小樽・塩谷丸山 8名参加 ○1月27日(土) 樽前山 7名参加 ○2月9日(金)～10日(土) 来馬岳(カルルス温泉泊り) 10名参加 ○2月26日(月)～27日(火) 日勝ピーク／オダッシュ山(トムラウシ友の会小屋泊り) 10名参加 ○3月20日(火)～21日(水) 羊蹄山(京極山荘泊り) 10名参加。

*NHK文化センター・新さっぽろ 登山教室 ○「週末はゆっくり登山」5～10月 月1回 原則土曜日催行 稀府岳、オダッシュ山、岩内岳、狩場山、神威岳、藤野焼山 ○「熟年からのゆっくり登山」5～10月 月1回 原則水曜日催行 累標山、阿古美山・当丸山、黒松内岳、無意根山、上ホロカメットク山～十勝岳縦走、手稲山 ○「スノーシュー教室」1～3月 月2回土曜日催行 長沼・長官山～静台縦走、室蘭岳、支笏湖・紋別岳、穂別・坊主山、庚申草山、多峰古峰山。

《プロジェクト・地域活動》
*2017年子供サマーキャンプ(第18回自然児学校) 7月

28日(金)～30日(日) 日高町・国立日高青少年自然の家「からまつキャンプ場」で小中学生18名と保護者1名が参加してツリークライミング、北日高岳登山、キャンプファイヤー、手作りパン焼き体験などを楽しむ。運営スタッフには支部長以下支部の会員、会友約20名が参加。

*山の日制定記念ファミリー登山会
8月11日(金) 「山の日」に合わせて一般公募のファミリーを対象にした日帰り登山会を開催。札幌・三角山～大倉山～荒井山縦走。10家族23名参加 サポートの支部会員・会友は11名参加。

*大雪山系・十勝連峰高山植物盗掘防止パトロール(花パト)
○5月19日(金) 自然保護研修会 札幌エルプラザ2階で開催 23名参加 ○6月1日～9月30日 28名の会員・会友で延べ139日のパトロール実施 ○7月9日(日) 官民合同パトロール 銀泉台～赤岳～小泉岳 支部会員3名参加。

*支笏湖復興の森づくり 6月26日(月) 下草刈り作業に6名参加。

*海外登山調査研究事業 前年度に続き千島列島の地質および火山、登山方法などについて勉強会を開催 11月10日(金) 札幌エルプラザ・環境研修室 テーマ「千島列島の火山」講師 北大総合博物館館長・中川光弘教授(火山学) 会員、会友13名参加。

《広報・出版活動》

＊支部通信 年7回発行 会員、準会員、会友に郵送またはメール配信で配布（約300部）。

＊北海道支部会報「ヌブリ」の第48号を4月に発行 山に関する紀行文、エッセイ、山の歴史・評論などを掲載。

《その他行事・集会》

＊各種集会 ○8月19日(土) 支部夏季交流会 ルーム白石 会員、会友16名参加 ○12月9日(土) 支部年次晩餐会 ロイトン札幌 会員、会友など46名参加 ○11月16日(木) 北海道山岳団体交流会 札幌で開催 支部から3名参加 ○1月18日(木) 支部新年交流会 ルーム白石 会員、会友25名参加。

(藤木俊三)

青 森 支 部

平成29年度の青森支部の活動において、山岳遭難事故に対する知識、対処法などの講習を取入れた行事を実行してきた。「山の日」記念登山には、一般参加者も対象とした「地図とコンパスの使い方」、冬期行事では「雪崩対策講習・実技救助法」、また「赤十字救急法」、「ロープワーク講習」も実技講習として行なった。今後の行事にも取入れ、登山技術・遭難対策の強化に努めていきたいと思う。そして29年度は4名の新入会員がメン

バーとして加わった。ともに山行を楽しみ、支部活動を盛り上げていきたいものだ。

《会議》

＊5月12日(金) 通常総会（平成29年度事業・決算報告・会計監査報告、平成30年度事業計画・予算案） 青森市ワシントンホテル 出席28名（当日出席12名、委任状数16名）。

《山行・野外活動》

＊4月29日(土)～30日(日) 支部春山山行 南北八甲田山連峰（酸ヶ湯駐車場上テント設営） 参加7名。

＊5月27日(土)～28日(日) 第33回東北・北海道地区集会（岩手県遠野市） 参加9名。

＊10月9日(月) 松見ノ滝 参加8名。

＊11月25日(土)～26日(日) 支部晩秋山行 北八甲田（仙人峠小屋） 参加7名。

＊1月13日(土)～14日(日) 山岳スキー研修（鱒ヶ沢竹越会員山荘） 参加17名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月24日(土)～25日(日) 春季白山山地ブナ林再生事業 参加9名。

＊6月29日(木) 高山植物盗掘防止パトロール 参加1名。

＊7月2日(日) 青森ウエストン祭（新郷村） 参加2名。

＊7月2日(日) 北八甲田山登山道維持活動 参加6名。

* 7月9日(日) 八甲田山の日 参加7名。

* 8月11日(金) 山の日親子登山 参加14名。

* 9月23日(土)～24日(日) 秋季白神山地ブナ林再生事業 参加7名。

* 2月27日(火)～28日(水) 八甲田山スキーコースポール立て 参加6名。

* 3月27日(火)～28日(水) 八甲田山スキーコースポール立て 参加5名。

《その他の行事、懇親会》

* 11月11日(土) 支部年次晩餐会 青森市ワシントンホテル 参加13名。

(須々田秀美)

岩手支部

平成29年度事業で最大のイベントは、5月27日～28日における「第33回東北・北海道地区集会」を岩手支部主管で開催したことであった。遠野市の宿泊会場「たかむろ水光園」に7支部から会員60名が参集した。木瀬公二氏の講演「遠野の山々と遠野物語」で、当地ならではの「不思議」に引き込まれる。続いて、語り部の遠野物語で始まった懇親会は、隣接する南部曲り家の2次会へと盛り上がりつついき、まさに遠野づくしの一夜

だった。

翌28日は遠野3山の一つ、「六角牛山」と「又一ノ滝」の2班に分かれて記念山行を行ない、次年度開催の山形支部に無事バトンタッチした。同じ釜の飯を食い、ともに山を登ってJACの仲間意識を育む2日間となった。

また、岩手支部は月例山行を毎年計画しているが、ここ数年滞っていた県外の登山を再開し、7月に北海道の樽前山とアポイ岳に登っている。

支部会員動向は、諏訪弘会員(11009)と佐藤泰彦会員(8776)が逝去されたことにより、支部の重鎮2名を失った。その一方で、新入会員や準会員を迎えることができ、支部が活性化した。支部通信は、菅原敏夫会員の驚異の編集力によって、表紙カラー刷りの47号と48号を発行できた。これらすべてが会員各位の総合力にほかならない。

《会議》

* 4月1日(土) 第1回支部役員会 出席5名。

* 4月9日(日) 支部委員会 出席14名 通常総会 29年度事業報告・決算報告、30年度事業計画・予算案の審議 出席21名
(委任状27名) 支部懇親会 参加18名。

* 6月10日(土) 第2回支部役員会 出席5名。

* 9月23日(土)～24日(日) 平成29年度支部合同会議 出席…支部長、事務局長。

* 10月9日(月) 第3回支部役員会 出席4名。

* 12月2日(土) 平成29年度支部連絡会議(東京) 出席1名。

* 3月2日(金) 第4回支部役員会 出席4名。

* 3月27日(火) 支部会計監査 出席3名。

《山行・野外活動》

* 4月22日(土) 4月例会「階上岳」 参加12名。

* 5月20日(土) 5月例会「六角牛山・又一ノ滝」 公益 参加15名。

* 5月27日(土) 28日(日) 「第33回東北・北海道地区集会」 出席60名。

* 6月10日(土) 6月例会「月山(和賀)」 参加8名。

* 6月18日(日) 「残雪の裏岩手連峰開山祭」を後援 参加5名。

* 7月1日(土) 岩手山山開き 参加5名。

* 7月10日(月) 13日(木) 7月例会「樽前山・アポイ岳」 参加4名。

* 8月11日(金) 「山の日」制定記念山行(中止)。

* 8月26日(土) 27日(日) 岩手山8合目避難小屋管理 参加4名。

* 9月9日(土) 9月例会「五葉山」 公益 参加7名。

* 10月9日(月) 10月例会「女神山」 公益 参加9名。

* 10月13日(金) 14日(土) 「第33回全国支部懇親会・筑波山」 参加2名。

* 11月11日(土) 11月例会「日光山(山田町)」 参加6名。

* 12月2日(土) 3日(日) JAC年次晩餐会 参加7名。

* 12月16日(土) 17日(日) 12月例会「金壺山(矢巾町)」 参加14名、拡大委員会・支部忘年会(ききよう荘) 参加17名。

* 12月24日(日) 1月例会「網張スキー」 参加6名。

* 2月10日(土) 2月例会「黒森山(宮古市)」 参加5名。

* 3月24日(土) 3月例会「御月山(八幡平市)」 参加7名。

《広報》

* 9月30日(土) 支部通信第46号発行。

* 3月20日(火) 支部通信第47号発行。

(阿部陽子)

宮 城 支 部

宮城支部は1958年に設立され、今年で60年目を迎える。会員数は漸減が続き、4月1日現在、会員42名、準会員5名の47名で、2014年に発足した支部友会会員17名を加えると、合計64名となっている。主に宮城の里山を中心に活動を続けているところである。

今年度は、支部創立60周年に当たることから、60周年を記念した事業を計画している。具体的には、海外登山として中華民国山岳協会の創立に係わりを持った宮城支部唯一の名誉会員で

ある平沢亀一郎翁の縁で、交流が深い同山岳協会の協力・支援を得ての玉山登山を実施する。因みに、玉山登山は1996年
以来の事業となる。さらに、60周年記念誌の発行および祝賀会
を行なうこととしている。

通常の活動としては、公益事業の一環として、登山教室や親子登山教室を実施する。これらの事業は将来における支部会員、支部友会員増を期待しての実施であり、他支部の事例を参考にするなど創意工夫し実りあるものにしていきたい。

このほかに月例の役員会および山行、仙台市内小学校が実施している野外活動（登山）のボランティアとして支援を行なっている。また、今年は岩手・宮城内陸地震から10年目に当たることから、そのメモリアル事業として秋田支部、岩手支部との3支部合同栗駒山登山を実施することになっている。さらに、ビールパーティ、芋煮会、晩餐会などで会員たちの親睦を図ることにしている。

《会議》

* 4月8日(土) 事業報告・計画、決算・予算の審議 出席者34名（当日出席17名、委任状17名）。

* 定例役員会 5月17日(水)、6月14日(水)、7月12日(水)、9月12日(火)、10月10日(火)、11月16日(木)、1月17日(水)、2月21日(水)、3月21日(水)。
出席者延べ数85名。

《山行・野外活動》

* 4月30日(日) 春山山行（戸神山） 参加者15名。
* 6月4日(日) 第4回登山教室（仙台大カゴ） 参加者28名。
* 6月18日(日) 梅雨払い山行（雁戸山） 参加者13名。
* 7月22日(土) 24日(月) 夏山山行（焼岳） 参加者13名。
* 8月8日(日) 第4回親子登山教室（戸神山） 参加者27名。
* 8月11日(金) 12(土) 山の日記念宮城・山形合同山行（蔵王山） 参加者26名。

* 8月27日(日) 沢登り山行（蔵王山城） 参加者3名。
* 9月10日(日) 初秋山行（仙台神室岳） 参加者11名。
* 10月8日(日) 第5回親子登山教室（葉菜山） 参加者18名。
* 11月5日(日) 第5回登山教室（三方倉山） 参加者15名。
* 12月10日(日) 初冬山行（白沢五山） 参加者13名。
* 1月21日(日) 冬山山行（大東岳） 参加者4名。
* 2月11日(日) 厳冬期山行（南面白山） 参加者5名。
* 3月25日(日) 春山山行（あけら山） 参加者11名。

《広報・出版活動》

* 支部情報誌『宮城山岳通信』の発行。

今年度は、年4回（第9～12号）を発行して支部会員、支部友会会員、日本山岳会（本部および各支部）に送付した。

《その他の行事、懇親会》

* ビールパーティ 7月30日(日) H・JALシティ仙台 25名

参加。

* 支部晩餐会（望年会） 12月17日（日） シェルブール仙台 17
名参加。

（富塚和衛）

秋 田 支 部

秋田支部は設立59周年を迎え、会員数は55名。会員の高齢化、平均年齢の高さは避けられない状況にあり、会員増強は喫緊の課題である。また、活動会員が固定化していることから、「秋田支部へのお誘い」などを印刷・配布し、会員増の努力をしている。

新たな公益的活動として、秋田県生活環境部自然保護課が、「山の日」制定事業の一環として行なう、登山道整備事業の後援をし、太平山丸舞登山道や乳頭山登山道の整備、森吉山山麓高原の植樹などに参加した。

《会議》

* 4月8日（土） 通常総会28年度事業報告、決算の承認。29年度事業計画、予算案の審議。出席43名（当日出席20名、委任状28名）。

* 10月16日（月） 第1回役員会 支部担当者会議報告、役員改選および秋田支部設立60周年記念事業を協議。長岩名誉顧問か

らの横断幕寄贈などを協議。9名出席。

* 12月8日（金） 第2回役員会 役員改選、支部年間行事、山岳調査事業などを協議。10名出席。

* 1月13日（土） 第3回役員会 役員改選、山岳調査事業を協議。30年度総会に提出する案件について協議。本会に届け出る登山届について。14名出席。

* 2月7日（水） 第4回役員会 総会に提案する役員改選案、設立60周年記念事業としての山岳調査事業・60座ラリーを協議。10名出席。

* 2月21日（水） 事務局会義 山岳調査事業協議。5名出席。

* 2月26日（月） 事務局会議 山岳調査事業辞退。6名出席。

* 3月23日（金） 第5回役員会 役員改選など。8名出席。

《山行・野外活動》

* 5月17日（水） 春の里山山行（東鳥海山） 参加25名（内会員外10名）。

* 8月19日（金） 声かけ山行（牛形山） 参加6名（内会員外2名）。

* 10月22日（日） 秋の里山山行（甚吉森） 参加14名（内会員外4名）。

《プロジェクト・地域振興活動》

* 6月11日（日） 太平山山開き市民登山に協力・公益（登山振興）秋田市からの一般参加者約30名をサポート。支部会員参加11

名。

* 7月15日(日) 県自然保護課登山道整備に参加(公益登山振興)

太平山丸舞登山道、不帰ノ滝歩道整備 参加8名、八幡平・

秋田駒ヶ岳登山道整備 参加1名。

* 9月30日(日) 県自然保護課植樹活動・森吉山山麓植樹に参加

(公益登山振興) 参加1名。

* 11月5日(日) 太平山歩道整備、倒木処理、中岳周辺刈払い(公益登山振興) 参加7名。

* 5月～11月 太平山自然学習センター、東北森林管理局、太平山観光開発などが主催する登山やハイキング、自然観察に

秋田支部会員がサポートとして参加、小・中学生延べ100

名、一般参加約75名。

《広報・出版活動》

* 支部会報「秋田山岳」第104～106号まで4回発行。

* 支部だより 第3号～9号まで7回発行。

* 「秋田支部のご案内」を発行。広報活動として、支部会員および各支部、他山岳会や公民館などに配布。

《その他の行事、懇親会》

* 4月8日(土) 通常総会終了後懇親会を開催。24名参加。

* 5月27日(土)～28日(日) 東北・北海道地区集会9名参加。

* 10月13日(土)～14日(日) 全国支部懇談会1名参加。

* 12月5日(土) 日本山岳会年次晩餐会に4名参加。

* 1月13日(土) 新年会を開催14名参加

(鈴木裕子)

山形支部

2017年度会員動向は、新入会員3名で、支部会員数59名(永年会員6名)である。

支部活動は高齢化の大きな波で、残念ながら活発とはいえない状態である。支部活動の基となる総会、支部晩餐会や山行などのはがき回収率が低迷しているなか、行事参加者は若干増加の傾向が認められる。特に、役員会の出席率が向上してきたことが上げられる。今後、役員が一丸となって会員数の増加を積極的に進め、支部活動の活性化に尽力していきたい。

《会議》

* 支部総会 4月8日(土) 山形ビッグウイング 19名出席。

* 役員会 3回(6月10日、10月21日、3月3日(いずれも土曜日))。

* 支部長・事務局会議 9月23日(土)～24日(日) 東京 支部長・事務局長出席。

《山行》

* 第33回東北・北海道地区集会(岩手支部) 岩手県遠野市、六角牛山・又ノ一滝、6名参加。

215

*公益清掃登山 村山市甕岳 7月2日(日) 6名参加。

*山形・宮城支部交流登山 8月11日(祝)12日(土) 11日の交流会では講演会が開催されたが、12日の蔵王山公募登山は豪雨で中止となった。山形支部から15名が参加。

*第1回支部山行 日本山岳会(山研)それぞれの上高地 8月18日(金)20日(日) 5名参加。

*第2回支部山行(鳥海山滝の小屋芋煮会) 9月9日(土)10日(日) 15名参加。

*支部晩餐会 記念登山(蔵王山) 11月11日(土)12日(日) 20名参加。

*第3回支部山行(蔵王樹氷原を滑る会) 1月19日(金)21日(日) ASCから9名、支部から12名参加。

*第4回支部山行(鳥海山) 日程延期で4月7日(土)8日(日) 3名参加。

《地域振興活動》

*登山路整備 松田会員による母狩山登山道の整備(谷定口尾根コースの藪狩りとロープ設置)が年間を通して行なわれている。

《公益目的事業》

*第1回公益清掃登山 村山市甕岳 7月2日(日) 6名参加。

*第2回公益清掃登山 鶴岡市湯ノ沢岳(9月17日(日))は豪雨のため中止となった。

*写真展の開催 木村喜代志会員による「憧憬の地」自然と人

とーミヤンマー・ラオス・インド北部・ネパール・チベットー写真展 5月16日26日 東北公益文科大学 本学部棟公益ホール。

*第24回アルパインフォトビデオクラブ写真展 6月14日(水)20日(火) 酒田市総合文化センター クラブ所属支部会員3名中心に開催 推定1200名来場。

*「学校から見える山」イラストプレゼント 5月12月 村山地区の寒河江市立三泉小学校の5・6年生に鳥瞰図と展望図を贈呈し、贈呈式では記念講演会を開催した。

《懇親会》

支部晩餐会 11月11日(土)12日(日) 蔵王温泉「ヴァルトベエルグ」20名参加。山用品・書籍のバザーが行なわれた。今回

も畠中永年会員から参加者全員に地元で遡上する鮭の味噌粕漬のプレゼントがあった。記念登山は予期せぬ降雪のため中止となった。

《自然保護関係》

自然保護全国集会(7月910日)には2名の自然保護委員が参加できなかった。

《支部報『やま』の発行》

11月15日に支部報『やま』14号を発行した。前事務局長の尽力によるところが大きい。

《今後の課題》

前支部長から引き継いだ「学校から見える山」イラストプレゼントは長期的視野に立った会員の増加作戦の一環ともいえるものであり、この活動が県内に広く拡散されることを願うところである。

(野堀嘉裕)

福島支部

平成29年12月に支部創立70周年を迎え、①記念誌出版(資料発掘)、②記念山行、③70周年記念祝賀会開催の3事業をほぼ完遂させることができた。

公益事業では、東日本大震災の年から継続してきた山岳3地域(吾妻、安達太良、那須・甲子)放射線量調査と記録化を実施、測定値把握記録化。さらに登山道整備、植生復元、一般公募の「フリークライミング講習会」、山の日「親子登山」を継続実施した。しかしその中身は一部会員の参加に限られ、会員拡大も成果を得られなかったことが反省点として上げられ今後の課題でもある。

《会議》

*4月8日(土) 支部総会開催。事業報告、年間活動計画、決算、予算、支部役員案など満場一致で可決。出席者19名(委任状

45名)。支部総会に先立つ4月1日(土) 第1回支部役員会開催、出席者12名。次年度事業方針について協議。

*11月10日(金) 第2回支部役員会開催。上半期活動総括と下半期計画。

《山行・野外活動》に向けた取り組み競技。

*5月20日(土) 「第4回フリークライミング講習会」開催、地元紙で行事内容を公募、12名参加。一般参加者の基本技術と実技習得実施。

*6月24日(土) 自然保護クラブ主催の吾妻山姥ヶ原荒廃地の植生復元作業に5名参加。

*8月11日(祝) 第2回山の日「安達太良山親子登山」実施。公募の未就学児など20家族70人の親子が参加。支部員など20名体制で安全登山と広報に努めた。

*9月4日(月) 吾妻山登山道整備作業に支部員7名参加。

*10月9日(月)・10日(火) 新潟・福島県境の峠道「八十里越」山行をテント泊で実施、支部員11名参加。

*11月11日(土)・12日(日) 霊場「霊山」での支部員交流会と初冬山行を実施。13名参加。

*2月18日(日)・19日(月) 本部山行委員会主催「裏磐梯イエローフォール」スノートレックに支部員11名参加。

*2月23日(金) 冬山山行「ニッ小屋氷柱探索」実施。5名参加。

*3月17日(土) 春山スキー・スノーシューツアー(裏磐梯・猫

魔岳)実施、8名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

*4月上旬、11月山岳地域放射線測定(公益事業) 吾妻、安達太良、那須・甲子を選定 山頂、登山道の定点測定実施。延べ18日、18人参加、測定値記録。

*平成27年に立ち上げた「支部創立70周年記念事業委員会」は12月9日開催の「70周年記念祝賀会」をもって終了、解散した。この間、記念誌発行、記念山行、資料発掘作業を3年越しに取組み、ほぼ完遂した。

《広報、出版》

*支部創立70周年記念誌「やまなみ」(A4判・155ページ、130部)発行。

*四半期ごとの支部活動を集約した「支部会報」年5回発行、全会員に配布。

《その他の行事、懇親会》

*9月3日(日) 吾妻小舎での「支部納涼会」10名参加。

*2月3日(土) 支部新年会 郡山市内で開催15名参加。

(渡部展雄)

茨城支部

茨城支部は2007年に支部設立最小限の21名で発足して10

年経過し、会員数も42名となり、2017年は創立10周年を記念して諸行事を実施した。

支部総会は年1回開催し、支部例会は原則として隔月に開催している。総会および支部例会に先行して2時間、公益事業として一般市民にも公開した講演会を開催している。支部山行は、ほぼ毎月実施し、そのほかに公益事業として茨城県自閉症協会親子登山への協力登山を、当支部会員が数名参加し実施している。茨城支部報は年1回6月に発行している。

平成30年3月末現在、会員42名、支部友11名、合計53名。

《会議》

*5月28日(日) 支部総会(年1回) 土浦駅前・ウララビル5階会議室。

*4月16日(日)、9月10日(日)、11月19日(日)、1月14日(日) 支部例会 土浦駅前・ウララビル5階会議室。

*6月5日(月) 臨時支部役員会 土浦市・ホテルマロウド(参加者5名)。

*7月20日(木) 臨時支部役員会 土浦市・奥井サロン(参加者13名)。

*3月5日(月) 臨時支部役員会 土浦市・奥井サロン(参加者7名)。

《講演会》公益事業として会員以外の一般市民にも公開

*4月16日(日) 「黄金の国ジパングー金山と金の話」 茨城自然

博物館長・横山一巳氏 参加者…会員18名 一般市民10名
合計28名。

* 6月17日(土) 「茨城県内 山岳寺社の祭礼」 茨城支部 酒井
國光氏(日本山岳文化学会会長、日本ヒマラヤ協会顧問) 参
加者…会員32名。

* 9月10日(日) 「地磁気と地磁気観測所」 茨城支部 河村まこ
と氏(元気象大学校長) 参加者…会員22名 一般市民10名
合計32名。

* 11月19日(日) 「アングレスの山々とインカの民」 茨城支部事務
局長 西川元禧氏 参加者…会員20名 一般市民13名 合計
33名。

* 1月14日(日) 「日本地図作成史と古地図」 茨城支部 長岡正
利氏(国土地理院客員研究員) 参加者…会員20名 一般市民
3名 合計23名。

《支部創立10周年記念行事》

* 6月17日(土) 支部創立10周年記念式典 土浦市・ホテル マ
ロウド 参加者…近隣3支部の支部長、事務局長、県自閉症
協会長をはじめ32名。

* 8月11日(金・山の日) 2ヶ月後に茨城支部が主催する全国
支部懇談会に向け、直前の準備と会員の結束を図るための会
議とビアパーティを実施 牛久市・牛久シャトー 参加者…
22名。

* 10月13日(金)～14日(土) 第33回全国支部懇談会を主催 支部活
動の活性化に結び付く起爆剤とすべく支部創立10周年記念
事業として全国支部懇談会を茨城で開催。1日目…筑波温
泉・つくばグランドホテルで講演会と懇親会 2日目…筑波
山登山または「地図と測量の科学館」と「地質標本館」の見
学 参加者…全国26支部から140名
* 11月4日(土) 全国支部懇談会実施の慰労会と反省会 牛久
シャトー 参加者…20名。

* 11月13日(月) 支部創立10周年を記念し、岩崎元郎氏「健康登
山講座」実施。土浦市亀城プラザ2階文化ホール 参加者…
178名。

《支部山行》

* 4月25日(火)～27日(木) 屋久島・宮之浦岳 参加者4名。

* 4月28日(金)～5月1日(月) 霧島・韓国岳登山と人吉お城まつ
り 参加者15名。

* 5月6日(土) 群馬・西上州神成山 参加者9名。

* 6月11日(日) 埼玉・鐘撞堂山・鉢形城 参加者5名。

* 6月26日(月)～28日(水) 岩手・兜明神山・岩神山、七時雨山
参加者4名。

* 8月22日(水)～23日(木) 中央アルプス・木曾駒ヶ岳 参加者9
名。

* 11月27日(月)～29日(水) 奈良・金剛山、葛城山・千早城 参加

者2名。

* 12月6日(水)～7日(木) 忘年山行・大子町月居山 参加者11名。

《特別山行》公益事業として茨城県自閉症協会 親子登山への協力登山

* 6月11日(日)～12日(月) 東吾妻山～一切経山 下見登山 茨城

支部参加者4名。

* 7月2日(日) 茨城・難台山 トレーニング登山 茨城支部参加者2名 協会14名。

* 8月5日(土)～6日(日) 東吾妻山～一切経山 茨城支部参加者5名 協会28名。

《広報活動》

* 6月1日(水) 茨城支部報(年1回)の発行。今回は「支部創立10周年記念号」として支部活動10年間を振り返る内容とした。

《その他の行事》

* 12月2日(土) 日本山岳会晩餐会 新宿・京王プラザホテル 茨城支部参加者5名。

* 2月17日(土)～18日(日) 栃木・千葉・茨城・群馬4支部合同懇談会(栃木支部主催) 塩原温泉・明賀屋本館 山行は新潟湯富士 茨城支部参加者4名。

(西川元禧)

栃木支部

栃木支部は設立して11年目となった。栃木県では8月に第2回「山の日」記念全国大会が開催され、その連携イベントとして栃木支部で6月に「山の講演会」と7月に「親子登山教室」を開催した。また、本年度より栃木県山岳遭難防止対策協議会に構成員として加わり、「山の日」に合わせて発表された栃木県「山のグレーディング」の作成を行なった。

支部会員数はここ数年50名前後で推移している。復活会員の支部入会もあったが、会員増の傾向には至っていない。会員の高齢化は進み、支部活動を担う若手会員の増強が急務であることに変わりはない。

今年度「次期リーダー育成と会員増強」を目的に、特別事業補助金を受けて、ユース栃木で「谷川岳虹芝寮スプリングミーティング」と「雪崩勉強会」を実施した。群馬支部、本部や県山岳連盟などに広く案内し、参加者を得ることができた。日本山岳会の活動を理解していただいて、会員のスキル向上と増強につながれば良いと考えている。中高年層に対するマスターズクラブは「栃木百名山登山」を継続している。また今年度は栃木支部主管で北関東ブロック(千葉支部・茨城支部・群馬支部・栃木支部)の定例行事である4支部合同懇談会を那須塩原で開催した。

登山の振興と安全登山教育を目的に奥日光で行なう「親子登山教室」は6年目を迎え、今年度は大真名子山で実施した。また「山の講演会」では各県で設定されつつある「山のグレーディング」についてその狙いと内容を説明した。とちぎTVでその活動を報道されたことは、日本山岳会の良いPRとなった。

《会議》

*5月28日(日) 通常総会 事業報告・計画、決算・予算・記念行事募金および栃木支部規約改定など原案通り満場一致で可決した。出席22名。総会終了後懇親会を開催、懇談に親交を深めた。

*支部役員会 平成29年度役員会7回開催。支部役員と事業委員など毎回8名が集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》

*4月8日(土) 春山山行 鶏足山 参加14名。

*8月19日(土)～20日(日) 夏山山行と懇親会 奥鬼怒加仁湯鬼怒沼山 参加11名。

*1月21日(日) 冬山山行 赤雪山・仙人ヶ岳 参加12名。

*2月17日(土)～18日(日) 北関東ブロック4支部合同懇談会 栃木支部主管で那須塩原温泉で開催。講演「ツキノワグマ未知の姿」、新湯富士登山、塩原観光などを実施した。参加4支部会員合わせて35名。

*上記支部山行のほかマスターズクラブでは、支部会員同士の

健康のため栃木百名山を中心に山行を行なった。今年度は屋久島・宮之浦岳、日光高山、千部ヶ岳、中禅寺湖一周、大鳥屋山、岳ノ山、湯殿山、谷倉山の山行を実施し、日光清掃登山にも参加した。

《プロジェクト・地域振興活動》

*4月15日(土)～16日(日) 谷川岳虹芝寮スプリングミーティング ユース栃木主催で成蹊学園虹芝寮を拠点に開催。親睦を深めながら一ノ倉岳スキー登山を行なった。参加は栃木支部、群馬支部ほか7名。

*7月2日(日) 日光清掃登山 栃木県山岳連盟との共催 前白根山・奥白根山・五色山他 参加支部関係者15名。

*7月22日(土)～23日(日) 親子登山教室 奥日光の光徳・大真名子山で「第2回「山の日」記念全国大会連携イベント」として開催。学習院山桜会や栃木県山岳連盟・県教育委員会などの後援を受けた。参加親子12家族27名、支部関係者12名。

*9月3日(日) 那須岳クリーンキャンペーン 那須岳周辺(平成の森) 参加者支部関係者9名。

*2月24日(土)～25日(日) 雪崩勉強会 日光湯元ビジターセンター・白根山登山口周辺 ユース栃木主催で講師2名を招き日光湯元で開催した。栃木・群馬支部や本部会員のほか、県山岳連盟会員など参加19名。

《広報・出版活動》

*5月28日(日) 栃木支部報第10号を発行。

《講演会》

*6月25日(日) 第11回「山」の講演会 栃木県青年会館(コンセーレ…共催)で「第2回「山の日」記念全国大会連携イベント」として実施。参加76名(内一般55名)。長野県の原一樹氏(前長野県山岳遭難防止対策協会書記)が「山のグレーディング」について、ねらいと内容を解説した。

*12月17日(日) 第9回ヒマラヤの集い 栃木県青年会館(コンセーレ…共催)で実施。参加58名(内一般38名)。12月17日栃木県青年会館(コンセーレ…共催)で実施。参加者58名(一般参加38名)。上杉純夫氏(前栃木県山岳連盟副会長)がヒマラヤトレッキングについて、写真とともにその楽しみ方を解説した。

《「山の日」制定記念行事》

*9月3日(金) 栃木県「山の日」協議会主催「安全のためのファミリー登山教室in那須」 那須岳周辺。栃木県山岳3団体で、安全な山登りの楽しみ方や自然のすばらしさを体験する登山教室を実施する予定であったが、台風通過による強風のため中止とした(親子77名参加予定)。

(前田文彦)

5月の総会で、田中壯佑前支部長が闘病のため退任、北原秀介新支部長に交代した。それに伴い、役員の一部も代わり、新体制がスタートした。

9月初め、支部創立に尽力され、4年間にわたり支部をリードしてきた田中前支部長が亡くなられた。まさに精神的支柱を失ったようなショックだった。支部には高校時代からの親友や、ヒマラヤを共にしたものもあり、その喪失感は計り知れないものだった。田中前支部長の思いを胸に、氏の退任後、そして逝去後も各種イベントや山行など支部活動は積極的に進められた。

《会議》

会議は隔月(奇数月)の例会を柱に、必要に応じて、役員会、山行や事業等の委員会を開いた(以下、例会のみ記す)。

*5月17日(水) 通常総会(前橋・群馬県社会福祉総合センターで第22回例会を兼ねて開催) 28年度事業報告・会計報告、29年度事業計画・予算などを審議。田中前支部長の退任の意向を踏まえ、支部長に北原会員、平野前副支部長の退任に伴い副支部長に黛監事を、監事に鈴木会員をそれぞれ選任した。出席(委任含む)29名。

*7月19日(水) 第23回例会(高崎・南公民館) 自然保護全国集

会等の報告。山フェスタ・山の日イベントin谷川岳への対応などを協議。健康登山塾開講が提案され、検討をスタートすることが決定。出席16名。会議後のショートスピーチは宮川会員による「新陰流」。

*9月20日(水) 第24回例会(高崎・南公民館) 9月4日に逝去された田中前支部長への黙祷が始まる。山フェスタ、山の日イベントin谷川岳、国体ブロック大会などの報告。健康登山塾のシミュレーション山行を決定ほか。出席18名。会議後のショートスピーチは根井会員による「ふるさとの山の本」。

*11月15日(水) 第25回例会(前橋・群馬県社会福祉総合センター) 会議前に故田中前支部長が自らの山歴をまとめたスライドショー上映と金子会員によるスピーチを行なう。会議では計画書の提出徹底や支部創立5周年記念行事などの役員会議報告。支部ホームページの開設、健康登山塾についての報告など。出席23人。会議後のショートスピーチは石垣会員による「トレイルランニングの問題とは」。

*1月17日(水) 第26回例会・新年会(前橋・うたや) 支部長年頭挨拶、事務局からの連絡のあと、新年会。出席20名。

*3月22日(木) 第27回例会(高崎・南公民館) 健康登山塾や稜線トレイルなどの支部事業を統括する事業委員会の設置を承認、委員長に武尾会員。上毛新聞社企画の新登山ガイドブックのコース取材計画、稜線トレイルの完全踏破について協議

など。出席13人。

《山行・野外活動》

支部山行も3年目を迎え、谷川岳周辺での自然観察ツアーも含めると今年度も6回実施した。尾瀬合宿山行では支部会員の懇親を深めることもできた。30年度実施を目指した「健康登山塾」のシミュレーション山行も行ない、年度明け早々に始まる塾の準備にも事業委員会を設置し精力的に取り組んできた。

*5月28日(日) 支部山行(荒船山) 内山峠から荒船山周回コースと荒船不動から兜岩山の2コースに会員9名が参加。

*6月25日(日) 支部山行(湯ノ丸山) 地藏峠から烏帽子岳鞍部経由で湯ノ丸山へ。会員10名が参加。

*8月11日(祝) 山の日イベントin谷川岳 山麓の自然観察会(6名)、天神尾根(2名)、清水峠弾丸ツアー(1名)など講師、スタッフとして会員が同行した。

*10月21日(土)・22日(日) 支部合宿山行(尾瀬至仏山・ロッジ長蔵) 21日、尾瀬至仏山を目指すも雨天で小至仏山まで。夜はロッジで懇親会。参加9名(会員2人はそれぞれ夫婦で参加)。

*11月26日(日) 支部山行(西上州笠丸山) 30年度開始予定の健康登山塾のシミュレーション山行として実施。血圧、脈拍などを計測しながらデータを集める。会員と医師、看護師など18名が参加。

＊3月10日(土) 支部山行(足利行道山) 栃木支部のサポートも受け、一般参加2名を含め8名が参加。

《プロジェクト・地域貢献活動》

群馬県庁で7月に開かれた「ぐんま山フェスタ」では、地元紙の上毛新聞社、県山岳連盟、県勤労者山岳連盟とともに共催団体に加わり、その企画段階から携わった。群馬支部では斎藤繁理事による健康と登山に関する講演会を柱に、日本山岳写真協会会長の橋本勝会員による山岳写真展や、会員による登山相談コーナーなども設け、来場者に山の魅力をアピールした。さらに、日本山岳会3代会長木暮理太郎を顕彰する出身地・太田の「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の協力による資料展示なども例年どおり行なった。イベント全体としても成功を収め、来場者数は前年を上回る5800人を集めた。

8月には、谷川岳を舞台にした恒例の「山の日記念イベント」(谷川岳エコツーリズム推進協議会・群馬県山岳団体連絡協議会主催)も開かれ、群馬支部では岳連、労山とともに谷川山麓での家族自然観察ツアーを主管したほか、登頂コースや清水峠越えなどにもスタッフを出し、その運営に携わった。

3月には、橋本・根井両会員が前橋市上川淵公民館のセカンドライフセミナーの講師として、それぞれ「山岳写真入門」「登山入門」をテーマに講演した。それぞれ一般市民19名、29名が参加。

《広報・出版活動》

支部報を予定通り年2回(7月と1月)、6号と7号を発行した。秋には支部運営のホームページも開設し、フェイスブックも試行的にスタートした。

《その他の行事》

＊2月10日(土) 救急法講習会(前橋・前橋市総合福祉会館) 日本赤十字から講師を招き、会員を対象に実施。10名が参加した。

(根井康雄)

埼玉支部

平成29年度は、自立した登山者育成のための登山教室「埼玉やま塾」開講に向けた準備を開始している。また、「山の日」記念事業として、ウエスタ川越を会場に埼玉県山岳連盟主催で開催した、2017「山の日」小江戸川越夕涼み・トークショーとミニコンサートに参加した。

支部活動は各委員会が年間計画を掲げて支部事業を推進している。広報委員会では、埼玉支部ホームページの活用を推進し、年3回の支部報発行を実施した。社会貢献委員会では、埼玉県障害者スポーツ協会と共催で毎年恒例の「ふれあい登山」を実施した。自然保護委員会では、越生町教育委員会の後援で「大高取山自然観察会」、さいたま森林サポータークラブと「森づくり」

などを共催した。山行委員会では、毎月1回の月例山行で多様な会員の要望に合わせた山行、四季の山として季節の特徴を生かした山行を実施した。登山教室の指導者養成および次世代を担うリーダー養成のために、日本山岳会主催の初級登山教室指導者養成講習会や最新の登山技術装備に精通した登山ガイドの指導のもと、沢登り・岩登り・雪山登山などを実施した。安全登山委員会では、セルフレスキュー・救急救命法や山岳救助隊による安全登山に関する講演会、講習会を実施した。

《総会》

* 4月15日(土) 平成29年度通常総会(埼玉会館4階 A会議室)は、134名(現在会員)、出席者39名、委任状は79名で開催され、松本支部長を議長に選出し、平成28年度事業報告および収支決算報告、平成29年度事業計画(案)および収支予算(案)、支部役員人事(案)、並びに支部規約改定(案)が承認された。

《埼玉支部委員会》

* 毎月開催 支部長・支部委員・会計・監査・事務局長が出席して、各委員会の事業報告や計画の立案・審議・承認等を実施した。行事・講演会・講習会・自然観察会・支部新年懇談会・ふれあい登山・「山の日」など。

* 4月9日(日)「ふれあい登山」は東飯能駅から天覧山および多摩主山を登山し、吾妻峡から飯能駅または東飯能駅に下山

した。参加者は障がい者25名、付き添い26名、山岳関係者31名、障害者スポーツ協会9名など計91名で、障がい者との親睦を深めた。

* 4月29日(土)～30日(日) 自然保護委員会は、第3回高尾グリーンセンター森づくり研修会を開催し、すかんぼの会、グリーン倶楽部を含め、計14名(会員9名)が参加した。

* 5月13日(土)、自然保護委員会は、第6回大高取山自然観察会の解説者研修会を開催した。

* 5月14日(日) 自然保護委員会は越生町教育委員会の後援を得て、第6回大高取山自然観察会を開催し、新井越生町長、越生町、東京多摩・千葉支部などから計42名が参加。

* 5月28日(日) 自然保護委員会は森林サポータークラブと共催で、第1回森づくり&自然観察会を、狭山丘陵・緑の森博物館周辺で草刈りを実施した。

* 6月10日(土)～11日(日) 自然保護委員会は玉原高原でブナ林&湿原観察会を開催し、すかんぼの会7名を含め計18名が参加した。

* 6月3日(土) 安全登山委員会は「ハイキングレスキュー講習」を飯能市市民会館および天覧山周辺で開催し、埼玉岳連の瀬藤武氏を講師に会員14名を含む28名が参加。

* 9月1日(金)「山の日」記念事業として、埼玉県山岳連盟主催の2017「山の日」小江戸川越夕涼みトークショーとミニ

コンサートを後援、総参加者164名（内会員5名）。

* 10月8日(日) NPO埼玉森林サポータークラブと共催で、第2回森づくり活動および自然観察会を越生町ふれあいの里で開催した。

* 10月21日(土)～22日(日) 小鹿野町北斜面付近で第6次シカ生態系調査を実施した。

* 9月20日(水) 安全登山講演会では「ガイドが考える安全な登山」と題し、日本山岳ガイド協会認定登山ガイドⅡで埼玉支部会員の平川陽一郎氏を講師に浦和コミュニティセンター10階で開催した。参加者は会員19名、一般26名（総数45名）であった。

* 平成30年1月13日(土) 新年支部懇談会は、東吾野駅に集合し、奥武蔵・ユガテ～日和田山を23名でハイキング、その後、飯能市内の清河園で懇親会を開催（24名参加）。

* 1月20日(土) 安全登山講演会では「今、山で何が起こっているか」と題し、埼玉県警山岳救助隊飯田前副隊長による講演に47名（一般28名、会員19名）が参加した。

* 2月25日(日) 安全登山講習会「山仲間のセルフレスキューを学ぶ」は恵秀彦氏および渡邊浩氏を講師に川鍋ビル8Fで開催され、一般参加8名を含む総計19名が受講した。

《山行・三支部合同懇親山行》

* 4月16日(日) 総会記念山行として、群馬県の上州三峰山に19

名が登山した。

* 5月20日(土)～21日(日) 四季の山(春)に、女峰山～小真名子・大真名子を8名で縦走した。

* 6月4日(土) 二子山・武川岳を10名で登山した。

* 6月11日(日) 西沢・沢胡・桃沢廻行（初級沢登り）を平川ガイドと会員6名が参加。

* 7月1日(土)～2日(日) 平ヶ岳(伝之助小屋)中ノ俣ルート(積雪のため中止)を12名が参加。

* 8月4日(金)～6日(日) 四季の山(夏)を鳥海山に10名で登山した。

* 9月2日(土) 箱根外輪山の明神ヶ岳・明星ヶ岳に5名で登山した。

* 9月30日(土)～10月1日(日) 天城山(万二郎岳・万三郎岳)に6名で登山した。

* 10月15日(月)～16日(火) 丹沢・水無川廻行に平川登山ガイドと会員7名が参加した。

* 10月28日(土)～29日(日) 神奈川支部主催による第2回南関東ブロック懇親山行(3支部)が神奈川県山岳スポーツセンターで開催され、東京多摩(9名)・神奈川(12名)・埼玉(3名)支部から計24名が参加したが、台風22号の影響で登山は中止となった。

* 11月3日(土)～4日(日) 毛木平～十文字峠～白泰山～栃本コ

千葉支部

スを6名で登山した。

* 12月9日(土)～10日(日) 忘年山行(農園ホテル泊)は正丸駅、

正丸峠に14名が参加。

* 2月17日(土)～18日(日) 四季の山(冬)を、平川会員と共に入

笠山・蓼科山で実施(13名参加)。

* 3月3日(土) 白石車庫から堂平山・丸山(芦ヶ久保駅)に14

名で登山した。

《全国支部懇談会》

* 平成29年10月13～14日、第33回全国支部懇談会が筑波温泉「つ

くばグランドホテル」および筑波山などを会場に茨城支部主

催で開催され、埼玉支部からは13名が参加。

《海外登山》

* 平成30年1月22日(月)～28日(日) ハワイ・ネイチャートレッキ

ングを8名で実施。

《埼玉支部報の発行、ホームページの活用・再構築など》

* 埼玉支部報は、21号を6月、22号を11月、23号を3月に発行

した。

* デジタルメディア委員会の全面的な協力を得て埼玉支部ホー

ムページを再構築し、山行・行事・講演会・講習会などの情

報を会員に迅速に提供するとともに、一般登山愛好者にも最

新の活動状況を提供するなど、会員増にも期待される。

(松本敏夫)

千葉支部は2017年、誕生してからちょうど10年目の節目を迎えた。8月には記念祝賀会を開催し、盛大に祝うことができた。これに先立ち7月にはロシア・カムチャツカ半島のアバ

チャ山へ記念山行を行ない14名参加、11人が山頂を踏んだ。4

シーズン目を迎えた房総半島の東京湾側から太平洋側に横断し

「安房と上総」を分ける郡界尾根踏査もほぼ終了し、太平洋の海

に出合う1回を残すだけとなった。支部山行については、年間

を通じて活発に行ない、安全登山を楽しんでいる。

支部会員数は93名で、物故会員もいて、ほぼ横ばいであるが

支部独自の制度である会友は47名おり、その中から会員になる

者も少なくない。山歴が浅くとも、支部山行で経験を積んだ人

には、積極的に会員に推薦することになっている。

《会議》

* 5月13日(土) 通常総会 出席74名(当日出席35名、委任状39

名)。

* 定例役員会 毎月第3火曜日に開催

《設立10周年記念式典・祝賀会》

* 8月26日(土) 10周年記念式典と祝賀会 船橋グランドホテル

参加者…来賓11名、会員47名、会友9名。

《山行・野外活動》

《山行・野外活動》

* 4月2日(日) 三龜山 参加20名。

* 4月15日(土) 西印旛沼散策Ⅱ 参加9名。

* 4月23日(日) 丹那断層と函南原生林の自然観察 参加23名。

* 6月3日(土) 4日(日) 尾瀬・燧ヶ岳 参加6名。

* 6月10日(土) 11日(日) 御座山・高峰山 参加8名。

* 7月2日(日) 奥武蔵・棒ノ折山 参加11名。

* 7月15日(土) 佐原の大祭 参加10名。

* 7月21日(金) 25日(火) 創立10周年記念山行 カムチャツカ・

アバチャ山 参加14名。

* 8月19日(土) 20日(日) 北ア・白馬岳 参加8名。

* 9月10日(日) 足利・大小山 参加20名。

* 12月9日(土) 養老溪谷・大福山とチバニアン 参加14名。

* 12月23日(土) 24日(日) 三ツ峠(忘年山行) 参加6名。

* 1月6日(土) 景信山・東尾根(新年山行) 参加7名。

* 1月13日(土) 津辺野山・江月水仙ロード(新年山行) 参加20

名。

* 2月4日(日) 箱根・湯坂路 参加13名。

* 2月10日(土) 浦安散歩 参加12名。

* 3月4日(日) 5日(月) 伊豆大島・三原山 参加16名。

* 3月10日(土) 鍋割山と塔ノ岳 参加4名。

* 3月31日(土) 高水三山(読図講習会) 参加14名。

《プロジェクト・地域振興活動》

・房総半島郡界尾根踏査

* 10月31日(火) 東大演習林四郎治林道 参加3名。

* 11月12日(日) 白岩・麻綿原 参加11名。

* 12月16日(土) 麻綿原・勝浦ダム 参加11名。

* 1月28日(日) 勝浦ダム・台宿 参加10名。

* 2月24日(土) 台宿・日蓮寺 参加12名。

・青少年野外活動支援

* 5月5日(金) 児童養護施設児童引率・扇山 参加16名。

* 8月2日(水) 児童引率・富士山お中道 参加18名。

* 8月28日(月) 29日(火) 児童引率・高峰高原 参加12名。

* 11月25日(土) 児童引率・日和田山・物見山 参加12名。

* 1月20日(土) 児童引率・笹尾根 参加8名。

* 12月10日(日) 親子登山・内浦山県民の森 参加51名。

《広報・出版活動》

「千葉支部だより」 A4判16ページ 年4回(6・9・12・

3月) 発行。

《講演会》

* 5月13日(土) 総会記念講演「槍ヶ岳と慈恵医大槍ヶ岳診療所」

浜口欣一会員(6778) 慈恵医大山の会

* 8月26日(土) 設立10周年記念講演「日本の氷河と山の姿」

小嶋尚会員(9512) 明治大学名誉教授

《その他行事》

- ・ 全国支部懇談会（10月・茨城支部主催） 参加6名。
- ・ 4支部合同懇談会（2月・栃木支部主催） 参加10名。
- ・ 関東7支部情報交換会（7月）、支部合同会議（9月）、支部連絡会議（12月）、年次晩餐会（12月）

（三田 博）

東京多摩支部

初心者登山教室は立川市民交流大学講座として継続中、初級登山教室へつなげる形で進めている。今年度4月には第4期初級登山教室修了生22人の内、1名が会員、18名が準会員として入会した。平成30年4月も第5期修了生から10人を超える入会者が見込まれ、修了生会員は60人を超える見通しである。

安全登山を担保するため、支部全体の活動実態から導き出された改善点の提言を安全委員会でまとめている折、本部より個人山行を含む全山行登山計画書の提出と計画内容の吟味・検討・変更指導体制づくりの指示が出て、全体のシステム作りが先行する形となった。

5周年記念事業の締めくくりとして、多摩百山選定、会員延べ150人による取材山行記事をベースに登山ガイド作成が終了し、2月にホームページで「多摩百山ガイド」として一般に公開、会員には報告書を届けた。

《会議》

- ・ 5月6日(土) 立川市女性総合センター第3学習室にて通常総会 27年度事業報告・収支決算案、28年度事業計画・予算案などを審議。出席200名(当日出席67名、委任状133名)。
- ・ 幹事会 立川市女性総合センター第1会議室にて毎月第3火曜日開催 幹事・監事が延べ173名出席。予算・決算・事業計画・プロジェクト事業等の審議・活動報告。
- ・ 総務、財務、広報、IT、山行、集会、自然保護、安全、奥

多摩BC運営委員会の9つの委員会と登山教室、多摩百山、2017雲取山標高年、支部運営課題検討、10周年記念検討の5つのPTが毎月開催。

《山行・野外活動》

- ・ 定例山行 9回実施、延べ149名参加。

4月15日(土) 両神山20名、5月12日(金)・13日(土) 立山・雄山9名、6月10日(土) 櫛形山20名、7月29日(土)・30日(日) 13名、8月26日(土)・27日(日) 爺ヶ岳16名、9月30日(土)・10月1日(日) 木曾駒ヶ岳16名、12月9日(土) 長尾平28名、2月11日(日)・12日(月) 上高地スノーハイク12名、3月3日(土) 幕山15名。

・ 平日山行 毎月第3木曜日実施。10回実施、延べ105名参加。

4月20日 養山18名、5月16日 三頭山6名、6月15日 伊豆ヶ岳11名、7月20日 破風山7名、9月21日 城峰山7名、11月16日

石老山6名、12月21日大丹波ナイトウォーク13名、1月16日

子ノ権現20名、2月15日大野山7名、3月15日鷹取山10名。

・登山技術講習会 8回実施、延べ参加者79名。

7月15日(土)・16日(日) 日和田山9名、7月23日(日) 両神山7

名、9月10日(日) 四阿山11名、10月8日(日)・9日(月) 南八ヶ

岳縦走8名、11月25日(土)・26日(日) 飛竜山9名、12月24日(日)

日和田山12名、1月6日(土)・7日(日) 瑞牆山・金峰山11名、

2月24日(土)・25日(日) 杣添尾根・横岳12名。

・4月2日(日) 奥多摩山開き参加37名。

・4月2日(日) 新入会員交歓散策・奥多摩―鳩ノ巣参加37名参

加。

・6月22日(木)・23日(金) 三ツ峠アツモリソウ保護活動12名。

・8月6日(日) 高尾山親子森育ハイキング 参加33名。

・8月17日(木) 会員向け御岳山レンジショウマ観察会 参加8

名。

・8月22日(火) 御岳山レンジショウマ観察会 一般参加9名。

・10月8日(日) 国立四小高尾山観察ハイキング学童16名、保護

者4名、教員・育成会4名参加、会員8名 計32名参加。

・10月17日(土)・18日(日) おくたま地域振興財団との共催で20

17年雲取山記念登山 一般参加16名。

・10月28日(土)・29日(日) 3支部合同懇親山行参加9名。

・11月5日(土)・6日(日) 2017雲取山Year記念登山 参

加19名。

・12月27日(木) 会員向け高尾山シモバシラ観察会参加16名。

・1月5日(金) 高尾山シモバシラ観察会 一般24名、会員9名

参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

・4月～3月第5期初級登山教室 受講生22名。

・4月～6月立川市と共催で初心者向け登山講座 受講生41

名。

・7月～3月第6期初級登山教室 受講生17名。

・3月17日(土)・18日(日) 登山教室リーダー研修山行「八ヶ岳・

天狗岳」参加17名。

・奥多摩B.C. 今年度の利用者数は延べ118名。

・2月多摩100山。コースガイド作成。ホームページで公

開。

会員向けに報告書作成・配布。

《広報・出版活動》

・支部報「たま通信」4月、7月、10月、2月の4回発行。

・ホームページ100回ほど更新。

・メールマガジン「たま便り」60回配信 購読者230名。

《講演会》

・6月22日(木)「奥多摩の遭難を考える」一般14名、会員46

名。 計60名参加。

- ・ 10月25日(木) 「山の自然保護を考える」一般・会員30名参加
 - ・ 11月3日(金) 「雲取山荘よもやま話」一般・会員92名参加
- 《安全講習会》

・ 「やさしい山の天気講座」6月16日(金)、9月7日(木)、12月7日(木)、3月1日(木) 4回、延べ85名参加。

・ 11月12日(日) 「ロープワーク講習会」日和田山参加23名。

・ 11月13日(月) 「緊急連絡網シミュレーション研修会」参加25名。

・ 2月10日(土) 「セルフレスキュー講習会」参加9名。

《その他の行事・懇親会》

・ 7月6日(木) 新入会員オリエンテーション 参加32名。

・ 8月12日(土) 納涼ビアパーティ 参加26名。

・ 11月18日(土) 秋の水川溪谷ハイクと芋煮会 参加11名。

・ 1月27日(土) 新年の集い 参加81名。

・ スキー同好会 4回開催延べ16名参加。

・ 沢登り同好会 トレーニングを含め12回開催延べ73名参加。

・ 山の唄を歌う会 6回開催延べ72名参加。

・ 3地区サテライト・サロン 延べ10回開催 186名参加。

(山本憲二)

神奈川支部

神奈川支部は平成28年3月19日に日本山岳会33番目の支部として設立された。

平成29年度は、支部設立を記念して立ち上げた「かながわ山岳誌プロジェクト」を本格的に始動して月2回の踏査山行を実施し(7・8月を除く)、2つのグレード(ハイキング・登山初級程度のレベルⅡL、登山中・上級のレベルⅡH)およびキックオフ山行の計16回の山行により、約80のコース282ポイントのうち16コース67ポイントを踏査した。本プロジェクトは支部公益目的事業として5年計画で実施するもので、神奈川県下のはばすべての山と主要な峠を踏査し、『日本山岳誌』の神奈川版を作成する。単なる登山ガイドにとどまらず、地学、気象、山岳信仰や山名の由来などの文化的な情報も加えた総合的な山岳記録誌を目指しており、その情報提供などを通して社会へ貢献することを目的としている。踏査山行はプロジェクトチームを中心に支部会員が協力して行ない、ハイキング・登山初級程度のレベルの山行は原則として支部会員以外の方にも公開している。

このほかの支部公益事業として、鈴木正崇氏(当会会員)による「山の日」施行記念公開講演会「相模の山岳信仰―大山・八菅・山北・秋葉―」(同時開催:神奈川大学山岳部活動報告会)

を開催した。

他支部との交流として、南関東ブロック3支部（東京多摩・埼玉）合同山行を主催し、静岡支部との第2回交流会（静岡支部主催）および支部懇談会（茨城支部主催）に参加した。

このほか、支部員の提案によるスケッチ山行やスキー山行、山行報告会等を実施した。また、YOUTH CLUBなどの活動を支援するための環境整備を進めた。

支部報（電子版）は年度中に4回発行し、JAC神奈川支部のウェブサイトに掲載するとともに支部会員にメール配信を行なった（郵送は有償で希望者のみ）。

支部設立以来、山行委員会の運営などにご尽力いただいた井村英明副支部長が1月25日に永眠された。

《『かながわ山岳誌』 踏査山行》

* 4月15日(土) プロジェクトキックオフ山行（湘南平） 24名参加（内非会員4名）。

* 6月10日(土) 鳶尾山・八菅神社（L） 8名参加（内準会員1名、非会員1名）。

* 6月24日(土) 経ヶ岳・仏果山（H） 6名参加（内準会員1名）。

* 9月9日(土) 与瀬（L） 13名参加（内準会員1名、非会員1名）。

* 9月23日(土) 箱根明神ヶ岳（H） 7名参加。

* 10月7日(土) 鍋割山（L） 2名参加。

* 11月11日(土) 箱根湯坂道（L） 9名参加（内非支部員1名）。

* 11月25日(土) 菰釣山（H） 4名参加。

* 12月9日(土) 鎌倉（L） 10名参加。

* 12月23日(土) 日影山（H） 4名参加。

* 1月13日(土) 白山（L） 新年会12名参加。

* 1月27日(土) 大杉山（H） 2名参加。

* 2月10日(土) 円海山（L） 10名参加（内非会員1名）。

* 2月24日(土) 檜岳山稜（H） 3名参加。

* 3月10日(土) 湯河原幕山（L） 4名参加。

* 3月24日(土) ミツバ岳（H） 7名参加。

《他支部との交流》

* 10月13日(土)～14日(日) 全国支部懇談会（つくばグランドホテル、茨城支部主催） 1名参加。

* 10月28日(土)～29日(日) 南関東B（東京多摩・埼玉）合同懇親山行（大倉、神奈川支部主催） 24名参加（内神奈川13名） ※

悪天候のため懇親会のみ実施。

* 11月18日(土)～19日(日) 静岡支部との交流会（富士山側火山3座・天子山塊、静岡支部主催）。

《その他の山行》

* 6月3日(土) ジダング山（スケッチ山行） 6名参加（内会員外1名）。

* 3月9日(金)～11日(日) 妙高赤倉（スキー山行） 6名参加。

《委員会・懇親会等》

*5月18日(木) 山行委員会・『かながわ山岳誌』プロジェクト打合せ(神奈川工科大学横浜事務所) 11名参加。

*9月2日(木) 山行報告会(神奈川工科大学横浜事務所) 16名参加。

*12月16日(土) 山行委員会(神奈川工科大学横浜事務所) 18名参加、忘年会21名参加。

《会議等》

*5月20日(土) 支部総会・公開講演会(神奈川大学) 実出席29名、委任状による出席70名。

*役員会 神奈川工科大学横浜事務所にて4・6・7・9・10・11・12・1・2・3月の第3木曜日に計10回開催。山行計画やプロジェクト、予算・決算等について、審議・報告を行なった。執行体制は、役員13名、監事2名、顧問2名、オブザーバー4名(3月末現在)。

(寺井素子)

越 後 支 部

本年度活動の特徴の一つは、「山の日」記念事業として、糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」が組織的に取り組まれ、成功裏に終了したことである。この事業は、小学校高学年を対

象として、低山帯から高山帯まで5ヶ年計画でステップアップしていく。次世代を担う子どもたちに山の自然に親しむ機会を提供することで、子どもたちが豊かな自然のすばらしさや、その自然を守り育てていくことの大切さに気付くことをねらいとしている。糸魚川市根知地区「しろ池」周辺自然観察会と戸倉山(975・5m)登山を実施し、参加者は22名(子ども15名、保護者7名)だった。参加した子供たちから「植物のことや人のやさしさを学ぶことができた」「一番心に残ったのは、山頂まで登りされたこと」などの感想が寄せられ、大変好評だった。

2つ目は、上高地集会を初めて企画・実施したことである。会員と公募参加者を対象に、日本山岳会の施設である上高地山岳研究所を利用し、焼岳・徳本峠の登山と交流を目的にしたもので、会員拡大も念頭に置いた。参加者は25名(公募16名、会員9名)。豪雨のため登山は中止となり、上高地散策となったが、参加者との交流から準会員の入会者があった。

3つ目は、越後支部創立70周年記念号として機関誌「越後山岳」第13号が発刊されたことである。5年毎の発刊を基本として、新潟県および会津地域の山岳に限り、地方的香り高いものとして、引き継がれている。70周年記念事業「日本三百名山21座記念登山」報告、「藤島蔵書整理記録報告」をメインに、調査研究、踏査、随想など、会員の山への熱き思いが伝わってくる。ここ数年、高齢化による退会・物故者数が新入会員獲得数を

上回っている。本年度も、新入会員9名があつたが、退会・物故者が19名となった。

「すべての活動を会員拡大につなげる」ことを目標に、中長期的な視野で会員拡大と支部活動の強化を図り、支部活性化を目指すことが、さらに重要となっている。

《会議》

*5月27日(土) 通常総会 事業報告・計画、決算・予算など原案通り満場一致で可決。そののち懇親会を実施。出席者170名(当日出席 50名、委任状120名)。

*役員会 5月27日(土) 第1回理事會、6月17日(土) 第1回委員長會議、9月30日(木) 第2回委員長會議、12月9日(土) 第2回理事會、3月10日(土) 第3回委員長會議、支部役員が集まり、支部運営や事業について協議。延べ66名出席。総務、事業、広報、集會、自然保護、図書、県山協などの委員会、子ども登山教室実行委員会、3役・事業委員長會議など、適宜會議を開催し事業運営について協議。

《山行・野外活動》

*5月28日(日) 親睦登山・大力山(魚沼市) 32名参加。

*6月11日(日) 第3回「靴音・よりあいの集い」本元飯豊山(会津若松市) 14名参加。

*公募登山 7月1日(土)・2日(日) 上高地集會(豪雨のため、焼岳・徳本峠は中止) 上高地散策16名参加、8月27日(日) 雨

飾山(小谷温泉)雨飾山(梶山新湯) 14名参加、10月15日(日) 白鳥山(荒天のため中止)。

*「山の日」記念事業・その1 7月25日(火) 第60回高頭祭を弥彦山大平園地で開催 40名参加。引き続き弥彦山山頂にて新潟県登山祭および松明登山を実施 150名参加。

*「山の日」記念事業・その2 8月11日(金) 糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」を糸魚川市根知地区で開催。しろ池周辺で自然觀察会を行ない、その後戸倉山登山を実施。22名(子ども15名、保護者7名参加)。

《プロジェクト・地域振興活動》

*5月28日(日) 清掃登山・大力山(魚沼市) 32名参加。

*6月11日(日) 清掃登山・第3回「靴音・よりあいの集い」本元飯豊山(会津若松市) 14名参加。

*7月1日(土)・2日(日) 清掃登山・上高地散策16名参加。

*8月27日(日) 清掃登山・雨飾山(小谷温泉)雨飾山(梶山新湯) 14名参加。

《広報・出版活動》

*6月28日(木) 越後支部報第19号発行、10月15日(日) 越後支部報第20号発行、2月15日(木) 越後支部報第21号発行。

*12月1日(金) 「越後山岳」第13号発行。

《講演会》

*5月27日(土) 定期総会「魚沼の山案内人として」講師、桜井

昭吉氏 会員50名参加。

* 7月25日(火) 「山の日」記念事業・第60回高頭祭「山の日」

に考えてみる。山がもたらす人生の豊かさ」講師 梶正彦氏
(全国山の日協議会評議員) 会員40名参加、新潟県登山祭「2020年東京オリンピックと協会名変更について」講師 八木原昭明氏(日本山岳・スポーツクライミング協会会長) 一般110名 会員40名参加。

* 10月28日(土) 新潟県山岳協会70周年記念事業として、越後支部共催で海外登山講演会を実施。「重廣恒夫のヒマラヤ登山塾―ヒマラヤ登山13回の経験から―」講師 重廣恒夫氏、「ヒマラヤ高所順応レクチャー―高山病対処法―」参加者175名。

* 12月9日(土) 越後支部年次晩餐会「私の環境に関わる活動」講師 佐藤高晴氏 会員67名参加。

《その他の行事、懇親会》

* 12月9日(土) 越後支部年次晩餐会において、本間一人氏(環境大臣表彰)の祝賀会を実施。会員67名参加。

* 新潟県山岳協会登山講習会への講師派遣 7月8日(土)・9日(日) 第1回安全登山講習会(加茂市・粟ヶ岳県民休養地ピタ―センター)、6月17日(土)・18日(日)岩登り講習会(新発田市・杉滝岩)、10月29日(日) 第2回安全登山講習会(燕市・吉田東栄町自治会館)。(後藤正弘)

富山支部

平成29年度は、恒例の「播隆祭」が第32回を迎えた。播隆上人の生家跡に建立した「播隆上人顕頌碑」前で、「生家の会」の皆さんや富山支部会員、一般の方々を併せて50名の参加を得て播隆上人の遺徳を偲んだ。今年は「生家の会」の皆様から初めて播隆上人の遺品の展示があり、レブリカも一部含めて貴重な資料を見ることができた。槍ヶ岳の登山ルートを示す絵地図もあり、とても興味深い遺品の数々を解説していただいた。この後、富山支部が継続して登山道整備を行なっている高頭山への記念登山を催行した。

8月11日には「山の日記念」の親子登山を富山県南砺市にある高落場山で実施した。清水水林道を水芭蕉で有名な縄ヶ池まで南砺市で手配していただいたバスで移動し、登山口から出発した。この一帯はブナの原生林が美しい森林形態を呈しており、昔から山地崩落防止のためブナの伐採をせずに下流の集落を被害から守ってきた。このような林を地元では「雪持林」と呼んでいる。頂上では、子供たちに周辺の山々の解説を行ない、故郷の自然を肌で感じてもらい、下山してからの昼食時に冷えたスイカで喉を潤した。

今年は富山支部創立70周年に当たするため、記念式典や記念誌の発行、記念登山など行事が多彩となった。記念登山は6月8

日～11日に九州の九重山系と、10月28日～11月8日のブータン・トレッキングを実施した。

4月からは「支部創立70周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、記念誌作成に向けて原稿、写真、10年間の行動記録をまとめ、3月22日によりやく完成した。3月25日の記念式典には参加者全員に配布し、その後日本山岳会本部、各支部、関係団体などに配布することができた。3月25日の「支部創立70周年記念式典」に併せて、富山支部主催の第9回山岳講演会を開催した。講師は、富山支部会員で富山県立山カルデラ砂防博物館学芸課長の飯田肇氏で、「立山・剱岳に氷河現存——富山支部ホームグラウンドの魅力——」というテーマで講演いただいた。この講演の2ヶ月前に、新たに立山の内蔵助カール、剱岳の池ノ谷雪溪、鹿島槍ヶ岳のカクネ里雪溪においても氷体の流動が観測され、氷河としての定義を満たしているとの論文が認められたばかりであり、最新情報を交えた講演だった。非常に興味深い内容であり、時間内に収まり切れないくらいの多岐にわたる講演内容だった。式典出席者、支部会員や一般も含め約100名の参加者で盛況だった。

記念式典は、小林日本山岳会会長をお迎えし、京都・滋賀支部、福井支部、石川支部の支部長の皆様の出席も得て、富山県山岳連盟の皆様、会員総勢64名の参加を得て、和やかに開催することができた。関係団体、関係者の皆様方に御礼申し上げます。

す。

《会議》

* 4月12日(水) 支部総会 事業報告および収支決算報告、事業計画および予算案を承認 富山電気ビル 出席27名。

* 1月22日(月) 親睦会総会・新年会 立山国際ホテル 出席16名。

* 役員会は8回開催(5、6、8、9、10、12、3、4月)

《山行・野外活動》

* 5月21日(日) 八乙女山(一般募集) 参加50名。

* 6月8日(木)～11日(日) 70周年記念山行 九州九重山系 参加

4名。

* 7月17日(月)～19日(水) 安達太良山・西吾妻山 参加5名。

* 9月4日(月)～6日(水) 南アルプス塩見岳 参加5名。

* 10月13日(金)・14日(土) 全国支部懇談会(茨城支部担当)に参加3名。

* 10月28日(土)～11月8日(水) 70周年記念山行 ブータン・トレッキング 参加4名。

* 10月14日(土)・15日(日) 上高地山研宿泊 参加14名。

* 11月11日(土)・12日(日) 5支部合同懇親山行(福井支部担当)

蝶螺ヶ岳・西方ヶ岳 参加4名。

* 2月17日(土)・18日(日) 5支部合同スキー山行(京都・滋賀支部担当) 福井県豪雪のため来年に延期。

《プロジェクト・地域振興活動》

* 5月27日(土) 高頭山登山道整備 (公益) 参加9名。

* 6月4日(日) 第32回播隆祭 (公益) 式典参加50名、記念登山 (高頭山) 参加19名。

* 8月11日(日) 「山の日記念親子登山」 高落場山 参加37名。

《広報・出版活動》

* 富山支部会報発行 6月30日第105号、10月24日第106号、3月8日第107号。

* 第9回山岳講演会「立山・剱岳に氷河が現存」 3月25日(日) 富山第一ホテル天平の間 100名参加。

《その他の行事、懇親会》

* 8月2日(火) 例会・懇親会 山行報告九州九重山系 (渋谷)、東北安達太良山他 (山田)、ボツワナ・オカバンゴ報告 (鍛冶) とやま市民交流館 参加18名。

* 12月7日(木) 例会・懇親会 山行報告ブータン・トレッキン グ (山田) とやま市民交流館 参加20名。

(河合義則)

石川支部

石川支部は創立70周年を迎え平成30年2月に記念式典開催並びに記念誌発行事業を決定。実行委員会を組織し、無事に記念式典を終えた。

公益事業の継続では第3回となる「白山親子登山教室」は座学も含めた要領が評価され、予想を上回る参加者となった。また昨年再建された深田久弥ゆかりの山、富士写ヶ岳の方位盤について本年より久弥祭の開催場所を麓の九谷ダム広場で行ない、そのうち富士写ヶ岳登山として頂上で各団体の親睦を図った。

ふるさと登山道整備は事業総括リーダーを選出し、精力的に実施。しかしながら一部の登山道への取付き道路の荒廃で、通常の入山が困難な整備箇所も出てきたので、次年度は再検討をしたい。

会員構成は退会者もあったが、月例会や山行などで新入会員も増えつつある。また次年度承認の運びとなるが、中高生2名の本会員の入会希望者もあり、支部活性化推進事業の成果も現われてきている。新会員加入により会員の年齢構成が広がり、各年代が楽しめる企画が求められている。

《会議・月例会 (会場は金沢市総合体育館会議室)》

* 4月15日(土)・16日(日) 白山市吉野谷セミナーハウスにて支部

定期総会 出席40名(当日出席22名、委任状18名)。事業報告、計画案および会計報告・予算案等を全員一致で可決。会場を移して宿泊懇親会実施。

* 5月17日(火) 月例会 第1回役員会議兼第1回親子登山教室
実行委員会発ケ岳報告 11名出席。

* 6月21日(水) 月例会 白山加賀禪定道報告 12名出席。

* 7月19日(水) 月例会 夏山山行朝日岳報告 10名出席。

* 8月16日(水) 月例会 白山親子登山教室実行委員会 14名出席。

* 9月20日(水) 第2回役員会兼月例会 白山大汝避難小屋保全
報告創立70周年記念式典事業内容報告 11名出席。

* 10月18日(水) 月例会 秋山・西穂独標報告 11名出席。

* 12月20日(水) 第3回役員会兼月例会 記念式典進捗報告 13
名出席。

* 1月24日(水) 月例会 記念式典直前確認報告 11名出席。

* 2月21日(水) 月例会 記念式典報告、指導者養成講座参加報
告 10名出席。

* 3月21日(水) 第4回役員会兼月例会 新年度総会議案につい
て協議報告 10名出席。

《山行・野外活動》

* 4月16日(日) 新人雪上訓練 白山市一里野スキー場ピッケル
制動・ピーコン操作実習など技術研修 参加10名。

* 5月3日(水)・4日(木) 春山山行 笈ヶ岳 参加5名。

* 7月15日(土)・16日(日) 夏山山行 後立山連峰朝日岳 参加5
名。

* 11月26日(日) 大恐山(オンソリ山) 参加6名。オンソリ山
は古くからの白山遥拝所である。

《公益事業・地域振興活動》

* 5月28日(日) 自然観察会(公益) 宝達山こぶしの道 参加
6名、一般参加3名 現地案内(宝達ファンクラブ担当者)。

* 6月3日(土) 登山道整備(公益) 富士写ヶ岳不惑新道 参
加10名、一般参加2名。

* 6月18日(日) 登山道整備(公益) 浅犀みくまり道周回部
参加4名、一般参加2名。

* 7月29日(土) 第3回白山親子登山教室 (公益) 医王山キョ
山・座学フィールド実習 参加9名、一般参加23名。

* 8月26日(土)・27日(日) 第3回白山親子登山教室(公益) 白山、
参加14名、一般参加者34名。大雨で県道が通行止めになるも、

コースおよび宿泊山小屋を変更し、無事に行程を終える。登
山道からのご来光も見られて、参加者一同良き思い出の白山
登山であった。

* 9月2日(土) 登山道整備(公益) 杉峠登山道 参加6名、一
般参加1名。

* 9月9日(土)・10日(日) 大汝避難小屋保全状況調査(公益) 参

加2名。

* 10月1日(日) 登山道整備(公益) 杉峠登山口標柱修繕 参加4名。

* 10月14日(土) 親子秋山紅葉登山 天生湿原(公益) 参加8名、一般参加者10名。恒例になった秋の山行+天然ナメコ汁、参加者に喜ばれる。

《行事・懇親会・その他》

* 4月23日(日) 第21回久弥祭富士写ヶ岳 出席10名。本年より会場を麓の九谷ダム広場として、新しく再建された頂上方位盤の基に県内山岳愛好団体が集う会として参加。

* 自然保護全国集会(岐阜市) 岐阜支部主管 石川支部より参加2名。

* 8月5日(土)・6日(日) 上高地山研集会 明神5峰取付き、周辺散策、本支部として永く続けている集会である。参加10名、一般参加3名。

* 9月23日(土) 全国支部合同会議プラザエフ 参加2名。

* 11月11日(土)・12日(日) 5支部合同懇親山行 福井支部主管 栄螺山、西方ヶ岳 石川支部より3名参加。

* 11月25日(土)・26日(日) 山祭り集会・懇親会 白山市吉野谷セミナーハウス 参加19名 今年には集会イベントとして書籍を持ち寄り、配布会を行なった。

* 12月2日(土) 年次晩餐会京王プラザホテル 参加9名 澤村

会員が永年会員表彰を受ける。

* 2月3日(土) 創立70周年記念式典 ホテル金沢石川支部功労者6名に感謝状贈呈、支部会員の参加出席率が高く、また退会された先輩も参加いただき、盛会となった 出席41名。

(樽矢導章)

福井支部

平成29年は泰澄大師の白山開山1300年ということで、記念事業として泰澄塾・越前町と共催で泰澄祭・泰澄ウォークと越前五山スタンプリーなどを実施した。また、本年度の支部活動としては、月1〜2回の例会山行や森づくりなどを行なったが、昨年と同様、天候不順のため、やむなく中止することもあった。

《会議》

* 4月14(土) 通常総会 午後1時から、越前糸生温泉「泰澄の杜」にて平成28年度事業報告および決算報告が承認され、平成29年度事業計画案・予算案が提案承認された。出席者42名(当日出席者17名・委任状25名)。

* 3月19日(月) 役員会 出席者8名。平成30年度の事業計画案の検討や活動などの意見交換をした。

《支部山行》

- * 4月10日(月) 三床山(石生谷コース) 7名参加。
- * 4月23日(日) 吉野ヶ岳・文殊山 11名参加。
- * 5月7日(日) 日野山(菅谷コース)・牧谷コース・文殊山(大正寺コース) 8名参加。
- * 5月15日(月) 皆子山 6名参加。
- * 6月4日(日) 三ノ峰(石徹白コース) 8名参加。
- * 6月25日(日) 金剛堂山 雨のため中止。
- * 7月27日(木) 30日(日) 仙丈ヶ岳・塩見岳 3名参加。
- * 8月19日(土) 寺地山 4名参加。
- * 9月2日(土)・3日(日) 五色ヶ原 5名参加。
- * 9月25日(月) 立山三山 雨天中止。
- * 10月2日(月) 白山(平瀬コース) 雨天中止。
- * 10月29日(日) 三方岩岳と中宮温泉(食事) 台風22号のため山行中止(昼食のみ) 10名参加。
- * 11月11日(土)・12日(日) 5支部合同懇親会(福井支部主管) 11日・野坂岳 12日・蝶螺岳・西方ヶ岳 京都・滋賀、岐阜、富山、石川支部より15名、福井支部員14名参加。
- * 12月11日(日) 野見ヶ岳 14名参加。
- * 支部忘年会「かんぼの宿福井」 22名参加。
- * 1月14日(日) 岩籠山 雪のため中止。
- * 2月17日(土)・18日(日) 5支部合同懇親スキーと山行 銀杏峰(京都・滋賀支部主管)。記録の大雪のため来年度に延期。

- * 2月25日(日) 富士写ヶ岳 大雪通行止のため、取立山に変更9名参加。
- * 3月11日(日) 銀杏峰・部子山 5名参加。
- * 白山開山1300年記念登山 越前禪定道(平泉寺・法恩寺山・伏拝・小原峠・市ノ瀬・六万山・慶松平・御前峰)を5月から分割登山し、山の日に終了。延べ40名参加。
- 《その他の行事》
- * 10月13日(土)・14日(日) 筑波山の全国支部集会参加予定であったが、宮本前支部長逝去のため急遽中止、茨城支部にご迷惑をお掛けした。
- * 3月25日(日) 富山支部70周年記念式典 2名参加。
- 《公益年間プロジェクト》
- * 5月28日(日) 白山開山1300年記念、泰澄祭&泰澄ウォーク(泰澄塾・越前町と共催)、バスをチャーター、【小川集落・越知山・花立峠・悠久ロマンの杜】の縦走路にAコースとBコースを設定、途中越知山室堂にて神事があり、泰澄汁をふるまい、「森のコンサート」を楽しんだ。一般参加100余名、支部会員14名参加。
- * 4月・8月 泰澄大師白山開山1300年記念スタンプラリー(泰澄塾・越前町と共催) 越前五山《越知山・日野山・文殊山・蔵王山(吉野ヶ岳)・白山》の各山頂に、スタンプ帳を1000部ずつ置き5山を完登した方には記念バッジ+日

野山のお守りと交換。

*森づくり 4月から11月まで各月、越前町糸生の現地にて活動。池に繁殖したガマの撤去作業、遊歩道および周囲の除草、花壇・遊歩道の整備、檜の伐採木にシイタケ菌種付けなどを行なった。

(船田洋子)

山梨支部

新会員の確保、技術の向上、山岳文化の啓発、支部の活性化などを目的に、第3回「やまなし登山基礎講座」を9月から12月にかけて開催した。支部会員が得意分野の講師を務める自前方式(3講座は会員外の専門家)による連続講座である。10年間続けた「山の博覧会」の後継事業として、支部の最重要事業に位置づけているが、受講者が漸減しているのが現状である。事業の目的を念頭に置きながら、今後、開催方法などの改善を図っていききたい。

このほか、第1回田部重治祭や第7回中部ブロック交流会、10回の支部山行など多くの事業を行なった。

《会議》

*総会 4月22日(土) 平成28年度事業報告・決算報告、平成29年度事業計画・予算案を承認した。会員72人中、出席65人(出席35人、委任状30人)。

*理事会 毎月第2水曜日または木曜日に開催。支部長以下11人が出席。前月の事業総括、当該月事業の検討、重要案件の協議などを行なった。

*山行委員会 11月30日(木) 次年度の山行計画を検討した。9人が出席。

《山行・野外活動》

*支部山行 4月8日(土) 笛吹市・滝戸山 22人参加、4月16日(日) 韮崎市・茅ヶ岳 15人参加、7月1日(土) 身延町・毛無山 7人参加、8月20日(日) 北杜市・鷹見岩 14人参加、9月23日(土)・24日(日) 北杜市・編笠山・権現岳 14人参加、11月5日(日) 北杜市・後蔵 10人参加、12月3日(日) 南アルプス市・大崖頭山 15人参加、1月28日(日) 都留市・都留アルプス 10人参加、2月4日(日) 市川三郷町・桜峠 10人参加、2月24日(土)・25日(日) 茅野市・北八ヶ岳 5人参加、3月11日(日) 南牧村・飯盛山 13人参加。

*交流登山 5月21日(日) 第7回中部ブロック4支部交流会

山梨市・西沢溪谷 49人参加、7月30日(日) 第1回田部重治祭 山梨市・東沢山ノ神往復 6人参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

*第3回やまなし登山基礎講座 目的…前述のとおり。会場…山梨学院大学生涯学習センター講義室ほか、受講生9人。全14回開催(9月7日・12月14日)。

①オリエンテーション、日本山岳会の紹介、自然保護と山岳環境保全の法令 ②安全に楽しく登る ③服装・装備 ④登山中の病気・ケガの応急処置 ⑤地図読み・初級 ⑥地図読み・野外実習(塩ノ山) ⑦山を生かした地域づくり ⑧ロープワーク・初級(湯村山) ⑨山の気象 ⑩総合実践登山(水ヶ森) ⑪山梨の山岳遭難 ⑫山岳写真の撮り方 ⑬山梨の登山史 ⑭山梨の山と文学

*山梨県山岳レインジャー活動 目的…山梨県から委託された高山植物保護・調査事業 ①5月22日(月)および6月3日(土)日向山・鞍掛山探索調査 ②6月11日(日)・12日(月) 甲斐駒ヶ岳黒戸尾根探索調査 ③7月17日(日) 大菩薩峠・石丸峠探索調査 ④8月26日(土)・27日(日) 中白根・間ノ岳・三峰岳探索調査。

*第1回田部重治祭(田部重治を顕彰する碑前祭) 山梨市観光協会三富支部主催、山梨市、JAC山梨支部、山梨県山岳連盟後援 7月30日(日)開催。約40人参加(会員10人)。

*第58回木暮祭(木暮理太郎を顕彰する碑前祭) JAC山梨支部、山梨県山岳連盟、増富ラジウム温泉峡観光協会による木暮碑委員会主催、北杜市後援。10月15日(日)開催。参加。約40人参加(会員15人)。

*第36回深田祭(深田久弥を偲ぶ碑前祭) 4月16日(日)開催。約100人参加(会員12人)。

《広報・出版活動》

*「支部通信」第3期第2号の発行(6月12日)、「支部通信」第3期第3号の発行(11月24日)。
*会誌「甲斐山脈」第10号の発行(3月31日)。

(矢崎茂男)

信濃支部

支部は創設から満70年の古希を迎えた。しかし、支部員の平均年齢も70歳を超え、高齢化が著しい。若手といわれる壮年期の会員もいるにはいるが、自分でもそうだったように、社会や家庭の中核にあつて、なかなか会の活動を牽引していく余力はない。こうした状況下では、支部活性化といっても難しいものがある。ここ数年、いくつかの試みを行ってきたが、空回りに終わり、これといった成果も見られなかった。それは、かえって焦燥を募るものだった。

確かにまだ元気な年寄りもいる。そうした元気な年寄りに支えられた1年だったのかも知れない。高齢化? それがどうした…。しかし、その安堵は一時的なものであることも十分承知している。これから30年、支部が百年を迎える時に、いったいだれが支えているのかを考えながら次期の事業につなげていきたい。

《会議》

- * 4月16日(日) 平成29年度 支部通常総会 松本東急イン 本
人出席32、委任状75、計107名。
 - * 5月12日(金) ウェストン祭実行委員会打合せ会議 松本市内
第71回ウェストン祭に向けての準備協議。
 - * 5月19日(金) ウェストン祭協賛団体打合せ会議 松本市内
地元松本市、協賛団体との協議、打合せ。
 - * 6月14日(金) ウェストン祭反省会 松本市内 実行委員会の
反省会。
 - * 7月20日(木) 支部創設70年記念事業打合せ会議 会場となる
美ヶ原山本小屋との協議、送迎や現場の確認など。
 - * 8月2日(水) 支部創設70年コンサート打合せ会議 桂氏事務
所 記念コンサート の時間、プログラムなどの協議。
 - * 1月14日(日) 支部役員会 登山計画書の扱いなど協議。
- 《支部山行》
- * 5月5日(金) 7日(日) 上高地定着 2名。
 - * 6月3日(土) ウェストン祭記念山行 徳本峠越え。
 - * 8月26日(土)・27日(日) 鍋冠山―大滝山―蝶ヶ岳―常念岳 8
名。
 - * 9月23日(土)・24日(日) 燕岳―常念岳 7名。
 - * 10月7日(土)・8日(日) 支部創設70年記念登山 美ヶ原3コー
ス 計35名。

- * 1月2日(火) 4日(木) 常念岳東尾根 3名。
 - * 1月27日(土)・28日(日) 八方尾根スキー例会 4名。
 - * 2月24日(土)・25日(日) 乗鞍岳スキー例会 9名。
- 《広報、出版》

- ①支部インフォメーション
 - * 4月 9号発行 総会報告など。
 - * 6月 10号発行。
 - * 8月 11号発行。
 - * 12月 12号発行。
 - * 3月 13号発行。
 - ②支部報
 - * 6月 第64号発行。
 - * 10月 第65号発行 支部創設70年特別号。
- 《その他の行事》
- * 6月4日(日) 第71回ウェストン祭 上高地 記念講演 田辺
寿氏(元日本山岳会副会長)。
 - * 10月7日(土)・8日(日) 支部創設70年記念集会 会場 美ヶ原
山本小屋。7日には同会場でフルート奏者の桂總子さんを招
いて記念コンサートを開催。
 - * 1月14日(日) 支部新年会 松本市アルピコプラザホテル。
 - * 岳都まつもと山岳フォーラム、松本市海外都市交流委員会、
信州豊かな環境づくり県民会議などへの参加。(米倉逸生)

岐阜支部

会員入会は、実績のある人を紹介制で入会させていたが、現在では山岳活動初級者でも意欲ある方には入会してもらっている。そのため、入会者の技術・体力が不明のまま会の活動に参加され、パーティ行動での安全確保が難しくなっている。入会者の技術・体力・指向性を把握するため、山行歴の提出を求めると、同時に「日本山岳会」の組織、「岐阜支部」の生立ち、山行計画等のオリエンテーションの場を設けた。以下は29年度の主な活動報告である。

《会議》

* 4月15日(土) 定時総会 事業報告・計画、決算・予算など原案どおり満場一致で可決。そののち懇親会を実施。出席30名。

* 4月～3月 毎月第2木曜日に役員会を12回開催。支部役員14名ほどが集まり、支部運営や事業について協議。

* 10月28日(土) 新入会員研修会 参加17名。

《公益事業》

* 山岳講演会11月10日(金) 「岳人・Dr・Mの山道具考」(株式会社社モンベル社長 真崎文明氏) 聴講者114名。

* 権現の森林づくり 4月30日(日)～11月12日(金) 10回 参加61名。

植栽地整備、苗木170本植樹、登山道整備、防獣ネット修復、道具小屋の建築。

* 写真展 12月1日(金)～28日(木) 岐阜市長良 喫茶パウゼ、1月6日(土)～29日(月) 山県市大桑 香り会館 作品26点 出展者11名。

《共益事業》

* 月例山行

- ・ 4月16日(日) 春期懇親山行／権現山各務原 参加15名。
 - ・ 5月14日(日) 例会／荒島岳 参加13名。
 - ・ 6月18日(日) 例会／金剛堂山 参加9名。
 - ・ 7月23日(日) 家族登山／冠山 参加14名。
 - ・ 8月20日(日) 例会／乗鞍岳 参加15名。
 - ・ 11月12日(日) 例会／蠅帽子嶺 参加7名。
 - ・ 11月13日(月)～18日(土) 海外山行／台湾雪山 参加9名。
 - ・ 1月14日(日) 例会／池田山 参加18名。
 - ・ 2月25日(日) 例会／明王山 参加13名。
 - ・ 3月18日(日) 例会／藤倉山 参加8名。
- * バリエーション山行
- ・ 4月2日(日) 舟伏山 参加19名。
 - ・ 5月18日(木) ユックリ山行／百々ヶ峰 参加8名。
 - ・ 5月20日(土) 岩登り講習会／御在所岳前尾根 参加6名。
 - ・ 5月28日(日) 登りたくない山／水洞 参加9名。

- ・ 6月11日(日) 甘利山 参加22名。
- ・ 8月6日(日) 沢登り／九蔵谷 参加8名。
- ・ 8月27日(日) 木曾川源流の山／鉢盛山 参加12名。
- ・ 10月26日(木) ユックリ山行／百々ヶ峰 参加7名。
- ・ 11月5日(日) 陀羅佛小屋山行／大姥山 参加9名。
- ・ 12月3日(日) 今西錦司記念山行／ゴジ谷・西滝ヶ洞 参加12名。

- ・ 12月10日(日) 登りたくない山／横谷 参加11名。
- ・ 1月28日(日) 越美国境の山／見当山 参加4名。
- ・ 3月11日(日) 男埴山 参加8名。
- ・ 3月25日(日) 芦倉山 参加6名。

＊自然観察会

- ・ 6月4日(日) 小津権現山 参加10名。
- ・ 9月24日(日) 大野町滝谷山 参加15名。
- ・ 2月18日(日) 白尾山 参加10名。

＊本部・他支部の行事

- ・ 7月9日(日)～10日(月) 自然保護全国大会／岐阜市で開催 参加103名。

- ・ 10月13日(金)・14日(土) 全国支部懇談会／茨城支部 参加11名。
- ・ 11月11日(土)～12日(日) 五支部合同懇親山行／鶴賀 西ヶ岳・蝶螺ヶ岳 参加4名。

＊懇親会

- ・ 12月8日(金) 理事会・忘年会 参加13名。
- ・ 1月20日(土) 新春懇談会 岐阜キャスルイン 参加27名。

《会報》

- ＊ 9月30日(土) 「岐阜山岳 第82号」発行。
- ＊ 3月31日(土) 「岐阜山岳 第83号」発行。

(今峰正利)

静岡支部

《活動》

- ＊ 4月12日(水) 平成29年度支部通常総会 静岡労働政会館 出席者49名、委任状69名。

- ＊ 4月15日(土)～16日(日) 文珠山荘「山菜天ぶらの会」 会員12名、その他1名参加。

- ＊ 4月23日(日) 公益事業・第1回ハイキングセミナー「竜爪山」受講生6名、会員7名参加。

- ＊ 5月6日(土) 会員山行「愛知奥三河・日本ヶ塚、1107・3m」6名参加。

- ＊ 5月10日(水) 定例会 19名出席。

- ＊ 5月20日(土)・21日(日) 中部4支部交流会・担当山梨支部「西沢溪合」14名参加。

- ＊ 5月28日(日) 会員山行「青笹山」16名参加。

* 6月 編集委員会「会報・不盡」 81号の発行

* 6月4日(日) 公益事業・第2回ハイキングセミナー「見月山1047m」 受講生5名、会員12名参加

* 6月10日(土)・11日(日) 会員山行「青雉山2406m・稲又山2405m」 池ノ平テント泊 11名参加。

* 6月14日(水) 定例会 17名出席。

* 6月17日(土)・18日(日) 文珠山荘「山荘に舞うヒメ堂鑑賞会」 会員11名、ほか2名参加。

* 7月12日(水) 定例会 22名出席。

* 7月15日(土)・17日(月) 会員山行「南アルプス・光岳・茶臼岳・上河内岳登山 16名参加。

* 8月16日(水) 「納涼懇親会」 センチュリーホテル 27名参加。

* 9月9日(土)・10日(日) 文珠山荘「納涼祭」 12名参加。

* 9月13日(水) 定例会 21名出席

* 9月20日(水) 文珠山荘 荻野氏希望の石碑の設置 7名参加。

* 9月23日(土)・24日(日) 全国支部合同会議 東京四谷プラザエフ 有元、木村出席。

* 10月11日(水) 定例会 22名参加。

* 10月13日(金)・14日(土) 第33回全国支部懇談会「茨城支部・筑波山」 11名参加。

* 10月28日(土)・29日(日) 山の日記念事業「ふるさとの山を登る

う」 梅ヶ島・山伏。

* 10月28日(土)・29日(日) 文珠山荘「ハローウイン」 石碑の除幕式開催。

* 11月 編集委員会「会報・不盡」 82号の発行。

* 11月11日(土)・12日(日) 会員山行「秋の懇親山行」 26名参加希望。

* 11月18日(土)・19日(日) 神奈川支部との交流会 15名、会員外2名参加(日帰り含む)。

* 12月2日(土) 年次晩餐会 新宿京王プラザホテル―26名参加。

* 12月9日(土)・10日(日) 文珠山荘「忘年会」

* 12月13日(水) 定例会 18名参加。

* 1月14日(日) 新年会 静岡駅前・松坂屋「梅の花」 12時30分受付、13時開催 会費5000円 46名参加。

* 2月11日(日) 第3回ハイキングセミナー「冬山入門・富士山、二子山」 セミナー生1名、会員14名、会員外1名参加。

* 2月14日(水) 定例会 17名参加。

* 2月17日(土)・18日(日) 会員山行「山とスキー・菅平、根子岳」 会員10名、会友2名、他支部1名参加。

* 3月10日(土)・11日(日) 文珠山荘「山荘をベースに山を登る」 12名参加。

* 3月14日(水) 定例会。

* 4月11日(水) 平成30年度通常総会、懇親会。

(木村勝利)

東 海 支 部

本年度も40歳以下の入会希望者には入会金の助成を継続した。その甲斐あって、平成29年度も多数の40歳以下の新入会員を迎え入れることができた。一方で高齢化もあり、退会者が入会者を上回る状態となり、3月末現在の支部員数は362名、昨年末より2名の減少となった。

《会議》

* 支部通常総会5月20日(土)開催。出席202名(当日出席74名 + 委任状128名) 本年度は役員の交代はなく、全員留任した。

* 常務委員会 毎月第4水曜日開催(支部長、副支部長、各委員長が参加。支部運営の基本事項について審議)。

* 正副支部長会議 毎月第3水曜日開催(支部長、副支部長、総務委員長が参加。常務委員会に先立ち、主要事項の事前審議)。

* 各委員会(22委員会) 毎月1回開催(各委員会の活動内容の審議)

《山行・野外活動》

* 山行委員会 定例山行(計画54、実施36、参加者合計280名)。

* 青年部(合計200隊の個人山行に加え、春、夏、冬期の合宿のgqthほか、読図講習、雪上訓練などを実施した)。

* 支部友会定例山行(実施36回、参加220名)。

* 東海ユース 原則40歳以下の男女登山教室卒業生で向上心のある登山初心者29名が支部員指導のもとに毎月1・2回の定例山行に加え69回の個人山行を実施。

* 亀の会 月1回の定例山行(参加延230人)に加え、自主山行を2回実施(28人参加)、会員数56。

* 登山教室(1教室、月1回の座学と山行、生徒数15名、指導支部員4名)。

* 登山学校 7月に開校。未組織登山者への安全登山の啓発、支部の人材の確保と育成、支部活動の活性化を目的として運営。経験および技量に合わせ初級、中級および上級の3つのグループに分け、1年間の実践・学習を通して技術の習得を目指していただくこととした。生徒数:初級46名、中級39名、上級8名、指導員32名で対応。

* ボランティア活動

①視聴覚障がい者支援登山の実施を、5月14日美濃天王山にて実施、参加36名(内30名が支部員ほかの支援者)。第2回を11月12日美濃南宮山にて実施、参加者30名(内支部員他支援

者22名)。

②視覚障がい者支援登山(ひまわり山行) 4回計画し、3回実施。参加者累計37名(内障がい者8名、支部支援スタッフ29名)。

③親子ふれあい登山 10月と11月の2回、尾高山で実施、参加者は合計248名(内支部員25名が支援のため参加)。

④知的障がい者支援登山(SON愛知と協働) 4月22・23日朝明溪谷・根の平峠、水晶岳登山(障がい者7名、家族7名、SONスタッフ19名、支部支援スタッフ31名が参加)。

*森づくり活動

①愛知県有林「やまじの森」における保健保安林・土砂流出防護保安林の整備に加え、遊歩道の維持・水土保全・生物多様性などの環境機能の向上を目指した諸作業。

②東大演習林での間伐作業。

③JAC所有の山桜フィールドでの森づくりと森の恵みを享受できる基地としての整備作業。

④民有地での間伐作業。年間作業日数…40日、参加人員…延べ360人。

*森の音楽祭 10月21日雨のため屋内で演奏会のみ実施した。参加者291名(内支部員30名)。

*自然観察会 毎月1回第3土曜日実施 参加者累計145名、支部員が説明員として参加)。

*同好会の活動 同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受している(現在7つの同好会が活動中)。

《事故防止事業》

*指導者研修講習会 6月から11月にかけて6回実施。

*携帯電話とメールによる登山届の提出促進(通年)。

《プロジェクト・地域振興活動》

*第5回夏山フェスタの開催

6月17日・18日に名古屋ウイングあいち7・8階にて開催。

特別協力の形で運営に参加。30の山小屋をはじめ、登山用品メーカー、自治体など100の出展数があり、来場者数は2日間で7599人であった(53名の支部員が支援スタッフとして従事)。

*第16回東海岳人写真展の開催

平成30年3月20日～3月25日 名古屋・栄の名古屋市民ギャラリーにて、日本山岳会東海支部・中日新聞社の主催。愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、CBCテレビ、NHK名古屋放送局の後援もいただいた。

皇太子殿下の特別出品をはじめ、支部員・支部員OBたちから国内外の山や自然を捉えた87点の作品が出品され、期間中の来場者は2293名を数えた。

《広報・出版活動》

* 支部報の発行（4、7、10、1月の4回）。

* ホームページを利用した支部活動の情報発信（通年）。

* メールマガジン月1回のペースで支部員・支部友会員・東海ユース・猿投の森づくりの会の希望者に支部活動および講演会などの情報を配信した。

《講演会》

* 4月11日(火) 駅前アルプス社長・千葉泰文氏「最新の登山グッズ」。

* 8月8日(火) 鈴木慎吾支部員「地図の読み方」。

* 10月7日 服田康弘支部員「バテない歩き方」、鈴木慎吾支部員「地図読み」。

* 1月6日 気象予報士・小田切正氏「気象遭難をなくすために」と題して山の気象の講演。

* 2月13日(火) 尾上支部友会委員長「日本山岳会100年の歴史」その栄光と影と題して。

* 2月24・25日 野口いづみ氏「山の病氣とケガ」の講演と実技。

* 3月3日 日本登山医学会認定国際山岳医・三浦裕氏「心臓マッサージやAED操作」講演と実技講習。

《「山の目」啓蒙活動》

* 6月17日・18日 夏山フェスタ会場にて参加者全員（759人）に「山の目」啓蒙のチラシを配布。

* 8月11日 御在所山頂および茶臼山高原にて「山の目」啓蒙チラシの配布。

（毛利邦男）

京都・滋賀支部

創立30周年記念事業を無事終了し、平成29年度は新支部長の下、次の30年のスタートとなる新たな活動を展開した。従来の活動に加え、新入会員の活性化、新たな会員の獲得を目的に読図、RC技術、沢登り技術を学ぶ講習会山行を行なった。また、例会山行への参加者の固定化を打破するため、未知の山旅、山研泊の北アルプス登山、近場でテント泊登山など、新たなシリーズ山行をスタートした。山に登るため、7月に座学、9月に実地の登山を行なった。

《会議》

* 4月15日(土) 第32回京都・滋賀支部総会鴨沂会館2階 34名参加。

・28年度事業報告・決算報告・監査結果報告。

・29年度事業計画・予算案・新役員体制案、審議。

・（表彰式）今西錦司賞、遠藤京子会員授賞。

・（講演会）太田五雄氏講師、「屋久島からヒマラヤの水峰へ」（懇親会）「綴」にて 21名参加。

*支部役員会 月1回第1水曜日(祝日第2水) 開催。(於)

鴨沢会館1階、12回延べ220名出席。

・各例会山行・各委員会・各部会活動報告 課題は審議、協議。

・山の日記念公益事業案、30周年記念誌発行の進捗管理。

《山行・野外活動》

*30周年記念山行 未踏3山 延べ32名参加、以上で30山終了。

・4月8日(土) 御池岳、4月22日(土) 伊吹山、4月29日(土) 三上山。

*山の日記念公益事業

・7月8日(土) 登山教室 (1)基礎知識・安全登山 (2)地図読み

と三角点 (3)京都一周トレイルの歩き方の3部構成51名参加
(一般26名)。座学で得た知識を山で実習、実地講習、16名参加(一般4名)

*定例山行 9回実施、延べ80名参加。

・5月1日(月)・10月25日(水) スケッチ 曾爾高原

・7月29日(土) 納涼登山 大文字山

・7月15日(土)・7月17日(月) 夏山 志賀高原・笠ヶ岳

・8月11日(金)・8月14日(月) 霞沢岳

・9月8日(金)・9月11日(月) 飯豊山

・9月16日(土)・9月18日(月) お月見 浅間隠山

・12月14日(木) 第1回武奈ヶ岳の日

・1月3日(水) 初詣登山 赤神山

*平日山行 5回実施、延べ27名参加。

松尾山寺3名、大黒山5名、五台山6名、白倉山6名、忘年山行稲荷山7名。

*山歩会山行 11回実施、延べ110名参加。

・奥島山11名、艮山11名、呉枯ノ峰10名、天ヶ岳4名、十郎ヶ嶽13名、太神山6名、鞍馬山10名 忘年山行瓜生山9名、大尾山8名、音羽山13名、堂山15名。

*講習会山行 8回実施、延べ82名参加。

・5月7日(日) 読図、ダンダ山 12名参加。

・6月4日(日) CR、比良げんき村人工壁 32名参加。

・5月14日(日)、6月18日(日) 金毘羅

・7月15日(土)・17日(月) 藤内壁初級RC、3回実施、19名参加。

・8月6日(日) 明王谷、8月27日(日) 白滝谷、9月3日(日) 口の深谷 初級沢登り3回実施、19名参加。

*スキー山行 3回実施 20名参加。

・4月30日(日)・5月3日(水) 立山 5名。

・2月10日(土)・12日(月) 藪原 8名。

・3月4日(日) 金藁岳 7名。

*テント泊山行 2回実施 8名参加。

・7月22日(土)・23日(日) 比良

・9月5日(土)・9月6日(日) 能郷白山

《部会・委員会活動》

関西支部

* 5月21日(日) 今西錦司レリーフの周辺を改修整備、8名参加。
* 5月28日(日) ダンダ坊整備懇親会(ダンダ坊森作り)、28名参加。

* 「未知の山旅シリーズ」 4名参加(第2山行部会) 10月5日(水)～9日(月) 南会津の山

* 11月15日(水)～15日間 アンナプルナ内院トレッキング、9名参加。

* 巨木観察 7回実施、延べ33名参加。(自然保護部会)

《山水会講演会》 鴨沂会館2階 48名参加。

* 10月18日(水) 「ネパール・アンナプルナトレッキング今昔」講師 松下文文支部長、28名参加。

* 12月20日(水) 「バキスタンK2街道の植樹と教育」講師 遠藤京子会員(今西錦司賞受賞・永年会員) 21名参加。

《会報》

* 支部便り年4回 127号、128号、129号、130号が発行された。

* 9月15日(金) 創立30周年記念誌が発行された。

《親睦会》

* 1月17日(水) 新年会 南禅寺 順正にて54名参加。

(竹下節子)

支部規約を改正し、本年度より支部長、副支部長、理事で構成する意思決定機関の「役員会」と業務実行機関の「委員会」を設置した。また、昨年12月に本部遭難対策委員会の「遭難対策規定」改正を受けて、支部に安全委員会を新たに設置し、支部報とホームページで登山計画書の提出を依頼するとともに、提出フォームと専用メールアドレスを示し、提出の徹底を図ることとした。また、特別事業補助金を活用して、若手指導者育成と会員増強に取組んだ。

《会議》

* 通常総会 4月26日(水) 大阪梅田駅前ビジネスセンター 事業報告、決算報告、支部役員選定、事業計画、予算を審議。出席者46名。

* 評議員会 4月19日(水) 支部ルーム 総会議案について諮問。

* 役員会 12回開催、延べ150名が出席。

《山行》

* 関西支部県境縦走 毎月1泊2日で9回実施、延べ84名参加。平成26年3月、日本海をスタートした縦走は12月に新宮に到達。2月から改めて奈良、三重県境を縦走開始。

* 4000山グランプリ 13回テント泊で実施、延べ122名

が参加。

* ゆるやか山行（里山山行・歴史と文化を訪ねる） 9回実施、延べ217名が参加。そのほか山行12回実施、延べ69名参加。

* 海外トレッキング 8月30日から9月7日 ジャワ島スメル山・イジュン火山で実施、4名が参加。

《安全登山啓発》

* 登山教室 初級から上級の3クラスで、座学1日と実践3日を1クールとして3回実施、参加者延べ255名。

* レスキュー講座 3月3日に赤十字救急法短期講習（応急手当）を実施、参加者12名。

* リーダーレスキュー研修会 3回実施、延べ20名参加。

* 初心者のためのロープワーク研修 2回実施、延べ7名参加。

《自然保護》

* 本山寺山森林づくり 森林保全など25回実施、述べ196名参加。

* 東お多福山草原復元活動 ススキ草原復元活動など7回実施、延べ25名参加。

* 観察会ほか

・ 自然保護全国集会 7月9・10日 伊吹山フィールドスタディ 7名参加。

・ 大台ヶ原の利用に関する協議会 奈良市で実施、1名参加。
《プロジェクト》

* 山の日関連行事

・ 藤木祭 10月1日(日) 芦屋市高座の滝前 大阪府と兵庫県山岳連盟との共催、参加者約120名。

・ 著者と語る会 11月18日(土) 弁天町生涯学習センター「山と宗教」講師・中川委紀子氏、参加者41名。

・ わんぱく探検 11月26日(日) 星田園地 参加者13名（うち子ども4名）。

《講演会など関連行事》

* 夏季懇談会 8月23日(水) 大阪梅田駅前ビジネスセンター「テンカンボチエ6499m」講師・岩田修一氏、参加者45名。

* 新入会員オリエンテーション 平成30年1月25日(木) 支部ルーム 新入会員4名参加。

* スケッチ同好会 6回実施、延べ80名参加。4月24・27日 絵画展実施。

《広報》

* 支部報発行 6、9、12、3月に4回発行。

* ホームページ 適宜更新

(金井良碩)

山 陰 支 部

山陰支部のホームグラウンドで中国地方最高峰の大山は、2018年に伯耆国「大山開山」1300年を迎えることから「神のいます山と共に生き、歩む」を大会テーマに多岐にわたるイベントが企画されている。その中のビッグイベントとして第3回「山の日」記念全国大会開催が大山を中心に決定され、山岳関係者として大会実行委員会のアドバイザーで協力することになっている。

平成29年度の主な事業としては、山陰支部設立70周年記念事業の実施準備や、他支部との交流促進として、熊本支部設立60周年記念式典に参加したほか、中国四国支部交流事業を行なった。国内遠征では、本州最南端の「日本百名山」の1つ、開聞岳（922m）に登山するなど、積極的に取り組んできた。しかし、会員の高齢化と減少傾向にあるなかでの活動には限界を感じており、今後の支部活動の方針を模索しているところだ。

《会議》

* 支部月例会の開催 米子市公会堂第7集会室で各月第4週金曜日午後6時30分から開催した。

* 4月15日(土) 運営委員会 平成29年度支部通常総会の議題について協議。

* 4月25日(火) 支部通常総会 米子市公会堂第7集会室 出席

者17名。平成28年度事業報告、会計監査報告、平成29年度事業計画、事業予算案、山陰支部設立70周年記念事業（案）を審議して、満場一致で議決した。

* 5月13日(土) 中国四国支部交流会 松山市道後温泉 6名参加。

* 9月23日(土)・24日(日) 平成29年度日本山岳会支部合同会議出席 会場 東京都千代田区主婦会館 支部長1名出席。

* 12月9日(金) 山陰支部年次総会 場所 米子ワシントンホテル 23名出席。

《山行・野外活動》

* 4月16日(日) 月例山行 猿隠山から御墓山縦走 参加者6名。鷲峰山 参加者3名。

* 4月23日(火) 同好会山行 茶臼山 会員1名参加、月例山行三国山（1251m）。

* 5月13日(日) 中国四国支部交流登山 皿ヶ峰登山 参加者6名。

* 6月13日(土) 月例山行 皆ヶ山（1159・3m） 参加者4名。

* 7月15日(土) 月例山行 若杉山（1021m） 参加者3名。

* 8月20日(金) 月例山行 人形山（1004m） 参加者2名、沖ノ郷山（957m） 参加者5名。

* 9月10日(日) 月例山行 白馬山（1060m）から金ヶ谷山

(1164 m) 往復 参加者3名。

* 10月1日(日) 月例山行 三国山(1126 m) 参加者2名、

三平山(1126 m) から朝鍋鷲ヶ山(1076 m) 参加者3名。

* 11月3日(金) 月例山行 仏ヶ山(744 m) 参加者3名。

* 11月6日(月) 月例山行 烏ヶ山(1448 m) 参加者4名。

* 11月19日(日) 国内山行 鹿兒島県開聞岳(922 m) 参加者6名。

* 12月17日(日) 月例山行 玉峰山(820・4 m) 参加者6名。

* 3月11日(日) 月例山行 打吹山(204 m) 参加者7名、三徳山(899・7 m) 参加者5名。

《プロジェクト地域振興活動》

* 地区公民館学習講座登山指導(公益事業) 計3回、指導員3名派遣。

* 3月17日(土)・18日(日) 「大山冬山バトロール」(公益事業)

冬山安全指導(公益事業) 指導員3名派遣。

(中井俊二)

広島支部

計画した事業は8月に発生した幌尻岳遭難事故により、支部活動が停止されたため、9月以降は事故対策の対応となった。

創設20周年事業は式典、積雪期県境脊稜縦走事業を中止したが、事故前であつたため、南アルプス縦走事業を実施。

《会議》

* 通常総会 4月8日(土) ホテルJALシティ広島 出席会員150名(当日出席74名、委任状76名)。

* 役員会 6月25日、1月25日、2月8日、2月20日、3月8日、4月3日の6回。

10月19日拡大役員会1月25日以降の役員会は支部再生についての審議とした。いずれも支部ルーム。

* 総務本部会議、正副支部長会議 月1回、各12回開催。いずれも支部ルーム。

* 新入会員オリエンテーション 5月25日 新入会員13名参加。

* 支部友委員会 3月22日新組織による支部友会制度廃止、準会員への支部友会員移行を検討、13名が参加 支部ルーム。

* 安全委員会(9月以降、事故調査委員会へ移行)

富士山遭難事故を受けて広島支部安全規定を制定して山行本部下に安全委員会を設置、登山計画書のチェックや安全登山の実施に向けた指導を目指した。8月の幌尻遭難事故を受けて、事故調査委員会に移行し同事故の原因究明、再発防止に向けた調査を行なった。

会議実施日 4月10日、7月3日 安全講習の実施方法、安

全確保の確認について。

*支部再生委員会 幌尻岳事故報告書の策定に添って、支部新組織を構築するために外部からの有識者を交えて委員会を立ち上げ、12月29日、1月19日、2月2日、2月13日、2月26日、4月6日の計6回開催した。委員会メンバーは本部から

副会長・重廣氏、公益法人担当の佐野氏、外部から山田・県岳連会長、松島・広島登山研究所代表、内部有識者として岡谷・県岳連副会長、内藤・広島工大山岳部顧問の吉村氏（いづれもJACC）、執行部から八幡・支部長、森戸・副支部長、古川・山行本部長、田賀・委員長、池本氏、西岡・総務本部長が参加。支部再生のための新組織改造計画を審議し、支部役員会に提言、反映させ、すべての審議を終えて4月6日をもって再生委員会を解散した。

*新組織説明会 3月24日、25日の両日午前と午後の計4回開催し、会員107名が参加。

《山行・野外活動》

*安全委員会（安全講習）

・5月28日 第1回講習会（天応 ロープワーク）。

・6月18日 第2回講習会（天応 クライムダウン・ピッチ登樵・ラッセルなど）。

・7月2日 第3回講習会（天応 岩稜歩き・支点構築・引上げ・支点回収など）。

・8月27日 第4回講習会（ウラオレ谷 沢登り）
幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

*第1山行委員会（例会山行）

・4月29・30日 寂地山～小五郎山テント泊 新入会員歓迎登山 参加34名。

・5月27・28日 毛無山～白馬山～朝鍋鷲ヶ山～三平山 テント泊 参加17名。

・6月17日 右田ヶ岳 日帰り 岩稜歩き 参加30名。

・7月28～31日 常念岳～蝶ヶ岳～徳沢 北アルプス小屋泊縦走 参加22名。

・8月26・27日 伊予富士～赤星山（石鎚連峰）テント泊 参加6名。

幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

*第2山行委員会

・4月22・23日 大山雪上訓練（第3山行合同）参加11名。

・5月3～7日 北アルプス薬師岳～黒部五郎岳など（2チーム）参加7名。

・6月24・25日 西中国山地歩行訓練 参加16名。

・7月28～31日 南アルプス縦走（8チーム）参加27名。

・8月1～14日 南アルプス縦走（8チーム）参加27名。
幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

*第3山行委員会

- ・ 4月22・23日 大山雪上訓練(第2山行合同) 参加11名。
- ・ 5月3～7日 北アルプス(北ノ俣岳・黒部五郎岳縦走) 参加5名。

- ・ 6月 備中(クライミング) 雨のため1日 参加12名。

- ・ 7月 二ノ原谷(沢登り) 参加者6名、三倉岳訓練 参加9名。

- ・ 8月 劔岳(源次郎尾根) 悪天候で撤退 参加4名。

幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

* スキー委員会

ゲレンデ以外実施なし。

* 支部友委員会

- ・ 5月14日(日帰り) 黒滝山・白滝山 参加21名(正会員15名)。

- ・ 6月11日(日帰り) 中郡古道街道歩き 参加15名(正会員14名)。

活動なし。

- ・ 7月9日(日帰り) 極楽寺山 参加20名(正会員13名)。

幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

* 国際委員会

ニュージーランド山岳会との交流を計画(20周年記念事業)したが、中止。

* 交流委員会

5月13・14日第4回3支部交流会および第2回中国・四国ブロック会議を四国支部主催で実施。山陰支部7名、広島支部

10名、四国支部10名が参加。ブロック会議と交流登山を実施。幌尻岳遭難事故のため、北九州支部、京都・滋賀支部との交流会は中止。

《プロジェクト・地域振興》

* ジュニア・ユースの育成(公益事業)

- ・ ジュニアクラブ 5月14日 深入山登山(ワラビ採り) 参加15家族、34名(小学生19名、保護者15名)、スタッフ8名、計42名。

- ・ 8月5・6日 夏休み親子登山・キャンプ体験 参加8家族24名(子供13名、保護者11名)、スタッフ10名 計34名。

幌尻岳遭難事故のため、11月紅葉ハイキング、2月親子雪遊び体験を中止。

- ・ 学生クラブ

活動なし

- ・ ユースクラブ

4月23日 ケガの予防講習会参加35名、30日 福山蔵王(クライミング)参加4名、5月5・6日 白山 残雪期登頂例会登頂参加4名、14日(三倉岳)参加5名、20・21日(八面山)参加11名、28日(備中)クライミング 参加2名自主訓練、6月10日 天応(クライミング)参加6名、18日十方山(二ノ原谷)沢登り例会 参加8名、7月9日 寂地山系(足谷峽)沢登り例会 参加8名、15～17日 劔岳(池ノ谷)バ

リエーション登攀自主訓練 参加3名、23日寂地山系（犬戻しノ滝）沢登り自主訓練 参加3名、8月27日 大崩山祝子川本流沢登り例会 参加7名。

幌尻岳遭難事故のため、以降中止。

*自然環境保護・保全活動

・4月16日 霧ヶ谷湿原再生地整備、保全および湿原景観の維持。カラコギカエデ、ハンノキ・ノイバラ等の伐採・刈取りおよび除去。

広島支部会員20名、八幡湿原自然再生協議会7名、NPO法人西中国山地自然史研究会7名参加。

・6月3日 霧ヶ谷湿原再生地整備、保全および湿原景観の維持。カラコギカエデ、ハンノキ・ノイバラ等の伐採・刈取りおよび除去。

広島支部会員20名、八幡湿原自然再生協議会7名、NPO法人西中国山地自然史研究会7名参加。

幌尻岳遭難事故のため、9月9・10日予定の登山道整備を中止。

*登山講座（中国新聞文化センター主催・公益事業 14年目）

登山講座への講師派遣

広島教室（中級、初級、里山計5講座）、福山教室（初級、里山計2講座）、呉教室（里山1講座）岩国教室（初級、里山計2講座）計10講座で前年どおりに開始。講座生が増加して活

況を見せていたが、幌尻岳の遭難事故を受けて契約の3月で講師派遣の中止を決定、12月中級・初級講座を前倒しで中止した。安全に講座を終了するため講師を増員した。最終的に生徒延数は1094名で前年総数を上回った。

《広報・文化活動》

*広島支部報「JAC HIROSHIMA」支部報を年4回（4月、7月、10月、1月発刊）。

*山楽サロン（さんかく）サロン部会（スズメ蜂対策、アマチュア無線機、スマホ勉強会2回）を開催。

*医科学委員会

特に活動なし。

*インターネット部会

次年度からのホームページ更新準備（テスト実施）。

*図書委員会

会員・他支部からの寄贈と本部からの寄託図書約1600冊を収蔵、整理、寄託図書以外の貸出し。

《その他の行事・懇親会》

1・平成29年度支部報告および決算報告、平成30年度氏支部計画書および予算書の提出。

2・9月23日全国支部長合同会議に八幡支部長、西岡本部長代行が出席、幌尻岳遭難事故について報告。
12月2日全国支部長合同会議に八幡支部長が出席し、幌尻岳

遭難事故について中間報告を行なった。

3・支部再生の重点項目として本部指導により、東海支部に田賀、土居、西岡会員3名が訪問し、「亀の会」の運営方法などの意見交換を行ない、貴重な資料の提供を得て高齢者支援組織新設の基礎作りを行なった。

《会員動向》平成30年3月26日現在

会員 167名(前年191名)、支部友会員25名(前年36名)。
来年度から支部友会は廃止、準会員に移行、現在申込み13名、
新入会員申込み6名(本部承認待ち)。

(近藤道明)

四 国 支 部

四国支部は設立後6年の比較的新しい支部である。それゆえかどうかは不確実であるが、平均年齢は他支部より若干低い。しかし、その内包する課題は他支部同様、高齢化や若年層会員の少なさなど共通している。支部活動をいかに活性化し、会員増加にどう繋げていくのか、活動を支える指導者をいかに育てるのか、暗中模索の状況である。

《会議》

*5月20日(土) 通常総会 四国山岳植物園「岳人の森」(徳島県神山町) 審議事項は、28年度事業報告および会計報告、29年

度事業計画および予算案、並びに支部規約の一部改正。出席会員数82名(委任状提出者59名含む)。翌21日(日)に記念山行を実施。

*9月3日(日) 役員会(7名出席) 三好市 今後の支部運営について意見交換。

*毎月1回 会員有志による情報交換会「サロン会」を支部ルーム(徳島市川内町)で開催。

《山行・野外活動》

*5月21日(日) 雲草山・高丸山縦走 参加者15名。

*6月10日(土) 高ノ瀬山(オオヤマレンゲ巡視) 参加者5名。

*7月29日(土) 白井谷川遡行 参加者4名。

*9月30日(土)・10月1日(日) 妹背山・今ノ山(4000山GP)

参加者11名(内四国支部6名)。

*12月16日(土)・17日(日) 千本山。野根山(4000山GP) 参加者10名(内四国支部3名)。

*1月14日(日) 犬吠山・小富士山(干支の山行) 参加者21名。

*2月11日(日)・12月(月) 三嶺 参加者11名。

*3月11日(日) 梶ヶ森(南大王集落福寿草鑑賞) 参加者6名。

*初心者登山教室「フラワートレッキング」主に愛媛県内で

38回講座開設 参加者306名。

《広報・出版活動》

*支部報「四国山岳」第4号 4月発行。

《プロジェクト・地域振興活動》

* 4月8日(土) 第5回小島烏水祭(高松市峰山公園) 碑前祭(烏水顕彰碑前)・峰山公園周辺ハイキング・讃岐うどんのお接待・夕食懇談会 参加者100名。

* 6月22日(木)〜7月3日(月) 米国西海岸における烏水の足跡を訪ね、シヤスタ山登山およびヨセミテ渓谷訪問 参加者8名。

* 8月11日(金) 「山の日イベント親子登山」 徳島県主催行事に山行リーダーとして支部会員8名参加。

* 11月11日(土) 登山道整備(草刈り) 落合峠〜前烏帽子 NPO法人との合同実施支部会員3名参加。

《その他行事》

* 5月13日(土) 第2回中国・四国ブロック会議 松山市道後友輪荘 四国支部主催 参加者24名(内四国支部9名)。

* 5月14日(日) 第4回山陰・四国・広島3支部交流会 四国支部主催 皿ヶ嶺および善陣ヶ森にて交流登山 参加者35名(内四国支部18名)。

(森山宏昭)

福岡支部

《会議》

平成29年度通常総会を、5月28日(日)福岡市立早良市民セン

ターにて開催した。支部会員数68名、総会出席者25名 委任状14名 合計39名。高木荘輔支部長挨拶に続き、規約改正など各議案が審議され承認された。総会後に支部会員の活動報告会(水野、酒匂、九大山岳会、渡部)を行なった。また、場所を移して「みくに」にて懇親会を開催した。

《プロジェクト・地域振興活動》

* パハルフェスタin坊がつる

4月29日(土)・30日(日) 2日間第6回「パハル・フェスタin坊がつる」のイベントとして、鈴木みきさんをゲストに「山つていい友! 新緑の九重山登山と法華院温泉」に講師派遣(長岡、渡部)などで協力した。

2日間晴天に恵まれ、北は北海道、南は熊本からの参加者総勢27名で長者原―雨ヶ池―坊がつる(法華院温泉山荘泊)―北千里が浜―久住山―杳掛山―牧ノ戸峠と、足並みも揃って春のくじゅう(九重)を楽しんだ。法華院温泉山荘では、イベントとして鈴木みきさんトークショーを開催。山荘は昨年の地震の影響で登山者が激減したとのことだが、29日は100名以上の宿泊者となり、テントサイトからもトークショー参加もあり、復興イベントの一助となった。

* 第2回夏山フェスタin福岡2017

6月24日(土) 12〜19時、25日(日) 10〜17時 電気ビル共創館(4階・みらいホール) 来場者数 24日約1600人(昨年1

000人)、25日約2700人(昨年2700人)、合計約4300人(昨年3700人)。

国民の祝日「山の日」の制定を記念し登山愛好家の裾野を広げる好機として、山に親しみ、理解を深めてもらうイベントを開催した。主催は日本山岳会などからなる全国「山の日」協議会を中心とした夏山フェスタin福岡2017実行委員会、また協力団体として日本山岳会福岡支部、日本山岳会北九州支部、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟なども加わった。

*祝日「山の日」制定記念in福岡登山大会

8月11日(木・祝)当日、福岡支部・福岡県岳連主導の「英彦山登山大会」、福岡県労山主導の「宝満山登山大会」、北九州支部主導の「風師山登山大会」の3山での大会を共催で行なった。

*日本山岳会福岡支部創立60周年記念「岩崎元郎さんの健康登山講座in太宰府」

10月13日(金)18時30分～20時30分(開場18時) 太宰府館まほろばホール 第1部＝岩崎元郎さん講演「山に登って元気になろう」 第2部＝「生涯登山を楽しむために」【対談】岩崎元郎&古川靖(毎日健康登山実践者)&高木莊輔(日本山岳会福岡支部長) 参加者＝130名。

*日本山岳会福岡支部創立60周年記念事業「猪熊隆之気象予報士の山の天気入門講座」机上講座&実践フィールド観察会

12月9日(土)13時～17時30分 プラム・カルコア太宰府(太宰府中央公民館) 多目的ホール

講演に先立ち、日本山岳会福岡支部創立60周年記念式典として、高木支部長よりパワーポイントを用いて福岡支部60年の歴史や活動についての解説を行なった。机上講座では風の流れと地形による山岳気象の基礎と気象遭難を防ぐための知識を学んだ(参加者54名)。さらに実践フィールド観察会では観世音寺から大宰府政庁跡までを歩き、実際に空を見ながら観天望気についても学んだ(参加者42名)。

*ふるさとの山清掃登山兼岳人のつどい「十坊山」

2月24日(土) 参加者＝登山21名(会員16名、会員外5名)、懇親会23名(会員19名、会員外4名) 燃えるゴミ1袋、燃えないゴミ少々。

《広報・出版活動》

*支部報No31を3月15日に発行した。

主な内容①・支部長あいさつ「ひき続き会員増と安全登山の追及を」(高木莊輔) ②・福岡支部創立60周年記念特集(倉智清司) ③・会員からの自由なテーマ、「Sir Ernest Mason Sallowと武田久吉」(山本博)、「山の日におもっつゝ山の原点・九重と穂高」(柴田佳久)、「ユネスコの世界遺産 神宿る島 宗像・沖ノ島と関連遺産群」(辻和毅) ④・山行・トレッキング記録、「グーキーピーク・トレッキング」(長岡ミツ子)、「太郎平、雲

ノ平、鏡平を縦走」(酒匂輝昌)、「モンゴルの風にふかれて」(渡部秀樹)、「ウズベキスタンに世界遺産と西天山を訪ねて」(渡部秀樹) 5・支部活動・事務局報告(支部創立60周年記念事業関連を含む) など。

(渡部秀樹)

北九州支部

遭難対策防止として山行計画書の提出が義務付けられ、そのチェック体制を進めている。当支部では、会員の高齢化によりリーダーの不足が問題になっている。指導員研修も5年目になり、リーダーとしての人材が着実に育ちつつあるが、実践を経験する機会が少ない。徐々に若い世代も入会するようになりつつあるが、若い人材育成の継続性が難しく、満足せずに去っていく者もいる。指導できる人材の育成が急務である。

《会議》

*総会

4月23日(日)午後13時より第18回通常総会を英彦山「しゃくなげ荘」で開催。出席者31人(委任状28人)。準会員制度が導入されたことから支部規約改定(案)が審議され承認可決された。

*役員会

定例役員会 5月10日(水)、7月5日(水)、9月6日(水)、11月1日(水)、1月8日(月)、3月7日(水)。

臨時役員会 6月7日(水)、1月24日(水)、3月30日(金)。

*山行委員会 9月27日(水)、10月25日(水)、2月20日(火)。

《講習会》

1・支部山岳指導員研修 5回 延べ人数56人(指導員14人)。

2・山岳専科 4回 延べ人数38人。

3・岩登り教室 2回 17人。

《自然環境保全活動》

*九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視員15人を選出し、森林保全巡視活動を行なうとともに、登山道の清掃など自然環境保全活動を行なった。

*英彦山頂上に設置されたバイオトイレの清掃作業を月に1回程度を行なった。

《行事・野外活動》

*4月9日(日) 英彦山清掃登山(支部23人、総数50人)。

*5月20日(土)・21日(日) 九州5支部懇談会を下関「海峡ビューホテル」にて開催。福岡支部10人、東九州支部17人、熊本支部10人、宮崎支部15人、北九州支部29人(総勢81人)。

*5月16日(火)・18日(水) 幸幼稚園児ハイキングサポーター13人。

*5月7日(日) 戸ノ上山にて登山体力測定(16人)。

*5月28日(日) 英彦山山開き 14人参加。

- * 6月24日(土)・25日(日) 山の日記念フェスタ in 福岡 6人参加。
- * 8月11日(祝) 家族登山(風師山→矢筈山) 参加者103人。
- * 10月22日(日) 横有恒祭(風師山は雨天中止) レセプション 24人。
- * 11月3日(金)・4日(土) 宮崎ウェストン祭16人。
- * 12月16日(土) 「忘年の集い」吉塚「ホテルサンヒルズ」31人。
- 《支部山行》月例山行12回実施、延べ1771人参加。
- * 4月2日(日) 福智山・虎尾桜観賞 12人参加。
- * 5月3日(水)→5日(金) 諸塚山、二ツ岳、犬ヶ岳 14人参加。
- * 6月4日(日) 右田ヶ岳(9人)、陶ヶ岳・岩登り教室 10人参加。
- * 6月10日(日) 九重猟師山・合頭山(オオヤマレンゲ観賞) 11人参加。
- * 7月1・2日 九重山夜間登山 21人参加。
- * 8月18日→22日 北アルプス表銀座(燕岳→槍ヶ岳) 10人参加。
- * 8月26日・27日 沢登り(尾鈴山・甘茶沢) 8人参加。
- * 1月7日 宮島・弥山(新春登山) 20人参加。
- * 1月28日(日) 三郡山(難所ヶ滝氷瀑観賞) 10人参加。
- * 2月10日→12日 伯耆大山・冬山訓練 11人参加。
- * 3月3日→4日 英彦山峰入古道(岳滅鬼峠→小石原) 9人参加。

* 3月17日→18日 立中山・三俣山(マンサク観賞) 17人参加。
《広報出版活動》

会報誌「北九だより」の発行4回(4月、7月、10月、1月)
《同好会活動》

1・版画教室 17回開催(ルーム) 伊藤前支部長の指導(6人)。
2・ポレポレの会(山行および史跡探索) 10回延べ130人参加。

(関口興洋)

熊 本 支 部

平成28年度は、4月早々熊本地震に見舞われ、まさに出鼻をくじかれた格好の新年度の始まりだった。

4月16日の地震は熊本の県民に大きな衝撃を与えたが、会員の3名の方が家屋の半壊という被害に遭われ、現在もみな仮設生活を強いられているが、幸いにも山岳会においては人的被害は見られなかった。

会の活動は大きく軌道修正を余儀なくされた。4月に予定していた支部通常総会は当然のごとく延期になり、結局は5月の末、やつのことで会場の確保ができ、参加された会員の無事を確認した。当然ながら、事前に計画していた年間事業は、4月、5月、6月の行事や山行は中止せざるを得なかった。7月

の北アルプス遠征が今年度最初の事業となった。平成29年度は熊本支部が創立されて60周年を迎える記念すべき年になるため、支部ではその記念の事業として「熊本の一等三角点」の再調査と確認作業を実施すべく、準備委員会を設立して、順次計画実行に移る際の熊本地震で、この事業も見直しを迫られた。今年度は通常の支部行事のほかに、この設立60周年記念事業としての特別事業を計画、準備委員会を立ち上げた。役員会も月1回の定例会と準備委員会も並行して実施された。

今年度も昨年度に続き、「支部のリーダー養成」として山岳会の特別補助を交付していただき、夏の沢登り、冬の雪山における研修会を実施した。今回は国際山岳医でもある土井理会員の指導でかなり重厚な研修が実施された。

支部活動の主目的もある会員の増強の「登山教室」も実施しているが、会員からは多少マンネリ化しているのではないかと意見もあり、この登山教室のテーマでもあった、「阿蘇外輪山の完全踏破」も9月の登山教室で一応の結果が出たのを機会に、今までこの事業に参加された一般の方々に、再度のお誘いをし、会員確保を充実することになった。それによって過去に参加された方から、このような誘いがあれば必ず参加するとの意見が多く寄せられ、今年度から採用された「準会員」制度にも多くの関心が寄せられ、思いがけぬ6名の加入者があった。

先に述べたように、平成29年度は熊本支部が設立されて「還

暦」を迎え、その記念行事の計画準備が実行委員会の20名を中心に進められた。特に「何か記念に残ること」を考え、支部会員全員で熊本県内にある、一等三角点を踏査し、歴史や自然をより観察しようと取りかかった。この事業も地震のため3カ月の活動停止があり、予定を大きく変更することになった。熊本県には14座の一等三角点があり、1700mクラスの高山から400mクラスの低山がある。特に低山では登山の対象になっていないものもあった。また、県境をまたいで4座の一等三角点もあり、結局この17座を調査研究の対象とした。約1年間の調査期間で、延べ59名の会員が協力し、設立60周年の記念日には何とか間に合った。通常の支部行事に加え、この記念事業は支部会員にとって大きな負担と、労力を与えてしまったが、結果はかなり詳しい内容となり、何よりも会員が登ったこと面白い、低い「山」に挑戦し、地図の見方や、植生の調査、そして地元聞いたその山の歴史など、通常の登山活動では得られない貴重な経験をしたことが大きな糧となった。

《事業》

* 4月16日(土) 森林巡視登山(阿蘇・高岳) 地震災害のため中止。

* 5月15日(日) 第16回登山教室(五家荘・保口岳) 地震のため中止。

* 5月28日(日) 平成28年度支部総会 熊本婦人会館 27名。

- * 6月11～12日 宮崎支部との交流会 熊本地震のため延期。
- * 7月15日～18日 北アルプス遠征(北穂高岳) 6名。
- * 7月30日(土) 市民登山教室(座学) テーピング技術講習 22名
- * 7月31日(日) 市民登山教室(実技) 九重・扇山登山 19名。
- * 8月11日(祝) 「山の日協賛親子登山」玉名市・小岱山 32名。
- * 8月20日・21日 第12回登山研修会「沢登り」宮崎県・藤河内溪谷 10名。
- * 8月27日(土) 夏季例会(ビールパーティ)支部会員の親睦と交流を図った 31名。
- * 9月11日(日) 第15回登山教室 南阿蘇・高森峠～国民休暇村 34名。
- * 10月2日(日) 九州山脈トレイルランへの参加協力、他団体のトレイルラン大会協力 11名。
- * 11月5日(土)・6日(日) 宮崎ウエストン祭 ウエストン祭および記念山行を実施 10名。
- * 11月20日(土) (金峰山三の岳) 森林保全巡視登山 21名。
- * 12月3日～18日 第7回山の写真展 実数455名(名簿記載149名)。
- * 12月11日(日) 海外登山報告会 19名。
- * 1月14日(土) 支部新年晩餐会 支部会員・会友の親睦と新年の挨拶会 26名。
- * 2月5日(日) 第8回冬山登山研修会 九重・御池 29名。
- * 3月3日～6日 冬季研修会(大山雪山研修会) 7名。
- * 3月12日(日) 干支の山(霧島・白鳥山) 30名。
- * 毎月1回支部役員会 事業の仔細計画や支部の運営内容の検討を行なった。
- * 年3回 支部報発行 37号、38号、39号(支部活動の報告や情報提供・会員の登山報告)。
- * 隔月 支部通信の発行(登山計画の案内や会員への連絡を行なった)。
- 《山の日記念事業委員会》日本山岳会・熊本山岳連盟・熊本山岳ガイド協会。
- * 2月6日 第1回山の日記念事業委員会。
- * 3月10日 第2回山の日記念事業委員会。
- 《熊本支部設立60周年記念事業準備委員会》
- * 平成27年3月(東部公民館)設立60周年の周知広報 役員会などで準備計画を立てる。
- * 平成28年4月 準備委員会の設置 会員に呼びかけ、16名の委員を選出。
- * 平成28年4月(東部公民館)準備委員会の開催 記念事業そのほかの説明と担当者決定。
- * 平成28年4月16日 熊本地震発生 被害状況の調査。
- * 平成28年5月 第2回準備委員会(帯山公民館) 準備計

画の再検討。

*平成28年6月 第3回準備委員会 特別事業
業一等三角点調査の計画。

*平成28年7月 第4回準備委員会
点の調査進捗状況と変更。

*平成28年8月 第5回準備委員会
の変更・進捗状況報告。

*平成28年9月 第6回準備委員会
協力者募集と計画。

*平成28年10月 第7回準備委員会
告会と調査日程の確認。

*平成28年11月 第8回準備委員会
の問題点報告と再調査。

*平成29年2月 第9回準備委員会
の問題点報告と再調査。

*平成29年3月 第9回準備委員会
果と役割分担決め。

(松本莞爾)

東九州支部

平成29年度に東九州支部で実施した公益的事業では、まず5

回目を迎えた初心者向けの「登山入門教室」がある。過去4回に比べて、実践講座に重点を置いたこの講座は、修了者17名のうち、会員2名、会友7名が支部会員となった。15回目を数える青少年を始め山登りの初心者を対象にした「青少年体験登山大会(登山教室)」は過去最高の76名の参加者で盛況裡に終わった。昨年、県内主要山岳団体と共催で実施した『山の日』記念登山行事を、今年も同団体共催で実行委員会を立ち上げて、「山の日登山・ふるさとの山に登ろうinおいた・霊山」として広く一般の参加を呼びかけて実施し、約100名の参加が得られた。そのほか継続的に実施している公益事業として、久住山・御池の遭難者慰霊碑の前で遭難者の慰霊祭を兼ねた「山の安全を祈る集い」を法華院温泉と共催で実施、祖母傾山系で近年著しいスズタケや樹木の枯死とシカの食害状況の調査を大分県植生研究会との共同作業で実施、九重山系の登山道の清掃登山活動などがある。

また公益事業では支部の登山活動の基点としての位置づけをもつ、毎月1回の月例山行をはじめとして、合宿山行・研修山行、忘年山行と忘年会など、会員相互の交流と親睦とを中心に実施してきた。さらに、岳人交流を開始して12年目、隔年ごとに訪問しあう交互交流登山を開始して11年目となる韓国山岳会蔚山支部との交流は、29年は韓国側が日本を訪問の順番で、九重山系で交流登山と交流会を実施した。

支部の活性化と次期リーダー育成を視野に入れた青年部の拡大と活性化に力を入れ、本部からの特別事業補助を受け入れて実施した研修山行は2年目を迎えた。まだ少人数ではあるが、出来るだけ独自の活動の中から、独創性に満ちた活動の発展を期待している。

支部の動向と広報伝達のための支部報発行は季刊(春夏秋冬)で年4回発行してきた。このような支部の活動の中で29年度は新たに4名の新入会員。6名の新入会友が見られた。

◇共益事業

《会議関係》

*支部定期総会 4月22日(土) 大分市・コンパルホール 会員80名中61名(うち委任状出席28名、別途に会友の22名)出席
平成28年度事業報告および決算報告・監査報告などを承認、29年事業計画および予算、一部規約改正などが決定された。

*支部役員会

・第1回役員会 5月12日(金) コンパルホール 平成29年度事業の具体的推進についてほか。

・第2回役員会 6月9日(金) コンパルホール 第5回登山入門教募集要領についてほか。

・第3回役員会 7月21日(金) コンパルホール 第5回登山入門教室実施・山の日行事の実施についてほか。

・第4回役員会 9月4日(金) コンパルホール 第16回青少年

体験登山大会についてほか。

・第5回役員会 10月18日(木) コンパルホール 韓国山岳会蔚山支部との交流会についてほか。

・臨時役員会 11月20日(水) コンパルホール 大分百山の選定直しについて。

・第6回役員会 1月17日(水) コンパルホール 登山計画書提出の徹底についてほか。

・第7回 4月6日(金) コンパルホール 平成29年度事業報告・決算報告、平成30年度事業計画・予算計画等定期総会議案審議ほか

*会計監査 日時 4月6日(水) 午後4時から コンパルホール

《公益的事業の実施》

*第5回登山入門教室 受講者20名(うち途中辞退などあり。17名が修了)。

・開講式と座学講座 9月20日(水) 大分市金池南・ホルトホール大分。

・実践講座

第1回 10月1日(日) 福万山(山歩き的第一步から)

第2回 10月15日(日) 和尚山(登山入門コースの実践)

第3回 11月11日(土)・12日(日) (テントや山小屋に泊まってキャンプ体験) 横岳キャンプ場と津波戸山(ちよつと陰

しい山歩きの実戦訓練

第4回 1月20日(土)・21日(日) (山小屋泊まりと雪山体験) 泉
水山・黒岩山(20日)・三俣山(21日)

*第16回青少年体験登山大会(青少年登山教室) 9月11日(日)
コース(牧ノ戸峠―久住山―牧ノ戸峠 参加者76名 最
少者7歳(小1) 最年長者82歳)

*「山の日登山」ふるさとの山を登ろうinおいた・霊山 8月
11日(木) 大分市・霊山(七瀬川公園―秋岡・霊山―内植田―
七瀬川公園) 参加者約100名。

*山の安全を祈る集い 9月3日(日) 池ノ小屋の上の遭難慰霊
碑前慰霊碑前で法華院温泉の院主の読経で慰霊と安全祈願
参加者29名。

*スズタケ枯死とシカの食害調査 本谷山の西の稜線でスズタ
ケ食害状況の定点観測と、尾平越から本谷山まででの稜線
上の樹皮の食害状況調査。第7回 6月3日(土) 支部参加者7
名、第8回 9月30日(土) 支部参加者8名。

《共益事業》

*月例山行 28年度の山行テーマ「伝説と歴史の山を登る」

・4月16日(日) 古処山(859・4m) 参加者15名。
・5月14日(日) 津波戸山(367・1m) 参加者19名。
・6月4日(日) 求菩提山(782m)・犬ヶ岳(1130・8m)
参加者15名。

・7月9日(日) 五葉岳(1569・6m) 参加者9名。
・8月6日(日) 九重山遭難慰霊碑(山の安全を祈る集い)。
・9月4日(日) 9月16日(土)・17日(日) 牛ノ峠(918m)・男鈴
山(783・4m) 台風接近により中止。

・10月28日(日) 天山(1046・1m)・彦岳(845・2m)
参加者10名。

・11月23日(木) 孔大寺山(498・8m)・金山(317・3m)
参加者5名。

・12月9日(土)・10日(日) 大矢野岳(1236m)、烏帽子岳(1
336・7m)、杵島岳(1326m)(忘年登山)。

・1月27日(土) 可愛岳(727・8m) 参加者13名。
・2月18日(日) 八方ヶ岳(1052・9m) 参加者22名。

・3月24日(土) 祇園山(1307・3m)・揺岳(1303・5
4m) 参加者18名。

*忘年登山および忘年会 12月9日(土)・10日(日) 9日〓大矢野
岳(1231m)、高千穂野(1100・9m) 10日〓烏帽
子岳(1336・7m)、杵島岳(1326m) 忘年会〓9

日「かんぱの宿阿蘇」参加37名。

*韓国山岳会蔚山支部との交流登山 11月3日(金)・4日(土) 交
流会・懇親会〓3日 長者原・法華院温泉・別館「花山酔」
交流登山〓3日 泉水山・黒岩山 4日 三俣山 参加蔚山
支部20名(ガイド1名)、東九州支部参加者30名。

＊研修山行

・第1回 6月17日(土) 麗谷周回 研修Ⅱ沢登り 参加者5名。

・第2回 7月2日(日) 神原川小鳥谷尺 研修Ⅱ沢登り 参加者7名。

・第3回 8月19日(土) 傾山サマン谷 研修Ⅱ沢登り 参加者7名。

＊青年部の活動 研修山行 JAC本部の特別事業補助金制度の承認により実施するもので、全九州アルパインガイドクラブに事業委託して研修実施。

・第1回 11月25日(土) 扇山・恵比須岩 研修目的Ⅱ岩場におけるアイゼンワーク、ロープワークなど 参加者4名。

・第2回 12月16日(土) 高崎山の太谷 研修目的Ⅱ岩場におけるアイゼンワーク、ロープワークなど 参加者5名。

・第3回 1月28日(日) 大崩山系・宇土内谷 研修目的Ⅱアイス斜面で、歩行訓練、アイゼンワーク、ロープワーク、ピッケルワークなど 参加者5名。

・第4回 2月23日(金)・25日(日) 吉和冠山(広島県) 研修目的Ⅱ一般ルートでなく積雪のある南尾根を登ることにより、雪山技術、歩行技術、ラッセルワーク、積雪生活技術を学ぶ参加者4名。

＊支部報発行 4月25日…77号、7月25日…78号、10月25日

…79号、1月25日…80号。

《支部会員の動向》

平成30年3月31日現在 会員73名(29年度死亡1名 退会1名 入会4名) 準会員4名 会友74名。

(飯田勝之)

宮崎支部

宮崎支部は29年度総会において、役員のほとんどが交代し、新役員による運営を余儀なくされたが、末永前支部長に顧問という立場でご指導いただき、また支部会員の積極的な支援により支部活動を進めることができた。公益事業としては、「山の日」ときめき家族登山in大浪池」とした公募登山、地元高千穂町との共催による第33回宮崎ウェストン祭の開催、宮崎家庭裁判所委託の少年補導登山、水源の森づくりなど自然保護活動、宮崎市中央公民館まつりにおける日本山岳会および支部活動を紹介するパネルや写真展示、宮崎市近郊の清掃登山などを行った。定例山行、月例山岳研究会などの支部行事はおおむね計画どおり順調に進めることができた。以下に概要を記す。

《会議》

＊4月8日(土) 平成29年度宮崎支部通常総会 出席52名(当日出席36名、委任状16名)。

* 毎月第1木曜日 支部役員・委員長会議、同会議はほかに7回開催(延べ167名)。

* 毎月第1木曜日 定例登山研究会(延べ297名)。

《山行・野外活動》

* 4月15日(土) 鰐塚山(定例山行) 17名参加。

* 5月20日(土)・21日(日) 九州5支部懇談会・北九州支部主管、

宮崎支部会員15名参加。

* 6月17日(土) 高千穂峰(定例山行) 18名参加。

* 7月15日(土) 矢岳(定例山行) 18名参加。

* 8月11日(金) 山の日ときめき家族登山・大浪池(公益) 公募

参加者24名、宮崎支部会員21名参加。

* 10月14日(土)・15日(日) 第33回全国支部懇談会・茨城支部主管、

宮崎支部会員14名参加。

* 10月16日(月) 丹沢山系大山 14名参加。

* 11月3日(金) 第33回宮崎ウエストン祭(公益) 一般参加者数

170名、宮崎支部会員20名参加。

* 11月4日(土) 祖母山(定例山行) 20名参加。

* 11月24日(金) 宮崎家庭裁判所委託登山(公益) 参加者22名、

宮崎支部会員8名参加。

* 1月21日(日) 高房山(定例山行) 25名参加。

* 2月17日(土) 丹助岳(定例山行) 14名参加。

* 3月2日(土)・4日(日) 第33回諸塚山山開き 一般参加者約7

00名、宮崎支部会員17名参加。

* 3月10日(土)・11日(日) 熊本支部交流・仰烏帽子山 熊本支部

会員14名・宮崎支部会員11名参加。

* 3月18日(日) 双石山山開き 一般参加者150名、宮崎支部

会員7名参加。

《自然保護・環境保全事業》

* 5月28日(日) 第22回森づくり会総会 2名参加。

* 7月2日(日) 育林作業・田野の森 7名参加。

* 7月30日(日) わくわくの森Ⅰ・第13回下草刈 6名参加。

* 9月10日(日) わくわくの森Ⅱ・第7回育林作業 3名参加。

* 11月12日(土) 森づくりの会、第15回森の散策、釈迦ヶ岳 5

名参加。

* 12月9日(土) 双石山清掃登山(兼定例山行) 20名参加。

* 2月12日(日) 育林作業・田野の森 8名参加。

* 3月11日(日) わくわくの森Ⅲ・第7回春の整備 3名参加。

《公報活動》

* 8月11日(金) 山の日ときめき家族登山に併せたミニ講話と日

本山岳会作成パンフレットの配布、一般参加24名・宮崎支部

会員21名参加。

* 11月25日(土)・26日(日) 第23回宮崎中央公民館まつり、支部

活動の山岳写真・日本山岳会の紹介などをパネル8枚で展示、

一般参加者数約700名、宮崎支部会員15名参加。

《出版事業》

宮崎支部報年4回発行（各A4判・8ページ・150―200部）。

* 4月1日（60号）、7月1日（61号）、10月1日（62号）、1月1日（63号）。

（荒武八起）

委員会の活動報告

総務委員会

当会の運営と管理を担当する部門として、各種会議や各種行事の運営、パンフレットや各種資料の作成、販売品の企画・販売などの実施やその補助を行なっている。近年は、会の財政改革や活性化を実現するために、会運営の合理化などにも積極的に取り組んでいる。毎月第1・3月曜日に定例の委員会を開催し、そのほかに各行事の打合せや事前準備のために、年十数回、臨時の委員会や作業日を設けている。

1・新入会員オリエンテーション

9月2日(土)104号室 対象者267名中27名参加

新入会員がJACに対する理解を深め充実したクラブライフを過ごしていただけるよう、その年に入会した会員を対象に、年1回開催している。本部役員の挨拶ののち、会の歴史・組織・活動、山岳保険、ルーム・図書室・山岳研究所等の施設やWebサイトの利用方法などを動画も交えて説明する。各自自己紹介をしてもらい、そののち、委員会、同好会関係者も交え、意見交換と懇親を図る。また、遠方で参加することが困難な会員のために、支部のオリエンテーションなどで活用していただけるよう、JACの

説明のCD-ROMを製作し、全支部に提供している。

2・同好会連絡会議

7月3日(月)104号 出席24同好会、欠席2同好会

同好会活動の活性化を図り、業務上必要な事項を連絡するために年1回開催している。本部からの情報伝達のみでなく、同好会からの要望も尋ね、会の運営に反映している。構成員の減少などにより、活動実績がほとんどなく、休眠中の同好会もみられるので現状に合わせた台帳の整理を行なう。同好会活動の活性化に役立てるために、同好会活動の発表の場として年次晩餐会などの活用なども検討している。

3・JACオリジナルグッズの製作と販売

会員サービスの一環として、オリジナルグッズを企画・製作し、ルームでの直販やWebサイトでの通信販売、年次晩餐会の会場でも販売している。会員からの要望も取り入れ、ソーラーランタンなどの新製品も積極的に取り入れている。販売・在庫管理の見直しによる合理化や販売チャネルの拡大などを検討している。

4・支部合同会議

9月23・24日 プラザエフ(東京・四ッ谷)

各支部の支部長・事務局長の出席の下、事務局の主管で年1回

開催している。昨年は試験的に東西に分けて開催し、討議時間を十分に取れた、などのメリットがあったものの支部同士の意見交換が十分に行なえず、費用や手間が掛かることなども配慮し、本年は従来どおりに(全支部出席のもと)年1回実施することとなった。討議内容が多いため、効率よく充実した討議ができるよう、運営方法の工夫が求められる。

5・年次晚餐会

12月2日(土) 京王プラザホテル(東京・新宿) 出席者 517名

申込み方法を改善したこともあり、同伴者を含めて出席者数は増加している。席の希望受付け、入場時のハープの演奏など、出席者が快適な時間を過ごせるよう新たな工夫も取入れている。講演会も年齢を問わず、多くの会員が興味を持つものを取入れるようにしたこともあり、新しい試みとして企画した佐々木大輔氏と関裕一氏の映像と対談では340名ほどの入場があった。

併催行事として、特別展示(『シュラーギントワイトアトラス』〈図版集〉の公開)、図書交換会、山岳写真展(アルパインフォトクラブ)、支部の書籍・文献の展示、販売を行なった。参加者により楽しい時間を過ごしていただけるよう、内容や進行方法を引き続き見直してゆく。

6・JAC説明会

偶数月の第4金曜日 本部ルーム 延べ参加者数40名
会員増加のための取り組みとして、入会を検討している方に対する説明会を定期的の開催している。説明会の参加者の多くが入会している。

(今田明子)

デジタルメディア(DM)委員会

DM委員会は、インターネット利用による当会の広報、事務連絡の支援を目的として活動している。公益社団法人としての公開情報および、当会主催のイベントの案内を行なうwebサイト(ホームページ)の運用、会員向けメールマガジンの発行、および会務に関わるメールシステムの運用管理を1997年来行なってきた。毎月定例会議を開催するのに加えて、メールングリストなどを通じて記事の掲載、編集検討を行ないつつ、インターネットシステムの運用を行なっている。2017年度の活動は以下のとおり。

1・「HOME」および「ROOM」のWebサイト運営

Webサイトへの活動記録記事や、案内記事が多量・多岐にわたるようになったことから、会員募集案内をはじめ、一般関係者からのアクセスを容易にすべく、当会の組織や歴史の紹介、および委員会、支部および同好会の活動、イベントの案内を中心とし広報的内容に重点を置いた「HOME」サイトを設けている。こ

れと併せて、設けた「ROOM」のサイトでは、本部委員会、支部、同好会などの活動記録、および会員専用の会務運営に関わる活動規程や、活動要領、各種の事務書類の書式を掲載することにより会員の利便を図っている。「ROOM」サイトは、各委員会、支部、同好会のインターネット担当者が記事を編集して、それぞれが主催するイベントの紹介や活動報告の掲載も行なわれている。

2・メールシステムの運用

日本山岳会の会務、委員会、支部、同好会の活動を支援するため、当会独自のメールアドレス（ドメイン）のメールシステムを運営している。種類は

- (1) 通常のメール受信を行なうメール
 - (2) 特定のグループを対象として運用するメーリングリスト
- などが準備されている。

3・メールマガジンの発行

メールマガジンは、Webサイトの会員専用ページを閲覧するためのパスワードを申請した会員、およびメールマガジン配信を希望申請した会員を対象としている。このWebサイトに掲載された委員会、支部などのイベント紹介にリンクして最新情報とともに、当会が協賛するイベントや、登山関連の有用なニュース・情報提供を目的に、おおむね隔週に発行している。

4・SNSの活用

当会の公益法人としての広報機能を高め、またWebサイト

に掲載された記事へのアクセス数向上、活動紹介を目的としFB（Face Book）も活用し、イベントなどの紹介を行なっている。FBは、タイムリーに情報を発信できるため、一般登山者がFace Bookで紹介されたイベントに参加する機会が増える、などの活動周知に加え、当会へ入会する事例も増えて有効に機能している。DM委員会は、Webサイトの編集に改善を加える検討を進めているが、各委員会、支部などには記事の充実のために会報への紹介と併せて、Webサイトへのイベント案内、活動報告の投稿（またはDM委員会への原稿提供）をお願いしている。

連絡先 internet@jac.or.jp

（多田真弘）

資料映像委員会

当委員会の主たる業務は、博物館の資料管理方法を参考にして、過去より引き継がれている歴史的に貴重な山岳文化資料（絵画・映像を含む）の適切な保存と管理、内容の調査・研究、新たな収集、公開展示、貸出し、画像使用許可、寄託資料の管理、内外の問合せに対する対応などを行なうことである。

年度毎の事業内容の、見直し・追加・重点項目の設定を行ない、年間計画書（事業、担当および事業別予算）を作成している。事業の進捗を確認し、重要事項を審議するために月例会議を実施し、議事録に

残している。また、活動内容で本会会員に公開すべきものは会報「山」、会誌「山岳」やWebに随時掲載している。

2017年度の主な公益・共益事業の活動内容を以下に記す。

1・「第21回全国山岳博物館等連絡会議」の開催

・11月25日に日本山岳会集會室で開催した。5館7名と当委員会委員・理事8名が参加し、各館の学芸員による特別展、企画展や研究調査の現状報告（最近では海外からの観光客と登山客増加が話題になる）、情報提供、抱えている課題とそれに対する意見交換や助言が行なわれた。この会議は毎年実施している山岳関連の博物館・美術館との相互および本会との協力関係を深める有意義な会議となっている。本会議の内容は会報「山」872号（2018年1月）を参照。

2・現物資料・映像資料の保存と活用

・所蔵資料の点検と内容調査・記録、本会内常設展示、保存環境改善（102号室の換気・保存資材交換など）、資料貸出しと画像使用の許可書発行、問合せ対応（16件）を行なった。管理中の資料と絵画のデータベース登録数は約500件（個別資料は数千点）、映像資料（DVD・VHS・フィルム）は450タイトル。

・本会内に保管しきれない絵画と資料は、適切な保管・管理と、展示や研究に活用していただける博物館・美術館8館に寄託している。これらの年度末棚卸しと、寄託継続手続きの管理業務を行なった。

・加賀正太郎会員寄贈『蘭花譜』（木版画）の修復作業を実施し、経年劣化を低減するために、新しい保存方法を採用した。

・主な資料貸出し展示協力の例

①松本市立博物館 特別展「山岳画家 武井真澄」（7月14日～9月24日） 武井画伯がデザインした初期の当会の会員章を貸出した。

②世田谷文学館「山へーto the mountains 展」（7月15日～9月18日）「山」を学際的に捉えた特別展に取り上げられ、諸分野で活躍した人々の小島烏水（登山家・随筆家）、田辺和雄（登山家・植物学者）、深田久弥（登山家・文筆家）、吉阪隆正（登山家・建築家）、田部井淳子（登山家）、石川直樹（登山家・写真家）、坂本眞一（漫画家）、初期の女性登山家等の関連する展示資料のうち、当会にある所蔵の現物資料、映像資料と書籍についての展示に貸出し協力をした。

③富山県「立山博物館」特別企画「宮様、山へー大正期登山ブームのなかの皇族登山」（10月21日～11月26日） 秩父宮家から御寄贈のピッケル、秩父宮殿下の山岳スキー御写真（立山）などを貸出した。

④慶應義塾体育会創立125年記念 特別展「近代と慶應スポーツ」（11月28日～12月13日） 横有恒愛用のピッケル、アルパイト東面スケッチ（山岳部・三田幸夫）、マナスルに埋められたピース缶の3点を貸出し、展示に協力した。

⑤日本BS放送株式会社『ヒマラヤの聖峰80年目の再挑戦 山頂に眠る旗を探しに』の番組制作に、当会所蔵の写真・映像資料を提供し、協力した。

3・晩餐会特別展示「シュラーギントワイト3兄弟の業績」

・12月2日の年次晩餐会に図書委員会と共催で、シュラーギントワイト3兄弟が東インド会社の依頼で今から160年前にインドおよび高地アジアの探索を行なった業績を示す、松崎中正会員寄贈の報告書と付図のアトラス(図版集)であるリトグラフの特別展示を行なった。美しい色彩のリトグラフは、参会者には大変好評であった。

(溝口洋三)

山岳編集委員会

当会の機関誌『山岳』第百十二年(2017年)は、担当の神長常務理事以下昨年と同様のスタッフで編集作業が行なわれ、8月中旬に発刊された。

表紙は、昨年に続き、岐阜県下呂市在住の田立康彦会員(会員番号9233)にお願いし、湊沢カールから望む前穂北尾根の画で飾っていただいた。

今号は、それぞれ特徴的な記録3本を巻頭にもってきた。特に国内の記録として、劔沢大滝左壁ゴールデンピラーの記録が目をひく。

厳冬期黒部横断32日間にわたる佐藤裕介氏ら3人の記録は、停滞18日間を要する長期におよび、しかも一瞬のチャンスをつかんで挑むというスリリングなものとなり、いかにも冬の黒部ならではの横断行にふさわしい貴重な記録である。また関西支部によるナンガマリII峰の記録は、重廣恒夫隊長の指導のもと、ヒマラヤ登山塾でトレーニングや準備を進め、ヒマラヤの7000m峰に9人が初登頂するという成果を上げた登山隊だった。東京農業大学山岳部の若手メンバーで挑んだ東稜からのマナスル登山は、登頂後に隊員1名が消息を絶ってしまうという残念な結果に終わったが、信頼できる仲間との登山の様子が克明に綴られている。

つづいての「調査・研究」では、創立110周年記念海外学術登山隊の大森弘一郎会員によるゴジュンバ氷河調査隊の活動記録が続く。これまでの過去の経験を生かしながら、空撮を交えた調査は、氷河池の現状報告とともに貴重な推論を導き出している。また、河川の支流を表わす「沢・谷」地名考は、五十嶋一晃会員による、沢の地名考察であり、東日本は「沢」、西日本は「谷」など、示唆に富んだ論考は会員ならではのものである。

「読物」は、5本並んだ。まず積雪期鹿島槍ヶ岳南峰の初登頂を巡って中村純二会員以下関連した論考が3本続く。一高旅行部と濱田和雄の過去の記録を一つずつ掘り起こしていく作業は大変なものだろう。ほかの読物もどれも歴史の一端に触れるものばかりで、興味深いものが続いた。

そのほか「図書紹介」以降は、例年どおりの構成である。

なお、昨年度の製作費総額は、424万8320円で、前年度と比べると若干増となっている。内訳は、製作費278万395円、送著作業・封筒代100万6949円、通信運搬費9万148円、編集費34万9640円、その他経費2万1188円。印刷部数は5600部である。

(神長幹雄)

会報編集委員会

かつて出版社で編集経験のある節田重節（会員番号6720）と原邦三会員（同9080）が、会報の前半と後半を分担して編集作業を進行、毎月20日過ぎに発行している。

当会全体で経費削減に努めている折から、昨年同様、増ページをせず、毎月20ページ以内に納めているが、総会や年次晩餐会など、大きなイベントのある月は、正直言ってページ取りが苦しい月もある。また、年間を通じて本部および各支部で催事が多くなっており、それらの報告を掲載しようとする、どうしても紙面が固いイメージになるので、一方に偏らないよう、できるだけ会員の皆さんが親しみやすい会報にすべく努めている。近年は、新入会員や若い会員が増えているという状況に鑑み、そういう会員にも当会の活動状況に興味を持って見ていただけるよう、最新の登山界の情報や人物紹介など、人間臭く

変化に富んだ紙面作りを心掛けていきたいと思う。

昨年の製作費総額は856万812円、前年比約48万円減で、経費削減効果が出ている。毎月の印刷・製本費が330万4800円で、月平均27万5400円。通信・運搬費が349万1505円、送著作業費が82万2427円、編集費101万1360円、原稿料5万5000円などとなっている。

(節田重節)

図書委員会

17年度の図書委員会の活動を語るにあたって、三好まき子委員長が体調不良のため委員長業務をしばらく休まざるを得なくなったことをまず記しておく。その間、担当理事の近藤が委員長を代行することになったのだが、そこで分かったことはこれまでいかに三好委員長に頼り切っていたかということである。図書委員会の業務内容は、昨年度の『山岳』に掲載された彼女の手による報告に詳しいが、その業務は多岐にわたり、どれを行なうにも図書に関する知識と日本山岳会図書室の現状把握、さらに事務局との連携が必要になる。

また、図書委員会は英語をはじめとする各言語のエキスパート、出版関係者、ブックデザイナー、山岳図書の執筆者など、山岳図書についての様々な知見を持った人材で構成されており、委員一人一人と話をするたびにその知識の深さに驚かされる。ただ、それだけに委員会

をコーディネートし、委員会業務を円滑に執行するには、そういった各方面のエキスパートたちの知見を的確に図書委員会の目的とする方向に持っていくが必要になる。

委員長を代行してきた私は、そのいずれについても本来必要とされている質を維持することができたとは言いがたい。やはり三好委員長とのコーディネート力、営業力、そして人間性まですべてが、これまでの図書委員会の力の源だったのである。少しでも早い三好委員長の復帰が待たれるゆえである。

ただ、彼女が不在であることにより、若手の委員会メンバーに自覚が芽生え、何かがあっても自分できちんか決着させるという意識が強まったことは禍福は糾える縄の如しというたとえ通り、今後の委員会運営をいい方向に進ませていく力になるはずと信じている。

現在は委員会がこのような状況にあるため、ルーティンワークや恒例行事を除くと例年に比べて委員会活動が低調だったことは否定することができない。図書室、蔵書の管理については事務局の際立った働きによりこれまでと同じ質が維持され、晩餐会にあわせて行なわれた図書交換会も狩野芳郎委員をはじめとする若手の委員によって盛況のうちにこなすことができた。しかし講演会はあとで述べるように、1回だけの開催と寂しい限りである。

今後は、深い知見を持つベテラン委員の力と、若手委員のパワーとITに関する知識を融合させて、日本山岳会のアイデンティティの一つである山岳図書の蒐集と利用推進、研究をさらに深めていきたいと

考えている。ただ、それを阻害する要因になりかねない一番の悩みが、蔵書蒐集スペースの問題である。今、図書委員会に限らず日本山岳会の知恵を結集してこの解決に当たらないと、会のアイデンティティの一つが音を立てて崩れてしまいうに違いない。これは図書委員会だけの問題ではない。このことを『山岳』の紙上を借りて会員一人一人に訴えたい。

もう一つ進めていきたいのが本離れしている50代以下の会員に、山岳図書に親しむ機会をつくり、山岳図書への理解を深めてもらう活動である。これは一部の有志若手委員とマウンテンカルチャークラブとで協力しながら始めたところだが、今後は図書委員会全体を巻き込み、若い会員のニーズも図りながらもっと大きな活動として日本山岳会の中に広げていきたいと考えている。

17年度に開催した行事2企画。

*第43回山岳史懇談会「白瀬南極探検隊の業績と航海」 11月17日(金) 開催

1910～12年に白瀬大尉らによって行なわれた日本初の南極探検の記録映画(デジタル修復された版)を観ながら、当時の苦難に満ちた南極探検と航海の様子を極地研究所名誉教授の渡辺興亜会員に語ってもらった。

*第35回・図書交換会 12月2日(土) 開催

出品本は約400冊、完売。

そのほか、会報「山」の「図書紹介」欄のコーディネーターも図書委員会の毎月の仕事である。紹介する本の選定↓執筆者の選定↓依頼↓原稿の入稿までをコンスタントに行なう必要がある。

(近藤雅幸)

自然保護委員会

今年度は自然保護活動のテーマをA・シカ問題 B・ライチョウ問題 C・リニア建設問題 D・自然保護諸問題の4課題を決め、委員が自主的に担当し活動報告、問題提起などに取り組むことを確認した。シカ問題、ライチョウ問題など自然保護をテーマの講演会、シンポジウム保護活動などに積極的に委員が参加して委員会でも報告、会報に原稿を提供することを確認して新年度を始めた。

委員の増強を近隣支部に呼び掛け、東海支部自然保護委員長が就任。

【自然保護全国集会の開催】

7月9日(日)、10日(月)の両日、「外来種に怯える山の植物たち」をテーマに、岐阜支部と共催で岐阜市の長良川河畔の「十八楼」に首都圏および全国各地18支部の会員と一般参加者を含め、総勢106名の参加で開催した。

1日目の午前の部は11時から13時まで。全国集会の主目的の全国各支部の自然保護委員会の活動状況や課題などの報告があった。午後の部は14時から開催。一般参加者を迎え、演題「伊吹山の外来種」を財

団法人自然学総合研究所・清水政美研究員の基調講演を行なう。

16時から17時30分まで、①高山帯での課題、②亜高山帯での課題、③山地帯での課題の3分科会に分散して活発な討議が行なわれた。

2日目のフィールドスタディは、伊吹山の自然観察会を実施した。

【機関紙『木の目草の芽』の発行】

隔月刊で127・132号を発行。支部、支部自然保護委員、一般購読希望者、山岳団体、自然保護団体、マスコミなどの関係機関にも贈呈している。

【自然観察会開催】

4月22日(土) 武蔵増戸・小峰公園 参加者7名。

11月3日(金) あきる野市・横沢入り都里山地域 参加者11名。

【講演会】

演題「アラスカ大自然の生活と環境」 講師 茅野徹氏(アラスカ・デナリ州立公園在住12年、デナリ・チノ・ネイチャ・センター所長) 参加者30名。

【シカ調査に関わる協力要請】

11月21日(火) 国立研究開発法人 森林研究・整備機構森林総合研究所野生動物研究領域長 岡輝樹氏による説明会開催。

【山岳写真のデータベース化】

高山植生の同じ場所での昔と今をデータベース化する作業は、長く続ける活動で継続している。

【山岳団体自然環境連絡会】

日本山岳・スポーツクライミング協会、東京都山岳連盟、日本勤労者山岳連盟、山はみんなの宝クラブ、日本ヒマラヤアドベンチャートラスト、日本ガイド協会と日本山岳会の7団体の自然保護担当者が出席して、月1回情報交換会を行っている。

2017年度の活動のトピックスは3月11日(土)に、国立オリンピック記念青少年総合センターで、「第1回山岳自然環境セミナー」を環境省の後援で開催したこと。喫緊の問題を取り上げ「山の自然が破壊する」深刻化する日本ジカの被害」をテーマに、環境省の取り組みの現状報告などを基調講演、パネリストによる提案質疑応答意見交換がなされた。

【その他】

科学委員会の呼び掛けで『山のマナーノート』作成に参加。

(川口章子)

山行委員会

1・山行委員会の役割について

山行委員会の役割は、理事会の指導のもと、「国内外の登山の企画・実施」を行ない、会員相互の交流・懇親を図り、会員1人1人の登山技術の習得・向上を目指し、ひいては日本山岳会の設立目的である「登山を通じてあまねく体育、文化、および自然愛護の精神の高揚を図ること」に貢献することにあると考えている。

当委員会は日本山岳会の本部委員会にあつて、最も山岳会らしい委員会の1つだ。山行委員会は、「会員の役に立つ、会員のためになる委員会」を目指して国内・海外の山行、講習会などの企画、運営、実施に取り組んでいく。

2・活動方針〈安全に楽しく、全国の仲間と一緒にあこがれの山に登ろう〉

右記役割と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下のとおり定めている。

- (1) 全国の会員が自由に参加でき、かつ楽しく有意義な山行を企画する。山行に当たっては、何よりも「安全」に最大限に配慮する。
- (2) 会員の多数は60歳代、70歳代。その大多数の中高年会員を主な対象とした、山行を実施する。山行以外にも安全登山に資する講習会などを企画。

- (3) 軽ハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い、積雪期も含めたオールラウンドな山行を行なう。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキング・ツアーも企画する。

- (4) 何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない楽しいプラスワン(植物、地形、歴史、文化、温泉など)の山行を志向していく。山行を通じて会員相互の交流を図る。

- (5) 全国の支部、ほかの委員会などとのコラボレーションを積極的に図っていく。

3・活動内容

(1)公益事業「登山リーダーのための救急救助講習会」を6月に開催。恵会員に講師を依頼し、「登山リーダーに求められるレスキュー技術の実技講習」を公益事業として実施した。非会員を含めて57名参加。

(2)会員向け事業 平成29年度、以下の12山行を企画、実施した。山行参加者は延べ225名。各山行には、山行委員が2名以上参加している。

4月「四国八十八カ所歩き遍路…徳島」遍路道を歩いて巡る。参加者10名。8泊9日。

5月「大峰南奥駈道」修験道の山を歩く。参加者10名。5泊6日。

6月「大雪山、富良野岳」北海道支部とコラボレーション。参加者14名。3泊4日。

7月「パミールハイウエイとワハーン渓谷」参加者3名。11泊12日。

8月「越百山く空木岳」中央アルプス名山。参加者10名。2泊3日。

9月「北アルプス縦走第5回…黒部溪谷と黒部五郎岳」赤木沢と黒部五郎を巡る。参加者14名。5泊6日。

10月「四国八十八ヶ所歩き遍路…高知」遍路道を歩いて巡る。参加者10名。10泊11日。

10月「尾瀬と田代山」尾瀬沼、燧岳、帝釈山、田代山を巡る。バ

ス利用。参加者16名。2泊3日。

12月「晩餐会記念山行」足和田山と紅葉台。天候良く、富士五湖、富士山、南アルプスの好展望。参加者82名。バス利用日帰り。

1月「スキー懇親山行」蔵王スキー場で実施。参加者12名。2泊3日。

2月「裏磐梯スノートレック」福島支部とコラボレーション。イエローフォールヘトレック。参加者26名。1泊2日。

3月「八ヶ岳峰の松目と硫黄岳」雪山ラッセルで峰ノ松目へ。参加者8名。2泊3日。

(3)研修会の実施

「山行員会研修会」を、11月に蓼科で実施。1年の振り返りと委員会内のコミュニケーションの向上を図った。翌日、北横岳ロープウエイを上り、軽ハイキング。

(4)月例会

毎月第1水曜日、ルームにて担当理事にご出席をいただき、例会を実施している。理事会からの情報伝達、各山行の行程、安全管理など運営に関する検討を行なっている。

(征矢三樹)

「山の日」事業委員会

国民の祝日「山の日」が施行されて2年目となる2017年。「山の日

日」事業委員会は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という山の日の意義を広く国民に周知させるための活動を展開してきた。

その1つが広報用リーフレットの製作である。2016年の「山の日」を知らう」に続き、「山の一番を知っていますか?」をテーマに3万部を製作。一般の人たちにも気軽に手にとって読んでいただけるように、A4判三ツ折のページ展開のなかに、クイズ形式で「山のいちばん」に関する蘊蓄をたっぷりと詰め込んだ。このリーフレットは主に全国各地で開催された「山の日」関連イベント会場で配布され、「山の日」の意義の周知に貢献したものと思われる。

「山の日」に関連したイベントに対しても積極的な協力を続けてきた。5月には東京国際フォーラムで開催された「山の日」フォーラムに委員を派遣。世田谷文学館の企画展「山へ! To the Mountains 展」(7~9月)には、「山の日」制定までの流れを整理した年表や写真など、各種資料を提供して展示を行なった。

また「信州山の日フェスタ」(高峰高原・7月)や、岳都松本山岳フォーラム(松本・11月)といったイベントに対しても講師を派遣するなどして支援。そして8月11日に栃木県那須町で開催された第2回「山の日」記念全国大会では、当委員会の萩原が記念シンポジウムの司会をつとめ、女優の小林綾子さんから4人のパネリストに山の体験談や山への思いを語っていただき、ふるさとの山をもっと見直し、子どもたちに山の魅力を伝えていこう、と訴えた。

そして大切なのは、全国に支部を持つ日本山岳会ならではの「山の日」への取り組みである。9月に全31支部に対してアンケートを実施したところ、26の支部が「山の日」を意識しての活動をされていたことがわかった。その内容は、親子のための登山教室や登山に関する講演会、ふるさとの山を一般参加者とともに登る合同登山など、さまざまな形で人と山を結びつけるイベントが行なわれた。注目したいのは、約半数にあたる15の支部が8月11日の山の日に合わせてイベントを開催して下さったことだ。運営の裏には多大な苦労があったかと思うが、より多くの人に「山に親しむ」機会を提供していただいたことに対し、この場をお借りして深く御礼を申し述べたいと思う。

「山の日」の運動は、その意義を広く浸透させるための広報活動とともに、「山に親しむ機会」を生み出す場をさまざまな形で提供することが今後の課題となっていくことだろう。当委員会では新たな広報誌「山の日 magazine2018」の編集協力をしながら、各地での「山の日」関連イベントに対して協力を続けていく予定である。

(萩原浩司)

科学委員会

科学委員会では、会員および一般登山者に単なる技術に関する情報のみでなく、山に関連した幅の広い情報を提供することにより、心豊かな安全登山を願って活動を行なっている。ここに2017年度の活

動を報告する。

1・フォーラム「登山を楽しくする科学」

2018年3月10日(土)に、第10回のフォーラムを立正大学品川キャンパスで開催した。

第1の講演は日本山岳写真協会会員の大村肅氏による「山の写真を楽しむ——初級者から脱皮するためには——」。第2の講演は、医療委員会委員長の野口いづみ氏による「山での虫刺されと対策——ブヨ、ヒル、マダニ、ハチなど——」。第3の講演は、環境省長野環境事務局自然保護官の福田真氏による「ライチョウを守り育てよう!——ライチョウが棲む《天上の楽園》を永遠に——」。最後は、日本火山学会会員の福岡孝昭氏による「緊急速報 草津白根火山噴火——突然の噴火に備えた活火山の安全登山心得——」。

いずれも充実した講演で、会員外を含む約120名の参加者が講演に聴き入った。アンケート結果でも好評であった。資料として4講演の要旨冊子を作成、配布した。

2・探索山行

6月10日(土)、11日(日)に「修験道登山」をテーマに秩父・三峰山で実施した。2日間とも好天に恵まれ、会員を中心に34名が参加した。10日は宝登山登山後、長瀬の「自然の博物館」で秩父山地の生成を井上素子学芸員の説明で学習。三峰神社宿坊の興雲閣に宿泊。夕食前に権欄宜から修験道登山の講話を聴く。11日は霧

藻ヶ峰の往復登山を80歳を超える参加者を含め、全員で行なった。

3・研修山行

10月4日(木)、5日(木)に「大崩壊地形の立山カルデラ」をテーマに、委員を中心とした参加者14名が崩壊カルデラ地形についての知識を習得した。4日は砂防工事用のトロッコ列車でカルデラ内に入り、立山温泉跡などカルデラを内部から見学。5日は立山カルデラ砂防博物館の菊川茂氏の案内で、バスで室堂まで上り、室堂山まで登山してカルデラ地形を鳥瞰した。室堂山山頂付近では氷河擦痕を観察し、バスで下る途中では「立山杉」の巨木も見学した。

4・「山・トイレマナー」冊子の作成

近年の登山マナーの低下を防ぎ、山でのトイレの利用についての理解を進めるため、理事会の承認・依頼のもと、自然保護委員会との共同事業として編集作業を開始した。2018年8月11日の「山の日」に発行予定である。

5・ショートセミナーの実施

委員の情報知識の強化のため、例会時にショートセミナーを行なっている。2017年度は7つのテーマが提出され、科学的なものの方に沿った議論を行なった。テーマの1部は3月に開催するフォーラムのテーマに発展している。

6・例会

毎月第3木曜日に開催。毎回約20名の委員が出席、委員会の運

営、活動計画について審議している。1月は新年会、8月は暑氣払いの会とし例会の代わりに懇親会を行なった。

7・ホームページなどの強化

委員会独自のホームページを見やすくするなどの強化を実施。FaceBookも試験中である。会員あるいは一般登山者からの質問に答えるコーナーの開設を検討中。

委員会活動のさらなる活性化のため、若手委員の勧誘に努めるとともに、3月のフォーラムの参加者の増強に注力したい。「マナー冊子」の発行も当面の課題である。

支部活動などでの登山の科学に関連する講演会への講師の派遣と紹介をしたいと考えている。会員の皆様からのご依頼、ご相談をお待ちしている。

(福岡孝昭)

YOUTH CLUB委員会

ユースクラブ委員会は昨年度同様、3部に分かれて首都圏を中心とした若年～中年層の登山活動を実施した。傘下には、登攀的山行を中心とする青年部、縦走的山行を中心とするワンダーフォーゲル部(WV部)、現役学生の登山活動を支援する学生部があり、加えて技術研修を主催する講習センターを置いて活動した。またWV部からのステッ

プアップを支援する「踊り場」を設け、メンバーを固定した訓練山行を実施している。

青年部は、月例の例会を実施し、年間約90回の山行を企画・実施した。踊り場の支援も実施。WV部は、月例の例会を実施し、年間約80回の山行を企画実施した。新入会員の受け皿としても機能している。学生部は、日中韓三国学生交流登山を12年間継続しており、本会唯一の国際交流事業となっている。今年度は8月に韓国で実施、学生8名が参加した。またマラソン大会、クライミング大会、アイスクライミング講習を例年同様、実施した。

講習センターでは、会員外から参加者を募って登山講習会を月例で実施(机上および実地登山)。参加者から若手の新規入会(約20名)に繋がっている。またユースクラブ内での踊り場研修、WV部講習会、青年部技術研修会も精力的に実施した。

青年部、WV部のメンバーが参加する同好会(バックカントリークラブ、平日クラブ、マウンテンカルチャークラブ)へのアドバイス、技術支援も実施した。また、青年部、学生部、講習センター向けに登山装備品を保管、管理している。

名簿・緊急時個人情報管理、山行計画書・報告書の保管、会議資料の整理などの事務作業は業務委託している。

(山田和人)

委員会の主な活動は安全に登山を楽しむために、登山の医学についての啓発活動を行なうことであり、そのために講演会や講習会を開催している。

I 公益目的事業

4 回の事業を行なった。参加者の事後アンケートでは、いずれも「とても良かった」と「良かった」という感想が9割以上と、好評だった。

(1) 実地講習会「第2回景信山メデイカルハイキング」

5月20日に山の医療を实地に学ぶ企画として会員向け講習会「第2回景信山メデイカルハイキング」を実施した。植物専門家の東京都林業試験場の亀谷行雄講師が有害植物の解説指導を行ない、野口いづみ委員と秦和寿委員がハチ刺され・虫刺され・切り傷・すり傷・出血・足首ねん挫・膝痛・腰痛・足ツリ・骨折などの対処の実技講習と、心肺蘇生実習、携行医薬品の指導、解説を行なった。参加者は24名だった。(会報866号、<http://jac.or.jp/info/inkai/cat64/post-1295.html>)。

(2) 実技講習会「登山者のためのコンディショニング・ストレッチ教室——膝痛・腰痛を中心に——」

10月26日に東京体育館にて実技講習会「登山者のためのコンディショニング ストレッチ教室——膝痛・腰痛を中心に——」

を行なった。講師は運動療法士の西方由美子氏で、主に膝痛、腰痛に対して自宅で行えるコンディショニングとストレッチについて実習学した。自分の体を緩めてコンディショニングするセルフケアの重要性を実感した。参加者は24名だった。(会報872号、<http://jac.or.jp/info/inkai/cat64/post-1384.html>)。

(3) 講演会「雪山の医療」

2018年2月26日に山岳会104号室にて野口いづみ委員が講演会「雪山の医療」を行なった。低体温症、凍傷、雪崩遭難事故の対処などについて講義した。参加者は27名で、資料請求が4件あった。参加者は50歳代が多く、平均年齢54歳、会員外が会員より多く14名だった(会報875号、<http://jac.or.jp/info/inkai/cat64/post-1415.html>)。

(4) 実技講習会「第2弾 登山者のためのストレッチ教室——登山前後のストレッチを中心に——」

3月9日に東京体育館にて実技講習会「第2弾 登山者のためのストレッチ教室——登山前後のストレッチを中心に——」を行なった。講師は運動療法士の西方由美子氏で前回の復習に加えて、登山前後の動的・静的ストレッチストレッチについて学んだ。参加者は27名で60歳代が多く、会員外が10名だった(会報877号、<http://jac.or.jp/info/inkai/cat64/post-1432.html>)。

II 公益目的事業

(1) 第37回日本登山医学会学術集会を後援

6月2―4日にキッセイ文化ホール（松本市）で第37回日本登山医学会学術集会・第4回アジア・太平洋登山医学会（花園正幸会長）が開催され、これを後援した。委員数名が参加し、座長などを担当して協力した（会報866号、<http://jac.or.jp/info/iinkai/cat64/37.html>）。

(2) 会報「山」の医療コラム (Climbing&Medicine) を掲載

会報「山」に医療コラム5編を掲載した。

下山後の筋肉痛とアミノ酸効果 浜口欣一 第863号、過換気症候群（過呼吸症候群） 浜口欣一 第865号、登山家の呼吸 忍者の呼吸 斉藤繁 第867号、登山家の呼吸 忍者の呼吸（その2）…低標高での長時間活動時の呼吸 斉藤繁 第869号、登山家の呼吸 忍者の呼吸（その3）…睡眠と呼吸 斎藤繁 第873号

(3) HP活動と会員増加活動

医療委員会の活動を随時アップした。その成果で各種イベントに会員外の申し込みが多かった。イベントでは日本山岳会活動の紹介を行なって入会を募り、数名の入会者があった。

Ⅲ 次年度の活動方針

- (1) 講演会、講習会、メディアカルハイキングなどの企画。
- (2) 第38回日本登山医学会学術集会の後援。
- (3) 会報「山」に医療コラムの掲載。
- (4) HPの運営。

Ⅳ 委員会

連絡は主にメールで行ない、不定期に例会を開催し、事業の検討と山岳医療の新しい知見などについて討議している。委員会構成は、執行理事、野澤誠司、担当理事、斉藤繁、委員長野口いづみ、委員11名（浜口欣一・大野秀樹・稲村道子・神尾重則・村上和子・小清水敏昌・秦和寿・植木貞一郎・香川茂雄・山内佳奈・土井理）である。

（野口いづみ）

山岳研究所運営委員会

山岳研究所運営委員会は、毎月第2火曜日に当会の市ヶ谷ルームで委員会を開催するとともに、4月下旬から11月中旬の約6ヶ月半における上高地開山期間中に、管理人の協力を得て山研の運営管理を行っている。開所期間中はミニ水力発電の実用化研究を神奈川工科大学と共同で行っており、発生した電力は建物内の照明などに利用している。また、会員サービスと本会運営収益の観点から、3月に「日本山岳会山岳研究所運営要領」を改正し施行した。以下に2017年度の主な活動を列挙する。

* 4月22日―23日 山研の開所作業を実施した。前年の開所作業は暮雪ではかどったが、本年は山研前の除雪作業を余儀なくされた。積雪状況によって開所作業の手順は大きく左右する。まずはミニ水力

発電用の引水を優先するため、過半数の委員を善六沢に向かわせて除雪作業を行なった。飲料水は水道利用により給水管の接続を行なえばよいが、溜め込んだ貯水槽から建物内への給水と排水までの間、水道管や器具破損による漏水がないかどうか最も緊張するところである。また開所時に、会員サービスの観点からトイレの便座をウオッシュレット便座に3台取り替えた。

* 4月27日 晴天の下、上高地閉山式が開催され、今シーズン山の安全を祈願。祈願後、獅子舞や松本市と姉妹都市のグリンデルワルト村から訪問された26名がヨードルを披露。山研管理人と委員が出席し、上高地関係者と一緒になって訪れた登山者や観光客に鏡開きのお酒を振る舞った。

* 5月14～15日 台湾の呉夏雄さん、陳威志さんから6名が槍ヶ岳登山の帰りに山研に宿泊して建物内設備とミニ水力発電施設を見学、管理人と委員が交流した。お2人は建築師で、雪霸国家公园にある標高3100mの山小屋改築プロジェクトに関われ、槍ヶ岳山荘や横尾山荘にも宿泊して日本の山小屋建設を研究されている。呉さんは台湾山岳連盟発起人でもあり山岳雑誌『台湾山岳』の編集長でもある。

* 6月3～4日 信濃支部主催のウェストン祭開催時期に、新入会員を対象とした恒例の「徳本峠越えとウェストン祭参加」を企画・実施し会員18名と委員11名が参加した。

* 9月30日～10月1日 山研運営委員会の企画で「秋の徳本峠越え」

を初めて開催した。初企画にも関わらず7名の会員と委員7名が参加し好評を博した。来年度も実施する予定である。

* 10月28～29日 山研の閉所作業を実施した。台風22号が接近する雨天のなか、委員が一致協力して無事作業を終えた。飲料水の貯水槽の清掃は大変な作業だが新人委員が頑張ってくれた。

* 11月15日 冷たい小雨が降るなか、神に感謝する上高地閉山式が開催され、山研管理人と委員が出席した。翌朝、目を覚ますと一面の雪景色であった。

* 11月17日 上高地右岸水道事業組合による右岸水道本管の水抜きとエア抜きに合わせて、山研の水道本管の水抜きとエア抜きを実施した。この作業をもって山研の作業はすべて終わり、来年の開所作業を待つことになる。

このほか、上高地町内総会、上高地を美しくする会（清掃12回）、上高地消防訓練などに山研管理人や委員が出席し、行政関係者および上高地関係者との交流を重ねた。また、8月に山研の消防施設点検を行ない10月に消防署の検査を受けた。

現在の山研は、改築後25年を経過しているため大小の補修工事が余儀なくされている。5月に給湯器を2機取り替えたが、来年度は屋根と外壁の塗装工事が控えている。また、ミニ水力発電についても善六沢の形状変化に伴い、取水設備の改修が必要になってきている。山研の維持管理は大変であるが、会員の団体利用と平日利用が大きな要因となつて利用数は増加傾向にある。そのなかで、着任3シーズン目と

なる元川管理人の仕事量は大変なものであるが、その人柄と熟知している自然観察力により、利用者に喜ばれていることは大きな支えとなっている。

今後とも会員みなさんの視野に立って、会員サービスを基本姿勢として山研運営委員会を的確に運営していきたい。みなさんのご理解とご協力をお願いするところである。

(柴山信夫)

家族登山普及委員会

当委員会は、2016年度まで独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受けて、ウェブサイトを「親子で楽しむ山登り」を作成していた。ところが2017年度は審査に落ちたため、助成は受けられなかった。

そこでウェブサイトの作成ではなく、家族登山を安全に行なうためには、委員会として何ができるかを考えて、まずは研究授業のような家族山行を実際に行なうことにした。対象を日本山岳会の会員に限定して「祖父母と孫の登山教室」と題して、会報誌「山」のみで告知した。ところが残念なことに応募はなく、研究授業の山行は中止した。その反省として次のことが上がった。

- ・対象を日本山岳会会員に限定した
- ・1回だけの単発の教室だった

・祖父母と孫に限定したこと

・告知が会報「山」のみだったこと

・告知から開催までの期間が短かった

これらことを踏まえて、2018年度の事業計画をどのようにするか検討した。そして次のような方針での山行教室の事業展開を実施することにした。

・会員だけでなく一般の家族を対象とする

・定期的に、できれば隔月で教室を開催し、年間計画を公表する

・祖父母だけではなく家族を対象を広げる

・告知は新聞、自治体の広報などさまざまな方法を考える

・隔月の教室のたびに告知を行ない、日本山岳会の名前を認知してもらう

現在、全国の支部で親子登山や家族登山、ハイキングが開催されている。それらのイベントに当委員会のノウハウを活用していただけるようにしたいと思っている。家族登山のイベントに参加した親や祖父母はもちろん、登山に興味を持った子どもたちが、成長してから日本山岳会の会員になってくれることを期待している。

最後に、東京の世田谷文学館で7月15日から9月18日に開催された「山へ！ To the mountains展」に、前年度まで当委員会が制作したウェブサイトのコンテンツを利用して日本山岳会の名前で展示協力して好評を博したことを報告する。

(飯田邦幸)

山人として生きる	志田忠儀	KADOKAWA	600	文庫判	207p
山ガール―俳句とエッセー	山本純子	創風社出版	1400	四六判	152p
〈ヤマケイ新書〉クマ問題を考える	田口清美	山と溪谷社	880	新書判	223p
〈ヤマケイ新書〉山岳遭難は自分ごと	北島英明	山と溪谷社	820	新書判	206p
〈ヤマケイ新書〉山のリスクを磨く本	昆 正和	山と溪谷社	780	新書判	221p
〈ヤマケイ文庫〉アウトドア・もののローグ	芦澤一洋	山と溪谷社	900	文庫判	301p
〈ヤマケイ文庫〉ウルトラライトハイキング	土屋智哉	山と溪谷社	800	文庫判	206p
〈ヤマケイ文庫〉作家の山旅	山と溪谷社/編 大森久雄/解説	山と溪谷社	930	文庫判	357p
〈ヤマケイ文庫〉新編 溪流物語	山本素石	山と溪谷社	890	文庫判	299p
〈ヤマケイ文庫〉新編 西藏漂白	江本嘉伸	山と溪谷社	1100	文庫判	525p
〈ヤマケイ文庫〉生と死のミニャ・コンガ	阿部幹雄	山と溪谷社	950	文庫判	405p
〈ヤマケイ文庫〉ドキュメント 山の突然死	柏 澄子	山と溪谷社	800	文庫判	254p
〈ヤマケイ文庫〉野草の名前	高橋勝雄	山と溪谷社	1000	文庫判	269p
〈ヤマケイ文庫〉山小屋ごはん	松本理恵	山と溪谷社	1000	文庫判	221p
〈ヤマケイ文庫〉若き日の山	串田孫一	山と溪谷社	800	文庫判	284p
山と河が僕の仕事場2	牧 浩之	フライの雑誌社	1600	A5	189p
山と過ごした一日	萩生田 浩	西田書店	1600	四六判	221p
山梨東部の山登山詳細図(東編) 全130コース	守屋二郎	吉備人出版	900	685×1000	2p
山の怪奇百物語	山村民俗の会/編	河出書房新社	1200	四六判	215p
山の手帖2018 *手帖	山の手帖2018 編集会/編	信濃毎日新聞社	1200	B6	224p
山の農学―「山の日」から考える	日本農学会/編	養賢堂	1851	A5	155p
山の不思議―飛騨の山小屋から山登り語辞典	加藤博二 鈴木みき	河出書房新社 誠文堂新光社	1200 1400	四六判 A5	189p 173p
山夜景をはじめ楽しむ人のための関西ナイトハイキング	堀 寿伸	創元社	1700	A5	135p
YaYa! 歩くオザさん―祖母・傾・大崩山	齋藤義信	北方新社	1700	四六判	253p
ゆったり行こう! 中国・四国山歩きガイド	山歩きの会・遊道山	メイツ出版	1650	A5	144p
吉田博画文集―われ山の美とともにあり	吉田 博/画	東京美術	2000	240	127p
【ら】					
60歳からの夏山の天気	日本気象協会	成山堂書店	2000	A5	152p
六甲山系登山詳細図(西編) 全88コース	守屋益男/著 守屋二郎/編	吉備人出版	900	1000×685	2p
六甲山系登山詳細図(東編) 全88コース	守屋益男/著 守屋二郎/編	吉備人出版	900	1000×685	2p

深田久弥と北海道の山 ふくしまの低い山 50	高澤光雄 奥田 博	白山書房 歴史春秋出版	1600 1500	四六判 A5	215p 109p
*改訂新版					
富士見高原 環境と文化の 50 年 ぶらり超低山散歩 北九州近郊 編	富士見高原愛好会/ 編 谷 正之	彩流社 海鳥社	2800 1500	A5 A5	287p 111p
ぶらり超低山散歩 福岡近郊編	谷 正之	海鳥社	1500	A5	111p
〈分県登山ガイド〉愛知県の山	西山秀夫	山と溪谷社	1900	A5	135p
〈分県登山ガイド〉青森県の山	いちのへ義孝	山と溪谷社	1900	A5	135p
〈分県登山ガイド〉岩手県の山	藤原直美・照井克行	山と溪谷社	1900	A5	151p
〈分県登山ガイド〉香川県の山	高松勤労者山の会	山と溪谷社	1900	A5	127p
〈分県登山ガイド〉神奈川県の山	原田征史	山と溪谷社	1900	A5	143p
〈分県登山ガイド〉岐阜県の山	島田 靖・石際 淳・原 弘展	山と溪谷社	1900	A5	143p
〈分県登山ガイド〉京都府の山	木之下 繁	山と溪谷社	1900	A5	127p
〈分県登山ガイド〉佐賀県の山	内田益充・五十嵐 賢	山と溪谷社	2000	A5	135p
〈分県登山ガイド〉滋賀県の山	山本武人	山と溪谷社	1900	A5	127p
〈分県登山ガイド〉静岡県の山	加田勝利	山と溪谷社	1900	A5	127p
〈分県登山ガイド〉長崎県の山	山野辺捷雄	山と溪谷社	1900	A5	135p
〈分県登山ガイド〉長野県の山	垣外富士男・津野祐 次・加藤雅彦	山と溪谷社	2000	A5	175p
〈分県登山ガイド〉福島県の山	奥田 博・渡辺徳仁	山と溪谷社	1900	A5	159p
〈分県登山ガイド〉北海道の山	伊藤健次	山と溪谷社	2000	A5	143p
〈分県登山ガイド〉三重県の山	金丸勝実・内田拓也	山と溪谷社	1900	A5	143p
〈分県登山ガイド〉山形県の山	高橋金雄・斎藤政 広・寒河江伸治	山と溪谷社	1900	A5	159p
穂高岳の岩場	*復刻 武藤 昭	山と溪谷社	4600	240	189p
ほっかいどう山楽紀行	坂口一弘	共同文化社	1800	A5	287p
北海道の山と谷 新版 1	山と谷作成会議	富士コンテム	2700	A5	340p
北海道の山を登る	高澤光雄	白山書房	1700	四六判	280p
ボルダリング 基本ムーブと攻 略法	野口啓代	実業之日本社	1700	A5	191p
【ま】 街と山のあいだ	若菜晃子	アノニマ・スタ ジオ	1600	172×118	284p
松浦武二郎 北の大地に立つ	合田一道	北海道出版企画 センター	2400	四六判	327p
息子と狩猟に メコンを下る	服部文祥 北村昌之	新潮社 めこん	1600 5500	四六判 四六判	176p 675p
もう山でバテない! 森の巨人たち—巨樹と出会う近 畿とその周辺の山	能勢 博 草川啓三	山と溪谷社 ナカニシヤ出版	1200 1800	四六判 A5	207p 175p
【や】 野鳥と共に 四季の山旅 八ヶ岳	大津雅光 山岳写真同人四季	白山書房 日本写真企画	1800 3200	A5 256×240	367p 96p
山あるきとハイキングを楽しむ 本 関西版	京阪神エルマガジ ン社/編	京阪神エルマガ ジン社	920	A5	127p

追憶の山々	佐伯邦夫	山と溪谷社	1500	四六判	253p
てっぺんー我が妻・田部井淳子の生き方	田部井政伸	宝島社	1200	四六判	230p
天空の檜ヶ岳	*写真集 穂苅貞雄	山と溪谷社	2800	260×220	78p
東海トレッキングガイド	日野 東	風媒社	1600	A5	164p
東海の山ハイク	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1200	A5	127p
東京から行くラクちん！絶景山歩き&ハイキング	KADOKAWA/編	KADOKAWA	900	A5	127p
東京の山百無名山	高村 薫	山と溪谷社	2400	四六判	182p
東京日帰り山さんぽ50	交通新聞社/編	交通新聞社	1200	A5	159p
洞窟ばか	吉田勝次	扶桑社	1400	四六判	255p
登山白書 2017	山と溪谷社ヤマケイ登山総合研究所/編	山と溪谷社	2800	A4	162p
登山力アップの強化書	徳永哲哉	西日本新聞社	1500	四六判	191p
登山を楽しむための健康トレーニング	齋藤 繁	上毛新聞社事業局出版部	1500	A5	210p
富山の百山	*改訂版 富山県山岳連盟/編	北日本新聞社	2500	A5	259p
【な】					
治す！山の膝痛	小林哲士	山と溪谷社	1500	四六判	205p
雪崩教本	雪氷災害調査チーム・雪崩事故防止研究会/編	山と溪谷社	1000	A5	143p
雪崩リスク軽減の手引き	出川あずさ・池田慎二・日本雪崩ネットワーク	東京新聞出版部	1700	AB	104p
*増補改訂					
新潟県登山口情報 300	全国登山口調査会	新潟日報事業社	1700	A5	262p
新潟 100 名山	*新版 新潟県山岳協会/編	新潟日報事業社	1800	A5	232p
日光の気象と自然	辻岡幹夫	随想舎	1800	A5	159p
日本三百名山に立つ	日野修道	風詠社	2000	A5	405p
日本三百名山あるきガイド上	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	2300	A5	319p
日本三百名山あるきガイド下	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	2300	A5	319p
日本百低山	日本山岳ガイド協会/編	幻冬舎	1300	新書判	311p
日本百名山一山の名はこうしてついた	楠原佑介	祥伝社	800	新書判	209p
【は】					
肺がんステージⅣ山好き女の挑戦	渡辺国男・村田はる江	新日本出版社	2000	四六判	221p
はじめよう！山登り	樫出版社/編	樫出版社	1200	AB	128p
花かおる横根高原ー前日光県立自然高原	横根高原保全・活用協議会/編	随想舎	900	新書	112p
花の百名山	*新装版 田中澄江	文藝春秋	840	文庫判	477p
花の百名山地図帳	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2400	A4	223p
光・山・憧憬	*写真集 川口邦雄	日本カメラ社	3500	260×220	72p
秘境滝を行くー信州 80 溪流訪瀑記	篠原 元	信濃毎日新聞社	2000	A5	339p
人を襲うクマ	羽根田 治	山と溪谷社	1600	四六判	220p
ヒマラヤは黒部から	薬師義美	茗溪堂	4500	四六判	478p

高齢者にも楽しめる東京近郊の 尾根歩き	三塚正志	創英社	1800	A5	150p
御朱印トレッキングー関東週末 旅	東京都山岳連盟/監	淡交社	1600	A5	127p
【さ】					
最後のヴァイキングーローア ル・アムンセンの生涯	スティーン・R・ バウン/著 小林政 子/訳	国書刊行会	3500	A5	371p
最後の辺境	水越 武	中央公論	1050	新書判	184p
作例でわかる！山岳写真上達法	中西俊明	山と溪谷社	2300	AB	183p
サバイバル猟師飯	荒井裕介	誠文堂新光社	2500	A5	239p
山怪 式	田中康弘	山と溪谷社	1200	四六判	254p
山怪実話大全	東 雅夫	山と溪谷社	1200	四六判	235p
山岳—SCIENCE PALETTE	Martin F Price/ 著 渡辺悌二・上野健一 /訳	丸善出版	1000	新書判	176p
山岳読図ナビゲーション大全	村越 真・宮内佐季 子	山と溪谷社	1900	A5	240p
自分を超越続ける しま山 100 選	南谷真鈴 ネイチュアエンター プライズ/編	ダイヤモンド社 ネイチュアエン タープライズ	1300 1600	四六判 A4	215p 127p
車窓の山旅 中央線から見える 山	山村正光	実業之日本社	950	文庫判	415p
ジャック中根のクライミング道 場	中根穂高	山と溪谷社	1500	A5	174p
淳子のでっぺん	唯川 恵	幻冬舎	1700	四六判	435p
信州の山 南部 326 山 *新版	宮坂七郎	新每書籍出版セ ンター	2500	A4	290p
新編 裏山の博物誌	三宅 修	山と溪谷社	1300	四六判	317p
鈴木みさの休日ふらり山旅計画	鈴木みさ	エクスナレッジ	1500	四六判	134p
鈴木みさの富士登山ご案内	鈴木みさ	イースト・プレ ス	1200	A5	167p
スノーキャンプ・マニュアル	ボーイスカウト日本 連盟/監	誠文堂新光社	2200	A5	206p
スペイン巡礼路を歩き尽くす	笠井利之	文理閣	1800	A5	216p
スポーツクライミング教本	東 秀磯	山と溪谷社	2000	A5	159p
聖山 *写真集	渡辺千昭	日本カメラ社	4500	250×260	131p
生死を分ける、山の遭難回避術	羽根田 治	誠文堂新光社	1600	A5	159p
続 かながわのハイキングコース ベスト 40 プラス 1	山本正基	神奈川新聞社	815	文庫判	294p
【た】					
ダウラギリ山域の山と村	山崎 裕晶・山崎 江 里・野上秀雄	文沢社	1800	A5	140p
脱・初心者！もっと楽しむ山登 り	小林千穂	講談社	1200	四六判	175p
立山信仰と三禅定	福江 充	岩田書院	8800	A5	404p
探検家の日々本本	角幡唯介	幻冬舎	650	文庫判	320p
丹沢の沢 200 ルート	後藤真一	山と溪谷社	3200	A5	319p
チベット 謀略と冒険の史劇	倉知 敬	社会評論社	2300	四六判	357p
ちゃんと歩ける熊野古道	春野草結	山と溪谷社	1500	四六判	143p
蝶ヶ岳 *写真集	熊澤正幸/監	光村印刷	1800	170×183	63p

山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アーネスト・サトウの明治日本山岳記	アーネスト・メイスン・サトウ/著 庄田元男/訳	講談社	980	文庫判	285p
ASAHI-DAKE 大雪山旭岳登山英語地図 1:25000	マルクス・ハウザー/著 渡邊悌二/訳	亜細西社	1800	960×660	1p
*日本語併記					
亜熱帯の森をゆくー西表島探検	安間繁樹	あつぷる出版社	2400	A5	341p
安全登山の基礎知識ー「山の知識検定」公認BOOK	田中正人	スキージャーナル	1800	A5	184p
*増補改訂版					
いまから始める山スキー入門	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1900	A5	120p
岩と雪 BEST SELECTION 1958-1991 NO.1-169	池田常道/編	山と溪谷社	2800	AB	334p
植村直己・夢の軌跡	湯川 豊	文藝春秋	750	文庫判	326p
失われゆく植物たちー長野県レッドデータ植物図鑑	土田勝義	信濃毎日新聞社	2000	A5	255p
大山詣り	川島敏郎	有隣堂	1000	新書判	213p
おかわり！山グルメ	小雀陣二/監	樺出版社	1000	四六判	144p
ONTAKE 神宿る山と人	浅野恭正/撮影 近藤誠宏/監	岐阜新聞社総合メディア局出版室	1667	190×270	87p
*写真集					
【か】					
火山全景	白尾元理/写真 下司信夫/解説	誠文堂新光社	3800	AB	191p
鎌倉&三浦半島 山から海へ30 コース	樋口一郎	東京新聞	1400	A5	159p
釜トンネルー上高地の昭和・平成史	菊地俊朗	信濃毎日新聞社	1300	四六判	269p
神々のやどる霧島山	森田清美	鉾脈社	2000	四六判	301p
完全解説 日本の火山噴火	島村英紀	秀和システム	1600	A5	240p
関東近辺花のハイキング 12 カ月	関根茂子	新ハイキング社	1800	A5	274p
関東周辺の岩場	*新版 菊地敏之	白山書房	2200	A5	215p
北アルプスの花	*写真集 岩橋崇至	日本写真企画	2315	190×260	80p
ぎふ峠ものがたり	岐阜新聞社/編	岐阜新聞社	2000	B5	187p
熊が人を襲うとき	米田一彦	つり人社	1800	四六判	223p
熊！に出会った襲われた 2	つり人社書籍編集部/編	つり人社	1111	四六版	159p
げんさんとよーこさんの山ごはん	げんさん・蓮池陽子	山と溪谷社	1500	A5	128p
高山病と関連疾患の診療ガイドライン	日本登山医学会高山病と関連疾患の診療ガイドライン作成委員会/編	中外医学社	2900	AB	116p

山岳図書目録 (2017 年)

日本山岳会図書委員会

この山岳図書目録は毎月作成していますが、それを1年分にまとめて整理し直して掲載しています。月例の図書委員会では、その毎月のリストを検討材料にして、図書室に必要な本を各出版社に寄贈してもらい蔵書の充実を図っています。

ありがたいことに、山岳書を出版する主な出版社は、新刊書が出るとすぐに寄贈してくださり、いちいち依頼状を送る必要がありません。図書室の蔵書のほとんどは、そんな出版社の好意で収蔵されたものです。

その出版社の1つがナカニシヤ出版です。関西を中心に良質な山岳書の出版を続けている京都の老舗出版社です。特に『新日本山岳誌』は当会の創立100周年を記念してナカニシヤ出版から刊行されたものですが、企画段階から物心両面にわたって大きな協力をいただきました。まさしくこの事業は、ナカニシヤ出版なくしては形にならなかったものです。そして、それを牽引したのが会長の中西健夫氏でした。

図書委員会では、京都から中西氏を招いて話していただいたことがあります。物腰の柔らかさと優しい京都弁が印象的でした。もともと先代である父君が、京都大学の正門前で書店を始めたことからスタートしたことや、自身も若いときから登山に親しんでいたこと、京大の関係者との縁から山岳関係の本を作り始めたことなど、学者の町・京都ならではの話を聞くことができました。

ナカニシヤ出版といえば、現在は学術書・人文書を中心に、毎月何冊も本を出版する大きな出版社ですが、「実は、山の本は私だけが作っとるんです。ほかの者にはよう作らせません」との発言がありました。柔らかい物腰のなかに、出版社社長（当時）としての立場と、個人としての山岳書の出版を混同させないという静かな、しかし、明確な意思を感じたものです。2013年には自身の半生を語る『山の本をつくる』も出版されました。

その中西会長が昨年8月に逝去され、山の本の世界は大きな柱を失いました。

『新日本山岳誌』に続く、110周年記念の『改訂 新日本山岳誌』『ヒマラヤの東 山岳地図帳』『インド・ヒマラヤ』の発行など、利益を度外視した大きな事業を引き受けられた姿に、文化を支える「旦那さん気質」ともいえる町衆の心意気が強く感じられる、見事な京都ならではの出版人でした。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

*判型が数字で表示されているものの単位はmm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

complete mountain photography history, Sugimoto interviewed Yukio Tabuchi to compile two series of “Mountain photographs and mountain photographers”.

The second part describes the story of how Sugimoto planned exhibitions including ‘Mountain photographs of the world-Japan-Italy joint exhibition of three photographers using glass photographic plates’ which mainly focused on the photographic works of Vittorio Serra, ‘Fosco Marini Exhibition’ and ‘Takeshi Mizukoshi Photo Exhibition’. At the end, he said that the mountain photography research is to tell the history of mountain climbing, and concluded that “The history of the mountain photographs progresses by overlapping and mixing the history of mountain climbing with that of the photograph.”

At the end of this book, the summary of Sugimoto's biography and a note are added.

“Deep connection with the imperial family remaining in the mountains of Shikoku”

Yasuhiro ONO

The Miki family, who is involved in an imperial ceremony, lives near the top of Mt. Miki in Mima City, Tokushima, which is located at about 15 kilometers east northeast of Mt. Tsurugi, the second highest mountain in western Japan. The Mikis is one of the important families and known as a direct descendant of the clan “Awaimbe” who lived in Awa Province. The family's house is known as the oldest private house in Tokushima, which is designated as a national important cultural property (important cultural asset residence). The imperial ceremony in which the Mikis are involved is called “Daijo-sai” which first held after an emperor is enthroned. The Mikis serve as a general manager who dedicates ‘Atarae-fuku’ a cloth woven with hemp.

The present Emperor will abdicate on April 30, 2019, and then the crown prince will accede to throne on May 1. At the same time, the regnal year will be changed to start a new era. The Daijo-sai will be held on November 14 and 15. At the ceremony, the Mikis will again offer ‘Atarae-fuku’. The history and tradition will be inherited in this way.

supported them, the clothes and equipment of that time, the scenery of the remote village Arimine that was going to sink into a lake, which are indispensable materials for the modern Japanese mountaineering history.

Thinking about such an historical background, Ito's sparks of imagination and friendship stories with Shintaro Momose and Chihiro Akanuma in Azumino, I feel endless fascination.

“Weston’s footsteps while staying in Kumamoto”

Toshiyuki TANOUE

The footsteps of Walter Weston during his stay in Japan, who was the first honorary member of The Japanese Alpine Club (hereinafter referred to as JAC), had been almost unveiled by the investigations of many researchers, but his footsteps in Kumamoto, the first place of his appointment in Japan, were remained a mystery. As a member of JAC living in Kumamoto, I was concerned about it for a long time. So I brought some unknown points to light and was able to compile the document “The footsteps of Weston in Kumamoto which was made clear by 2018”.

Based on a few reports and materials about Weston, I traced his footsteps including “When did he come to Kumamoto?”, “Where did he live?”, “What church did he work for?”, “What kind of activities did he do?”, “When did he leave Kumamoto?”, and “When did he come back to Kumamoto again?”, but his information was left only a little. As time goes by, the valuable materials will be scattered. So I decided to write down some new facts about the activities of Weston during his stay in Kumamoto, which has been remained blank until now, to mark a 130 year milestone of Weston's assignment to Kumamoto.

“Makoto Sugimoto and Mountain Photographs”

Tatsuya ZAITSU

I am writing down the achievements of Makoto Sugimoto, a pioneer in mountain photograph research in Japan, in two parts: ‘Until the publication of “Mountain photographs and photographers”’ and ‘Domestic and International exhibitions of mountain photographs’. The first part begins with the background of Sugimoto. He joined the Chunichi Shimbun. After transferred to the planning and publishing department, he found that mountain photography was under-estimated. So he visited The Japanese Alpine Club, which was located in Ochanomizu at that time, to meet Takazo Takano and Matsujiro Kanmuri in person and exchanged information. Then he started a serial titled ‘Japanese mountain photography history note’ in “Gakujiin”. After Hisayoshi Takeda encouraged him to

nine pitches, and fix ropes there. We started the attack on August 5. We first got over Badal Peak, went across many gaps, rock peaks and ice and snow walls appeared one after the other on the ridge, detoured around the buttress sitting at the end of the ridge, traversed the ice wall with a peak incline of 60 to 65 degrees, which is the most difficult part, and finally entered in a fragile crevasse in front of us and bivouacked there. Loose dry avalanches attacked our tent all the time.

On the day of attempting to the summit, we climbed the wide snow ridge, got over the col, climbed the slope, and reached the summit. I hardly experienced a welling up of my feelings. We repeatedly rappelled down the northwest wall.

3. East Face of Beatrice—First free ascent

Yusuke SATO

Together with Ryo Masumoto, we climbed the sharp central crack running from the bottom to the top of the east face of Beatrice. The ideal of Big Wall Free climbing may be onsite or red-point a route to extend a rope, but we need enough time to lift a lot of water. After the bad weather forced us to stay, we started climbing the big rock wall. The pitches of climbing, jumaring, and lifting were repeated. Finally nice weather pushed us up to the ridgeline with 4 pitches of climbing. While avoiding unstable snow, we traversed the rocks with climbing shoes and left the snow ridge for the top. I felt quiet excitement in my heart about the fact we completed free climbing to the top.

“Koichi Ito—who loved mountains, rivers, local people in Kurobe”

Hideo NISHIYAMA

Biography of Koichi Ito, an enthusiastic alpinist lived in Nagoya, who had roamed about mountains and rivers in Kurobe since the end of Taisho era. He did not practice alpinism to make a mountaineering record but left creative works with extraordinary ideas in filming mountain movies. Ito's family are said to have been serving the Owari clan as a merchant. He joined The Japanese Alpine Club in 1916, and was given the membership number: 481. His representative works are the two films that entitled “Yukino Tateyama, Harinoki goe” (1923) and “Yukino Yakushi, Yari goe” (1923-24). Both films were shot by Koichi Ito, edited by Eiji Haneda, and narrated by Kiyoshi Kodama. There is no doubt that these films are the first full-fledged Japanese mountain movies. According to a document kept in the Tateyama Museum, these films includes the pioneer works of the men who challenged the northern Alps covered with snow, the remarkable activities of the mountain guides who

Three ascents in Karakorum in 2017

1. First ascent of North East Face of Shispare

Sumiko KASHIWA, Kenro NAKAJIMA

"This mountain could be the one that I wouldn't get to the summit in my life." It was his first impression of when Kazuya Hiraide first saw Shispare.

In 2002, Hiraide travelled to Pakistan by himself and fascinated by Shispare which has a beautiful pyramidal-shape and a large unclimbed wall. His first challenge was in 2007 after five years while he was waiting for the opportunity. However, he gave up because of the snow instability at 6000 meters. In 2012, the second challenge also ended up because of an unstable weather. In 2013, the third challenge was along with the strongest partner, Kei Taniguchi. However, they eventually gave up at 5700 meters. For the fourth challenge in 2017, Kenro Nakajima joined as his partner.

Last year, the weather was bad overall. So, they climbed in fear of the avalanche and the snow shower, but Nakajima led and climbed up further. The place before C2 that they called "first rock wall" was the turning point to decide whether to go or withdraw. Soon appearing in the morning of the third day after entering the wall, the slab was the most difficult part of the northeastern wall. On 22nd, they started from their tent site, climbed one pitch on a steep snow wall, traversed the snow wall three pitches to the right snow ridge, climbed 4 pitches, and then reached the ridge to the summit. Although the weather was not very good, they deposited their supplies as many as possible and headed to the summit with minimum climbing gear, a few foods, and a piece of rope. When reached the summit, rather than enjoying standing at the summit, they worried about the descent. So they climbed down to the depot place and bivouacked there. On the 24th, they struggled down to BC.

At the end of this article, Nakajima's brief realistic climbing record is supplemented.

2. First ascent of Southwest Ridge of West Peak of K7

Katsutaka YOKOYAMA

After spending several seasons training and practicing in Patagonia, I decided to move on to Himalaya. So, I challenged West Peak of K7 with Takaaki Nagato. Immediately after arriving at BC, we repeated expeditions and altitude acclimatization processes, but we always suffered from bad weather. At first we started from the lower rock wall, climbed

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 113 No.171

Issued August 2018

CONTENTS

First Ascent of North East Face of Shispare	S. Kashiwa, K. Nakajima.....	(7)
First Ascent of Southwest Ridge of West Peak of K7	K. Yokoyama.....	(16)
East Face of Beatrice—First free ascent.....	Y. Sato.....	(44)
*		
“Koichi Ito—who loved mountains, rivers, local people in Kurobe”	H. Nishiyama.....	(55)
“Weston’s footsteps while staying in Kumamoto”	T. Tanoue.....	(66)
*		
“Makoto Sugimoto and Mountain Photographs”	T. Zaitsu.....	(85)
“Deep connection with the imperial family remaining in the mountain of Shikoku”	Y. Ono.....	(107)
*		
Book Reviews		(119)
In Memoriam		(155)
*		
Minutes of Meeting for JAC during April/2017—March/2018		(179)
Report from the Local Sections during 2017—2018.....		(208)
Catalogue of Japanese Mountain Books in 2017.....		(A28)
English Summary		(A22)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

(May 2018)

President : KOBAYASHI Masashi

Vice-President : SHIGEHIO Tsuneo, NOZAWA Seiji

NAKAYAMA Shigeki

Honorary Secretary : KAMINAGA Mikio, NAGATA Kotaro

TANIUCHI Tsuyoshi

Honorary Treasurer : FURUKAWA Kengo

Honorary Editor : SETSUDA Jusestu

Auditor : HIRAI Takuo, ISHIKAWA Kazuki

Commitee

OHKUBO Harumi

YASUI Yasuo

KIYOTO Rokuro

SAITOH Shigeru

HOSHI Yukimasa

KONDO Masayuki

HATANO Aoi

Council

NARIKAWA Takaaki

HASHIMOTO Kiyoshi

IMAMURA Chiaki

YOSHIKAWA Masayuki

NISHIMURA Masaaki

KUROKAWA Satoshi

TAKAHARA Sampei

SAKAI Hiroshi

TAKANO Tsuyoshi

NOGUCHI Izumi

FURUNO Kiyoshi

SANO Tadanori

HAGIWARA Hiroshi

ARAI Azusa

Chair of Local Section

Hokkaido : NISHIYAMA Yasumasa

Fukui : MORITA Makoto

Aomori : NAKAMURA Tsutomu

Yamanashi : FUKAZAWA Kenzo

Iwate : ABE Youko

Shinano : TSUKAHARA Masakatsu

Miyagi : TOMIZUKA Kazuei

Gifu : TAKAGI Motoaki

Akita : KONNO Masao

Shizuoka : ARIMOTO Toshimicti

Yamagata : NOBORI Yoshihiro

Toukai : TAKAHASHI Reiji

Fukushima : KOBAYASHI Masahiko

Kyouto-Shiga : MATSUSITA Masafumi

Ibaragi : ASANO katsumi

Kansai : KANAI Yoshihiro

Tochigi : WATANABE Yuji

Sanin : NAKAI Shunichi

Gunnma : KITAHARA Shusuke

Hiroshima : YAHATA Hiroshi

Saitama : MATSUMOTO Toshio

Sikoku : ONO Yasuhiro

Chiba : MIKI Yuzo

Fukuoka : TAKAKI Sousuke

Totoyama : TAKENAKA Akira

Kita-kyushu : SEKIGUCHI Kouyou

Kanagawa : KOMITA Nobuo

Kumamoto : MATSUMOTO Kanji

Echigo : ENDO Ienoshinmasakazu

Higashikyushu : KATO Hidehiko

Toyama : YAMADA Nobuaki

Miyazaki : ARATAKE Yatsuki

Ishikawa : NAKAGAWA Hiroto

— 掲載広告一覧 —

カモシカスポーツ（表2）

山と溪谷社

(株)モンベル

アルパインツアーサービス(株)

アライテント

雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰

早月小屋

立山室堂山荘

槍ヶ岳山荘ほか

(株)好日山荘

カシオ＜PRO TREK＞

(株)アトラストレック（表3）

山と自然を、より豊かに楽しむために
登山者必読の山の知識を新書で提供

ヤマケイ新書

アルピニズムと死 YS001

山野井泰史 僕が登り続けてこられた理由

モンベル 7つの決断 YS002

辰野 勇 アウトドアビジネスの舞台裏

山の名作読み歩き YS003

大森久雄 編 読んで味わう山の楽しみ

体験的の山道具考 YS004

笹原芳樹 プロが教える使いこなしのコツ

今そこにある山の危険 YS005

岩崎元郎 山の危機管理と安心登山のヒント

「体の力」が登山を変える YS006

齋藤 繁 ここまで伸ばせる健康能力

ドキュメント 御嶽山大噴火 YS009

山と溪谷社 証言と研究から大災害の現場を分析

現代ヒマラヤ登攀史 YS010

池田常道 8000メートル峰の歴史と未来

山の常識 釈問百答 YS011

釈 由美子 教えて！山の超基本

山岳遭難の教訓 YS013

羽根田 治 実例に学ぶ生還の条件

明解日本登山史 YS014

布川欣一 エピソードで読む日本人の登山

もう道に迷わない YS015

野村 仁 道迷い遭難を防ぐ登山技術

日本の山を数えてみた YS021

武内 正・石丸哲也 データで読み解く山の秘密

日本の山はすごい！ YS020

山と溪谷社 編 「山の日」に考える豊かな国土

山の神さま・仏さま YS026

太田昭彦 面白くてためになる山の神仏の話

日本百霊山 YS029

とよだ 時 伝承と神話でたどる日本人の心の山

御嶽山 生還者の証言 YS030

小川さゆり 事故から2年、復興への兆し

山の天気になまされるな！ YS031

猪熊隆之 気象情報の落とし穴を知っていますか？

山岳名著読書ノート YS032

布川欣一 山の世界を広げる名著 60冊

「山の不思議」発見！ YS033

小泉武栄 謎解き登山のススメ

体験的登山技術論 YS034

澤田 実 脱初心者のための実践アドバイス

山岳遭難は自分ごと YS026

北島英明 「まさか」のためのセルフレスキュー講座

山のリスクセンスを磨く本 YS037

昆 正和 遭難の最大の原因はアナタ自身にあった

登山者のための法律入門 YS039

溝手康史 山の法的トラブルを回避する



山と溪谷社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1丁目105番地
☎03-6744-1900 (代表) / <http://www.yamakei.co.jp/>

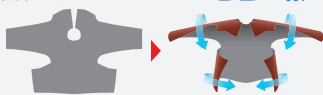
SINCE 1975
mont·bell

終わりになき進化

あらゆる天候下で活躍するレインウェア。
極めて高い防水透湿性や、フィット感の調節など
機能を妥協することなく、軽さを徹底的に追求。
超軽量極薄シェル素材に、極限まで縫い目を減らす
独自のパターン「K-Mono カット™」を取り入れ、
モンベル史上最軽量の134gを達成しました。
ウインドブレーカー感覚で着ても蒸れずに快適。

レインウェアは新たな次元へ ——

身頃と袖を1枚の生地で作上げる
独自のパターン



縫製を減らし、高次元の防水性・軽量性・耐久性を実現



GORE
WINDSTOPPER
WATER RESISTANCE

極めて高い
防水透湿性能



抜群のフィット感で良好な
視界を確保するフード

バーサライト® ジャケット

#1128592 Men's 税抜き価格 ¥14,600 (+税)
本体重量: 134g (Mサイズ)
サイズ: S・M・L・XL 収納サイズ: 6×6×12cm
■ 女性用モデル、ハットもご用意しています。

Light & Fast®を追求した
究極の軽量・コンパクトモデル!
詳細はこちらから ▶



※Light & Fast®は株式会社モンベルの登録商標です。



株式会社 **モンベル**

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス
☎ 0088-22-0031 / TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

www.montbell.jp

登山とトレッキングの 専門旅行会社です。

花の宝庫ヒレネー山脈

オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキング・クラブ、山のお仲間などで企画するオーダーメイドの山旅を承ります。ぜひ、お気軽にお申し付けください。

山旅の出張説明会も承ります。

山のお仲間がお集まりの時に、世界の山旅に精通したスタッフが資料や映像をお持ちして皆さまの元へご説明にお伺いします。

ツアーカタログをご請求ください。

世界中の山旅を掲載したカタログを無料でお送りいたします。お電話またはEメールにてお気軽にお申し付けください。ホームページでも最新のツアー情報をご覧いただけます。

世界の山旅・辺境の旅を手がけて49年の実績



日帰りハイキング



トレッキング



登頂ツアー



ネイチャリングツアー

旅行企画・実施



観光庁長官登録旅行業第490号/一般社団法人 日本旅行業協会 正会員

アルパインツアーサービス株式会社

本社/〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 (第7東洋海事ビル4階)

東京/☎03(3503)1911 大阪/☎06(6444)3033

名古屋/☎052(581)3211 福岡/☎092(715)1557

札幌/☎011(711)7106 仙台/☎022(265)4611 (転送)

(株)りんゆう観光 広島/☎082(542)1660 (転送)

アルパインツアー

検索

ツアーカタログをご請求ください。

●営業時間・平日9:30~18:30 土日祝/定休

HP **www.alpine-tour.com**

✉ **info@alpine-tour.com**



アルバマヨ西南壁 佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

ARAI TENT

www.arai-tent.co.jp | 04-2944-5855

***立山・剣岳・大日岳の行き帰りにご利用ください。**



奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ(左)とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

雷鳥沢ヒュッテ

[シーズン中] TEL.076-463-1835

ロッジ立山連峰

[シーズン中] TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617 (FAX兼) <http://www.raichozaawa.net>

馬場島から一直線

試練と憧れの剣岳・早月尾根



早月尾根は山を楽しむだけではなくお花も楽しめる尾根です、花の百名山にも載っています。

早月小屋

[シーズン中] TEL.090-7740-9233

[メール予約可] hayatsuki@ma.net3-tv.net

<http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/> 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺63-2 佐伯謙一

残雪、花、そして新雪まで
立山を楽しむベースキャンプ
としてご利用下さい。



立山室堂山荘

バスターミナルより徒歩10分

TEL 076-463-1228 <http://www.murodou.co.jp>

槍ヶ岳山荘

☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ

☎0263-95-2626

岸岳小屋

☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ

☎090-1401-7884

岳沢小屋

☎090-2546-2100

【事務所】

〒390-0813

長野県松本市埋橋1-7-2

TEL. (0263) 35-7200

FAX. (0263) 35-0637

<http://www.yarigatake.co.jp/>

あこがれの槍ヶ岳。



次に登る日を、もっと好い日に。

登山・アウトドアの総合専門店

好日山荘

SINCE 1924

お近くの店舗情報はウェブサイトをご覧ください。 www.kojitusanso.jp

好日山荘公式SNSでは旬の登山情報、イベント情報、店舗情報をお届けします。



photo by Torioji Kato

CASIO



PRW-60-2A1F
¥52,000+税

ダウンサイジング NEW プロトレック誕生。 トリプルセンサー×マルチバンド6 電波ソーラー PRW-60

動きやすく使いやすい

縦50.5×横47.2mmのミッドサイズケース



PRW-60
縦50.5mm

PRW-60
横47.2mm



夜間使用に応える

フルオートダブルLEDライト

protrek.jp

公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

——1905(明治 38)年設立——

住所：〒 102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 サンビューハイツ四番町

2017 年度役員・評議員・支部長名簿

会 長	小林 政志				
副 会 長	重廣 恒夫	野澤 誠司	中山 茂樹		
常務理事	神長 幹雄	永田 弘太郎	谷内 剛		
	古川 研吾				
理 事	大久保 春美	安井 康夫	清登 緑郎		
	斎藤 繁	星 征雅	近藤 雅幸		
	波多野 あをい				
監 事	平井 拓雄	石川 一樹			

評 議 員	成川 隆顕	橋本 清	今村 千秋		
	吉川 正幸	西村 政晃	黒川 恵		
	高原 三平	坂井 広志	高野 剛		
	野口 いづみ	古野 淳	佐野 忠則		
	萩原 浩司	新井 梓			

支部長	北海道＝西山 泰正	青 森＝中村 勉	岩 手＝阿部 陽子
	宮 城＝富塚 和衛	秋 田＝今野 昌雄	山 形＝野堀 嘉裕
	福 島＝小林 正彦	茨 城＝浅野 勝己	栃 木＝渡邊 雄二
	群 馬＝北原 秀介	埼 玉＝松本 敏夫	千 葉＝三木 雄三
	東京多摩＝竹中 彰	神奈川＝込田 伸夫	越 後＝遠藤家之進正和
	富 山＝山田 信明	石 川＝中川 博人	福 井＝森田 信人
	山 梨＝深沢 健三	信 濃＝塚原 賢勝	岐 阜＝高木 基揚
	静 岡＝有元 利通	東 海＝高橋 玲司	京 都・滋賀＝松下 征文
	関 西＝金井 良碩	山 陰＝中井 俊一	広 島＝八幡 浩
	四 国＝尾野 益大	福 岡＝高木 莊輔	北九州＝関口 興洋
	熊 本＝松本 莞爾	東九州＝加藤 英彦	宮 崎＝荒武 八起

編集後記

『山岳』第百十三年（2018年）号をお届けします。今年も大変お待たせいたしました。春の編集、夏の刊行を目指しているのですが、この時期は会務も多く、どうしても進行が遅れがちになってしまっています。申し訳ありませんでした。

さて、今年の年報の内容ですが、巻頭に昨年のカラコルムの3つの「記録」をもつてきました。第一線で活躍している現役クライマーの記録が並びます。

シスバーレの美しい山容に魅せられた平出和也会員は、過去も含めてこれまで4回目の挑戦で、中島健郎氏とともに北東壁初登攀に成功しました。その究極ともいえる登攀は、NHKスペースヤルの映像でご覧になられた方も多いと思います。記録は、柏澄子会員にまとめてもらい、最後の手記だけ中島さんに寄稿してもらいました。

続いては、横山勝丘氏によるK7西峰南西稜初登攀の記録です。岩峰と氷雪壁が交互に現われる核心部は、ヒマラヤならではのスケールと高所での登攀の難しさを感じさせますが、苦闘の末に登頂したのはさすがです。また、佐藤裕介氏によるベアトリス東壁のフリー初登攀の記録は、大量の水を荷上げしながらオンサイト、もしくはレッドポイントしてロープを延ばしていく、ビッグ・ウォールのフリー化の難しさと楽しさを表現した記録になりました。

どの記録も、最近の登攀技術の高さを示唆するものですが、今後は会員の手による独創的で魅力的な記録にも期待したいと思っています。

次に「読み物」を2本取り上げました。

西山秀夫会員による「黒部の山河と人を愛した伊藤孝一伝」です。大正末期から黒部の山河を跋涉した名古屋の登山愛好家・伊藤孝一の伝記を綴ったものです。代表的な作品『雪の立山、針ノ木越え』（1923年）と『雪の薬師、槍越え』（1923年）の2本の記録を取り上げながら、当時、積雪期の北アルプスを目指したパイオニアたちの情熱の一端が偲べれます。田上敏行会員による「熊本滞在

中のウェストンの足跡」は、師の最初の赴任地だった熊本滞在の足取りを少しずつ掘り起こし、空白だった滞在中の行動に光を当てた力作です。

「調査・研究」も2本入りました。

財津達弥会員による「杉本誠と山岳写真」。日本の山岳写真研究の先駆者として知られる杉本誠の業績を、「山の写真と写真家たちの発刊まで」と、「国内外での山岳写真の展覧会」の2部構成で綴られたものです。「山岳写真の歴史は、登山史と写真史が重なり合い、縋いませになって進むもの」という杉本の持論、業績が詳しく展開されています。

尾野益大会員による「四国の山に残る皇室とのゆかり」は、西日本第2の高峰・剣山の東北東に位置する三木山頂上付近に今も伝わる三木家による、天皇家の祭事にまつわる原稿です。皇太子さまが天皇に即位した後、初めに行なわれる皇室の重要儀式に関したもので、興味深い記述になっています。

今年の年報は、全体にスリム化を試みました。内容はこれまでどおりパラエティに富み、それでいてもう少し薄くして、手に取りやすいものを心掛けてみました。経費をなるべく抑えながら、なお会員の皆様に喜んでいただけるような年報を今後も目指していく所存です。

また今回の年報は、英文サマリイの復活を模索し、なんとか加藤大雄会員の協力を得て、掲載することができました。海外への発信の重要性は十分認識しているながらも、現実には作業が進まず、サマリイの復活は急務だと思っておりました。なんとか、復活できたことに少しほっとしております。

（神長幹雄）

『山岳』編集委員会
担当理事／委員長 神長幹雄
委員／節田重節、成川隆顕、小泉弘、永田弘太郎、萩原浩司

山岳 第百十三年（通卷一七一号）

二〇一八年八月三十一日発行

本体価格三五〇〇円

発行所 公益社 日本山岳会

東京都千代田区四番町五十四
サンビュールハイツ四番町

（〒一〇二一〇〇八一）

電話 〇三―三三六―四四三三
振替口座 〇〇一三〇一―四八二九

発行人 小林 政志
編集人 神長 幹雄

印刷所 株式会社 東京印刷

発売所 株式会社 茗溪堂
東京都新宿区南元町九一七二〇七
電話 〇三―三三六―三八一一
振替口座 〇〇一八〇一―二四七三
消費税込み三七八〇円

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載
を禁じます。

